IS　～インフィニット・ストラトス～　・・・・・・こんなんで大丈夫か？

Shine

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＩＳ　～インフィニット・ストラトス～　・・・・・・こんなんで大丈夫か？

【Ｎコード】
Ｎ１７６３Ｘ

【作者名】
Ｓｈｉｎｅ

【あらすじ】
オリ主の鷹野慎二はいきなり死んでＩＳ＜インフィニット・ストラトス＞の世界に転生することになった。転生先の世界で、ラブコメ起こしたり、修羅場起こしたり、ＩＳ動かして騒動になったりなど・・・・あれ？面倒なことしか起きてない！？・・・・ともかく頑張って生きていく生き様を描く物語です。
あと、ノリと勢いで始めた初作品なのでひどい出来となっていますがそれでも良い方はどうぞご覧ください。

はぁ、いきなり何がおきたんだ？

目が覚めるとそこは知らない場所だった。

（一体ここはどこだ？）

そこは一面が白くどこまでも続いている気がした。おかしいことに空も存在しない、まさしく白の世界だった。

（とりあえず立つか）

こんな状況でも不思議と酷く落ち着いていた。

「お、やっと起きたか」

どこからともなく現れたのは、絵画で良く見るような神の格好をした男だった。

（誰だこいつ？あれなのか、俺は神様だぞえっへん、とかやるコスプレしてる変態なのか）

「おいおい、酷い言いようだな。それと、コスプレとかじゃなくて本職な」

（ああ、自分の事神様だと信じてる痛い子か・・・そいや、何かのラノベにもいたな・・・）

「だから、本職だって言ってんだろ！！」

（ん、てか何でこいつとの会話が成り立ってんだ？）

「だから神様だから、お前の心が読めんの」

「俺のプライバシーはどこに行った、コノヤロー！」

「いきなり何叫んでんだよ・・・・調子狂うな・・・・」

ふむ、本気で困ってるな。そろそろ真面目に話すか・・・

「で、神様やい。何しに出てきた」

「神様って知っても、上から目線からかよ・・・・俺の方が上なのに」

ん、小さい声で何かしゃべってんな

「まぁ、いいや。とりあえず結論から言うとお前は「死んでる、だろ？」死んで・・・・ああ、今回は記憶が残ってんのね」

少し嬉しそうに言ったのは何でだ？

「さっさと本題に入れるな・・・その前にすまん」

神がいきなり頭下げてきた。

「は？」

「今回お前が死んだのは俺の部下の失敗から生まれた事故なんだ」

「・・・・・・・・」

「部下に失敗で意味も無く死んだお前にちょっと詫びとしてもう一回人生歩ませててやる」

「とりあえずいいか？」

「ん、何だ？」

俺は、息をすぅっと吸って

「そんな理由で俺を殺すなぁあああああああああああああああ！！！！！！！！！！！！！」

そこでいままでの不満をぶつける

「あのあと、家に帰って買ってきたラノベ読もうとおもったのに！！！しかも９ヶ月ぶりの新刊だったのに！！！！！！！」

「だったら、そのラノベの世界に転生させてやるか？」

「だいたいなぁ！・・・・・・・・え？」

ナニイッテヤガンダコイツ？

「いや、お前俺の話聞いてた？」

「いや、聞いてたけど・・・・そんなことできんの？」

「できるも何も、俺は神だぞ？不可能は無いに等しい！」

「無いとは言い切らないのな」

「う・・・そこは触れないでくれよ！！！！」

「だったら不可能って何なんだ？」

「無視かよ・・・・・・まぁ、いいや。例えばだ、お前が元々生きていた世界には転生できない」

「あぁ、なるほどな・・・同じ世界に同じ人間がいたら可笑しいもんな」

「・・・・・お前、ほんとに高校生だったのか？物わかりというか世界の秩序が分かりすぎているというか・・・・・」

神がなぜか黙ってしまった。理由かぁ・・・・

「まぁ、ラノベに似たような奴あったからかな」

「・・・まぁ、この話は終わりだ」

終わりって・・・・せっかく空気読んで話したのに・・・・・

「そこ、黙らっしゃい。ええと、お前が死ぬ前に持ってたラノベは・・・・」

俺しゃべってないのに・・・・・

「小さいこと気にすんな・・・・お、あったった」

俺が死ぬ前に持ってたラノベって・・・・・・・・あれ？なんだっけ？

「頭打って死んだから、記憶があやふやなんだろ？まぁ仕方ないな」

ええと、伝〇伝じゃないし、い〇天じゃないし・・・・・・あ！

「そうだ！ＩＳ＜インフィニット・ストラトス＞だ！！！！！」

「お、思い出したのか。話進めるけど、何か能力欲しいか？」

「能力かぁ～・・・・・・ＩＳは動かしたいな～」

「ん、あとは？」

「そうだなぁ・・・・・・一夏たちと幼馴染にしてくれ」

「了解した、あとはチートとしてある程度身体能力上げとくな・・・性別は男っと」

何かいきなりぶつぶつと一人で話し出した。すると、俺の周りに光が浮いて集まってきた。

「これは？」

「まぁ、転生の準備ってとこかな」

「へぇ、そんなのあるのか」

「まぁ、いろいろあんだよ。っと、準備が整ったな。」

「ついにＩＳの世界に行けるのか～」

「あっちの世界行ったら一切こちらかの干渉はないと考えていてくれ」

「分かった、とりあえずありがとう」

「いいって、こっちが悪いんだし」

ケラケラと笑いながら言った。

「じゃあな」

「もう会うことはないだろうけどな」

「ははっ、たしかに」

俺は今までにないくらいで清々しい気分で迎えていた。しかし・・・・・

「・・・・・・え？」

俺は、間抜けな声を出してしまった。だって仕方ないだろ？いきなり下に穴が出来たんだから

「消えるとかそうゆうのじゃないのかよおおおお！！！！！」

「今まで、俺のことからかった罰だ☆」

こっちも清々しい位の笑顔だった・・・・

「ふざけんなあああぁぁぁぁぁぁぁぁ・・・・・・・・・・」

このように異様に不安な門出だったがおれはＩＳの世界に転生するのであった。

「だぶう、ばびゅばぶだだだ（ちくしょう、無理矢理にでもあっちに干渉して復讐してやる）」

転生した先、赤ちゃんになっていたことに驚くよりも前に神への復讐を誓うのだった・・・・・

しばらくしてから

「だ！？ばぶびゅびゅぶぶ！？（あれ！？おれ赤ちゃんになってる

し！？）」

・・・・・普通、逆じゃないのかオリ主よ

はぁ、いきなり何がおきたんだ？（後書き）

いかがでしたか？誤字脱字などがありましたら、コメント欄にて報告お願い致します。

う～ん、これはなかなか・・・（前書き）

色々酷い出来となってしまいました・・・・・

う～ん、これはなかなか・・・

俺がこの世界に転生して早3年がたった。え？いきなり飛びすぎだって？仕方ないだろう。赤ちゃん時代にあだあだ言いながら神へに復讐を誓ってる様子を描写するのか？ある意味カオスだから止めた。

そういえば、俺はこの世界では鷹野慎二になっている。歩けるようになってから少し散歩したら、なんと隣は織斑と言う家族だった。・・・・・そんなこともあるんだね。あ、そういえば一夏達と幼馴染にしてくれって言ったっけか。で、更に織斑さんちの隣は篠ノ之さんだった。・・・・・・・・・・・・・・・こんなんでいいのか？本気で不安になってきた・・・。それと気がついたんだが。ここの世界は俺が知ってるラノベの世界じゃないってことだ。え？意味がいまいちわからないって？う～ん、そうだなぁ・・・。もう、この世界は俺の人生そのものってことだ。今俺がいるのは、俺が読んだ時よりも前の世界だから一夏がどういう子供だったかもいまいちわからなかった。だから、ラノベに書いてあったことと違うことが起きる可能性があるんだ。もう、こいつらは二次元に生きている存在じゃなくて俺と同じ時を刻む存在になったってことだ。え？厨ニ臭いって？・・・気にしないで、そこは。

なんやかんだでそんなふうに時間は過ぎていったんだ。で、ただいま絶賛保育園の中だ。よ～く観察すると、なんか見たことある顔がちらほらと。五反田さんに更識さんとか・・・・・。まぁ、五反田は分かるがなんで更識？同じ街の結構近くに住んでたのか・・・。まぁ、いいか。ん、そいや同年代の更識だから簪か・・・。とりあず声かけとこう。

「お～い、簪ちゃ～ん」

「あなた、だぁれ？」

うぉい、なんだこの可愛い生物は！！！！！と言っても、俺が知ってるのはＩＳ学園に入学した簪しか知らない訳だからなぁ。子供は誰しも純情ってことか。

「僕？僕は鷹野慎二って言うんだ」

「知らない子だぁ」

「そうだけどさ、友達になってくれない？」

「いいよぉ」

ぱぁっとした笑顔で言ってきた。うごぉあぁぁぁぁ。何これ超カワイイ！！！！！！！！

「じゃ、遊ぼう！！！僕のことは慎二って呼んでね」

「うん、分かった～、慎二」

少し経って、分かったことだが簪は楯無さんが大好きみたいだ。ん、でもまだ当主になってないから楯無ではないのか・・・・。うん、まぁ放っておこう。

その日はあと弾と一夏と、箒と友達になった。まぁ、みんな同じ保育園だったわけだ。でも、弾の家は少し遠いなぁ。なにせ、この近くに保育園とか幼稚園はここしかないから仕方ないらしい。

こんな、感じで保育園時代は過ぎていったはずだったが、卒園式の日に簪からびっくりする発言が聞こえた。

「慎二～」

「ん、簪か。どうしたそんな悲しい顔して。悲しいことでもあったのか？」

「うん、私ね引越しするの。遠くに」

と、泣きながら言ってきた。それにはいろんな意味でびっくりしたわけだ。いきなり泣き出すし、しかも引越しって・・・・・。仲のいい友達と離れるのは悲しいな・・・・・。

「そんなに泣くなよ、簪」

「だってだって・・・・・」

う～ん、仕方ないな～恥ずかしいけどいるまでも泣いている子もほっとけなしな

「簪、また会えるって」

「ほんと・・・？」

やべぇ、可愛い・・・

「ほんとほんと。あ、そうだこれあげるよ」

と言って、俺はポケットから青い石を取り出した。

「きれい・・・・・」

「そうだろ、なんたってこれは俺の大のお気に入りなんだ。だから、寂しくなったらこれを見て俺も思い出せ、な？」

「うん、わかった・・・・・ねぇ、慎二」

「ん？」

「次会う時までに私が慎二のことをきちんと覚えていたら、・・・・・・お嫁さんにしてくれる？」

「ああ、いいよ。簪みたいなかわいい子だったら大歓迎だよ」

「可愛い・・・・・・えへへ♪」

そんなひと騒動あって俺の保育園生活が幕を閉じた・・・・・・・・。簪に行った言葉が後に大変な事態を招くことはまだ知らない・・・・・・

う～ん、これはなかなか・・・（後書き）

やっちまった感満載、まさかの簪ちゃん登場でした

こんなんでやっていけるのか・・・・？

もう少しもう少しで・・・・・・（前書き）

う～ん、今回も何か説明みたいな文になってしまいました。
早くＩＳ学園に入学させたいがために大分省力してしまいました・・
・

もう少しもう少しで・・・・・・

まぁ、時系列から行けば今は小学校だわな。まぁ、実際そうなんだけど。小学校に入ってからは弾と簪が居ないから一夏と箒と一緒にいた。弾は別な小学校に通っていた。

小学生になったから、箒の家の道場で剣道を習い始めた。まぁ、ここで俺のチートな身体能力発揮ですよ。というか、やっぱりチート酷い。

小学2年から始めたんだけど、その時点で身体能力は中学生くらいあった。な？この時点でおかしいだろ？あの、神を酷い能力くれたもんだよ。しかも、剣道習って2年目に全国優勝しちゃったし・・・・。みんな、「天性の才能だね」とか「天才だ・・・」とか色々酷かったよ。そんな訳で天災の束さんにも目を着けられるし・・・・・・。はぁ、不幸だ・・・・・。

そんな、悶々としたまま過ごしているとある事件が起きた。まぁ、みんな分かるだろうけど「白騎士」事件ね。まぁ、ＩＳが世間に出たから箒は引越しをした。まぁ、多分フラグは一夏にたっただろう。たまに、熱っぽい目で見ていたし。時たま、アプローチするときに俺が協力したりしたから確実だろう。

まぁ、次の年は鈴が転校してきたよ、当たり前だけど。でもって、一夏と鈴がいきなり喧嘩した。殴り合いになる前に俺が止めたんだが、ちょうどいいくらいに丁度二人とも殴ろうとした時に止めたから両頬にパンチが来て、俺は気絶した。そしたら、どうしたものか次の日には二人とも仲直りしていた。そして、俺に謝ってきた。素直な子は兄さん大好きだぞぉ～って言いながら二人に抱きついたら、殴られた・・・。なんでだ・・・・。そんな感じで小学校は終わった。

中学校の入学式に懐かしい奴と再開した。弾だ。俺は覚えていて当たり前だが、弾が覚えていた理由が「同い年に見えなくて、浮いてたから」だとよ。妙に納得したんだけどな。それからは弾と鈴と一夏と俺の４人でよくつるんでいた。

鈴の家に行ったら、料理屋だったし（俺はただ忘れていただけ）、たまに一人で客として行くと何故か婿宣言されたし。まぁ気にしては居なかったんだけどな。そして、中学2年の終わりに鈴が中国に帰った。まぁ、ここは知っていたからまた会えるさと言って送り出した。

そういえば、あれだな、鈴が中国に帰る前に放課後呼び出され「料理が上達したら、毎日酢豚を食べてくれる？」と言われた。あれ・・

・・、俺フラグ立てたっけと思考し、心当たりがなかったから、おごってくれるのだと思った。そのとき俺は「毎日酢豚だったら胃もたれしちまうな」と言ったら「酢豚じゃなくてもいいから、私の料理食べてくれる」って必死に言ってきたから、「当たり前だろ」って言ってやった。凄く嬉しそうにしてたな・・・・。あん時の鈴は可愛かったな・・・・・。っは！？何言ってんだ俺！？しかし、なんでかな俺の周りの女子は引越しばかりするなぁ。寂しいったらありゃしない。簪しかり、箒しかり、鈴しかり・・・・・

ともかく鈴は中学2年の終わりに帰ったから、中学3年は受験勉強してたな。特に、俺は困らなかったが弾と一夏が危なかった二人に勉強教えていた。俺と一夏は早く自立したかったから藍越学園に受験することに決めた。弾は頭に出来からもう1ランク下の高校を受けた。俺は、その時忘れていた。神から貰った能力「ＩＳを操縦できる」を・・・・・。それが惨事に繋がることはおれはまだ知らない・・・・・・。

もう少しもう少しで・・・・・・（後書き）

すいません、まじすいません。
酷いできなのはわかってます。
俺の文才の無さを呪ってください。
そして、多分次からＩＳ学園に入学できます！！！
変にフラグ立てて、回収できなくなったらどうしよう・・・・・・

来たぜＩＳ学園！！！だけどこいつは・・・・・・・

俺の高校生活が始まった。だが、ある意味これは・・・・・・・・辛い。え？何で辛いかって？そりゃあ、俺と一夏以外は女子なんだ当たり前だろ。しかも、一番前の席という特典付き。わ～い、うれし～な、なんて言うと思うか？背中に突き刺さるのは視線視線視線視線視（ｒｙ。背中に穴が開くんじゃないかってくらいの視線しかない。しかし、原作では一夏はこの状況で一人だったのか・・・・・。うわぁ、死ねるな。

「あ、皆さん全員そろってますね。それではＳＨＲを始めます。」

と言って、教室に入ってきたのは山田麻耶先生だ。原作から思ってたんだが、この人は本当に日本人か？緑髪の日本人なんているのか？

「みなさん、１年間よろしくお願いしますね」

誰も先生の話を聞いていない。というか、せめて俺らを見ないで先生を見てやれよ。先生困ってるじゃないか。

「うぅ・・・・・、で、では自己紹介をお願いします。出席番号順にお願いします」

うん、先生がんばった。褒めてあげたいよ、ほんとに。ってか、一夏は大丈夫なのか？さっきから、汗がダラダラ出てるけど・・・。って、次一夏じゃん。あぁ、あの調子じゃ気づいてないな～。

「織斑くん、織斑一夏君」

「は、はい！？」

って、声が裏返ってんじゃん。大丈夫か？あいつ・・・・・

「えっと、織斑一夏です。・・・・よろしくお願いします」

周りの女子からは「え、何？それで終わり？」みたいな視線が一夏に集中している。う～ん、思ったんだけど自己紹介なんてそんなモンだと思うんだよな～。実際俺は、中学そうだったし。お、一夏がなにか言うか？

「えっと・・・・・以上です！」

ズサーーーー！！うん、そのリアクションは間違ってないぞ。溜める必要あったのか？変に期待するだろ。ってあれ？千冬さんだ。お、出席簿を振りかぶって・・・・スパーン！！・・・・叩いた～！！！ん、何かこっちに・・スパーン！！！！・・うごぁあああああ・・・・威力2割増しじゃね？

「なんで俺まで・・・・・・」

「なに、失礼なことを考えてる気がしたのでな」

「暴力で解決するのはどうかと思いますが」

スパーン！！！！！！・・・・・・・更にさっきの2割増し・・・・・・・

「・・・・・せめてもうちょっと手加減して」

「大丈夫か、慎二？」

ほらみろ、一夏までこっちの心配してるじゃないか。そんなことより・・・・・・

「すまん・・・・ちと休ませてくれ」

頭が、すげぇ痛い。

「諸君、私が織斑千冬だ。君たちを1年で使い物にするのが私の仕事だ。私の言うことをよく聴き、よく理解しろ。出来ないものは出来るまで指導してやる。私の仕事は若干１５歳を１６歳までに使い物にすることだ。逆らってもいいが、私の言うことは聞け。いいな」

うわぁ～、酷ぇ横暴だなぁ～。こんな先生で他の女子もかわいそ・・・・

「キャーーーーーー！千冬様、本物の千冬様よ！！！！」

「ずっとファンでした！！」

「あの千冬様にご指導いただけるなんて幸せです！！！」

「私、千冬様のためなら死ねます！！！」

うごぉあああおおおあおあお・・・・・・黄色い声が頭に響く・・・・・・。

「毎年毎年、よくバカ者共が集まるものだな。感心させられる。それともなにか、私のクラスにだけ集めているのか？」

う～ん、本当に呆れているな。てか、そろそろ頭限界なんだが・・・・・

「おい、お前ら。静かにしろ。一名瀕死になっている」
俺は、もうピクピクしてたよ。意識が薄くなってたし。しかし、助かった。もう少し続いてたら気絶していた。
「で、お前は満足に挨拶もできんのか？」
「いや、千冬姉、俺は・・・・・・」
ゴンっと、一夏は頭を机に押し付けられていた
「織斑先生だ」
「・・・はい、織斑先生」
あ～あ、一夏のアホ。わざわざクラスのやつに千冬さんと姉弟だってばらすことないのに・・・
「ほら、次は鷹野。お前だぞ」
「って、少しは休ませてくださいよ・・・・」
「いいから、さっさとやれ。ただでさえ、時間が押しているんだ」
「わかりましたよ・・・。え～と、鷹野慎二です。ＩＳについては初心者同然なのでよろしくお願いします」
そんな感じで自己紹介は終わったさ。異様に疲れたけどな。

来たぜＩＳ学園！！！だけどこいつは・・・・・・（後書き）

う～原作とは違うとか言いながらほぼおなじになってしまった・・・・・・

そいや、ＩＳ学園の女子ってレベル高くね？（前書き）

タイトルは関係ありません。

そいや、ＩＳ学園の女子ってレベル高くね？

「ふぅ、やっと1時間目終わった～」

あの自己紹介のあとはＩＳの基礎理論の授業をやった。主な内容は、あのタウ〇ページみたいな分厚いＩＳの単語やら色々書いてあった本の確認みたいなことをした。まったく問題なく授業は終わったんだが、未だに視線に慣れないな。そういえば、この世界の俺の頭は結構ハイスペック仕様になっている。あの分厚い本も何回か読んだら内容はある程度入ったしな。てか、これって絶対神の仕業だよな～。ま、便利だからいいか。

「う・・・。全然わからなかった。なぁ、慎二お前分かったか？」

「分かったかって・・・・・お前、あの分厚い本どうしたんだよ？」

「・・・・・・電話帳と間違って捨てた。」

「ははは、お前らしいな」

「笑うなよ～、こっちは大変なのに。そいや、お前って昔から勉強出来たよな。」

「勉強出来たって言っても、あれは毎日の継続があったからそうだっただけだぞ。お前はたまにしか勉強なかったろ。」

「確かにそうだけどさぁ」

ん、そういえばここで何かイベントがあった気が・・・・

「・・・・・・・・・ちょっといいか」

ああ、そうか箒が話しかけてくるのか

「おい、一夏行ってこいよ」

「いや、お前に話しがあるんだが・・・・」

俺は箒に顔を近づけて

「おい、箒。一夏と二人になるチャンスだろ。俺を呼ばないで一夏に話しかけろよ。」

「そういう意味で話しかけた訳じゃないのだが・・・・・いいから来てくれ。」

そう言うと、箒は俺の手をとって強引に教室のドアに歩き始めた。

てか、この体勢は・・・・

「ちょっと待て箒!!このままじゃ転ぶ!!!!」

いきなり後ろ歩きで歩かされたらなぁ・・・・。しかも結構早いし。

「む・・・すまん」

俺は一回手を離して、体勢を直した。箒がもの惜しそうに手を見ていた。何でだ?とりあえず、俺は箒の手を取って教室を出た。

「時間無いからここでいいか?」

「うむ・・・」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

あれ？何か話があるんじゃなかったの？この沈黙は何？

「慎二・・・・・」

「ん？何だ？」

「・・・私の事覚えていてくれたのだな。」

「いや、当たり前だろ。それとも、忘れていて欲しかったか？」

「そうではない！！！覚えていてくれて嬉しかった・・・・」

「だったらいいじゃん。」

「そうだな・・・・」

こころなしか箒の顔が赤い気がする。風邪か？あ、そういえば

「そういえば箒、去年剣道全国大会優勝したんだってな。おめでとう」

「どうして知っているんだ」

「どうしてって・・・・・新聞に書いてあったんだけどな」

「どうして新聞なんか読んでいる」

「いや・・・箒って剣道強かっただろ？だから何かしら剣道関係で名前載ってないかって見てたんだよ。そしたら案の定書いてあったってわけだ。でも、全国優勝でお前の名前見るとは思わなかったから結構びっくりしたんだけどな。」

「・・・・・・・・剣道初めて2年目で全国優勝したお前に言われてもな」

「そんなこと言うなって。人がせっかく褒めてるのに・・・・」

「・・・・そうか褒めているのか」

「放課後剣道するか？お前がどのくらい強くなったか見たいし」

「いいのか？」

「お前がよかったら俺はいいんだけどな。暇だし」

「だったら頼もう」

「うし、だったら放課後よろしくな」

「うむ、それはそうとそろそろ授業が始まると思うのだが」

「マジ？だったらさっさと戻ろうぜ」

懐かしいやつと再開をはたし俺は教室に戻った・・・・

そいや、ＩＳ学園の女子ってレベル高くね？（後書き）

う～ん、なんかやっちまった感が・・・・・・

一夏のヒロインどうしましょ？

何でこうなった・・・・・

「ちょっと、よろしくて？」

一夏がパツキンの女に話しかけられていた。な～んか、悪い予感・・・・・。よし、ここは他人の振りを・・・・・・

「あなたもでしてよ」

ですよね～。はぁ・・・・・・たまには遊ぶか・・・・

「それで何かごようですか？お嬢さん」

「あら、あなたはなかなか対応がなっていますね」

「いや、ただの遊びだから」

「っ・・・まぁいいですわ」

何か勝手に納得したらしいな・・・・・ふぅめんどくさい・・・・

「てか、おまえ誰？」

「わたくしを知らない？このセシリア・オルコットを？イギリス代表候補生にして入試主席のこのわたくしを？」

お～、セシリーだったのか。まぁ、一夏に落ちるまではただのウザイ女だよな～

「なぁ慎二だ「代表候補生が何かって聞きたいのか？」う・・・」

「まぁ、代表候補生ってのはオリンピックで言う国の代表みたいなもんだ。簡単に言うとだけどな」

「へ～、さすが慎二は物知りだな～」

「物知りって・・・・これは結構一般常識だぜ？」

「ちょっとこ「常識って言ってもＩＳについてはほとんど皆無だからな～」

「おまえは関心がなさすぎだ。っと、オルコットさん話がそれたな」

「・・・・・・」

うん？何か青筋やら色々ヒクヒクいってんな～

「・・・・まぁ、入試で教官を唯一倒した私がＩＳのことを教えてあげてもよろしくてよ？」

ほ～、教官を倒した。なるほどなぁ、やっぱり強いわけだ。でもなぁ何かこの態度、去勢を張っている感じしかしないな。確か、原作でも触れていたような・・・・・まぁ、そのうち思い出すだろ。

「教官なら俺も倒したぞ？たしか慎二は相打ちだっけ？」

「ん？まぁな、千冬さんだったしなぁ。相打ちにもっていっただけ褒めて欲しいもんだ」

あれは怖かった・・・・だって千冬さん結構本気なんだもの。なんか、子供の時の恨みをなんとか～、って叫んでたし・・・・・恐怖と生き残るために必死だったからあんま聞こえなかったけど・・・・・

「・・・・あなたも教官を倒したっていうの？」

「と言ってもよけたら勝手に壁にぶつかったんだけどな」

「私だけだと聞きましたけど」

「女子だけではってオチじゃないか？」

キーンコーンカーンコーン。おお、ナイスチャイム。めんどくさくなるまえに終わった。すると、千冬さんと山田先生が教室に入ってきた。千冬さんは教壇に立った。

「ではこの時間は実践で使用する各種装備の特性について説明する」

特性ね～。基本は近距離、中距離、遠距離でいいんじゃねぇかな。あとは聞き流しとこ。

「ああ、先に再来週のクラス対抗戦にでる代表者を決めないとな。なに、クラス代表と言ってもいままでで言うクラス委員長と考えてくれて構わない。一度決まると変更は効かないからそのつもりで」

へ～、とりあえず面倒くさそうだから俺は関係ないいっと・・・・・

「はい、私は織斑君を推薦します！」

一夏がんばれ～俺は傍観してるから。さてと、寝るか・・・・

「私は鷹野君を推薦します！」

ん、なんか幻聴が聞こえたような・・・・まぁ、気のせいだろ。

「では候補者は織斑一夏と鷹野慎二の二名、自薦他薦は問わんぞ」

って

「「俺ぇ！？」」

スパパ～ン！！！！！うごぁあああ・・・・・やっぱり一夏より俺の方が威力が高い・・・・・

「うるさいぞ、馬鹿者共」

「って織斑先生、もうちょっと手加減してください・・・・」

「さて、他は居ないのか？居ないのなら二名の内のどちらかにやってもらうが？」

「無視ですか・・・・・」

それよりも頭痛い・・・・・

「納得いきませんわ！！」

あぁ・・・・やめて大声出さないで・・・・・・頭に響く・・・

「そのような選出認められませんわ！大体、男がクラス代表なんていい恥さらしですわ！この、わたくしにそのような屈辱を1年間味わえと言うのですか！？」

う～ん、やっと頭が治った。てか、好き勝手言ってるな～

「実力でいえば私がクラス代表になるのは必然。それを、物珍しいからと言って極東の申にされては困ります！わたくしは、このような島国まできてＩＳの修練に来ているのであってサーカスをしにきている二ではありませんわ！」

う～ん、サーカスか・・・それはそれでありかもな

「大体、文化としても後進的な国で暮らすこと自体、わたくしにとって屈辱でしかありませんのに！」

バン！！！！！

「おいおい、さっきから好き勝手言わせれば・・・・・ＩＳの修練？日本が文化として後進的？じゃあ、お前が修練に来ているＩＳはどこの国が作った？文化として更新的な日本じゃないのか？そんな国に文化も技術が劣っているイギリスはどうなんだよ？」

「篠ノ之博士は・・・・」

「特別だって言いたのか？ふざけんな！！！あの人だって人間で悩んだり怒ったりすんだよ！その人を特別扱いだ？バカも休み休み言いやがれ！日本にいるのが屈辱ならさっさと国に帰りな、嬢ちゃん。それでＩＳについて修練できるならな」

「言わせておけば、祖国と人の事バカにして・・・・・！」

「先にバカにしたのはどこのどいつだ？どこの国の代表候補生だっけか？」

「っ・・・・・！！！！決闘ですわ！！！！！」

「いいぜ、徹底的に潰してやるよ」

「それで、ハンデはどのくらいあげましょうか？」

「だからバカも休み休み言えっていったろ。学習能力ねぇな・・・」

「さて、話はまとまったな。それでは、勝負は来週の月曜日の放課後第３アリーナで行う。概要者は、鷹野慎二、セシリア・オルコット、織斑一夏の三名で行う。それでは、授業の準備をしろ」

「・・・って何で俺も入ってんだよ千冬姉！」

パシーン！！

「織斑先生だ。お前も候補者に入っていただろう？以上だ。ほら、分かったらさっさと授業の準備をしろ」

う～ん、やっぱりさっきの威力弱いな・・・・あれか家族と他人の違いなのか！？そうなのか！？そうなんだな！？パシーン！！！！！！うごあぁあああああ・・・・・三割増し

「・・・・・ちょ、何で叩かれてんの俺・・・・・」

「余計なことを考えてる暇があったらさっさと授業の準備をしろ」

「やっぱ、軽くスルーなんだ・・・・」

「ほぅ・・・・私に口答えするのか・・・・・」

「なんでもありません！！！！！」

意味不明な2回目の出席簿アタックを食らって、授業が始まった。

パシーン！！！！！！！！！！

うごあぁあああああああああああ・・・・・・・・・最初の５割増し

・・・・・・・・・３回食らって授業が始まった・・・・・・

「あ・・・と・・は、任せ・・・た・・ぞ・・・・・・・・・・・一・・・・

・・・・・・・夏」パタッ

「あれ！？慎二！？織斑先生慎二が・・・・・・・・・」

何でこうなった・・・・・（後書き）

ＰＣを姉に返して更新できませんでした。
これからもこういうことがたぶんあるのでよろしくです。

ふぅ、やっと視線から開放されたか・・・・？（前書き）

多分、今までで一番長くなりました

ふぅ、やっと視線から開放されたか・・・・・？

やっと、初日の授業が終わり放課後になった。

「う～・・・・結局分からなかった・・・・・・」

と、一夏は机にうなだれていた。

「まぁ、あの基礎理論書読んでなきゃそうなるわな。今回はお前が全面的に悪いんだから諦めろ」

「確かに俺の責任だけどさぁ・・・・そいや、慎二その基礎理論書持ってきてるか？」

「いや、あんな重いの持ってきているわけないだろ。ましてや、今日は家に帰ったらあれを何回か読む予定なんだ」

「あ、やっぱ慎二も自宅から通ってんのか」

「まぁ、部屋割りが間に合わなかったみたいだしな」

「じゃ、今日は帰るか・・・・・・」

「あ、俺は箒と剣道やってから帰るから」

「お前、箒とやるのか？あいつ全国優勝したのにやるのか？」

「ふふふ、忘れてもらっては困る、俺も全国優勝したことをな！！！！」

「全国優勝って何年前だよ・・・・」

「とにかく、俺は剣道やって帰るから」

「とりあえず、分かったよ」

俺は剣道場に行くために教室のドアに向かおうとすると

「あ、織斑君、鷹野君まだ教室にいたんですね」

山田先生が教室に入ってきた。

「まぁ、いましたけど・・・・俺これから剣道やって帰るんですけど」

「そのことなんですけど、お二人には急遽寮の部屋が決まりました」

「え？入れないから俺らって自宅からの通学じゃなかったんですか？」

「そのことだが、国の方が学園の外に出すなと言ってきたのでな。急遽入ってもらうことになった」

今度は千冬さんが教室に入ってきた。

「・・・つまり、他の国に狙われないように学園の中にいろってことですかね」

「そのとおりだ。男性のＩＳ操縦者なんてお前らしかいないからな、

狙われやすいということだ。これが部屋の番号と鍵だ」
紙と鍵を渡された。え～と、俺の部屋は～１０２５号室か
「なぁ、一夏。お前何号室だ？」
「俺は１０３２号室だ。慎二は？」
「俺は、１０２５号室だ。なんだか、遠いんだか近いんだか良く分からんな」
「そういえば、荷物はどうなるんですか？」
「織斑のは私が用意した。鷹野は親御さんに頼んだら持ってきてもらった。先に部屋に置いてあるから確認するように」
「わかりました」
「まぁ、とにかく寄り道しないでその部屋に行けよ」
「俺は篠ノ之さんと剣道するので、では」
「寮の帰宅時間はきちんと守れよ」
「了解しました、では」
俺は剣道場に向かった。

剣道場に着くと箒が防具一式を既に付けて待っていた。

「あれ？箒、もしかして待たせたか？」

「いや、大丈夫だ。試合前の精神統一をしていた」

「そうか、だったら俺もさっさと準備してくるな」

「ああ、分かった」

俺は、更衣室に向かった

～・～・～・～・～・～・～・～・～・～・～

「くっ・・・・やはり勝てないか」

箒との試合を数回こなしての戦績は４勝０敗１引き分け。まぁ、この引き分けは最初に気を抜いていたせいでこうなったんだけどな・・・・。いや～油断していたとはいえ１本取られるとはな。

「でも、流石は去年の全国覇者だな」

「・・・去年、帰宅部だったお前に言われてもな・・・・・・」

「帰宅部って言ってもトレーニングはしてたし、なんだかんだで運動してたんだぜ？これでも」

「お前は昔から強かったな、そういえば」

「そうでもないぞ？あれでも影で努力してたんだから」

「それでも、強かった。・・・・・そして今も」

ん、最後の方聞こえなかったな。それよりも、なんか箒の顔が赤いな・・・

「箒も強くなったな。俺も最初はびっくりしたよ」

「そうか、強くなったか・・・・・ふふ」

う～ん、また顔が赤い・・・風邪か？

「箒、顔が赤いぞ？風邪でもひかないように寮に戻ったらどうだ？」

「うむ・・・・そうさせてもらおう。戸締まりは頼んだぞ」

「分かった。風邪ひくなよ？」

「分かっている」

俺は戸締まりをして、寮に向かった。

～・～・～・～・～・～・～・～・～

「え～と、１０２５、１０２５・・・・お、あった」

俺は、寮の中で自室を手探り状態で探していた。まぁ、聞けば話は早かったんだけどそこは冒険心がくすぐられたというかね・・・・・・

「まぁ、とりあず入るか」

ドアを開けるとビジネスホテル顔負けの設備の部屋が目に飛びこんできた。まぁ、ビジネスホテル見たことないんだけどね。シャワーの音が聞こえるということは先客がいるのか。とりあえず、ベットに座るか。

「ふぅ～、今日は疲れたな～」

ん？そういえば先客って・・・・・・一夏は別な部屋だから・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・悪い予感しかしない・・・・・

「ん？誰かいるのか？」

案の定聞こえてきたのは女子の声だった。しかもさっき聞いていた・・・・・

「ああ、同室になった者か。これから1年間よろしく頼むぞ」

・・・・・・・・・・振りかえったらダメだ。よし、窓を見よう！！！

「こんな格好ですまないな。汗をかいてしまったから先にシャワー

を使わせて貰っていた。私は篠ノ之・・・」

そこまで言うと女子はシャワー室から出てきた。

「・・・・・やっぱり箒か」

「え・・・・・・慎二？」

「びっくりしてるのは分かるが、とりあえずちゃんと服を着てきてくれ」

「・・・・・・・私は見られても構わないぞ？」

「こらこら、年頃の女子がそんなこと言っちゃだめだろ」

「う・・・・・・・了解した」

しばらくして、箒は服を着てきた。ふぅ、とりあえず面倒ごとは無くなったな。

「それで、お前が私の同居人だと言うのか？」

「そうらしいな・・・お前は１０２５号室で間違いないんだろ」

「ああ、お前は・・・・・・確かにそうらしいな」

箒は落ちていた紙を見て理解してくれたようだった。うん、話が早くて助かる。・・・・そういえば、それを分かっていて俺をこの部屋にいれたのだろうか？千冬さんは・・・・まぁ、とにかく優先順位はこっちだな。

「・・・・お前が希望したのか？」

「それはさすがに・・・・・俺も急遽入れられたからいまいち状況がよくわかってないんだよな～」

「・・・・・・・そうか」

なんか、箒が少し寂しそうだな・・・・

「まぁ、同居人が箒で助かったよ。これが知らない女子だったらな・・・・・」

「そうか、私でよかったか・・・・・そうかそうか」

ん？今度は嬉しそうだな・・・・う～ん分からんな

「とりあずあれだ、シャワーの使用時間とか決めないとな」

「そのことだが、私が7時から8字、慎二が8時から9時でいいか？」

「いいけど、なんで箒が先なんだ？」

「部活後、汗かいた状態であまりいたくないのでな」

「そういうことなら先に使ってくれ」

「助かる」

「いいっていいって、それくらいの気遣いぐらいは出来るぜ？って、そろそろ食堂が終わる時間だな。飯、食いに行くか。箒、行こうぜ」

「私が一緒でいいのか？」

「いや、一夏も誘おうと思ったんだが・・・・・」

「・・・・・」

「いあや、そんな顔で睨むなよ。美人さんが台無しだぞ」

「美人！？私が！？」

「いや、お前以外に誰が居るんだよ・・・・」

「お、お世辞ならいらないぞ」

「お世辞って・・・・おまえなぁ、俺がそういうの言わないことぐらいわかってるだろ？」

「まぁ、そうだが・・・・」

「はぁ、そんな顔すんなよ。・・・・さてと、箒二人で飯食おうぜ」

「わ、分かった」

いきなり嬉しそうな顔してるよ・・・・ま、箒は笑顔が似合うからいいけどな。

「む、何を笑っている」

「いや、やっぱり箒は笑顔が似合うなって話し」

「む・・・・そうか。ならできるだけ笑顔でいるように努力はしてみる」

「ああ、そうしてくれ」

そんな感じで俺の高校生活の初日は終わった・・・

みんな、気づいてないかもしれないけど実は俺、箒のシャワー上がりの姿見たんだぜ！え？どうやって見たかって？それはな、窓を見

たときに見えたんだよ。ほら、夜って明かりつけとくと反射して見えるだろ？まぁ、それで見えたんだよ。箒は気づいてなかったみたいだけどな。てか、気づいてたら俺の俺の命はないか・・・・。てか、箒もなかなかいい体になってたな～。スタイル良かったし胸もなかなか・・・・・・・・っは！？また俺は余計なことを・・・・みんなこれは内緒にしておいていてくれよ？

ふぅ、やっと視線から開放されたか・・・・？（後書き）

書いてる途中、箒のキャラがわからなくなったりしました・・・

もしかして、キャラ崩壊してるか・・・・？

ま～た、面倒なことが起こったよ・・・・

次の日の3時間目の休み時間、俺はと一夏は千冬さんにあることを通達されていた。

「織斑、鷹野お前たちの専用機だが用意までに時間がかかる。それと鷹野お前の専用機はG．W．社が用意してくれるそうだ」

「え？・・・・G．W．社ってあのG．W．社？」

「鷹野君って一体なにもの？・・・・・」

みんなが驚くのは無理もない。G．W．社と言うのは電化製品、IS研究、食料品などの色々なものに手をだし全て売上世界5位以内という実績を残しているらしい。まぁ、俗に言う超一流企業だな。ちなみにG．W，ってのはゴールデンウィークではないからな。まぁ、らしいってのは俺も今朝箒に教えてもらって初めて知ったからだ。一夏も知っている企業をだ。まぁ、それに関してはこれから話すよ・・・・・・

～・～・～・～・～・～・～

目が覚めるとそこはいつぞや見た白の世界だった。まぁ、神域だな。ってことはあいつがいるな・・・・・・・

「おーーーーーい！！！神ーーーーーーー！！どこだーーーーーーー！！！！」

「まだ、神に対しての言葉遣いがなってないな・・・・・・」

「で、干渉しないんじゃなかったのか？」

「いや、何か面白そうだから今回は加勢しようと思っただけだ」

「そんなんでいいのかよ・・・」

「いいんだって、神も暇なんだぜ？これでも」

「だろうな。遊んでるイメージしかないし」

「あれ？俺そんなとこ見せたっけ？」

「いや、ただの俺のイメージ」

「ちょっと待てい！そんな簡単に人のイメージ決めるな！！！」

「いや、だって事実そうなんだろ？」

「まぁ・・・そうなんだけどさ・・・・・・はぁ、やっぱ呼ぶんじゃなかった・・・・・」

何かいきなり地面にのの字書いてふてくされてしまった。まぁ、地面なんてないんだが。

「で、要件は？学校に遅刻したくないんでな」

「・・・・少しは心配しやがれ・・・・・・まぁ、いい。その点は心配しなくていい・あっちの世界は６時３０分で止まっている」

「6時30分ってまた微妙な・・・・」

「まぁ、気にすんな。で、お前イギリスの代表候補生と戦うんだって？」

「まぁ、そうなんだが・・・なんで知ってる？」

「忘れたか？俺は神だ！不可能は無いに等しい！！！」

「いや、どうでもいいんだが・・・てか、今俺がいる世界ならお前不可能無いんじゃないか？」

「あ、それもそうだな・・・・だったら・・・・俺は神だ！不可能はない！！！」

気付かなかったんかい。つか、言い直す必要あったのか？てかやっぱ、こいつはアホなのか？

「そこ、黙っらしゃい」

「いや、しゃべってないし。つか、いつかのデジャブだし」

「う、うるせぇ。で、要件だが・・・」

あ、スルーした。

「お前の専用機だが、俺が用意してやろう」

ほんとにスルーしたよ・・・・・読心術でわかってるよな・・・・・あえて無視してるのか？

「あの、俺の話聞いてた？」

「ああ、まぁ一応」

「一応！？結構大事なこと言ったつもりなんだが・・・・」

「で、どうやって用意すんだ？」

「無視か・・・・・それは起きてからのお楽しみだ♪」

すると突然俺の下に穴が出現した。

「ってまたかよぉおおおおおおおおおおおお！！！！！」

「やっぱお約束かな～って♪不意打ちしないとバレそうだったし♪」

「ふざけんなぁぁぁぁぁぁぁ・・・・・・」

～・～・～・～・～・～・～

以上回想終了。

ま、朝っぱらから嫌なことがあったんだよ。あと、G．W，社って表向きは「ゴールド・ウィンドウ」（金色の風）ってことになってる。まぁ、この世界の日本は好景気だからピッタリな名前なんだが多分「ゴット・ウイング」とかなんだろうな・・・・・なんたって神が作った会社なんだから。

「安心しましたわ。まさか専用機で戦うなんて思っても無かったで

しょうけど。専用機ならフェアな勝負が出来ますわね」

セシリーが話しかけてきたな。こいつも決闘絡みの話になると必ずと言っていいほど話しかけてくるからな～。正直言って面倒くさい。

「俺が専用機に乗ってフェアな勝負になるかね・・・・」

「あら、自分が劣勢な事に気づいたんですの？だったら、今からでもハンデを付けてあげても宜しくてよ？」

「ああ、悪い。そういう意味じゃないんだ。逆でお前がかわいそうになるなって思ってさ」

「・・・・・何をおっしゃているの？」

「まぁ、それは試合当日のお楽しみってことで」

「・・・・・まぁ、いいでしょう」

「ほら話がまとまったなら席に戻れ。授業を始められんだろ」

「あの織斑先生、質問があるんですが」

「どうした、言ってみろ」

クラスのある女子が手を上げていた。

「篠ノ之さんってもしかして篠ノ之博士の親戚か何かでしょうか？」

「ああ、篠ノ之はあいつの妹だ」

って、いいのか千冬さん。個人情報ばらして。

「なに、どうせその内ばれていたさ」

「って、やっぱり先生は読心術を心得てるんですか？」

「まぁ、少しくらいならわかるさ。ましてや身内同然のお前なら尚更な」

「はぁ、やっぱり千冬さんにはかないませんね」

「ふん、お前はまだガキだろうが。私にかなわなくて当然だ。それと、織斑先生だ」

「分かりましたよ、織斑先生」

千冬さんは満足気な顔をして教室に戻った。すると

「ええ！？このクラスって有名人多くない！！」

「私このクラスでよかったかも！！！！！」

といった感じの女子特有の黄色い声が教室に広がっていた。って、そうか箒が束さんの妹ってバレてたのか。忘れてた忘れてた。そういえば、箒と束さんはそこそこ仲がよかったな、確か。おお、箒がオロオロしてるよ。微笑ましいな～。こっちに助けの目を送っているが流石に助けられないからな～。

「と、とりあえず皆さん席についてください」

山田先生の注意も虚しく声は届いてないようだった。

「さっさと、席に着かんか！授業中だと言うことを忘れるな！」

するとみんな席に戻っていった。さすが千冬さんだな。一言でみんなを従わせた。ある意味あの人は魔王じゃないのか？

「おい、鷹野。失礼なことを考えてないか？」

「いえ考えて・・・」

パシーン！！！！！！

「・・・いや、せめてセリフは言わせてください。てか、痛い」

「ほぅ、もう一発喰らいたいか」

「すいませんでした！！！！」

「よろしい。では山田先生、号令」

「は、はい！」

いつもどうりの授業が始まった。

～・～・～・～・～・～・～

次の休み時間、（まぁ昼休みだな）に箒が話しかけてきた。

「おい、慎二！なんでさっき助けてくれなかった！！！」

「なんでって言われてもなぁ・・・でも、ある意味よかったんじゃないか？クラスのみんなと打ち解けられたみたいだし」

「それはそうだが・・・・それとこれとは違いが・・・」

「それはそうと箒、飯食いに行こうぜ」

「まだ、話しが終わってない！！」

「でも、早いとこ食べないと時間無くなるぞ？話なら後で聞いてやるから」

「・・・・・その言葉忘れるなよ」

「ああ、放課後部屋に行ったらいくらでも聞いてやる」

俺たちは食堂に向かった。途中で一夏を呼んだら箒の機嫌が悪くなった。・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・あれ？もしかしなくても俺にフラグ立ってね？

う～ん、どう対応すればいいんだろう？・・・・・・・まぁ、いっか。

今は飯だ飯。

その日の放課後部屋についた途端に箒が文句を言い始めた。まぁ、言っていいって言ったのは俺なんだが・・・・流石に2時間は長いだろ・・・・ＩＳの基礎理論書読みながら聞いていたが長かった・・・・・もう少しで決闘だからなぁ・・・・さてどうしたもんか・・・・・・・最低限、箒に剣道してもらうか・・・・

ま～た、面倒なことが起こったよ・・・・（後書き）

次回は多分セシリーと戦います。

戦闘描写うまく書けるかなぁ・・・・・・不安だ・・・・・

決闘！！なんだけどなぁ・・・（前書き）

姉にＰＣ返してたので更新開きました

今回ははじめての先頭描写でした。

グダグダですが読んでくれると幸いです。

決闘！！なんだけどなぁ・・・

時は過ぎて次の週の月曜日。俺と箒と一夏は第三アリーナに来ていた。まぁ、セシリーと勝負するためだな。ちなみに、一夏は専用機が用意できなかったらしく今日はセシリーと俺の一騎打ちになってしまった。はぁ、一夏がいれば最低限盾に出来たのに・・・・・

「俺の専用機こないな～」

「そうだな」

「俺はＩＳ用意できないから観客だし楽だな～」

「・・・・・・逆だったら良かったのに」

「ん？何か言ったか慎二？」

「いや、別に」

まぁ、俺の専用機はまだ来ていない。ったく、神ならさっさと用意しろよ。てか、一夏の専用機用意できなかったのって絶対神が絡んでるよな～。

「ブルーティアーズか・・・・・」

セシリーはもう準備万端でもう１０分くらい待っている。律儀に待ってるなんて偉いな～、そこだけ。まぁ、俺は専用機待って３０分経ってるんだけどな！

「はぁ、いつになったらくるんだか・・・・・・」

誰にも聞こえないような声で愚痴った時

「鷹野君鷹野君！！！！！大変です！！！！！」

「何が大変なんですか、山田先生。せめて主語を入れてください・・・・・」

「す、すみません。そ、それよりも大変なんです！！」

「だから主語を・・・・・・」

この人は人の話を聞いてるのか？ましてやこの人は大人だよな？

「来ました！！！鷹野君の専用ＩＳ！！！」

「ほぉ、だったら準備しませんとね」

俺がＩＳスーツに着替えてきたら、そこにはでかいコンテナがあった。この時代でもでかいのを運ぶときはコンテナ使うんだな～。そこは人類の超えられない壁なのだろうか？そんなどうでもいいこと考えていると、コンテナが開いた。

「これが高野君の専用ＩＳ『雪月花』です！！！」

え～、何その厨ニ臭い名前。まぁ、かっこいいから良いか。さて、俺のＩＳはどんなのかな～。大体色は白ってのは想像出来るけどね。だって雪って入ってるし。そんな事を考えながら振り向くとそこには白がいた。・・・・いや、原作のパクリじゃないからね？白って

言っても種類があるじゃん？そこを説明するから。原作の百式は機械的な白だったろ？だけど雪月花は本当に雪のような白さなんだ。これから何色にでも染まりそうな白があった。

「早くしろ。時間がない。フォーマットとフィッティングは実戦の中で行え。できなければ負けるだけだ」

さすが千冬さん、無茶なこと言ってくれるぜ！たしかＩＳフォーマットとフィッティングって戦う前にやるもんじゃないの？今回は時間ないから仕方ないか・・・。そう思いながら俺は雪月花に触れた。

「・・・・・あれ？」

「どうした？まさか動かないとか言わないよな？」

「いや、そこは問題ないんだが・・・・・なんか冷たくてさ」

「いや、機械なんだから当たり前だろ」

「いや、そうなんだが・・・・違う冷たさなんだ。何か雪に触れているような冷たさでさ・・・・・」

「ほら、早くしろ。時間がないと言っただろ」

そう言われて俺はＩＳに乗り込んだ。

「背中を預けるように。そうだ、あとはシステムが最適化をする」

乗った感想はまるでこれからゲームが始まるような感覚だった。好きなゲームが発売してそれをこれからやるようなウキウキ感だ。だ

が、違うのは俺と雪月花が繋がっていることだ。

「ハイパーセンサーは問題なく作動しているな。鷹野、気分は悪くないか？」

「最高ですよ。何の問題もありません」

「そうか」

ほっとしたような千冬さんの声。ハイパーセンサーがなければ気づかないかもしれないくらいの違いだった。と言うか、ハイパーセンサーってこんなにもすごいのか？景色がいつもより鮮明だし全方位見えるし・・・・・・はは っ、なんだこれ。最高に気分がいい。周りを見渡すと、一夏と箒がいた。正確には意識を向けただけだ。

「箒、一夏行ってくる」

「ああ、あんな奴倒しちゃえよ」

「ああ、行ってこい！」

「ああ、勝ってくる」

そう言って俺はピット・ゲートを飛び出した。

「あら、逃げずに来ましたのね。遅いから来ないと思いましたわ」

「遅かったのはＩＳが来なかったんだよ。ま、逃げる理由はないか

ら来ないとな」

莫大な量の情報解析されていく。その中のブルーティアーズの情報は、特殊武装あり。てか、このままだとじばらくはフォーマットとフィッティングは終わらないな。ま、フィッティングは現在進行形で行われているんだろうけど。

「最後のチャンスをあげますわ」

「チャンスって一体なんだ？降参するチャンスだったらいらないぜ」

「そう、残念ですわ・・・・・それでは・・・・・」

警告！敵ＩＳ射撃体制に移行！ほぅ、攻撃がくることまで分かるのか。便利だなＩＳ。

「お別れですわね！」

パシュ！というような空気が圧縮されたような音がしたら俺にエネルギー弾が発射されていた。俺はそれを最低限の動きで回避する。

バリアー貫通。ダメージ２０。残りエネルギー５８０。実体ダメージレベル低。

あれ、やっぱり当たったか。まだ、ＩＳが俺の動きに対応出来てないな。ってことは、いつもよりも早く判断しなくちゃならんのか。ま、ハイパーセンサーのおかげでそんなのは楽なんだけどな。続けざまに射撃の嵐と言わんばかりのエネルギー弾の雨が降ってきた。さっきみたいなヘマは出来ないな・・・・

「さぁ、踊りなさい。私とブルーティアーズの奏でる円舞曲で！」

「悪いな。俺は生まれてこの方踊ったことがないんでね。そんな大層な踊りはできないな」

そう言いながら、俺はＩＳの武装を確認した。一覧には３項目あった。お、一夏みたいな１個だけではなかったか。え～と、『菊一文字』に『漆黒ノ太刀』に『バズーカ（ネタ）』？前二つは剣って分かるが、何だこの『バズーカ（ネタ）』って？まぁ、最初は無難に菊一文字で良いか。俺は菊一文字をコールした。すると出てきたのは全長２，５メートルもありそうな日本刀が出てきた。お～、結構かっこいいな。

「中距離射撃型のわたくしに近距離戦闘を挑むなんて・・・・・笑止ですわ！」

すると更に銃撃が激しくなった。それを俺は菊一文字と回避をもって猛攻をさばいていた。

「う～ん、これはちょっと頑張らないと辛いな～」

そういや、さっき整理している情報に神経伝達速度４倍ってなってたんだけど・・・・・嘘じゃね？だってさっきからタイムラグしか起きてないし・・・・まぁ、最初から比べればってきたけどな。あれだな、完全にフィッティングが終わってないからなんだろうけどさ。たまに無駄に当たってるからちょっと辛くなってきたか。シールドエネルギーが４００切ったし。

「さて・・・・・どう攻めるかな・・・」

俺は柄にもなく不敵な笑みをこぼした。

～・～・～・～・～・～

「はぁぁ・・・・。すごいですね鷹野君。とてもＩＳ起動が２回目とは思えません」

山田先生からみたらそうだろうが、他３者が見たら当り前に見えていた。いや、不思議に思っていた。

「ＩＳがあいつの反射についていけてないな」

「え？でもあのＩＳの神経伝達速度は４倍を超えているんじゃ・・・」

「それでもだ。主な理由はフィッティングが終わってないからだが、まだあいつに追い付いていない」

「彼って本当に人間なのでしょうか・・・・」

「まぎれもない人間だ。あいつだって泣いたり怒ったりするんだ」

その様子をみながら一夏と箒は

「まったく、あいつは何している！あいつならあんな奴すぐに終わるだろうに！！！」

「ほんと、どうしたんだ慎二？いつもの調子じゃないのか」

～・～・～・～・～・～

俺は少し苦戦していた。主な理由はタイムラグによるシールドエネルギーの低下だがそれだけじゃない。

「27分。まぁ、もったほうですわね。初見でここまでブルーティアーズに耐えたのはあなたが初めてでしてよ」

「そりゃ光栄だな・・・・」

そう言いながら俺はシールドエネルギーを確認した。残り100か・・・・。さすがにジリ貧だな・・・・・・。それと対照的にセシリアは戻ってきたピットを愛犬を愛でるように撫でている。そう、やっかいな理由その二がピットだ。隙があるにはあるんだが、ISが俺の動きについてこれないから中々手を出せないでいた。ま、ここらで一発賭けをしてみるか・・・・・そして俺はもう一つの武器漆黒ノ太刀をコールした。漆黒ノ太刀はその名のとうり、黒い3mある太刀だった。まぁ、ほとんど日本刀と変わりないな・・・・そうして俺は、右手に漆黒ノ太刀、左手に菊一文字という感じで構えた。

「あら、二刀流ですか・・・・まぁ、何をしてもわたくしの勝利に狂いは出ませんが！」

そういうと更にピットによる射撃の激しさが増した。

（くっ！ここらで行くぜ！！！！）

俺はエネルギー弾を菊一文字で弾き、特攻を試みる。するとセシリアは≪スターライトmk？≫を構えて俺への射撃を試みた。が、俺は漆黒ノ太刀でスターライトmk？へめがけて横なぎに振いスターライトmk？はセシリアの手元を離れた。

「っく！あなた無茶をしますわね！」

その隙を逃さずに俺は追い打ちをかけた。

「ですが詰めが甘くてよ！！！」

「何！？」

ぶるーティアーズのスカート部分と思われる部分から突如ミサイルが飛びだした。

「ちぃ！！！」

俺は回避をしてミサイルを切ろうと試みるが

（！？・・・くっそ、こんな時にタイムラグが・・・・！？）

あのまま切れていれば問題はなかった。が、今回のタイムラグは1秒にも及んだ。

「っく！」

俺は、爆発による衝撃に備え目を閉じた。

～・～・～・～・～・～

「高野君！！」

モニター室にいた3名が騒然としているなか千冬だけは笑みを浮か

べていた。

「機体に救われたな、バカ者めが」

「「「え？」」」

煙が晴れて行くと同時にそこには純白がいた。

～・～・～・～・～・～・～

『フォーマットとフィッティングが終了しました。確認ボタンを押してください』

機械音が流れてくる中、俺は指示に従った。

「やっと終ったか、まったく時間がかかったな・・・」

煙が晴れるとさっきとは違う雪月花がいた。最初のような機械的な角張りが更に攻撃特化になったように激しさを増していた。背中に着いていた小型のウイングスラスターは膝の後ろに届くくらい大型化していた。

「まさか、一次移行！？あなたいままで初期設定で戦っていたっていうの！？」

「まぁ、そういうこった。やっと、タイムラグが無くなったか・・・・」

「タイムラグ・・・？まさか今までは対応が遅れていた・・・・？」

「さぁ、こっからが本番だぜ！Ａｒｅ　ｙｏｕ　ｒｅａｄｙ？」

俺はさっきとは比べ物にならないくらいの速さで接近した。

「っく！！何て速さですの！！！！」

セシリアが接近戦武器『インターセプター』をコールしようとしていた。

「インターセ・・・・」

「遅い！！！」

俺は具現化しかけていたインターセプターを一刀両断した。おぉ。さっきよりも切れ味が上がってやがる。その隙にセシリアは距離をとってピットを展開していた。さすがに距離の取り方がうまい。

「さっきは接近を許しましたけど、今度はそうはいきません！」

今までで一番激しい攻撃だ。

（ほぅ、ここまでできるのかさすがだなぁ・・・・だが）

［ワンオフ・アビリティ『疾風迅雷』発動］

その文字が見えた瞬間に世界が一変した。さっき十分早かったが、こいつは・・・・・・・常に瞬時加速と考えてもらった方が分かりやすいかもしれない。だが、こいつで終わらせる・・・・！

「な・・・なんてスピードなんですの！？ピットが全く追いつか・・

・・」

「うおぉおおおおお！！！！」

俺は３Ｇにも及ぶ重力に軋む体に鞭打って全力で加速した。そして袈裟切りの構えに入った瞬間・・・

ブーーーーーーー！！！！　　ん？

『勝者、セシリア・オルコット』

「え？」

「・・・・・なんで？」

～・・～・・～・・～・・～・・～

「期待の特性を把握せずに戦うからだ、バカ者」

控え室に戻った瞬間に千冬さんにダメだしされた。

「何で負けたんですか、俺？」

「雪月花のワンオフ・アビリティ『疾風迅雷』はシールドエネルギーを消費してＩＳの能力を上げる能力だ」

「ああ、ってことはそのせいで先にシールドエネルギーがなくなったのか」

「そういうことだ」

理由が分かっても負けは負けだよなぁ、はぁ・・・・・・・・

「慎二、ドンマイ」

「まぁ、悔しいけど仕方ないか・・・」

俺が落ち込んでいると

「慎二！！！途中までの戦いはなんだ！！！！！」

と、今度は箒からのダメ出しだった。

「お前だったら、あんな奴簡単に倒せただろう！！」

「まぁ、そうなんだが・・・・タイムラグが酷くてな」

「それでもだ、お前はハンデがあっても簡単に勝てるだろ！！！」

「今回は無理したくなかったんだよ。初めてで勝手がわからなかったしな。おれに期待してくれるのは嬉しいが・・・・」

そんな言い合いが続いていると山田先生が助け舟を出してくれた。

「まぁまぁ、篠之ノさんもそれくらいにしてください。鷹野君だって疲れているわけですし」

やっと、箒が黙ってくれた。言い返すのも疲れてきてたからちょうどよかった。

「それと、鷹野君。鷹野君のＩＳは今待機状態になっています。呼び出せばどこでも展開できますが規約があるのでそこはしっかり守ってください」

「分かりました。まぁ、規約の方はしっかり覚えたんで問題ないです」

俺のＩＳの待機状態はネックレスだ。デザインは雪の結晶になっている。原作の一夏みたいに防具じゃないんだなぁ。

「今日は疲れたろ。寮に帰ってゆっくり休め」

「そうさせてもらいます」

そうして俺の初めてのＩＳ戦闘は幕を閉じた・・・・・・・

後に、ＩＳの神経伝達速度を見たら常人の６倍になっていた。・・・・・・・・・・・・・・・・俺って人超えてるとは思ったけどそこまで行ってたのか・・・・・・・・・別な意味でショックを受けた慎二であった・・・・・・・・・

決闘！！なんだけどなぁ・・・（後書き）

ちゃんと書けてましたかね？

誤字脱字がありましたら報告よろしくお願いします

はぁ、女子ってのはどうしてこんなにも強いんだ・・・・（前書き）

サブタイトルは関係あるようで関係ありません

ま、内容を見てからのお楽しみで

はぁ、女子ってのはどうしてこんなにも強いんだ・・・・

俺は今保健室にいる。何があったかはこれから話すよ・・・・・はぁ、だるい・・・・

俺はあの試合の後に晩飯を食べたんだよ。それで、部屋に戻る途中でまぁ吐いちまったんだよ。気持ち悪くもなくていきなりだったから、俺もビックリしたんだけどな一番ビックリしてたのは箒だった。ま、部屋に戻る途中だから一緒にいたんだけどな。それで用務員の人呼んできてもらって、片付けてもらったんだよ。幸い他に人が居なかったのが救いかな。で、そのあと箒に連れられて保健室に来た。それで検査したら内蔵（主に消化器官）にダメージがあった。理由としてはＩＳ戦闘での『疾風迅雷』によるダメージだと言うことが分かった。疾風迅雷はあまりのＩＳ能力の上昇によって内蔵にもダメージが通ることが分かった。その後、千冬さんがきて疾風迅雷の使用規制について話に来た。あと、エネルギー変換により制限できることも。それで、次の日学校を休めとも。その夜までは箒が看病してくれたんだが、寮の門限が迫っているから返した。で、今は絶賛ボッチってわけさ。飯も3日間は流動食（某ゼリー飲料やお粥）だけだしなぁ・・・・・はぁ飯は結構楽しみなのに。まぁ、今日は疲れたし休むか・・・・・

～・～・～・～・～

で、次の日俺は千冬さんに強制的に休みにさせられたので寮の部屋に戻って休んでいた。が、流石に昼時になると腹が減る。みんなの昼休みが終わるまであと３０分ある・・・・・今日はお粥がよかったけどゼリーで我慢するか・・・・

コンコン「慎二、いるか？」

「ああ、いるけど・・・・どうした箒？」

そう言って入ってきたのは箒だった。まだ、昼休み中だし忘れ物でも取りに来たのだろうか？箒の手に持っていたトレイに目がいった。

「箒、そのトレイどうした？お粥だけど」

「ああ、これはお前に持ってきたんだ。昨日は結局ゼリー飲料だったし、今日はお粥がいいと思ってな」

「お、マジで！持ってきてくれたのか！」

「うむ」

そう言うと、箒は部屋に入ってテーブルにトレイを置いてくれた。おお、あったかいご飯だ・・・・・まぁ柔らかいけど。そこはいいか、ご飯だったらなんでも。

「その、私が食べさせてやろうか？」

「いや、ご飯くらいは自分で食えるって」

箒がシュンとうなだれてしまった。あ、そうかフラグ立ってるんだっけ。はぁ、仕方ないか・・・・

「じゃあ箒、食べさせてくれ」

「・・・・いいのか？」

「いいのかって・・・・お前が最初にいったんだろうが」

「う、うむ、分かった。では・・・・・・・・あ～ん」

「あ～ん」

差し出されたお粥をもぐもぐと食べる。味付けはジンプルに塩と卵だ。俺はシンプルなのが好きだからちょうどいいや。それよりも、食べさせられるのって恥ずかしいな・・・・・周りに誰も居ないのが救いか・・・・・

「どうだ？美味しいか？」

「ああ、やっぱシンプルなのがうまいな」

「そうか、よかった・・・・」

心底安心したような声で呟いていた。ん？もしかして・・・・・・

「なぁ、箒」

「な、何だ？」

「もしかしてこれってお前が作った？」

「な、何で分かった！？」

「いや、味付けが異様に俺の口に合うから。あとは勘だけどな」

何か箒がもじもじしてる。何か可愛いな・・・・・・・っは！？俺は一体何を！？・・・・それよりも次が食べたいな・・・・

「箒、次くれ」

「わ、分かった。あ、あ～ん」

昼休み一杯まで箒は部屋にいて俺にお粥を食べさせてくれた。と、昼休みが終わりそうになると箒が

「そろそろ午後の授業がはじまるな・・・食器を片付けてくる」

「ああ、分かった。午後も頑張れよ」

「・・・・そういえばクラス代表はお前になったぞ」

ん？今なんて・・・・・・・・・・

「・・・・・・・・・箒、今なんて言った？」

「だから、クラス代表はお前になったと言ったんだ」

「・・・・・・・・何で？」

「たしか、オルコットがクラス代表を辞退したんだ」

「・・・・・・・・・・何で、辞退したんだよ・・・・オルコットさん」

「そろそろ授業に遅れてしまうからもう行くぞ」

「・・・・・分かった」

俺は委員長的立ち位置にはなりたくなかった。だって、放課後の時間削られたり、雑用任されたりいいことなんて無いからな。てか、正直面倒くさい・・・・今、悩んでも仕方ないか・・・・・・・・・・・・・・・・よし、寝るか。そう思い俺は眠りについた。

～・・～・・～・・～・・～

「ん・・・・・・？今何時だ・・・・・・・・・？」

目を開けるとそこには箒の顔があった。

「・・・・・・・箒？」

「ししししししし、慎二起きていたのか！？

「ああ、今起きた。てか、今何時だ？お前が帰ってきてるってことは学校は終わってるんだろうけど・・・」

「ああ、今は5時だ」

え～と、俺が寝たのが大体1時だから・・・・・・・・・

「・・・・・俺、４時間も寝てたのか・・・・・？そんなに寝たの初めてだな」

「そんなに寝ていたのか？よっぽど疲れていたんだな」

「まぁ、そうだな。それと寝る前に美味しいお粥も食べたしな」

「・・・・そうか、よかった。・・・・ふふ」

箒が嬉しそうにしてるな。うん、微笑ましい。そいや、フラグの件はどうするか。まぁ、付き合うっていっても箒なら問題はないし・・・・。いや、だってスタイルいいし料理もうまいし美人だし根は優しい子だし。原作は何でツンデレだったんだ？こんなに素直だし・・・・・う～ん分からん。

「そういえば慎二」

「ん？何だ？」

「今日の８時からお前のクラス代表就任パーティをやると言っていたぞ」

「・・・・・ああ、そうか。俺、クラス長になったんだっけ」

「無理なら後日にすると言っていたが、どうする？」

「いや、問題は無いよ」

「そうか、だったら問題ないと言ってくる」

「うん、分かった」

そう言うと、箒は部屋を出ていった。う～ん、まぁ腹くくるかぁ。そいや、昨日の試合の記録があったはずだな。それでも見て反省会でもするか。・・・・と、疾風迅雷が発動したとこ見るか。

う～ん、確かここらへん・・・・・・・お、あった。・・・・・・・・・・・何これ？てか、何この速さ・・・・・・・そりゃあ内蔵にもダメージくるわな・・・・・・そんなことを考えているとドアの方から声がした。

「慎二さん？いたら返事してください？」

ん、この声はセシリーか？

「はいはい、いますよ～っと」

扉を開けると案の定セシリーがいた。

「あれ？やっぱりオルコットさんか。どうした？」

「あの、わたくし謝りたくて・・・・ごめんなさい」

「は？一体何について謝ってるんだかわからないんだが・・・・」

「日本を侮辱したことと・・・・その、あなたを侮辱したことですわ」

「あ～、そんなことあったな。ま、気にすんなって。俺もオルコットさんのこと侮辱したし」

「慎二さん、オルコットさんなんて他人行儀な言い方はやめてください。わたくしのことはセシリアでいいですわ」

「そっか、分かったよセシリア」

「ふふ、それで宜しくてよ？」

「ま、立ち話もなんだし部屋に入るか？」

「では、そうさせてもらいましょうか」

俺はセシリアを部屋の中に入れた。俺は椅子に座りセシリアにはベットに座ってもらった。

「もう、最初みたいな着飾った態度は取らないんだな」

俺は、まずそのことについて話した。

「あら、どうして最初が着飾っていたと思いますの？」

・・・・・・原作がそうだったからとは言えない。まぁ、理由としてはちゃんとあるんだけどな。

「まず、最初に話したときに違和があったんだ。何か、無理して去勢を張っているというか、なにかを忘れようとしてるみたいな感じがしたんだ。あとは、今日暇だったからちょっと調べたんだ、オルコット家についてな。セシリア、お前の両親は去年他界しているな」

ここは少し原作と違うところだった。原作では確か7歳の時に他界しているはずだ。

「・・・・そう、そこまで知っているのですね。では、去勢を張っていた理由も？」

「まぁ、大方付いているさ。大体、オルコット家として恥の無いよ

うに高貴な感じでいたんだろ？」

「ふふ、当たりですわ。さすがですね。・・・・・確かに私は去年両親を無くして、不安定でした。そこで、ＩＳの代表候補生でしたのでＩＳの訓練に打ち込んで忘れようとしていましたわ。でもそんなのは気休めでしかありませんの。今だって寂しくて・・・・・・」

「・・・・・・セシリア、もう無理しなくてもいいんじゃないか？」

「無理なんてしていませんわ・・・・・・」

「じゃあ何でお前は・・・・・そんなに泣きそうな顔をしてるんだ？」

「泣きそうな顔なんて・・・・・・」

「今はさ、そんな我慢しなくていいよ。俺とお前しかいないんだし。俺には甘えてもいいぜ？セシリアが頑張ってるって俺は知ってるさ」

「・・・・・・・・・もう無理しなくてもいいんですの？」

「ああ」

「今は・・・・・・・・泣いてもいいですの？」

「ああ」

「うう・・・・・・・うううう・・・・」

セシリアは顔に手を当てて泣いていた。まったく・・・・・そんな泣く時まで我慢しなくてもいいのによ・・・・・そう思いながら俺はセシリアに近づいて静かに抱き寄せた。すると、セシリアは俺に抱きつき大声で泣いた。いくら15歳と言っても、子供は子供だ。亡くなったのが自分の両親ならなおさらだ。オルコット家はイギリスでは有名な貴族だ。それに見合うようにセシリアも頑張ってきたのだろう。多分セシリアは葬式の日も我慢していたのだろう。そしていままでも・・・・・1年間誰にも弱みを見せないように頑張っていた。親が残していった財産、地位を守るために。財産を狙う腐った大人たちから守るために、な。大変だろうな、俺が想像している以上に。しばらく泣いていたセシリアも落ち着いていた。

「もう、大丈夫か？」

「ええ、見苦しいところをお見せしましたね」

「泣いているのが見苦しいのか？それは違うだろ。人間は泣く生き物だ。泣いて当たり前なんだからそんなふうに言うなって」

「ふふ、そうですわね。・・・・・・・もし、次また泣きそうになったら胸をお借りしてもよろしいでしょうか？」

「ああ、それくらいならお安い御用だ。っと、そろそろ時間だな」

「あら、そうですわね。主役が遅くてはパーティも始められませんわね」

「そうだなぁ、だったら先に行って始められるようにしとくか」

「なら、ご一緒してもよろしいでしょうか？」

「どうせセシリアも来るんだろ？なら、断る理由がない」

「では・・・・・」

そう言うと、セシリアは俺の左手を取って抱きついてきた。

「あのセシリア、恥ずかしいんだが・・・」

「あら、殿方がレディをエスコートするのは当たり前ではなくて？」

「そういうもんかね・・・・・・まぁ、いいか・・・それでは参りましょうか？お嬢さん？」

「ふふ、それでよろしくてよ？」

そんなことを話しながら俺たちは食堂に向かった。途中箒に会って、怒られたのはまた別な話し・・・・・・・・・・・・・・

結局俺が部屋に戻ったのは１０時になっていた。いやぁ、１０代女子おそるべし。ああ、あと黛薫子先輩に名刺貰ったな。どれどれ・・・・・・・・あれ？これって会社の名刺じゃね？しかも結構有名な・・・・・・あ、そっか薫子先輩のお姉さんて結構有名な会社に務めてるんだっけ。ってことはその会社の名刺・・・・・・ああああ！考えるの面倒くせぇ。今日はもう寝る。って、俺今日結構寝てるな・・・・・・ま、眠い時に寝るのが一番だな、うん。じゃ、おやすみ～

はぁ、女子ってのはどうしてこんなにも強いんだ・・・・（後書き）

はい、すみません

かってにセシリアをかわいそうな娘に仕立て上げました

まぁ、原作とは違うって言ってるから問題ないよね？

あと、また更新空くと思いますので更新楽しみにしておいてください

ふむ、ＩＳ学園に来てから再会が多いような・・・（前書き）

今回もｇｄｇｄです

ふむ、ＩＳ学園に来てから再会が多いような・・・

「では、これからＩＳの基本的な飛行テストを行なってもらう。織斑、鷹野、オルコット。試しに飛んでみろ」

今はセシリアとの勝負が終わり１週間が経ち４月も終わろうとしている、そんな季節だ。桜の花びらも散って少し寂しい気もするが、季節ってのはそんなもんだろ。っと、さっさとＩＳ展開しないとな・・・・俺の体が一瞬光に包まれたと思ったらＩＳが展開されている。う～ん、まだ遅いかな～

「ふむ、まぁ妥協点だな。もっと早く展開できるように励めよ」

ほ～ら千冬さんからもありがたい言葉を貰えたぞ～、ってやっぱ厳しいな千冬さん。まぁ、俺も納得はしてないんだけど・・・・ねぇ？そんな中一夏はというと、やっとＩＳが展開できたみたいだな。

「遅い！熟練したＩＳ操縦者なら展開までに１秒とかからないぞ」

うん、やっぱり厳しいね。今回は一夏が遅いんだけどね。そういえば、一夏のＩＳは俺とセシリアが戦った次の日に届いたぜ。現時点で一時移行まで終わってるんだけどな。・・・・俺は初期設定で戦ったのにな、何なんだろうこの扱いの差。

「よし、全員展開したな。飛べ」

そういわれて、俺とセシリアは急上昇しある距離まで行くと停止した。一夏はというとまだ上昇途中だった。うん、遅い。百式のスペックは俺の雪月花には劣るとはいえ、ブルーティアーズには上なん

だからもっと早いはずなんだけどな。

「一夏、遅いぞ」

「そう言われてもな・・・・まだ飛ぶって感覚に慣れてないんだよ。慎二はなんでそんな早いんだよ」

「慣れた」

「慣れって・・・簡単に言ってくれるな」

「ま、何回も乗って慣れろってこった。スペック上ではブルーティアーズよりも上なんだから頑張れ」

「まぁ、慣れるしかないのか・・・・・」

そう言いながら、俺たちは飛行を始めた。う～ん、やっぱり風って気持ちいいな～。まだ春の風だからあったかいし、眠くなってくるな・・・・そう思いながら飛んでいるとセシリアが微笑んでいた。

「ん？どうした、セシリア。そんな顔して」

「いえ、ただ慎二さんと一夏さんは仲が良いなと思いまして」

「そうか～？どちらかというと俺が一夏をからかっているだけなんだけどな」

「おい！慎二！それは酷くないか！？」

「酷くない酷くない。そう言われないように俺を超えてみろ！」

「お前を超えるって・・・・・無理だろ」

「いやいや、ＩＳについては同じスタートラインなんだから大丈夫だって」

「まぁ、そうだけど・・・それをお前が言うか？」

「ふふ、やはり仲がいいですわね」

「はは、そうかもな」

「こら、そこの三人。いつまで仲良く飛んでいるんだ。さっさと急降下と完全停止をしてみろ。オルコットと鷹野は地上から１０センチを目標に。一夏は、地面にぶつからなければそれでいい」

「って、俺の目標設定高くないですか？」

「・・・始め！」

「って、やっぱり無視・・・・」

「ふふ、ではお先に」

そう言うとセシリアは地面に向かって急降下した。途中、ブーストを逆噴射して見事地表１０センチを達成した。

「ほう、やっぱり上手いな。じゃお先、一夏。地面に衝突するなよ」

「しねぇよ！」

「その言葉、忘れんなよ？」

俺も、セシリア同様に急降下した。俺はセシリアよりも遅いタイミングで全力でブーストを逆噴射して、地表５センチで停止した。

「さすが慎二さんですわね」

「ま、これは雪月花のスペックがあってこそ出来るんだよ」

「それでも、操縦してるのは人間なので結局のところ操縦者なんですのよ」

「う～ん、褒めてくれてありがとな。恥ずかしいが」

そんな会話をしていると一夏が地面に衝突しそうになっていた。はぁ、やっぱりか・・・・仕方ねぇな。俺は漆黒ノ太刀をコールして峰の部分で一夏を下から打ち上げた。ホーーーーームラン！！！とまではいかないが、２，３メートルぶっ飛んだ。

「いてて・・・慎二なにすんだよ！！」

「何って、助けてやったんだろうが」

「助け方にも方法があるだろ！」

「ほう、お前は地面に大穴を開けそうになって授業後一人でグラウンドの土を持ってきて修復したかったと？」

「いや・・・その・・・・・ありがとうございます」

「うむ、よろしい」

「そこのバカやってる二人はほっといて授業を進めるぞ。次は武装を展開しろ。織斑、そのくらいだったら出来るな？」

「ええ、まぁ、一応」

「そうか、ならやってみせろ」

そういうと一夏は目を閉じて右手に意識を集中させた。光の粒子が集まったかと思うと剣が出現した。

「遅い、０，５秒で展開できるようにしろ」

「次はオルコットやってみせろ」

「わかりました」

セシリアは一夏と違い一瞬爆発的に光ったと思うと手にはスターライトｍｋ？が握られていた。それにセーフティと弾が装填されている。すぐにでも射撃ができるようになっている。

「流石は代表候補性だな。よし、次は接近戦用武器を出してみろ」

「え？は、はいわかりました」

今度はさっきみたいな爆発的な光はなく一夏みたいに光が少しづつ集まってきた。だが、なかなか展開できない。

「まだか？」

「っ・・・！もう少しです」

そう言うと、今度はインターセプターが手に握られていた。

「遅いぞ。お前は実践でも相手に待ってもらうのか？」

「・・・はい、気を付けますわ」

「まぁ、練習すればいいさ。なに、まだお前たちは若い。これからはやる気があればいくらでも伸びる。励めよ、１５歳」

「は、はい！」

「さてと、あとはそうだな・・・・・・実戦での武器の使い方でも教えるか」

「あの、先生？俺は・・・？

「さて、射撃武器の説明だが・・・・・・」

「あぁ、やっぱ無視なのね・・・・・・はは、いいさもう慣れたし・・・・慣れたし」

俺は地面にのの字を書いてふてくされた・・・・・

～・・～・・～・・～・・～

「ふ～ん、ここがそうなんだ」

ＩＳ学園の正門には体には似合わないようなボストンバックを持っている小柄な少女がいた。

「ええと、総合受付は・・・？」

くしゃくしゃにはなっているが、最低限読めるくらいの紙を取り出し、場所を確認した。彼女の性格的にはもっと、くしゃくしゃになっているはずだが、ある人の言葉をキッチリと守っていた。

（あいつ、元気かな～。ま、元気じゃなかったら無理にでも元気にしてやるけどね）

彼女は中国人。だが、小学、中学は日本で暮らし友達もいた。そのなかの男子がこの学校にいる。まぁ、二人しかいないわけだが。そのどちらとも知り合いの彼女は再開を楽しみにしていた。

「だからお前は・・・・で・・・・・・・なんだよ」

ふと声がした。

（あれ、この声って・・・？）

「だから一夏は弱いんだよ」

「いや、慎二が強すぎるんだよ。あんな動き卑怯だろ？」

「仕方ないだろ？ＩＳのスペックが高いのが悪い」

やっぱりこの声は・・・・慎二だ・・・・・（注：一夏なんて眼中にない）よし、声かけよう。あ、でも気付かなかったらどうしよう・・・ま、いっか。その時はその時だ。

「慎・・・・・・・・」

「でも、慎二さん。少しは手加減をしてあげたらどうですの？さすがに一夏さんがかわいそうではなくて？」

「そうだぞ、慎二。強者なら弱者に対する対応もわきまえなければ」

「・・・・・・お前ら二人。意識はないだろうけど結構傷つくんだが・・・・」

「ま、大丈夫だって。一夏昔から頑丈だし、それにＩＳには絶対防御があるしな。今のうちからやられることに慣れさせるのもありだろ」

「・・・・・・・・・・・・・・もう良い」

その様子を3人で楽しそうに笑っていて、一夏が怒り出した。

（慎二が笑ってる顔久しぶりにみたなぁ・・・・・たまに悲しい顔するからなあいつ・・・・・）

今の彼女に他の女に対する嫉妬などの感情はなく昔を懐かしむような目でその様子を見ていた。邪魔をしないようにで総合受付に向かった。

「はい、じゃあ以上で手続きは終わりです。ようこそ、鳳鈴音さん」

「2組みのクラス代表って決まってますか？」

「え、決まってるけど・・・どうするの？」

「変わってもらうんです。私に」

慎二たちが1年1組だと言うことは知っていた。クラス代表になっていることも。5月の初めにクラスリーグマッチで戦うために変わってもらわないと・・・

～・～・～・～・～

「おはよ～、織斑君、鷹野君。ねぇ、転校生の噂聞いた？」

次の日の朝、クラスに入るなり鷹月さんが話しかけてきた。

「転校生？この時期に？また中途半端だな」

「たしか、編入って形になると試験のハードル上がるらしいな、この学校は」

「へぇ、さすが慎二だな」

「お前はもう少し勉強しろ」

「ですが、転校生の実力があっても慎二さんがいれば関係ないですわよ」

う～ん、セシリアは大分丸くなったな。みんなに対しても。やっぱ、

元は優しいいい子なんだな。って、そういえばなんだかんだでセシリアにもフラグ立てちまったな・・・・・はぁ、何でこんないい子達が俺なんかに好意を抱くんだか・・・・・

「そうだな、慎二がいれば百人力だな」

いつのまにか箒も来て話に混ざっていた。箒とセシリアは原作みたいにギスギスした感じではなくて仲のいい友達になっている。ま、仲が良いのはいいことだな。

「う～ん、褒めてくれるのは嬉しいけどやっぱ恥ずかしいな・・・」

俺がそう言うと、みんなが微笑んでいた。うん、やっぱこういうのには慣れない。恥ずかしい。

「慎二君には、頑張ってもらわないと！」

「そ！フリーパスのためにも！」

そう、5月のはじめにあるクラスリーグマッチで1位になったクラスには食堂のデザート1年間無料で食べられるフリーパスが貰えるのだ。ここのデザートは美味しいからなぁ。よし！今回も頑張ってみますか！

「専用機持ってるのもあと4組だけだし楽勝だよ！」

「へぇ～、4組にも専用機持ってる人いるのか～。ねぇ、誰だかわかる？」

「え～と、確か更識簪さんだっけか？」

「・・・・簪か・・・・・・・・・・」

「どうしましたの慎二さん？その簪さんと言う方は知り合いですの？」

「ああ、まぁ保育園でも知り合い。要は幼馴染だな。ま、幼稚園の卒園式で引っ越したんだけどな」

「あら、そうですの・・・・覚えていればいいですね」

「そうだなぁ・・・・放課後ちょっと会ってくるか」

「その情報古いよ！」

ふと、ドアの方から声がした。ふむ、この声は・・・・・あいつか・・・・

「2組も専用機持ちになったから簡単には優勝させないわよ！」

「やっぱ鈴か・・・・・鈴、そんなところにいないでこっち来て話そうぜ」

「そうしたいのは山々だけど時間が無いから教室に戻るわ。慎二！昼休みに会いに来るから待ってなさいよ！」

「はいはい、わかりましたよ～っと」

鈴は2組に戻っていったと同時に千冬さんが教室に入ってきた。

「諸君、おはよう」

「「「「「「「「「おはようございます」」」」」」」」」

この人が来るとみんな直ぐに自分の席に戻るんだよなぁ。軍隊みたいだ。ってことはあれか、千冬さんが上官か・・・・うわぁ嫌だなぁ・・・・・せめて山田先生くらいのってあの人は軍隊でもそんな上には立てないな・・・・

「鷹野、くだらないことを考えてないか？」

「いいえ考え・・・・・」

パシーン！！！！！

「・・・だからせめてセリフ言わせてください。痛みには慣れたけど・・・・」

「ほぅ、そうかだったらもっと強くするとしよう」

「いや、何でもありません！！！！！！」

「最初からそのように返事しろ。では、ＳＨＲを始める」

そうやって、今日が始まった。

～・～・～・～・～

時は過ぎ、今は昼休み。いつものメンバーで食堂に向かっていた。

食堂につくと

「待ってたわよ！慎二！」

と、道の真ん中で鈴が待っていた。

「俺は別に待ってないけどなぁ。それと鈴、そこ邪魔になるぞ。こっち来い」

「う、うるさいわねぇ！分かってるわよそんなこと」

「いや、分かってるなら最初からそうしろよ」

「いちいち、細かいわねぇ」

「人の迷惑にならようにしんしゃい」

そんな会話をして俺たちは食券を買い、食事を貰った。

「って、やっぱりお前はラーメンか」

「いいじゃない、美味しいんだもの。それとも何か文句ある？」

「ないけどよ、たまには違うものも食べたらどうだ？幸いこの学校のメニューはすごい量だし」

「そうね、気がむいたらそうしてみるわ」

俺たちは適当な席を見つけ席に座った。

「そいや、鈴。お前いつ帰ってきてたんだ？連絡くれれば迎えに行ったのに」

「子供扱いしないでよ、私だって女なのよ！」

「はいはい、分かりましたよ。で、いつ帰ってきたんだ？」

「昨日の夕方ね」

「また、急だなぁ。また、おばさんとおじさん店やるのか？」

「あ・・・・ああ、うん多分ね」

鈴が珍しく言葉を濁した。ってことは、言いにくいことか・・・・・・ま、余計な詮索はしない方がいいか

「おほん、ところで慎二さん」

「そろそろこいつとどういう関係か教えてもらいたいんだが」

「ああ、まだ紹介してなかったな。こいつは鳳鈴音。去年まで日本にいたけど中国に帰ったんだ。で、鈴こっちは篠ノ之箒だ。前に話したろ？後は、セシリア・オルコットまぁクラスメイトだ」

「よろしくね、私の事は鈴でいいわよ。鈴音って言うの面倒だろうし」

「では、私の事も箒でいい」

「わたくしもセシリアでいいですわ。あまり他人行儀に言われるの

は好きではありませんの」

「それは同感ね。同年代だもの仲良くしなくちゃね」

こちらも原作とは違くて、早々に打ち解けたな。やっぱあれか、みんな素直だから対応が違うのか？ま、仲が良くて悪いことはないし深く考えるのはやめよう。っと、あいつらは大分仲良くなったな関心関心。もうそろそろみんな食べ終わるな・・・

「ふぅ・・・・ごちそうさま。で、慎二あんた放課後ＩＳのトレーニングしてるんだって？」

「ま、始めたばかりだからやってるよ」

「なんなら、私も手伝おうか？」

「まぁ、それもありだがクラスリーグマッチが終わるまでは遠慮してくれ。最初に手の内分かってると本気の勝負した時つまらないだろ？」

「まぁ、それもそうね。じゃ、クラスリーグマッチは期待してもいいのね？」

「ああ、期待しとけ。俺に負けないようにな？」

「ふふ、大口叩けるのは今だけよ。じゃ、私クラスに戻るから」

「おう、またな」

そう言って、鈴は教室に戻って行った。

「慎二さん、大丈夫ですわ。わたくしが付いていますもの。不安なんてありませんわ」

「そうだな、セシリアの指導期待してるぜ？」

「はい、任せてくださいまし」

「私もいることを忘れてもらっては困るぞ」

「ああ、箒も接近戦の練習のときは頼むよ」

「うむ、任せておけ」

そう言った感じでその日の昼休みは終わった。

うん、鈴はいつ見ても元気だったな。まったくもって微笑ましい。クラスリーグマッチも楽しみだな。鈴も中国の代表候補生だから強いだろうし。ま、こっちにはセシリアもいるし箒もいるから問題ないな。これで負けたら俺の責任だ。あ、そうや放課後は簪に会いに行かないとな・・・・・・

ふむ、ＩＳ学園に来てから再会が多いような・・・（後書き）

なんだか、キャラ崩壊が加速しているような・・・・

そして中途半端に終わるという

次回は簪との再会編です

チートもたまには役立ったな・・・・・チートも使いようか・・・・・？（前書き

今回は簪さんのターンです

ただキャラ崩壊が加速していますので原作のキャラがいいと言う方はブラウザバックしてください

チートもたまには役立ったな・・・・・チートも使いようか・・・・・？

今は放課後、俺は４組の教室前に来ていた。簪に会うためだ。教室に入ると周りから「え、何で鷹野君がこの教室に・・・？」的な声が上がっていたがそんなのは関係ない。ぐるりと教室の見渡しても簪らしき人はいない。今は居ないのか？そう思ったが俺は近くにいた女子に話しかけた。

「ねぇ、ちょっといい？」

「え？な・・・・何？」

ちょっとおどおどしてるな。まぁ、いきなり話しかけられたらびっくりするわな。

「更識簪さんってどこにいるか分かる？」

「え？更識さん？え・・・・え～と確か整備室にいるはずだけど・・・」

「どこの整備室だかわかる？」

「ご、ごめん。そこまでは・・・・」

「そっか、邪魔したね。教えてくれてありがとう」

この学校の整備室は多いから何番目か知りたかったけど仕方ない。地道に第一整備室から見てくか。俺は待機状態のＩＳからディスプレイを出して学園の地図を出した。いや～ＩＳって便利だね。地図

をインストールすれば地図がディスプレイに表示されるから。俺は地図を頼りに整備室に向かった。

～・～・～・～・～

「ここが最後か・・・・」

俺は第一整備室から順に見てきた。が、結局最後の第七整備室まで来た。何もこんな遠くの整備室でやらなくてもいいだろうに・・・・。流石に疲れたぜ・・・・俺は息を整えて整備室のドアを開けた。ここもほか同様に機械が沢山あるな・・・・・ん？何か音がする・・・・向かってみるか。音のする方に向かうと人がいた。いや、当たり前なんだけどね。水色かかった髪をした女子だった。いや、こっちも当たり前だよね。逆に男がいたほうがびっくりだよね。そんな本当にどうでもいい・・・・いや、結構大事か・・・？・・・・とにかく俺はその女子に話しかけた。

「お～い、簪」

簪は返事をしないでディスプレイとにらめっこしていた。って、これは気づいていないな・・・・

「お～い、簪！」

ビクッ　あ、大声出しすぎたか・・・・・・・ま、気づいてくれたし良いか。

「・・・・・何？」

「何って酷くないか？久しぶりの再開なのに。まぁ、覚えていれば

だけどな」

「え？・・・・・・慎・・・・・ニ・・・？」

「そうだよ、俺は慎二だ。思い出したか？」

「思い出すもなにも・・・・・忘れて・・・・ない！」

「だったら最初の反応はなんだよ？忘れられているのかと思って俺、不安だったんだぞ？」

「あ・・・あれは・・・・その・・慎二が・・・・・・かっこよくなってて・・・・分からなかったから」

「そうか？かっこよさなら一夏の方が上だと思うけどなあ」

「そんなこと・・・ない！私は、慎二の方が・・・かっこいいと・・・思う」

「そ・・・そうか・・・・それはありがとう。でもそれを言うなら簪だって・・・・その・・・綺麗になったと思うぞ」

「あ・・・・ありが・・・・とう」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

あ、あれ？もしかして墓穴掘った？・・・・やべぇ、恥ずかしい・・・・どうしよう・・・・・何か話題何か話題・・・・・・って、俺

がここに来た理由を忘れてた。

「そいや、簪」

ビクッ　そんなにびっくりしなくてもいいのに・・・

「どうした・・・の？」

「いや、毎日毎日、整備室に来て何してるのかなぁって思ったんだけど」

「ＩＳを・・・組み立てるの」

「え？ＩＳを？なんでまた・・・・」

「倉持技研の人たちが・・・・白式の開発に回ったから」

「ああ、一夏のせいか」

「別に・・・そういう訳じゃ・・・・・ない」

「ま、どっちにしろ手伝うよ。で、今は何をやってるんだ？」

「そんな・・・ことさせちゃ悪い」

「いいんだよ、俺が勝手にやってるだけだから」

「・・・・だったら手伝って」

「おう、任せとけよ」

俺のチート能力の見せ場だぜ！

「それで今は・・・ウイングスラスターの出力調整をしてるの」

簪がディスプレイを見せてくれた。

「ああ、なるほど。出力が上がらないのか・・・・だったらこれをこうしたらどうだ？」

「でもそれだとこっちが・・・・・」

「ああそうか。ならここをこうして・・・・・」

「あ・・・出力の効率が良くなった」

「じゃ、次はこっちだな・・・・・・」

二人でディスプレイとにらめっこして時間が過ぎていった。

～・～・～・～・～

「ふぅ、簪ちょっと休憩しようぜ」

時間は既に5時半を回りあたりも少し暗くなっていた。

「う～ん、流石にＩＳの組立となると調整とは勝手が違うな」

「それは・・・当たり前。ＩＳは・・・・難しい」

「ま、それは同感だな。わからないことが多いからなＩＳは」

「・・・ねぇ・・・慎二」

「ん？どうした？」

「慎二はどうして・・・・・・そんなに強いの？」

「へ？何で今その話に・・・・」

「この前の戦いを・・・・思い出して」

「ああ、あれか」

簪が言っているのはセシリアとのクラス代表決定戦の事を言っているのだろう。ってか、簪も見てたのか。

「・・・別に俺は強くないさ」

「でも・・・・あの時は・・・・・・・強かった」

「ありがと。でも、俺は弱い・・・・・・・・あの子を守れなかった俺なんかな」

「え？・・・・何て言ったの？」

「ああ、なんでもないよ。気にしないで」

簪はびっくりしていた。いや、びっくりと同時に何故か恐怖を感じた。さっきの慎二は目の光が消えて虚ろになっていた。まるで、生

きていないように・・・・常人には理解できないような、暗い闇がそこのあるようで・・・・ここにいたのが簪ではなく他の人がいてもそう思っただろう。だが、簪はそこには触れなかった。触れてはいけないような気がしたからだ。簪は話題を変えて

「そ、そういえば・・・・クラスリーグマッチは大丈夫？」

「ん？まぁ、なんとかなるさ。いままで放課後は特訓してたしな」

「だったら・・・特訓したほうがいいんじゃないの？・・・こっちよりも」

「そんなこと気にすんなよ。それにもう少し頑張ればこの機体だって完成するだろうし」

そう、慎二の助けにより『打鉄弐式』はほぼ完成していた。まだ完成していないのは武装だ。『マルチロックオンシステム高性能誘導ミサイル』と『荷電粒子砲』が完成していない。荷電粒子砲の方は慎二の手伝いにより完成しているも同然だが、マルチロックオンシステム高性能誘導ミサイルがまだ微妙なところだ。まぁ、今夜睡眠時間を削って少し考えれば解決はしそうなんだけどな。時間にしてあと1～2日あれば完成する見込みは立っていた。これも慎二のチート能力によるところが大きい。常人には考えられない量の情報を解析、解決にまで持っていく能力があるからこそ、ここまで完成に近づいたのだ。

「とりあえず今日は遅くなったし寮に戻るか」

「うん」

俺たちは戸締まりと片付けをして寮に戻った。

～・～・～・～・～

「よっしゃあああ！出来たーーー！」

次の日の放課後、５時の整備室、慎二の雄叫びが上がっていた。

「動作確認もしたいけどもう時間的に無理か・・・・・明日テストしようと思うんだが、どうする簪？」

「う、うん・・・それでいいと思う」

「よし、じゃ明日の放課後だな」

「あ、あのね慎二・・・・ありがとう」

「ん？ああ、気にすんなって。それに言ったろ？好きでやってんだから気にすんなって」

「迷惑じゃ・・・・なかった？」

「迷惑だと思ってるなら俺も来ないよ。そこまでお人好しじゃない。それに俺は簪だから手伝ったんだよ」

「私だから・・か・・・・・・・へへ♪」

「そうそう、簪はもっと笑ったほうがいいよ、可愛いんだから」

「か・・・かわいい・・・！？・・・・・私が・・・・・！？」

「そ、子供ときはよく笑っててたと思うけどな」

「かわいい・・・私が・・・・・かわいい・・・・・・・」

あれ？何にも聞こえてないか？って、もう寮の門限近いな・・・・・・・うん、仕方ない。無理にでも連れていかないと。俺は簪の手を取り歩きだした。

「え・・！？慎二・・・・・！？」

「お、戻ってきたか。だったら手放すぞ」

「だ・・ダメ・・・・！・・・・手・・・・繋いでいたい・・・・」

「そ、そうか。でも恥ずかしいんだが・・・・」

いや、だったら手を繋ぐなよオリ主よ。

「・・・・・・・・・いや？」

うごぉおおおお！涙目の上目遣いで俺を見ないでくれぇえええええええええええええええええええ！！！お持ち帰りしたくなるだろぉおおおおおおお！！！！って、冷静に考えると箒が居るんだった・・・・そんなの関係あるかぁあああああああああ！！！！

「い、いやじゃないよ」

「そっか・・・ふふ♪」

あれ、機嫌良くなったか・・・？それよりも俺の理性がやばかった・・・・・・・ふぅ、やっと落ち着いた。その後、特に問題は無く寮に戻った。

～・～・～・～・～

次の日の昼休み、クラスリーグマッチの組み合わせ表が張り出された。なんと、俺は鈴と当たった。ん？そいやあんまり鈴と話してないな。ま、いっか。

その後何事も無く放課後になった。簪の起動テストだ。

「おいで・・・・・打鉄弐式」

うん、装甲も問題ない。

「とりあえず、飛行テストしてくれ」

「わかった」

簪は返事をすると飛び上がった。う～む、流石は日本の代表候補生、うまいね。加速、減速、旋回、急停止、上昇、下降を一通りこなして戻ってきた。

「どうだ？調子は」

「問題ない・・・・ただ少しブースト出力とスラスターの動きがずれてた」

「まぁ、それくらいならお前のデータと参照して調整すれば問題な

いさ。じゃ、次は武装テストだな」

俺は、パネルを操作して的を出した。

「じゃ、まずはミサイルだな」

俺はそう言って、的の数を２０に増やした。

「・・・少し多過ぎ」

「ミサイルをとりあえず全部出してくれ。どこまで正確性があるか知りたいし」

「・・・わかった」

簪は空中ディスプレイを操作して的をロックオンしていった。カシャ、と音がなった後にミサイルが次々と発射される。時差はあるにしろミサイルは次々と的に当たっていった。爆発の煙のせいで視界が悪いが時間が経つにつれて煙が晴れていった。結果は全弾命中。よし、マルチロックオンシステムは問題無いな。

「じゃ、次は荷電粒子砲を頼む」

俺はパネルを操作して違う的を出した。さっきと違うところは的が動くことだ。簪は荷電粒子砲をコールして的を狙った。キュインとチャージする音が聞こえ発射の準備が終わる。３秒か・・・・・もう少し早くならないものかな・・・・ドーン！と音がする頃には的を破壊していた。うん、威力は問題なし。まぁ、やっと実戦でも使えるくらいになったな。そばに簪が戻ってきた。

「どうだった？簪」

「うん、動作不良も無かったし・・・・何の問題もない。これも慎二の・・・・おかげ」

「どういたしまして。って、もうこんな時間か。結構準備に時間かかったな・・・・よし、帰るか」

「うん、わかった・・・・・・ねぇ、慎二今日も手・・・・繋いでくれる？」

「いや・・・・さすがに恥ずかしい・・・・」

「・・・・やっぱり嫌なんだ」

「い、いや！嫌じゃないって！！！ただ、恥ずかしいだけで・・・・・」

「・・・・だったら・・・・繋いでくれる？」

だから涙目で上目遣いはやめてくれぇえええええええええええ！！！！！！！落ち着け俺落ち着け俺落ち着（ｒｙ

「・・・・分かったよ。じゃ、帰るか」

俺は手を差し出した。

「・・・うん！・・・・えへへ♪」

簪は手を握ると嬉しそうな声で返事をした。たまにはこんなのもあ

りかと俺は思って寮に戻った。

うん、あれだね簪もフラグが立ってるね・・・・・・・・・さて、どうしようかね・・・・・・・ま、今はどうしようもできないからな・・・・・そんなことよりも何故か鈴が怒っていた。まぁ、ずっと放っておいたから怒られるのも当たり前か・・・・・・あとで謝ろう・・・・・・・・・って丁度良いことにクラスリーグマッチがあった。

その時に謝るか・・・・・・・よし！明日から特訓だ！！！・・・・・・・・・・・・・二日しかないけど

チートもたまには役立ったな・・・・・チートも使いようか・・・・・？（後書き

何故か簪のキャラがわからない件

まぁ、酷かったですよねぇ

すんません

何でこうも面倒事ばかり・・・・・・・・（前書き）

今回も戦闘描写がひどい結果に・・・・・・

何でこうも面倒事ばかり・・・・・・・・

さて、なんだかんだで始まったよクラスリーグマッチ。俺はもうアリーナに出ている。前には鈴。

「ねぇ、慎二。私としてた約束覚えてる？覚えてたら今回の件は忘れてあげる」

「ああ、もちろん覚えてるさ。あれだろ『料理が上手くなったら毎日私の料理食べてくれる？』だろ？」

「そう！そうよ！！よく覚えてたわね、あんた。あんたの性格だったら忘れてそうだけど」

「人に聞いといてそれかよ。全く褒めて欲しいもんだぜ」

「で、返事は？」

「ん・・・・それはお前が試合に勝ったら教えるってのはどうだ？」

「なによそれ・・・・まぁ、いいわ。じゃあ、勝ったら絶対教えなさいよね！」

「ああ、約束は守るさ」

『両者規定の位置まで出てください』

そこまで行くと試合のブザーがなった。さぁ、これからはいつ攻撃してもいいわけだ。気を引き締めなきゃな。俺は菊一文字をコール

した。対する鈴は青龍刀みたいなものをコールした。おいおい何だありゃあ。さすがにあんなの喰らったらやばいな・・・・・俺が思考に浸っていると鈴が先制攻撃を仕掛けた。俺は瞬間的に菊一文字だけじゃ受けきれないと判断し漆黒ノ太刀もコールした。そして。二本の刀で鈴の攻撃を受けた。ガキィン！！と音が周りに響いた。くっ・・・・・漆黒ノ太刀を出しといて正解だったな・・・・・・・・一撃が重い。

「へぇ、良く受け止めたわね！」

そう言うと鈴は更に力を込めた。くっ！このままじゃ押し切られる！俺は即座に菊一文字で鈴に切りかかる。

だが、動きは読まれていたように回避された。うまく距離を取られた・・・・・やっぱ強いな、鈴。

「ふん、あんたの動きなんかお見通しよ！」

鈴がまた突進してきた。俺は雪月花の機動力でそれをうまくかわし、力を込めた。

（もう練習した技を使わないとまずいか・・・・・）

俺は、漆黒ノ太刀を振るう。すると、剣から衝撃波が出た。

「ったくあんたは規格外ね！」

そう悪態をつきながらもノーダメージで回避する。まぁ、それくらいは読んでたさ・・・・・俺は、鈴の回避した方向にもう一回衝撃波を放つ。

「そんな同じ手が通じると思ってんの！」

衝撃波を鈴は青龍刀で弾く。

「それはダミーだ！」

その声が聞こえたとき鈴は慎二を見失っていた。いくらＩＳは３６０度見えるからと言って乗っているのは人間だ。必ず死角が出てくる。人間は後ろを見ることには慣れない。そこを雪月花の機動力で不意を突いた。次の瞬間には慎二は鈴に連撃を食らわせていた。

「っく・・・・なめるなぁ！」

鈴は青龍刀を振り回す。だが慎二には当たらない。

「遅い！」

攻撃の隙を突いて俺はまた鈴に連撃を当てる。だがそれは鈴の罠だった。鈴はバックステップをして距離を取りＩＳに付いていた二つのボールみたいのから何かが飛び出る。

「ッ！！！」

俺はそれをもろに喰らった。地面に叩きつけられ意識が一瞬飛かけるがＩＳに意識を引っ張られ無理やり意識が戻った。次々と放たれる見えない砲弾を俺はかろうじて躱していた。

「へぇ、よくかわすじゃない。衝撃砲＜龍砲＞は砲身も砲弾も見えなのが特徴なのに」

「見えないっていったって感じることはできるさ」
俺は龍砲を見切っていた。見えないものをよけるのは簡単だ。ましてや最低限ハイパーセンサーで見える。これなら簡単によけられる。鈴からは絶えず衝撃砲が発射されている。だがもう当たらない。避けながら俺は

「鈴、本気で行くぞ」

「なによ、今までは本気じゃなかってわけ？」

「まぁ、そんな感じだ・・・・・俺を見失うなよ？」

残りシールドエネルギーは４００。これならいける・・・・『疾風迅雷発動』ＩＳのディスプレイに表示されたあと俺は加速した。今回は２０％に制限されているがこの状態の雪月花はＩＳ史上最速になる。

「な、なんて速さなの！？龍砲が全然追いつかない！？」

俺は砲弾の雨をよけながら鈴に接近し、切りかかった。この調子で何回か切れば試合は終わる。そう思った矢先。
ズドォォォォォン！！！！！
アリーナ内に轟音が響いたかと思うと
『鷹野君、試合は中止です！早くピットに戻ってください！』
山田先生からの声が聞こえた。すると次は
『ステージ中央に熱源感知！敵ＩＳにロックされています！』
今度はＩＳからの警告音が鳴り響く。

「慎二！試合は中止よ！早くピットに戻りなさい！」

「多分無理だな。だって俺ロックされてるみたいだし」

「なんですって！？」

「ま、落ち着けや。時間稼ぎはなんとかなるさ。ってなわけで山田先生早いとこ増援頼みますよ」

『え？だ、だからピットに・・・・』

ブツッ！俺は通信を無理に切った。そして疾風迅雷を解除する。長くなるかもしれないから切っておかないと燃費が悪いからな。

「って、あんた無理に通信切ったわね」

「だって仕方ないだろ？あいつのビームはシールド破るみたいだし誰かが食い止めないといけないんだよ」

「まぁ、確かにそうね・・・・」

「ま、いっちょ共同戦線と行こうか。鈴、シールドエネルギーは？」

「１５０ってとこね・・・あんたは？」

「俺は３２０だ。危なくなったら離脱しろよ？無理は絶対するな。あいつのビームはシールドエネルギーをだいぶ削るはずだ。最悪死ぬかもしれない。絶対にそれだけはやめてくれよ」

「あんたもね。たまにあんたは無茶するからね」

「ああ、わかってるさ・・・・・さて、敵さんが出てきたみたいだぜ」

アリーナ中央の煙が晴れてきて敵ＩＳの姿が確認できるようになってきた。敵のＩＳは全身黒のフルスキンタイプで操縦者の姿は見えない。腕と胸の辺には大きな砲身が見える。あれでシールド破ったのか・・・・・・・

「さて鈴、俺が接近するからお前は援護を頼む」

「分かったけど、怪我はしないでね。まぁ、怪我は私がさせないけど」

「ああ、頼りにしてる」

俺たちはアイコンタクトをとり敵に接近した。

～・～・～・～・～・～

「鷹野君！？鷹野君、返事をしてください！鳳さんも！もしも～し！」

「本人たちがやると言っているのだ。任せてやれ」

「な、何をのんきな事を言ってるんですか織斑先生！」

「鷹野が言っていることは正しい。あのＩＳのビームはシールドを破る。最悪観戦しにきていた生徒にも被害が及ぶ。誰かが足止めをしなければならない」

「だったら、増援を！」

「これを見てみろ」

そう言って千冬が指さした画面にはこう書かれていた。

「遮断シールドがレベル４に設定！？扉も全てロック・・・・あのＩＳの仕業ですね」

いつの間にかモニター室で試合を見ていたセシリアと箒も画面を見ていた。

「そういうことだ。支援に行きたくとも行くことが出来ない。現在、３年の精鋭たちがシステムクラックを実行中だが時間がかかるだろう」

「・・・・・待つことしかできないと言うわけですわね」

「そういうことだ。大人しく待っていろ」

箒はただアリーナ内を映す画面を見つめていた。

（私は何もできないのか・・・・・？私はいつも傍観しかできない・・・・・そしていつも助けて貰うばかりだ・・・・・）

～・・～・・～・・～

「っく！こいつ攻撃が聞いていないのか！？」

俺たちは順調に攻撃しているように見えるが相手にはダメージが見

られない。相手からビームが発射される。俺たちは一回距離をとった。

「鈴、シールドエネルギーはどのくらい残っている？」

「５０ね・・・・・・そろそろまずいかも・・・・あんたは？」

「俺も１００しかない・・・・・・鈴、お前はピットに戻れ」

「な！？私はまだ戦えるわよ！」

「じゃあ、お前は死ぬつもりか？あのビームに当たったら絶対に死ぬ。だからお前は戻れ。お前がそこまでする必要はない」

「あ、あんたはどうするのよ！あんただって似たようなモンじゃない！！！」

「ああ、そうだな」

「だったら・・・」

「だが、結局誰かが足止めをしないとないらない。それにこういう損な役回りは男の役目だ」

「で、でも・・・」

「心配してくれるのは嬉しいけどな、鈴。俺はもう誰かが死ぬのは絶対に見たくない」

（誰かが死ぬ・・・・・・？もしかして慎二は誰かが死ぬのを見た・

・・・・・・？）

「鈴、分かってくれ」

「ッ！？・・・・分かったわよ！勝手にすれば！！！」

「ありがとう、鈴」

「でも！！！！！」

鈴は泣きそうな顔で

「絶対！絶対によ！！！！生きて帰ってきなさいよ！！！！」

「・・・・ああ、約束する」

鈴は自分を頼ってくれない寂しさと悲しさ、不甲斐なさ。そして・・・・・・・・・・・・・・隠し事をされている怒りが心を埋め尽くしていた。何で涙が出ていたのかは鈴自信にもわからない。

俺は鈴がピットに戻るのを見送りＩＳと向き合った。

「さてと・・・・・第２Ｒの始まりだ・・・・・」

俺は二本の剣を持ち直し体に力を込めた。切りかかろうとした。だが・・・・・・・・・

『慎二！！！！！』

突如、アリーナに響く声によってそれは遮られた。声の主は箒だった。

『私は！・・・私はいつも守られてばかりだ・・・・・だからこの恩を返す前には絶対に死なないでくれ！・・・・・・でないと私は・・・・』

最後の方は涙を流してほとんど嗚咽に近く聞き取れなかった。だが、敵ＩＳは箒の方を見ている。まさか・・・・！？

次には、ＩＳはビームのチャージを始めていた。

「箒！！！！！逃げろ！！！！！！！！」

だが、箒は泣いていて状況を把握出来ていない。くそッこのまま普通に行ってももう間に合わない。仕方ない。『疾風迅雷発動』

「疾風迅雷のリミッターを解除！！！」

『ですが、人体にダメージが・・・・』

「そんなのは関係ないんだよ！！！！！！！」

『・・・・・・・了解』

その時、俺は風になった。ＩＳの絶対防御を無効にしてすべてのエネルギーを疾風迅雷に回した。体が・・・・・・・軋む・・・・・・・・・・。この時慎二の体にかっかていたＧは１０Ｇにも及ぶ。ビームが発射された。

（くっそ！！！！！間に合え！！！！！！！！！！！！！）

俺はビームと箒との間に体をねじ込んだ。次の瞬間には背中にとて

つもない衝撃が走った。

「ぐあぁああああああああああああああああああああああああああ！！！！！！！！！！！！！！！！！」

「し・・・・ん・・・・・・・・・・じ・・・・・・・・・？」

箒は信じられないものでも見たような顔でこっちを見ていた。よかった・・・・・・・・・怪我はない・・・か。そう思って、俺は下に落ちる。絶対防御を無効にしていたから背中にはひどいケガを負っているだろう。そして、意識も落ちそうになる。が

（ここで意識がなくなったら・・・・・・みんなが危ない・・・・・・・まだ・・・・・・・終わらねぇ！！！！！！！）

俺は無理に体を動かし、ＩＳに全力で切りかかる。よかった、まだ疾風迅雷は発動している・・・・・・・これで止めが・・・・・・・・させる・・・・・

「これで終わりだぁあああああああああああああああああああああああああ！！！！！！！！！！！！！！！！！」

敵ＩＳの右腕を切り落とし、剣を切り替えして胴体を切った。

（浅かったが・・・・・これで・・・・・・・・・・・・問題ないだろ・・・・・・・中枢を狙ったし・・・・・・）

その願いには反して敵ＩＳの左腕が襲ってきた。よける術もなく俺はただ飛ばされた。そして背中から地面に打ちつけられる。

「かっはぁ！」

俺は苦悶の声あげながら血を吐いた。疾風迅雷の全開によるダメージが出てきたみたいだ。

（く・・・・そ・・・・・！まだ・・・・・動けるの・・・・・か）

敵ＩＳは胸のビームをチャージし始めた。俺は動こうとするが

「動か・・・・・な・・・・・・・・・い・・・・・・・・！」

ここにきて無理の代償が出た。絶対防御の無効にしての背中へのダメージ。疾風迅雷を無理に強要してきて雪月花のシールドエネルギーは０になっていた。最低限のエネルギーもない。

（は・・・は・・・・・・・・・ここで・・・・・終わりか・・・・・・・）

「「慎二――――――――――――――――――！！！！！」」

箒と鈴の悲惨な声が響く。まったく・・・・・静かにしろよ。うるさいな。俺は痛みに備え静かに目を閉じた・・・・・

だが、いつまで経っても攻撃はこない。不思議に思って目を開けると・・・敵ＩＳはチャージが完了した状態で動けないでいた。理由は・・・・・

「慎二さんは絶対に死なせませんわ！！！！！！！！！！！！！！！」

セシリアがピットからＩＳを展開してスターライトｍｋ？で射撃をしていた。おかげで敵ＩＳは行動不能になっていた。ああ・・・・・・・・・これで終わったか・・・・・・・・・・背中の出血が痛むが問題ないだろう・・・・・・・それに何か眠いな・・・・昨日の夜ふかしが効いてきたかな？そう思って俺は意識を手放した。

何か周りで声が聞こえる。とても聞いたことがある声だ。この声は・・・・・・・箒か・・・・・・・・鈴も・・・・・・セシリアも・・・・・・・簪もいるな・・・・・・・・・・・みんな泣いている・・・・・・・

・・・・・・・・・そんな泣くなと言いたいが声がでい・・・・・・・・・・・・・・・・・・俺はまた意識を手放した

何でこうも面倒事ばかり・・・・・・・（後書き）

書いたあとに気づきました

一夏が出てない!!!!!!!!!!!

一夏マジ空気!!!!!!!!!!!!!!!!!

うん、今回はあれだね・・・・・・（前書き）

今回は短めです

うん、今回はあれだね・・・・・・・

「ん・・・・・・・？ここは・・・・・・・？」

目に飛び込んできたのは白だった。って、またかよ・・・・・・・・・・・・暇だな神も

「こらこら、暇とか言うな」

「だって、事実そうじゃん」

「言っとくが今回は違うから。で、お前はここにいる理由わかるか？てか、何やってたか覚えてるか？」

「え？何やってた・・・・・？」

確か・・・・・・鈴とクラスリーグマッチで戦ってて、そしてゴーレムが乱入してきて・・・・・・

「・・・・・ああ、俺は死んだのか」

「いや、正確に言うと生きている。が、ほぼ瀕死の状態だ。あのビームを受けて生きているのは奇跡だぞ」

「でも、お前がくれたチートボディがあるじゃん」

「そうはいっても、あれほどの攻撃を受けるのは想定してねぇよ」

「・・・・・・一つ教えてくれないか？」

「ん？何だ？」

「箒は・・・・・・みんなは無事か？」

「ああ、ケガの一つもしてないぜ」

「そうか・・・・・・よかった」

「でもな、お前が死んだと思って泣き喚いてたぞ」

「・・・・・」

「で、今回は別に死んではいないがすぐにあっちの世界に戻す」

「なんでまた・・・・・・」

「それはな、お前が死ぬと泣くやつがいるからだよ」

「だったら、、みんな死にそうなやつはそうじゃないか・・・・・・・だったら何で」

「あの子を助けなかったってか？」

「・・・・・何で知ってる」

「お前な、俺は神なの。お前の世界を覗くこと、記録を見ることなんて簡単なの」

「・・・・・・」

「・・・お前だったら大切な人がいなくなる悲しみが分かるだろ？」

「・・・ああ」

「だったら、さっさと戻って安心させてやれ」

「・・・・・・今回は落とすなよ」

「あれ？バレてた？はっはっはっ・・・・・じゃ、行ってこい」

「・・・・分かった」

そう言うと神は指を鳴らした。するといつもどおり穴があいた。さて、さっさと戻らないとな。そう思い俺は世界に戻った・・・・

～・・～・・～・・～

千冬side

「お前ら、少しは休め。倒れたら面倒が増えるだろうが」

篠ノ之、オルコット、鳳、更識はこいつがあのＩＳからの攻撃を喰らって眠ってから少ししか休んでない。こいつはもう４日も目を覚まさない。医師によると、瀕死の状態ではあるが命に別条はない。が、いつ目が覚めるか分からない。下手をすると一生目を覚まさないかもしれない、とのことだった。まったく、こいつは何でこうも無理をするんだ・・・・私に頼ればいいものを・・・・・・・目が覚めたらそこのところを説教してやろう。あと、ＩＳの絶対防御を切っていたこともな。

「そんなにそいつの事が気になるか？」

４人は頷いた。そういえば、篠ノ之とオルコットと鳳は分かるが何故更識がいるんだ？まさか、あいつもう落としているのか？いや、ここにいる時点で落ちているか。あいつは昔から何故かモテるな。顔は良くもないが悪くもないのにな。まぁ、あいつの性格に惹かれるんだろう。私もいつの間にか惹かれていたしな・・・・ご、ごほん、話を戻そう。さて、こいつらを休ませるにはどうしたものか・・・・・・

「こいつが丈夫なのは知っているだろう？その内目を覚ますさ。だから、今は休め。こいつが起きたときに説教ができるようにな」

「はは、そうですね。今回の事は説教してやらんといけませんね」

「本当そうですわね。わたくしを頼ってくれなかったことを説教しませんと」

「そうよ、私なんか途中でピットに戻されたし」

「・・・・何も一人で頑張らなくてもいいのに」

４人であいつの事を言いたい放題だな。まぁ、これで休むだろ。まったく世話の掛かるガキどもだ。

千冬ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

～・～・～・～・～

千冬さんが箒たちを休ませた次の日の夕方、俺は目を覚ました。

「ん・・・？」

「「「「「し、慎二（さん）！？」」」」」

「あれ、お前ら・・・・・何でここに？」

４人は次の日も看病に来ていた。やはり想い人が心配なのだろう。そして、説教してやろうと昨日話していたがやはり慎二が起きてくれたことが嬉しくてそんなことはすぐには出来なかった。涙がとめどなく流れる。これが嘘ではないかと思うくらい。４人は慎二に泣きついた。

「「「「「うわぁあああああん！！！」」」」」

「おわ！？」

「何をやっているのだバ・カ・・者・・・さっさと起きな・・いか。心配しただろう」

「わたくし、あなたが死んだらどうすればいいんですの・・・・・？助けてもらってばかりで何も返せてないのに・・・・・」

「バカバカバカ！！！本当に死んじゃったと思ったじゃない・・・・・・」

「慎二・・・・・・良かった・・・・目が覚めて・・・・・・・本当に良かった」

「みんな・・・・・・」

泣いていて途中聞き取れなかったりもしたが、本当に心配してくれていたのはしっかりと伝わった。本当俺は何をやってるんだかな・・・・・こんな良い娘達を心配させて・・・・・・

「何を泣いてるんだ貴様・・・・・ら」

そんな呆れた感じで入ってきた千冬さんは俺が起きていることに驚いているようだった。

「鷹野・・・・・目が覚めたか」

「ええ、まぁ。体中は痛いですけどね」

「当たり前だ、バカ者」

そういつも通りに見える千冬さんも誰の目から見ても安心しているようだった。少し涙ぐんでいたように見えたのは俺だけだろうか？というか、そろそろ泣きやめてくれないかな・・・・・・

「・・・・」

その様子を見て千冬さんは少し不機嫌そうだった。何で？そんなに泣くの嫌いだっけこの人・・・・

「・・・さて、鷹野。話があるんだが」

「はい、なんでしょう」

「ゴーレム侵入時の通信の無断切断、絶対防御の無効化、勝手な行動をしたこと、疾風迅雷の無断リミット解除・・・・・・・話を聞かせてもらおうか？」

・・・え？何であんなに目が据わってらっしゃるの？すごい怖いんだけど・・・・・・俺はこれから何をされるんだ・・・・・・・？

「それと鷹野。お前はこれから1週間流動食以外口にするな」

「ああ・・・・・はい」

やっぱり目が据わってるよこの人・・・・そんなに怒らせることしたかな・・・・・・・・・

「今回は明日にも退院できるそうだ。今日はゆっくり休めよ」

「ああ、それと千冬さん。ここってどこの病院ですか？」

「IS学園最寄りの総合病院だ・・・・・・さて、小娘共も寮の門限には帰って来いよ」

そう言って千冬さんは病室から出ていった・・・・・・何か含みのある言い方だった。箒たちも流石に泣き止んでいた。

「全く慎二！お前はどうしてあんな無理なことばかりするんだ！」

「そうですわよ慎二さん！わたくしを頼ってくださいまし！」

「あの時はよくもピットに返したわね！」

「少しは私を頼って・・・！」

・・・・・・・最初に予定していた説教タイムが始まった。・・・・・・・・ちなみにこのあと1時間続き、寮の門限が近くなったのを教えなんとか帰ってもらった。

「はぁ、何か今回は疲れたな・・・・・・・」

ダメージもあるのだろう、やはり体の節々が痛い。それに異様にダルイ・・・・・・・あのシールドを破る威力のあるビームを受けたのだ、生きている方が不思議だ。背中は火傷だけで済みそうだ。

「・・・・・・・今回は守れたな・・・・・・・・・・・・・・・・・・・じゃあ、あの時は何で・・・・・・・・・・・・・・・・・・・！！！！！！！」

その言葉を言っている慎二は酷く悲しそうだった。人前では見せないような・・・・・だが、慎二自身は気付いてないかもしれないが時折顔に出るのだ。なので、箒、セシリア、鳳、簪は気付いている。だが、何故そのような顔をするのかは分からないだろう・・・・・・・何故ならそれは4人にとって空白の時間なのだから・・・・・・・・

あのあと、千冬さんに怪我の状態を聞いたんだよ、最初の。そしたらさ、結構ひどかった・・・・・あばら骨2本骨折、前よりも酷

い内蔵（主に消化器官）へのダメージ、出血多量による貧血、腕の骨のヒビ、足の骨のヒビｅｔｃ・・・・書けばほんとにきりがないってくらい多かった。それなのに5日で退院出来るなんて・・・・・・・・この体どんだけチートボディなのさ。まぁ、今回に関しては感謝だけどな。ふぁあ～・・・・・さすがに退院できるとは言ってもダメージは残っているらしい。今日は疲れたから寝るわ。早くＩＳ学園で過ごせるようにな・・・・・

うん、今回はあれだね・・・・・・（後書き）

結構長くしようとしたら失敗ｏｒｚ

やること無くなって短くなるしまつ・・・・・

そういえばやっと１巻分終わりましたね

もう少しでシャルとラウラの登場ですな

ったく、山田先生には困ったもんだ・・・・・・・・・・（前書き）

今回もｇｄｇｄです

それと題名は関係ない、はずです

ったく、山田先生には困ったもんだ・・・・・・・・・・

俺が退院した日は月曜日だった。・・・・・・何でこうもタイミングが悪いかね・・・・・・・ま、悩んでも仕方ないでけどな。どうせ過ぎたことだし。それで、いつも通りに登校したさ。いつもと変わらいない楽しい学校だったよ。昼食は流動食だけどな。ＩＳ学園に来てからは楽しくて仕方ない。中学までは正直言って学校は嫌いだったんだけどな、ＩＳ学園は好きな部類に入る。何が違うんだろうな・・・・・・・う～ん考えてもわからないなら考えない、それが一番。それで今は自室にいるわけよ。いや～１ヶ月も過ごすと親近感も湧くな。帰ってきたとき少しは懐かしかったしな。そんな風に感傷に浸っていると山田先生が入ってきた。

「鷹野君、篠ノ之さんいますか～？」

「はい、います。って、それ入ってきて言うセリフですか？」

「す、すみません」

山田先生は勢い良く頭を上げ下げしていた。すげ～、ヘッドバンクみて～。って、違う違う。

「怒ってるわけじゃないので頭上げてください。というか、何か用があって来たんじゃないんですか？」

「そ、そうでした。えっと、お引越しです！」

「・・・・・・先生、主語を入れてください」

何でこの人は主語を抜かすんだか。セシリアとの決闘の時もそうだったけどこの人はあれか、興奮してたり慌てたりしてると主語が抜けるのか。

「え、えと篠ノ之さんがお引越しです」

「ああ、そういうですか。でも、何で俺じゃないんですか？」

「それはですね、やはり新しい部屋を用意できなかったんですよ」

「それもそうですね」

この寮は基本2人部屋だ。人数合わせのため1人部屋になるかもしれないが基本はそうなっている。一夏は1人部屋に入ったみたいだな、話を聞いている限り。

「せ、先生、引越しは今すぐでないといけませんか？」

「まぁ、いつまでも男女が同室っていうのも問題ですし。それに篠ノ之さんだってくつろげないでしょう？」

「いえ、そんなことはありませんが・・・」

ちらっとこちらに視線を向ける箒。ああ、なるほど・・・・・

「箒、そんなに俺と別の部屋になるのが嫌か？」

「そ、そういうわけではないが・・・・」

モジモジと身をくねらせながら言う箒であるが恥ずかしいのだろう。

まったく、何でこうも可愛いんだろうな・・・こうも可愛いといじめたくなるな・・・・

「あ、そんな風に言葉濁すってことは嫌なんだ・・・・俺、傷つくなぁ」

「ち、違う！私は慎二と同じ部屋の方が良い！！！・・・・・あ」

「・・・・し、篠ノ之さん、さすがにそれは問題があるので諦めてください」

「・・・・はい」

あ～、墓穴掘って先生に注意されて小さくなってるわ。しかも、悲しそうな顔してるし。はぁ・・・・・・・何で二度と会えないみたいな顔してるんだか・・・・・

「箒、別に引越しって言ったって同じ寮の中だろ？別に会いたくなったら部屋に遊びにくればいいさ」

「・・・・・分かった。では、片付けをする」

そう言って箒は荷物をまとめ始めた。今までも様子を見て微笑んでいた山田先生が

「ふふ、なんだか2人はお似合いですね」

なんてことを言うから箒がむせてるじゃないか。俺は近寄って背中をさすってやった。

「大丈夫か、箒？水でも飲むか？」

「い、いや、大丈夫だ。・・・・何でお前は平気な顔をしている」

「何でって言われてもな・・・・」

「も、もしかして、私じゃ嫌か・・・・・？」

そんなさ、ビクビク怯えながら聞くなよ・・・いじめたくなるだろ。でも、今回は真面目に答えるか。

「嫌じゃないよ。ただ、そんなこと言われても実感が無いだけだって。だから、そんなビクビクすんなって」

「・・・・嫌ではないのだな？」

「だからさっきもそういったじゃんか」

「あの～、二人ともそろそろ引越しの準備をしてください」

済まなさそうに山田先生が言ってきた。別に悪くないんだからビシッと言えばいいのに、千冬さんみたいに。って、あそこまでビシッ言われるのも嫌だな。

「す、すいません。直ぐに片付けます」

そう言って、箒は片付けに戻った。ものの３０分もすると箒は荷物をまとめ準備が終わっていた。さすが箒としか言えないね、ここまで手際がいいと。

「では、篠ノ之さん。部屋に案内するので付いてきてください」

「はい・・・・・ではな」

「ああ、いつでも遊び来いよ。毎日暇してるから」

「分かった。寝坊するなよ？」

「しないように努力するさ」

そう言って箒は部屋を出ていった。う～む、さすがに二人部屋だと広く感じるな。ま、この広さを独り占めでしきって考えよう。そう思って俺は勉強に取り掛かった。

２０分ぐらい経っただろうか、いきなりドアからノックが聞こえた。俺は返事をしながらドアを開けると箒がいた。

「あれ、箒。どうした？忘れ物か？それとももう寂しくて遊びに来たか？」

「そ、そうではない！は、話があるんだ」

「話？だったら部屋に入るか？」

「いや、ここでいい」

オホンと咳払いした箒は決意を固めたように口を開いた。

「来月の学年別トーナメントだが、優勝したら・・・・・・付き合ってくれ！！！」

「・・・・・・・は？」

「で、では話はここまでだ。またな」

箒は逃げるようにして部屋に戻っていった。しばらくぼうっとしていたが意識が戻り思った。

「あれって要は告白・・・・・・・なのか・・・・・・・・・・・・・？」

俺は疑問を抱いたままその日は眠った。

～・～・～・～・～

時刻は同日（正確に言うと次の日の）2時、音も無く慎二の部屋が空いた。そのまま、ベットの近くまで行き慎二の寝顔を見ている様だった。

「ふ～ん、この子が慎二君か～」

するとその人物は扇子を広げ、しばらく眺めていた。

「別に顔は普通の男の子なのに何であんなに人気があるのかしらね、ふふ」

慎二の吐息の音だけが支配する空間に妖艶な笑みを浮かべた女子がいる・・・・・・・・・・あれ？何かいやらしい・・・・・・・・・

「何で簪ちゃんがあんなにゾッコンなのか気になるわね～。全く、

明日が楽しみね」

そう言ってその女性とは部屋を出ていった。・・・・・・いや、何もやってないからね？

～・～・～・～・～

次の日、学校に行くとある噂が流れていた。「学年別トーナメントで優勝すると鷹野慎二と付き合える」と言う噂だ。って、何か思うんだが最近俺の株上がってない？最初は一夏だったけど・・・・・・あんまり嬉しくないんだよな、学校生活は地味に過ごしたいし。あ、そもそもＩＳ学園にいるからまず無理か。そういえば、この噂俺が聞いてよかったのか？女子に聞いたら口が滑ったみたいだし。ま、聞いちゃったもんは仕方ないか。そう思い俺は教室に入った。

「おはよ～」

俺があいさつするとなんとも言えない空気が流れた。なんというか噂の事を聞きに行くか行かないかって空気だよ。誰か行けよ～みたいなね。俺は話しかけられなかったしとりあえずは席に座った。隣の席の一夏はまだ来ていないみたいだ。今日は俺が早いだけだしな。いつもより早く目が覚めたから早めに教室に来たってところだ。そういえば、何であんなにぐっすり寝てたんだろ？起きたら体が軽いし。そんなことを考えていると誰かが教室に入ってきた。顔が見たことないしリボンの色が違うから上級生だろう。その女性とは教室に入ってきたと思ったら俺の席の前に来て止まった。ん？俺は上級生に知り合いなんていないよな。って、ことはあれか。一夏目的か。初対面の人は一夏の方が良いらしい。やっぱりそこは、普通とイケメンの違いですよね～。・・・・・・・はぁ、自分で言ってて悲しくなってきた。すると、いきなり声が聞こえた。

「慎二君？聞いてるの？」

「え？あ、はい」

って、この人よく見たら・・・

「聞いてて無視してたの？もぅ、おねーさん傷ついちゃうな」

「すいません、少し考え事してたもので。それで、何の用ですか楯無生徒会長？」

そう、この人はこのＩＳ学園の生徒会長更識楯無だ。まぁ、簪のお姉ちゃんだな。この世界の更識姉妹は仲がいい。この世界でも楯無さんはハイスペックだが、そこらへんに簪はコンプレックスを抱いてないみたいだ。でも、確かこの人とは初対面のはずだが・・・・・

「何用って、もしかして昨日の夜のこと忘れてるの？」

は？昨日の夜？何の事だ？・・・・・・もしかして、昨日の夜感じた気配って・・・・・・・・

「あんなことまでしたのに・・・・・・・・・やっぱり私は遊びだったのね！」

およおよと泣き真似をして地面に座り込んだ。今まで聞き耳を立てていた女子からも冷たい視線が。って、三人こっち来てるよ！予想は付くけどね！箒にセシリアに鈴だ。しかも全員、目から光が消えてやがる！！！

「慎二・・・・・」

「どういうことか・・・・・」

「説明してくれるんでしょうね・・・・・・？」

箒、セシリア、鈴の順番で有無を言わさず聞いてきた。とういうか、脅迫だよね？

「ちょっと待て！！！俺は何もしていない！！！！！」

「ほぅ、言い訳するのか」

「往生際が悪いですわよ」

「いい加減、白状しなさいよ」

あの・・・・・みなさん、何故にこんなに恐ろしいんでしょう？すると、いきなり楯無さんが笑い始めた。

「あははは！やっぱり人気者ね、慎二君」

「って、笑ってないでなんとかしてくださいよ、生徒会長！」

「わかったわよ。それとおねーさんの事を名前で呼んでくれないと協力してあげないぞ？」

「分かりましたよ、楯無さん」

「う～ん、まぁいいかな。協力してあげる」

「ありがとうございます」
「別にみんなから慎二君を取ろうなんてしてないから安心してね」
って、俺は物ですか。人ですらないのか。
「昨日はただマッサージしただけよ」
「へ？マッサージ？・・・ああ、だから体が軽いのか」
「そうよ～、私が直々にやってあげたんだから感謝してもらわないと」
「って、勝手に人の部屋に入り込んだ人が言うセリフですか」
「だって、男のＩＳ操縦者ってどんな人か気になったんだもん」
「なにが、だもんですか。不法侵入ですよ、全く」
「生徒会長権利よ。そんなの関係ないもの」
「権力乱用じゃないですか！！！！」
「あ、そういえばこのクラスの担任って織斑先生よね？」
「はい、そうですよ」
「じゃ、時間だから戻るわね。慎二君、また来るからね、はーと」

「何がはーとですか。迷惑なのでこなくて結構です」

「もう、慎二君のいけずぅ」

そう言いながら楯無さんは教室を出ていった。すると、入れ違いで千冬さんが入ってきた。

「諸君、おはよう」

「「「「「「「「おはようございます」」」」」」」」

みんな、俺たちも会話で唖然としていたが直ぐに席に着いた。

～・～・～・～・～

放課後、俺は箒たちからの脅迫・・・・・いや、尋問・・・も違う・・・・・・ほとんど拷問みたいなものからやっとのことで抜け出し、部屋に戻るところだった。最近、一人部屋になったからくつろげる・・・・・・そう思い俺は寮の自室のドアを開けた。

「おかえりなさい。ご飯にします？お風呂にします？それともわ・た・し？」

バタン。あれ？俺疲れてるのか？流石にあの拷問に耐えたんだ見えてもおかしくないけど裸エプロンに楯無さんが見えるのはおかしいよな。よし、もう一回開けてみよう。

「おかえりなさい。わたしにします？わたしにします？それともわ・た・し？」

「選択肢が三つに見えて一つしかない！！！！」

「なによ、おねーさんじゃ不満なの？」

「今、疲れてるんですよ。拷も・・・・・尋問から帰ってきたんですから」

「だったら、私も居るからベットで寝たらいいじゃない」

「俺は一人の休息を期待してた！！！！」

そんな俺の言葉はお構いなしに楯無さんは部屋に入っていく。

「それで、何の用ですか」

「寂しくて遊びに来たの♪」

「お帰りください」

「箒ちゃんは良くて何で私はダメなの？」

「・・・・何故それを」

「生徒会長権利」

「俺のプライバシーは何処にーーーーーーーー！！！！！！！！！！」

「大丈夫よ、最初からそんなのは存在しないわ」

「衝撃の事実発覚！？」

「部屋には無数の盗聴器類が」

「ああ、それならもう壊しましたよ」

「あれ、結構高かったのよね～。弁償してよ？」

「あんたが犯人か！！！！！！！！！！！」

「まぁ、冗談はこれくらいにして」

「さっさと入って欲しかった！！！」

「澄野（すみの）　瑠美香（るみか）」

「！！・・・・・・どうしてその名前を」

「更識の情報網を舐めてもらっちゃ困るわ」

「・・・・」

先程の楽しい雰囲気はどこにやら。空気は豹変して重くなっていた。

「そんなに怖い顔しなくても大丈夫よ。・・・・・・・まだ、気にしてるのあの事」

「・・・・吹っ切ったつもりなんですがダメですね。やっぱり、俺は弱い」

「そんな風に溜め込むのは良くないわよ。吐き出すことも必要なの。泣くときはおねーさんがいつでも胸を貸してあげるから」

胸・・・・・・・

「あ、えっちぃ目で見た～」

「い、いや、そんなことないですよ！？」

「ふふ、焦った顔も可愛いわね」

「可愛いって、あんまり言われても嬉しくないですからね？」

「それもそうね。じゃ、私は戻るわね」

「・・・・もしかしてこれだけのために？」

「そんなことないわよ～。慎二君の顔見たかったのも本当だし」

「嘘だ～」

「あ、信じてないな～。これでも心配してるんだからね」

「はは、それはどうも有難う御座います」

「・・・さっきも言ったけど辛い時は私に言ってね」

「はい・・・・・やっぱり楯無さんはいい人ですね」

「私は元からいい人よ？」

「そうですね」

俺は感謝の意味も込めて笑顔でいった。

「う！！！」

「ど、どうしました？」

「い、いえなんでもないわ。それじゃあね」

そう言って、楯無さんは部屋に戻った。

～・～・～・～・～

楯無ｓｉｄｅ

全く、あのセリフのあとにあの笑顔はないでしょう！思わず抱きしめたくなっちゃったじゃない！！・・・・・・それにしても、簪ちゃんが言う以上に魅力的ね、慎二君は。あんなに、明るくていい子そうそう居ないわよ。でも・・・・・・あれは・・・・・・・・・・・・辛いわね。澄野　瑠美香、ね・・・・・・・・慎二君の抱えてる闇はどれほど深いのかは分からないけど・・・・・・できれば救ってあげたいわね・・・・さて、そのためには

「情報を集めなきゃね。さぁ仕事するぞぉ」

その日の生徒会室は夜遅くまで電気が付いていたみたいだ・・・

楯無ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

はぁ、まったく楯無さんには本当に敵わないな・・・・・・・はぁ、何で俺は周りの女性に支えられてるのかな・・・・・・・情けなぇ。俺もいい加減吹っ切らないといけないのに吹っ切れないし・・・・・・はぁ、本当ダメだな・・・・多分次に楯無さんに言われたら泣きそうだ。あの人には不思議と頼ってしまいそうになる・・・・・・・・なんでかな。さぁ、明日も学校だから寝ないとな。

ったく、山田先生には困ったもんだ・・・・・・・・・・（後書き）

この、無理矢理感・・・・・・・

まぁ、なんとなりますよね

そして、ついにシャル達を登場させられるかな～

転校生は貴公子と眼帯さん・・・・・・・・？（前書き）

やっとこさシャルルとラウラ登場ですよ～

転校生は貴公子と眼帯さん・・・・・・・・・？

「シャルル・デュノアです。フランスから来ました」

次に日の朝、教室に衝撃が走った。転校生が来たのだ。いや、転校生が来るのは不思議はない。現に、鈴は普通に転校してきた。問題は性別だ。男が転校してきたのである。

「お。男？」

「はい、日本には同じ待遇の人がいると聞いて本国から・・・」

「きゃあああああああ！！！」

「男、男よ！！！しかも三人目！！！」

「しかも今回は守ってあげたくなる系の！！！」

「ああ、このクラスでよかった！！！」

次にクラスを支配したのは女子による黄色い声だった。う～ん、やっぱりいつになってもこれには慣れない・・・・というか頭が痛くなる。

「あ～、騒ぐな。静かにしろ」

と、千冬さんがぼやいていた。あの調子じゃ本当に面倒くさそうだ。昔からこういうの嫌いだったからな、千冬さんは。一夏に目をやると同じような顔をしていた。はは、やっぱり考えることは同じか。

「み、みなさん静かにしてください！もう一人いますので」

もう一人の転校生はなんというか刃物の様な鋭さを身にまとった生徒だった。

「・・・・・・・・・・・・」

いまだに本人は口を開かない。山田先生が必死にお願いしているが撃沈していた。・・・・・俺は頑張った方だと思うよ、先生。さらに呆れていたん千冬さんが口を開いた。

「・・・・・挨拶しろ、ラウラ」

「はい、教官」

ビシッと敬礼をしていた。ん？あれか。このラウラとか言う奴は千冬さんがドイツに行っていたときに教えていた生徒か何かってことか？

「ここではそう言うな。今はもう教官じゃない。私のことは織斑先生と呼べ」

「了解しました」

ビシッ踵を合せ、手を横に付けた。典型的な気を付けだな。ここまで綺麗だと凄みがあるかもしれない・・・

「ラウラ・ボーデビィッヒだ」

「・・・・・・・」

あれ？短くね？流石にもう少しあるよね・・・・

「あの～、以上ですか？」

「以上だ」

せっかく山田先生が優しく話しかけたのにバッサリ切り捨てたな。逆にあそこまでバッサリいくと清々しいくらいだな。まぁ、山田先生は泣きそうだけど。と、俺がそんなことを考えているとラウラが一夏を見て

「！！貴様がっ」

と言って、いきなり

バシンッ！

小気味がいいくらいの綺麗な張り手だった。さすがの一夏も何が起きたのかわかってないな、ありゃあ。状況を読めたらしく一夏は席を立って

「何すんだよ！」

と、少しご立腹だった。まぁ、当たり前か。

「私は認めない。貴様があの人の弟であるなど、認めるものか」

と言い残し、席に座った。クラス中が微妙な空気に包まれるが千冬さんがまた面倒臭そうに言った。

「あ～、これでＳＨＲを終わる。各自着替えて第二グラウンドに集

合。今日は二組と合同で行う」

そう言うとみんなは準備を始めた。さて、俺らも早くいかないとな。

「ああ、それと鷹野と織斑。デュノアの面倒を見てやってくれ」

「了解しました～」

そう言って千冬さんは教室を後にした。入れ違いにデュノアが近寄ってきたが今はそれどころじゃない。

「君たちが鷹野君と織斑君？僕は・・・・」

「あ～、悪い。今はそれよりも更衣室に行かないとならないからちょっと来てくれ。よし、行くぞ一夏」

「おっけ～」

俺はデュノアの手をとった。最初は場所が分からないし、しかもあれがあるしな・・・・・・・

「デュノア、少し我慢してくれよ」

「え？それってどういう・・・」

その瞬間、周りから出てきたのは女子の大群だった。あ～、少し遅かったか。黛薫子先輩率いる上級生軍団だ。

「お、あれが噂の転校生くんか！」

って、情報早すぎないか？もしかして、情報漏れてたのか？でも、それよりもこの大群を抜けないと授業に遅れて出席簿アタックの餌食だ。

「黛先輩、インタビューを後でさせてあげるので少し足止めしてくれませんか？」

「マンツーマンのインタビューだったらいいよ～」

「じゃ、それでいいです」

「は～い、みんな待ってね～。転校生君の情報はきちんとこの黛薫子がきちんとインタビューしますので・・・・・」

よし、これで問題は解決した。あとはもう少し走れば何とかなるな。俺たちは第二アリーナの更衣室まで無事にたどり着いた。

「ふぃ～、デュノア大丈夫か～？」

「な、何とかね。ははは・・・・」

何て乾いた笑いをしていた。まぁ、あれには驚くよな。俺たちも最初驚いて授業に遅れてスパーンとやられたからな～。

「あれでもまだ軽い方だったんだぜ？なぁ、慎二」

「まぁ、いつもよりはな。あれには慣れないとやってけないしな。ところでデュノア、そろそろ着替えようぜ」

「うん、それと僕のことはシャルルでいいよ」

「だったら俺も慎二でいいや」
「俺も一夏でいいぜ。それと慎二何でお前は少し投げやりなんだよ」
「え～？、そうか～？いつもどうりじゃね～？」
「いつもよりもダルそうだけど、大丈夫か？」
「大丈夫に決まってんじゃんか！」
「って、お前！ふざけてたのか！！！」
「当たり前だろ！お前は俺がいじめるんだよ！！！」
「そんなのふざけんな！！！」
「ふふ、二人は仲がいいんだね」
「それ、前にセシリアにも言われたな～。そんなに見えるか？」
「うん、本当に仲がいいように見えるよ」
う～ん、そんなもんかね。ま、一夏と俺のことだしどうでもいいか。
「って、慎二！時間まずいぞ！！！」
「え？うわ、マジだ！！！」
よく見ると授業まで二分を切っていた。さっさと着替えよう。俺と

一夏は中にＩＳスーツを来ているから関係ないけど。

「よっしゃ、着替え終わり」

「俺も終わった～」

「ぼ、僕も終わったよ」

やっぱり、シャルルも中に着ていたのか。まぁ、結構当たり前っぽいし普通か。って、そういえばシャルルって本当に男か？喉仏はないし、肩幅も何か女っぽい、体型もなんだか女っぽいし・・・・・ましてやこの時期に男のＩＳ操縦者が発見されてＴＶで放映されてないのもおかしい。まぁ、国が隠してたり、女っぽい男もいるから一概に断言はできないけどな。

「どうしたの？慎二。授業遅れちゃうよ？」

「ん？ああ、そうだな。早く行くか」

俺たちはグラウンドに走り出した。

～・～・～・～

「遅かったな。まぁ、授業には遅れてないからよしとするか。ほら、さっさと並べ」

そう言われて俺たちは列の最後尾に並んだ。ふ～、流石に全力疾走に近かったから疲れたな・・・・・・

「あんたたち遅かったじゃない。何かあったの？」

そう言って話しかけてきたのは鈴だった。ああ、そうか。今日は二組との合同授業だったな。

「ああ、いつも通り上級生に追いかけられそうになったんだよ」

「それはお疲れ様」

「何をそこで話している？静かに話を聞け」

「「は、はい」」

千冬さんは話に戻った。

「では、今日は模擬戦をしてもらおう。そうだな・・・・・・さっき話していた奴らに実演してもらおう。鷹野、鳳！前に出ろ」

「え～、マジですか～？」

「な、何で私まで」

「ほぅ、貴様ら。そんなに叩かれたいか？」

「「いえ、滅相もございません！！！」」

「ならばよろしい」

そういう千冬さんは何かを待っているようだった。

「ち・・・織斑先生、実践ってどうすればいいんですか？鈴と戦え

ってことですかね？」

「そう慌てるな。お前たちの相手は・・・・・・」

ヒュウウウウウ！！！！！！！！

ん？悪い予感しかしないんだが・・・・・・・・・・

「ど、どいてくだ～い！！！！！」

やっぱり！！！俺は瞬時にＩＳを展開し鮮明になった視界で山田先生を捉えた。さすがに一夏みたいに飛ばすのはダメだよなぁ・・・・・・・・仕方ない・・・・・・・・俺は落下地点に入り激突する角度、スピードをある程度計算し下に潜り込み山田先生をキャッチすることに成功した。ふぅ～・・・一安心

「っと、大丈夫ですか？山田先生」

「は、はい。すみません」

ん、何か背中に痛い視線が・・・・・・・・よし、気にしない。俺は山田先生を下ろした。

「では、今回は山田先生と戦ってもらう」

「え？こんなドジな人とですか？」

「大丈夫だ。今のお前たちなら負けるさ」

「へぇ～、そんなに強いんですか。山田先生は」

山田先生に目をやるとさっきの言葉にダメージを受けているようだった。やっぱり、気にしてるんだね。

「山田先生、模擬戦を始めてください」

「は、はい。分かりました」

なんでこの人はこんなに、てんぱってるんだろう・・・・・・ま、気にしたら負けか・・・・俺と鈴はアリーナ上空に上昇していった。

～・～・～・～・～

「さて、こんだけ上がれば問題ないだろ」

ふと、下を見るとみんながだいぶ小さくなっていた。まぁ、ハイパーセンサーがあるから関係ないけどな。

「山田先生、はじめしょう」

「そうですね。では、いきます！」

山田先生が使っている機体はラファール・リヴァイブ。第二世代型の量産型ＩＳだ。後付武装（イコライザ）、拡張領域（バススロット）が豊富にありオールレンジで戦える万能機だ。だが、第2世代なのが玉に瑕。山田先生はライフルをコールし射撃をしてきた。セシリアと同等・・・・・いや、それ以上の精密射撃だ。このままだと、雪月花の機動力でも当たるかもな・・・

「鈴、俺が接近するから援護頼むぜ」

「ま～た、あんたの援護なのね。まぁ、いいけど。後ろは任せなさい！」

「頼むぞ」

俺は山田先生に接近した。菊一文字をコールし、横なぎに振るう。しかし、山田先生はそれを回避し反撃をしようとする。そこで鈴の龍砲からの攻撃が無数に降りかかる。が、山田先生はそれも回避している。

（さすがにこれくらいじゃ無理か・・・・なら！）

『疾風迅雷、発動』今回の疾風迅雷は当たり前だがリミットをかけた状態だ。だが、機動力は格段上だ。俺は高速移動しながら山田先生の攻撃を回避し鈴の攻撃に気がむいたところで攻撃を仕掛ける。漆黒ノ太刀もコールし二刀流で襲いかかる。

「鷹野流自己剣技、乱れ桜」

乱れ桜は二本の刀を逆手に持ち替えてＩＳの機動力を使い相手を切り刻む技だ。ま、最近出来たから技としては改良の余地はたくさんあるけどな。俺は山田先生に攻撃を仕掛けたように見えたが実際は山田先生の罠だった。俺が接近すると山田先生はいきなりこっちを向いた。その手にはいつの間にかコールしたグレネードランチャーが。今は高速状態だからそう簡単に回避は出来ない。

ドカーーーーン！！！

空中でグレネードの爆発に巻き込まれた俺はそのまま地面に激突し

た。

「いてて・・・・・・」

「だから言ったろう？簡単に負けるとな」

「本当にそうでしたね・・・・・」

俺が居なくなったあとの戦いは時間も掛からず決着がついた。

～・～・～・～・～

「慎二！何あんた先に落とされてるのよ！！！」

「・・・悪い」

「まったく、あんたに接近戦を任せたんだから押し切りなさいよね！！」

「・・・返す言葉もありません」

試合後、落ちてきた鈴と話し先程の模擬戦の反省会になったが、主な原因が俺にあるせいで反省会と言うか俺のダメだし会になっていた。

「だからあんたは弱いのよ。決めるところで決められないから」

「・・・はい」

「あんたのさえない理由もそれで決定ね」

「いやいや、それは関係なくね！！！！」

「何よ、文句あるの？」

「いえ・・・・・ありません」

「ほら、そこの二人。いつまで話している。次、やることの説明をするから聞いておけ」

俺たちは話すのをやめ、千冬さんの方を向いた。

「よし、では専用機持ちの織斑、鷹野、オルコット、鳳、デュノア、ボーデビィッヒの六名に別れて実習を行う。では別れろ」

そう言うと、みんなは散らばった。が、多くはシャルル、一夏、俺のところに来た。

「デュノア君の専用機ってどんなの？」

「私、デュノア君の操縦みたいな～」

「フランスってどんな国？」

と、言った感じに質問攻めにあっていた。それに、見かねた千冬さんが

「この、馬鹿者共！誰が固まれと言った！出席番号順に別れろ！！！」

と、言うとみんなは渋々別れた。おっと、俺のところにもみんな来たな。さて、始めるか。

「じゃ、最初はＩＳに乗って歩行と停止をやってみようか」

「「「は～い」」」

うん、みんないい子だな。言うことをきいてくれるし、この調子じゃ早く終わりそうだな。最初の子がＩＳに乗った。

「お～け～。じゃ、歩いてみようか」

「分かった」

そう言って歩き出すが少しぎこちない。まぁ、パワーアシストがあると言ってみんなＩＳにはそんなに触れてないからな。仕方ないよな。

「よ～し、上手だ。その調子その調子。じゃ、そこで停止してね」

「ふ～、緊張した～」

「あ、ちゃんとしゃがんで降りてね。次の人が乗れなくなるから」

「あ、そうだったね。忘れそうだったよ」

そう言ってその子はしゃがんで降りた。よし、さっさと終わらせよう。

「じゃ、次の人行こうか」

結果、俺たちは手際よく最初に終わった。ラウラの班の見たら、か

わいそうだった。だって、ラウラ自身が話さなくてみんな凄く気まずそうだったんだぜ？まぁ、千冬さんが手助けはしたけど。

～・～・～・～・～

そのあとの昼休み、俺はシャルルのところに行った。

「シャルル～、飯食いにいこうぜ～」

「え？僕と？迷惑じゃないの？」

「いや、迷惑だって思ってるなら最初から来ないよ」

「そ、それもそうだよね」

「男同士なんだから仲良くしようぜ」

「うん」

「じゃ、一夏も連れて行くか～」

途中、一夏を見つけて食堂に来た。さ～てと、今日は何食べようかな～。

「す、凄いメニューの多さだね」

「ん？ああ、そうだな～。俺たちも最初に来たときは驚いたもんだ」

「これだけ多いと迷っちゃうね」

「俺もそうだけど毎日違うのを食べて色々食べてるぜ～。今、やっと半分くらいだよ」

「え、一ヶ月で半分？・・・・・本当に多いね」

「そうなんだが・・・・・・シャルル、人の邪魔になるから移動しようぜ」

「あ、うん。分かった」

俺たちは食券を買っておばちゃんに食券を出した。

「おばちゃ～ん、よろしく～」

「はいよ～」

「今日も美味しいご飯頼むよ～」

「まかしときな」

いつも通りのおばちゃんが食事を運んでくる待った。

「慎二って食堂のおばちゃんとも仲いいんだね」

「ん？ああ、あれはな適当に話しかけたら面白い人だったからそれから話しかけるようにしてんだ」

話をしているうちに食事がきた。う～ん、今日もうまそうだ。俺が頼んだのは生姜焼き定食。生姜焼肉に林檎をすったものを入れとくのが隠し味らしい。それのおかげで程よく甘くご飯が進む。シャル

ルはカルボナーラ、一夏はうどんを頼んでいた。そういえば、カルボナーラに生クリーム入れるのって日本だけらしい。だからこの食堂は生クリームを入れない。いろんな国の生徒が居るからな。俺たちは、適当なところに席を見つけ食事を始めた。

「「「いただきま～す」」」

最初に肉を食べる。う～ん、やっぱり林檎のすり身がいい味を出している。肉は四枚入っているんだがこれだと一枚でご飯一杯はいける。だから、いつもお代わりするんだよね、ご飯だけ。俺はいつも通りご飯が無くなったのでおばちゃんの所に行きご飯をもらってきた。

「は、早いね。と言うか、おかずがまだたくさんあるのにお代わりって・・・」

「シャルル、慎二はいつもこの調子だから気にしちゃダメだぞ。まぁ、最近まで流動食だったから食欲がすごいんだけどな」

「流動食って、一体どうしたの？」

「それは自業自得というか何と言うか・・・」

「？どういう意味？」

「後で教えるよ。とりあず早く食べないと・・・」

「ん？お前ら食わないなら俺にくれよ」

慎二は席に座る。ちなみにご飯は四杯目である。

「お前が早すぎるんだよ。ったく、腹壊すぞ」
「これだけうまいもん食って腹壊すなら本望だ」
「はは、慎二って食べるの好きなの？」
「ああ、だけど朝は食えないから必然的に昼と夜が多くなるんだ」
「夜はあんまり食わない方が体にはいいんだぜ、慎二」
「いいんだよ、腹減ったときに食べるのが一番」
「ねぇ、慎二。その生姜焼き定食、僕に少し分けてくれない？そこまで美味しいって言ってると気になっちゃった」
「ん？いいよ。ほら」
俺は箸を差し出した。
「え？」
「え、じゃなくて早く食べろよ」
「でも・・・」
「もしかして、あ～んってされるのが恥ずかしいのか？」
「あ・・・まぁ・・・うん」

「じゃ、皿に置いとくぞ」

「うん・・・」

（もしかして、慎二って他の娘とかにもこうしてるのかな？女の子だったら恥ずかしいって気づかないの？って、そういえば今は男だった・・・だからか）

うん？シャルルが難しい顔で唸ってるな。もう食べられないのか？よし、だったら手伝ってやろう。俺はシャルルのカルボナーラを少し貰った。

「あ！僕のカルボナーラ！！」

「あれ？もしかしてお腹一杯とかじゃなかったのか？」

「違うよ～。もう、慎二は食いしん坊だね」

あれ？少しご立腹？そんなに取られるのが嫌だったのか？まぁ、これだけ美味しければ仕方ないか。

「悪いな、シャルル。勝手に取っちゃって」

「別にいいよ。でも、今度はちゃんと言ってね？」

「分かった」

「お前ら、時間なくなるぞ～」

一夏がいつの間にか食べ終わっていて忠告してきた。時計を見ると

残り１０分を切っていた。

「うお！マジだ！！！早く食わないと！！！」

と、言っても俺はご飯半分、シャルルももうほとんど食べていたので問題なかった。だけど、時間に追われて食べるとご飯が美味しくないんだよね。急いでるからあんまり味わからないし。やっぱりご飯はゆっくり食べるのが一番だな。俺たちは食器を片付け、授業に遅れないように教室に向かった。教室についた途端に箒と鈴とセシリアが近づいてきた。

「ちょっと、慎二どこ行ってたのよ！！！」

「え？どこって食堂だけど・・・」

「なんでさっさと行ってしまったんだ！！！」

「いや、だって腹減ってたし・・・・」

「わたくし達がお弁当を用意しましたのにあんまりですわ！！！」

「え？弁当作ったのか？」

「そうだ！」

「そうよ！」

「そうですわよ！」

「じゃ、後でくれないか？しっかり味わって食べようと思うんだが」

「そ、そこまで言うのなら仕方ないな」

「し、慎二がそこまで言うのなら・・・」

「慎二さんおっしゃるのなら・・・・」

「サンキュー」

五校時が始まりそうだったから俺たちは席に戻った。

～・～・～・～・～

今は放課後、授業が終わり自由時間になる。基本的に生徒はＩＳの自主訓練をする。基本俺たちも訓練はしている。ちなみに箒達の弁当だが、どれも美味しかった。セシリアは原作と違い料理は上手だった。後でお礼言わないとな。

「そういえば一夏達って放課後自主訓練しているんだよね？」

「ああ、基本的に模擬戦ばっかりだけどな」

「だったら、僕も参加させてもらってもいいかな？」

「俺はいいぜ。だけど慎二に聞いてみないと。おーい、慎二――！！！」

「一体何だ？さっさとアリーナ行かないと場所なくなるぞ」

「そのことなんだけどさ、シャルルも入れていいよな？」

「あ？何で俺に聞くんだよ」

「だって、慎二がリーダーっぽいし」

「あのなぁ、放課後の訓練はお前のためにやっているようなもんだぞ。だから、それはお前が決めろ」

「だったら、参加してもらおう。よろしくな、シャルル」

「うん、よろしく」

「ほら、さっさと行くぞ～」

俺たちはアリーナに向かった。

～・～・～・～・～

「ふぅ～、ちょ、ちょっと休憩」

「一夏こんなんでへばるなよ。まだまだこれからだぞ～」

今はアリーナで訓練をし一段落したところだ。今日は箒、セシリア、鈴は来ていない。箒は剣道部、セシリアはテニス部、鈴はラクロス部に顔を出しに行ったらしい。う～ん、お礼言いたかったのにな。仕方ない、明日言うか。

「・・・・・・慎二、何か悪役みたいだね」

「そうか？一夏をシバくのは俺の役目だからそう見えるだけだって」

「し、慎二、今日は終わりにしようぜ？時間も時間だし」
そう言われて時計を見るともう六時近かった。っち、今日は七校時だったから放課後短いな・・・・・もうすこし一夏をいじめたかった。
「じゃ、帰るか～」
俺たちは更衣室で制服を羽織い寮に向かった。
「そういえばシャルルってどこの部屋なんだ？」
「たしか二人の部屋の余ってる方を使えって言われたけど」
「一夏の部屋ってベットって付けられるのか？」
「付けられるらしいけど、業者の人に頼まないと出来ないらしい」
「じゃ、必然的に俺の部屋か。シャルルとはルームメイトか」
「改めてよろしくね、慎二」
「おう、こっちもよろしく頼むぜ～」
話しているうちに寮についた。階段までは一夏と一緒だが登ってからは反対方向なので別れた。
「じゃな、一夏」

「また、明日な～」

俺たちは部屋に向かった。部屋の前に来たのでとりあえず部屋番号を教えた。

「ここが俺たちの部屋な。１０２５号室。ちゃんと覚えとけよ」

「そんな簡単に忘れるものでもないでしょ？」

「それもそうだな」

俺は部屋のドアを開けた。

「おかえりなさい。お風呂にします？ご飯にし・・・・」

バタンッ！・・・・・・・・何で楯無さんが居るんだ・・・幻覚なのか・・・？いや、そんなわけはない、な・・・・・・はぁ・・・・・・・・・・・

「ど、どうしたの？いきなりドアを閉めて」

「いや・・・・・何でもないよ」

「ちょっと、慎二君。いきなり閉めるなんて酷いんじゃないの？」

「って、出てこなくてもいいですから！！！」

「何よ、二回目なのに何のリアクションもしないなんてダメね」

「俺は必ずしもリアクションを取らないといけないんですか！！！」

「そうよ」

「何て面倒臭い役に選ばれたんだ！！！俺！！！！！」

「だって、反応が面白いんだもん」

「そんなんで決めないでください！！！！！！！」

「え、え～と。慎二、この人は・・・・・？もしかして彼女とかなの？」

「え？違う違う。この人はこの学園の生徒会長の更識楯無さんだよ。彼女でもなんでもないよ」

「ふ～ん・・・・」

あれ？シャルルの反応が冷たい？何で？って、部屋に来ていきなりこれじゃそうなるか。

「慎二君それは酷いんじゃない？おねーさん傷ついちゃうな～」

「思ってもないこと言わないでください」

「え～、以外に慎二君のこと好きかもよ～？」

「それはそれで嬉しいですが、とりあえずお引き取りください。部屋に入れないじゃないですか」

「じゃあ、私も入れば問題ないね」

そう言い楯無さんは部屋に入っていった。はぁ、仕方ないか。

「シャルル、部屋に入ってくれ」

「・・・・お邪魔します」

「って、シャルル。ここはお前の部屋になるんだからお邪魔しますじゃなくてただいまだろ？」

「そ、そうだね。た、ただいま」

「おう、おかえり」

（あ、この感じ・・・・・懐かしいな・・・・・・・・・お母さん・・・・・・）

「ん？どした？」

「え？う、ううん。なんでもないよ」

「そうか？だったら早く入ってくれ。ドアが閉められない」

「ご、ごめん」

俺はドアを閉めて部屋に戻ると楯無さんがベットでくつろいでいた。

はぁ、全くこの人は・・・・・・

「楯無さん、お茶出したら帰ってくださいよ」

「もう、慎二君。つまらないなぁ」
「つまらなくて結構ですよ。はい、お茶です。シャルルもどうだ？日本茶」
「じゃあ、頂こうかな」
「じゃ、適当に椅子にでも座っててくれ」
「うん、わかった」
俺はシャルルの分も茶碗を出して、お茶を注いだ。
「ほい」
「ありがとう」
俺はシャルルにお茶を渡して問題をどう排除するか考えた。が、いい案がない。
「う～ん、慎二君が入れたお茶は美味しいわね～」
「ただのインスタントのお茶ですよ」
「じゃあ、愛の力かもね」
「はいはい、わかりましたよ～」
「あ、信じてないわね」

「シャルル、日本茶どうだ？」

「あ、無視ね」

「う、うん。僕はこういうのも美味しいと思うよ。これが紅茶と同じ茶葉だとは信じられないね」

「ああ、確かにそうだな。確か・・・」

「干している時間が違うのよ。あと、ほうじ茶も同じ茶葉ね」

「・・・・・ご解説ありがとございま～す」

「何よ、人がせっかく解説してあげたのに」

「で、用ってなんなんですか？」

「慎二君に会いに来たの」

「で、要件は？」

「だから、慎二君に会いに来たんだって」

「・・・・マジで言ってるんですか？」

「マジもマジ。大真面目よ」

「だったら、目的は終了したでしょう。帰ってください。今日は疲れてるんですから」

「だったら、マッサージしてあげるわよ？」

「マッサージはいいですよ。あんまりやると体が弱くなりますし」

「それもそうね。じゃ、今日は帰るわ」

「しばらく来なくてもいいです」

「もう、慎二君のいけずぅ」

バタンッ！俺は勢い良くドアを閉めた。ふぅ、やっとゆっくりできる。

「悪いな、シャルル。初日からこんなにうるさくて」

「ううん、楽しいから気にしないで」

ああ、シャルルいい奴だな～。俺の周りにこういう奴が多いといいのに。そのあとあシャワーの時間の相談、雑談などをしてその日は就寝した。

はぁ、何かシャルルに悪いことしたな。って、何で楯無さんが部屋にいるんだよ。何も今日じゃなくてもいいじゃないか。ふぅ、シャルルも転校初日にハードな一日だったな。しばらくはこんな日は来ないだろう。それよりもここの寮の鍵は大丈夫なのか？簡単に楯無さんに侵入されてるし。もしかしてマスターキーみたいなのを楯無さんは持っているのか？・・・・・・分からん！！！よし、寝よう。もう疲れた。おやすみ～・・・・・・

転校生は貴公子と眼帯さん・・・・・・・・？（後書き）

う～ん、今回ってどうなんですかね？

まぁ、毎回ながらにグダグダさでしたよね～

もう少し後先を考えられる頭が欲しい・・・・・

何で世の中はこうも腐ってるんだ・・・・・・・（前書き）

今回は結構原作に沿って話を書いてみました

何で世の中はこうも腐ってるんだ・・・・・・・

「一夏がオルコットさん達に勝てないのは、単に射撃武器の特性を理解できてないからだよ」

今日はシャルルが転校してきての土曜日の午後、俺たちは第三アリーナに来ていた。基本的に土曜日は午前授業で午後は自由時間になっている。が、アリーナなどが開放されるのでＩＳの訓練に励め、と言うことらしい。ちなみに何故第三アリーナかと言うと、模擬戦、射撃訓練などが出来て基本的な訓練にはもってこいの場所だからだ。

「う～ん、理解しているつもりなんだけどなぁ」

「いや、現にセシリアに勝てないんだから理解してないだろ」

「一夏の後付武装がないんだよね？」

「ああ、拡張領域がないらしい」

「それは、ワンオフ・アビリティに容量を回しているからじゃないかな？」

「ん～、でもワンオフ・アビリティにそんなに使うもんか？」

「一夏の零落百夜は、結構卑怯な能力だから仕方ないんじゃないかな？」

「ま、それ言ったら俺も似たようなモンだよな」

「慎二の場合はリスクが大きすぎるよ。全開にしたら骨にヒビが入っちゃうんでしょ？それに内蔵にダメージがいって流動食しか食べられなくなるし」

「それが一番の難点だなぁ」

「慎二は食べるのが好きだもんね」

「流動食は食った気しないんだよな」

「はは、体に優しく出来てるから仕方ないよ」

「じゃ、一夏の射撃武器対策講座でもやるか。シャルル頼む」

「任せて。でも、最初はどの武器にする？」

「う～ん、無難にライフル当たりでいいんじゃないか？」

「分かった」

「なあ、一体何してんだ？」

「何ってお前にライフル使わせるんだよ」

「え？でも使えないんじゃないのか？」

「基本的にはね。でも、使用者がアンロックすれば許可した人は使えるんだよ」

シャルルは、コールしたライフルを一夏に手渡した。

「しっかし、このライフルも普通だったらアンチマテリアルライフル並みの威力があるんだよなぁ。しかも相殺は勝手にＩＳがしてくれるし。ましてや、連射機能に優れてると来たもんだ」

「まぁ、それはＩＳの能力が高いから出来るんだよ、これは絶対に生身の人間では扱えないし」

「それだけＩＳがすごいんだよなぁ。っと、一夏の訓練をしないとな。一夏、準備出来たか？」

「ああ」

「じゃ、的出すな」

ピッピッっと音がしたあとに的が出てきた。

「よし、撃ってみろ」

一夏は、的に向かって撃った。的の中心ではないにしろそこそこ真ん中に近い。最後の的の撃ち終えると点数が出てきた。３３点。満点が４０点だからまぁまぁだな。

「どうだ？感想は」

「うん、とにかく早いって感想だ」

「慎二も一回やってみる？」

「ん？いいのか？」

「この際だから慎二もやろうよ」

「んじゃ、やってみますか」

俺はシャルルからライフルを貰い規定の位置に来た。

「よ～し、準備できたぞ～」

「じゃあ、始めるよ」

シャルルが言い終えると的が出てきた。俺はライフルを構えて打ち始める。ガゥン！ガゥン！！！生身の人が扱える火力を超えている音だ。だが、難なく連射ができる。改めて思ったが、すごいなＩＳ。いつの間にか、的撃ちが終わったらしい。えと、点数はっと。４０か。満点かぁ、うん上出来だ。

「す、すごいね、慎二。射撃武器使うの初めてなんでしょ？」

「まぁ、そうだけど昔から射的とか得意だったからなぁ。その影響じゃないか？」

「いや、それでどうこうできる問題じゃないと思うんだけど・・・・・」

「シャルル、慎二の規格外はよくあることだ。気にしたら、この先やっていけないぞ」

「そ、そうなの？何というか凄いね、慎二は」

そんなこんなで話していると、周りがざわついていた。ん？一体どうしたんだ？

「ねぇ、あれってドイツの第三世代型ＩＳ？」

「うそ、本国でもトライアル段階だって聞いてたけど」

なるほど、ラウラか。まったく、いきなり一夏を叩くなんてびっくりしたよ。え？原作の知識はどうしたって？もう、１５年も生きてるんだ、ほとんど忘れたよ。そんなことを考えていると、一夏にラウラから無線が入った。

『お前も専用機持ちらしいな』

「だったら何だよ」

『私と戦え』

「嫌だね、戦う理由もない」

『お前には無くとも・・・・・こちらにはあるんだ！！！』

そう言うと、ラウラは肩に付いていた大型カノンのチャージを始めた。発射まで3秒ってとこか・・・・・・遅いな。俺は前に出ようとしたシャルルを後ろに下げ、漆黒ノ太刀をコールした。そして、発射された弾を二つに両断した。

「な！！！」

これにはラウラも驚いていた。当たり前だ。弾を弾くならまだしも弾を切ったのだから。

「いきなり危ないもの使うな～、ラウラさんよ」
俺は漆黒ノ太刀を肩に担ぎながら言った。もう、落ち着いたらしく普通に返答してきた。
「ふん、お前には関係ないだろう」
「関係ないねぇ・・・ま、関係はないんだが、俺の仲間に手を出してみろ・・・・・・・・・殺すぞ」
その言葉と表情の威厳に恐怖を覚えたのだろうか、少したじろいで何かを言おうとしたとき放送が入った。
『そこの生徒！何をしている！組と出席番号を言え！』
「ふん、興が冷めた。今日はこのくらいにしてやろう」
そう言うと身を翻し去っていった。はぁ、やっと終わったか。
「・・・・本当に慎二って規格外だね。あのカノンから打ち出された弾を切るなんて」
「ま、気にすんな。それよりも今日は終わりにしないか？何か疲れたし」
「そうだなぁ、今日は戻るか」
そう言って俺たちは更衣室に戻った。

「ふぅ、最近暑いなぁ」

「まぁ、夏が近づいてるんだろ。仕方ないさ」

いつも、俺と一夏はここで着替えてから帰る。

「じゃ、じゃあ僕は先に寮に戻ってシャワー浴びてるね」

「おう、分かった」

そう、シャルルはいつもここでは制服を羽織い寮に戻ってから着替える。前に理由を聞いたら自分の部屋じゃないと落ち着かないから、だそうだ。ま、人それぞれだしそこは良いんだ。けど、着替えを見られたくないような動作をしているからなんかなぁ・・・・・・・・ま、他人に着替えを見られてもいいことないか。あ、確かボディソープ切れてたのシャルルに言ってないな。ま、気づくだろ。俺たちは少ししてから寮に戻った。

〜・〜・〜・〜

寮の部屋に入ったらシャワーの音が聞こえた。そういや、シャルルが浴びてたな。ボディソープはっと、確か棚に入ってたな。そのうち気づくだろうし、取っといてやるか。俺は棚からボディソープを取り出した。洗面台に置いておこうと、シャワー室に向かおうとした時、ドアが空いた。

「あ、慎二？ボディソープ取ってくれない？」

「おう、分か・・・・・た・・・・・？」

「え？・・・・・・・きゃあ！！」

少し状況を判断するのに時間が掛かった。なんせ、シャワー室のドアから出てきたのは『女』だったのだから。女性特有の膨らみや母性の象徴（？）があった。

「・・・・とりあえずボディソープ渡しとくな」

「う・・・・うん」

俺はシャルルにボディソープを渡してから、少し状況確認をした。とりあえずシャルルが女だったことだ。これについては、まぁ何となくだが納得がいった。今までの挙動不審は女だとバレないための演技だったのだろう。だからこそ、不振に思う点が何箇所もあった。まぁ、一夏は気にしてなかったみたいだけどな。最低限、バレないための訓練はしていたのだろう。次に理由だが、これもある程度予想はついている。確かシャルルは、デュノア社の息子になっている。まぁ、娘だったわけだが。最近デュノア社は今、経営不振に陥っている。理由としては第三世代型ＩＳの研究が進まない、といった理由だったはずだ。現に、シャルルの専用ＩＳ『ラファール・リヴァイブカスタム？』は第二世代型ＩＳだ。と、今考えられるのはこれくらいか・・・・・・あとはシャルルから話を聞けたら聞こう。

しばらくするとシャルルがシャワー室からでてきた。今までと違うことは、その何だ・・・・・胸があることか。しばらく無言だったが、俺が口を開いた。

「なぁ、シャルル」

ビクッ！

まぁ、今までより神経質なんだろう。驚いても仕方ない。

「紅茶入れるけど、飲むか？」

「う、うん。じゃあ、貰おうかな・・・」

やっぱり、今までより元気無いな。今は色々と考えているのだろう。俺は簡易キッチンへ行き、買っておいたミントティーのパックを出した。お湯が沸くまでの間、コップやらを用意した。沸いたお湯を一度カップに入れて少し温度が下がるのを待つ。シャルルは今、神経質になっている。少しぬるめのお湯が丁度いいだろう。あと何故ミントティーかと言うと、ミントには精神安定作用があるからだ。少しぬるくなったお湯にパックを入れる。色が出てきたからシャルルに持っていった。

「ほら、紅茶だ」

「あ、ありがとう」

シャルルは、一度紅茶を飲むと少し落ちつたようだ。

「ふぅ、慎二が入れる紅茶って美味しいね」

「美味しいって言っても、結局パックだけどな」

「それでもだよ。温度だってミントティーを選んだことだって・・・

・・・・慎二は優しいね」

「別に優しくないさ。・・・・・・・・・・ただ、誰かを失うのが怖いだけさ」

「え？最後の方なんて言ったの？」

「なんでもないよ」

しばらくお茶を飲んで落ち着いたのだろう、ポツリポツリと話してくれた。

「・・・・・・・慎二、僕が何で男装してたか聞きたい？」

「まぁ、聞きたいっちゃ聞きたいが・・・・・・シャルルが言いたくないなら別にいいよ」

「本当に慎二は優しいね。でも、聞いてくれるかな？独り言だって聞き流してくれてもいいから」

「ああ、分かった」

それまで、迷っていたようなシャルルだったが覚悟を決めたようだった。

「僕がデュノア、フランスのデュノア社に何かしら関係があると思っているかもしれないけど、それは当たりなんだけど、少し違う。僕はデュノア社の社長の本妻の子じゃないんだ」

「って、事は・・・・・」

「そう、愛人の子なんだ」

ある程度予想は付いていたが、本人の口から言われるとやはり驚きが隠せない。

「驚くのは無理はないよ。引き取られたのは本当に最近なんだ。半年くらい前かな、母さんが病気で倒れてしまって病院に入院したんだ。それで、お父さんに当たる人が病室に来て僕に言ったんだ。『母親の病気を直したいなら我々と一緒に来てもらおう。結果が出るまで母親は生かしておいてやる。でなければ・・・・・・・分かるな』って感じに脅されたんだよ。それにお母さんは重い病気だって言われて・・・・」

・・・・・・・・・・最低な人間だな、糞が。それでもまだシャルルの話は続く。

「それでデュノア社についたらいきなり本妻の人に叩かれたんだ。何が起こったか分からなかったけど言われて気づいたよ。僕なんかが歓迎されてる訳がないってね。事前の取り調べで僕はＩＳ適正が高いことが分かっていた。それでデュノア社のテストパイロットをやらされたよ。ＩＳの訓練は辛かったけどお母さんの為に頑張った」

「・・・・・・・・・」

「それでニュースが流れたんだよ。『世界初の男のＩＳ操縦者現る』ってね。それで、ＩＳ学園に入学することが分かっていたから『同じ男のＩＳ操縦者なら接近できるかもしれない』って会社の中で方針が決まったんだよ。それで、僕が選ばれたんだ。男の振りをする訓練を沢山してこの学園に来んだ。そしてその男のＩＳの情報を盗

んで来いってのが僕の任務。大体はこれで終わりかな」

「・・・・・・・・・」

「聞いてくれてありがとう。おかげで楽になったよ。そのうち僕は本国に戻るだろうね」

「・・・・・いいのか？」

「え？」

「シャルルはそれでいいのか？」

「そ、それでいいのかって決めるのは僕じゃないし・・・・・」

「そういう意味じゃなくて、シャルル自身はそれでいいのかって聞いてるんだ」

「ぼ、僕は・・・・・」

迷っている様に見えたシャルルだったが、搾り出すような声で言った。

「・・・・・僕はこの学園にいたいよ・・・・みんないい人ばかりだし、それにとても楽しい」

「そうか」

「で、でも、そんなこと聞いてどうするの？」

「何するってなぁ・・・・まあ、明日までの楽しみで」
俺はこの夜あること試そうと思う。今まで出来なかったがやらなければならない。
「一体何をするの？」
「秘密だ。まぁ、何もしなくてもこの学園に入れば最低限三年間は問題ないしな」
「え？それってどういう・・・・・」
「特記事項第二十二、本学園における生徒はその在学中においてありとあらゆる国家・組織・団体に属さない。本人の同意が無い場合。それらの外的介入は原則として許可されないものとする」
そう、これが使える。ＩＳ学園にいる間の三年間は絶対安全が保証される。まぁ、原則って書いているから何かしらの方法で介入は出来るんだろうけど。
「よ、よく覚えていたね。特記事項なんて五十五個もあるのに」
「ん～、何となく頭にぽんと出てきたんだよなぁ」
「はは、やっぱり慎二は規格外だね」
「ま、これにも穴はある」
「え？そうなの？」

「ああ、原則介入出来ないとは書いてある。が、何かしらの方法では介入は出来るってことだ」

「そ、そんな・・・・・どうすれば・・・・・・」

まぁ、不安にはなるよな。せっかく糸口が見えたのにこんなこと言ったら。でも、理解はしてもらわないとやっていけなのも事実だ。ここは妥協できない。

「心配すんなって、シャルル」

「これが心配しないでいれるわけ・・・・・」

「大丈夫だ。何かしら攻撃があったら俺が守ってやるよ。命に代えても」

「し、慎二・・・・・・」

「それにこの話を聞いている限り、お母さんって生きてるんだろ？」

「う、うん」

「じゃ、絶対にお前をお母さんに会わせないといけないからな」

「・・・・・・・・・慎二・・・・・・どうしてそこまで・・・・・・・・・」

「今まで、お前は頑張った。だから、これから頑張るのは事情を知った俺くらいだ。お前は休んでいいんだよ」

「で、でもそれだと慎二が・・・・」

「こういう面倒ごとは男が担うものなんだよ」

「慎二・・・・・・」

「さてと、なんだかんだで晩飯の時間だな。飯食いにいこうぜ」

「そうだね」

「と、その前に・・・・・シャルル、それじゃ女だってバレないか？」

「え？それってどういう・・・・」

そう、今のシャルルは胸が出ている。これじゃ、外に出たら一発アウトだ。それに気づいたらしくシャルルは腕で胸を隠し抗議の眼差しで俺を見てきた。

「・・・・慎二のえっち」

「いや、今のって仕方なくないか？」

「も・・・・・もしかして、見たい？」

「え？何を？」

「・・・・・・僕の胸」

「え・・・・・・まぁ、そりゃあ・・・・・男だし」

「・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

異様な空気が流れている。シャルルを見ていると恥ずかしそうな、それでいて何かを迷っているような感じだった。恥ずかしがるのは分かるが、一体何を迷ってるんだ？すると、突然ドアの方ノックが聞こえた。

「慎二さん？いらっしゃいますか？」

まずい、今のシャルルは誰が見ても女だ。それをセシリアに見られてたら大変だ。

「シャルル、とりあえずベットに入れ」

「わ、分かった」

「慎二さんいらっしゃいますよね。入りますわよ」

おい、ちょっと待て。何勝手に入ってきてるんだ。だが、問題は解決済み。シャルルはベットに入っているから女だとバレる心配はない。ただ、問題があるとしたら俺の体勢か。不自然にシャルルに毛布を掛けている。ま、なんとかなるよな。

「・・・・・何をしていらっしゃいますの？」

うわ～、いきなり痛いとこついてきたな。理由は・・・・・これでいいか

「いや～、シャルルが少し風邪っぽいから毛布かけてたんだよ」
「そうですか、お気の毒に。それよりも慎二さん夕食はまだですか？」
「ん？ああ、今から行こうと思ってたんだ」
「なら、ご一緒してもよろしいでしょうか？」
「いいよ。じゃあ、シャルル帰りにご飯もらってくるから寝てろよ？」
「ゴホゴホ、分かったよ。行ってらっしゃい」
・・・・・そんな露骨な演技いらないだろう。
「では・・・」
そう言うと、セシリアは左腕に腕を絡めてきた。
「あの、セシリア？何してんの？」
「あら？前に女性をエスコートするのは殿方の役目だと教えたバズですけど？」
「ああ、そういうことね・・・・・・では、参りましょうか。お嬢さん」
「ええ♪」

少しシャルルの方を見ると何故か不機嫌そうだった。え？何で？う～ん、何か食べたいの聞いとけばよかったかな。俺とセシリアは食堂に向かった。向かう途中の廊下で箒に会った。

「な、何をしている！！！」

「え～と、セシリアをエスコートしてるんだよ？」

何故疑問形になったかというと、異様に箒が怖くてそうなってしまった。意味が分からないだろうが、なってしまったんだからしょうがない。

「何故そのようなことをしている！」

「え～と、女性をエスコートするのは殿方の役目らしい」

「あら、箒さん。わたくしは今から慎二さんと夕食を食べに行きますの」

「そうか、なら私も同席しよう」

「箒さん、一日四食は体重を加速させますわよ？」

「その点は心配無用だ。その分、カロリー消費をするからな」

と言って、竹刀袋のようなものから取り出したのは日本刀だった。・・・・・・あれ？銃刀法違反だよな？当たり前のように持っているからあれだが、危ないよね？

「これで居合の練習をするから問題はない。では・・・・」

そう言って右腕を取った。

「・・・・・何してますの？箒さん」

「なに、女性をエスコートするのは殿方の役目なのだろう？」

そうは言うが、両腕でエスコートってするもんか？とにかく歩きにくいんだが・・・・・だけど、言ったら怒られるし仕方ないか

「ほら、二人とも。早くしないと食堂締まるぞ？」

「う、うむ、そうだな」

「そ、そうですわね」

とりあえず催促して問題は解決した。よかった、面倒ごとにならなくて。そのあと俺たちは食事をとった。帰り際にシャルルのご飯を貰うためにおばちゃんに話しかけた。

「おばちゃ～ん、ちょっとさ、もう一食ご飯作ってくれない？」

「なんだい、もしかして足りなかったのかい？」

「いや、俺じゃなくてシャルルの分なんだ。ちょっと体調悪いらしくってさ」

「なんだ、そういうことかい。よし、任せな。栄養あるもの作ってあげるから」

「じゃ、よろしくね～」

少しすると食事が運ばれてきた。焼き魚定食だった。確かに栄養はあるな。

「ありがと、おばちゃん」

「食べ終わった食器は明日の朝にでも出しといてくれればいいからね」

「分かった」

俺は部屋に戻った。部屋に戻るとシャルルはベットに座っていた。

「ただいま～」

「・・・・おかえり」

あれ、まだ機嫌悪い。

「なぁ、何で機嫌悪いんだ？」

「悪くなんてないよ」

「明らかに悪いじゃんか・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・部屋の中で腕組まなくたっていいじゃない。全く、見せつけてるの？」

「え？なんて言ったんだ？」

「なんでもないよ」

あれ、機嫌が戻った。何でだ・・・・・ま、いいか

「シャルル、ご飯持ってきたけど食べるか？」

「うん、頂こうかな」

そう言って、俺は机にお盆を置いた。

「あ・・・」

「どうした？」

「い、いや何でもないよ」

そう言ってシャルルは焼き魚定食を食べ始めるがうまく魚の身が箸で掴めない。あ、もしかして

「シャルル、箸使えなかったのか？」

「うん、練習してはいるんだけどね・・・・」

「じゃ、スプーンでも貰ってくるか」

「そ、そんな。悪いよ」

「それくらい気にするなよ。シャルルは遠慮しすぎだよ。今までの

経験上一人で頑張るのは分かるけど、少しは人に甘えることも覚えとけよ？じゃないと、息抜きとか出来なくなるぞ」

「・・・・・・・・甘える・・・・・」

あれ？そこに反応するの？シャルルは迷っていたが口を開いた。

「じゃ、じゃあ・・・・慎二が食べさせて」

「・・・・・・え？ごめん、何て？」

「だから、慎二が食べさせてくれる？」

「・・・・・・・・まぁ、いいけど」

顔を赤らめながらの上目遣いはないだろう・・・・・・・断れないじゃないか。ま、良いか。

「じゃあ、最初は魚が食べたいな」

「分かった」

俺は魚を一口大にして、シャルルの口に運んだ。

「あ～ん」

「あ、あ～ん」

「どうだ？」

「うん、美味しいよ。次はご飯が食べたいな」

「おっけ～」

しばらくシャルルにご飯を食べさせてから少し休み、その日は就寝した。

何あの破壊力。あれを断れる人はこの世に存在するのか？あ、でも少しいじめても良かったかもな・・・・しばらくはシャルルが女だってばらさない方がいいだろ。色々とめんどうだし。それにしても、今日は色々あったな。しばらく濃いイベントはないと思っていたが甘かったらしい。この調子じゃ、連続して起きそうだな。はぁ、疲れる。さてと、やってみますか。あることを

～・～・～・～・～

目が覚めると神域だった。よし・・・・・今回は成功した。

「成功じゃなくてお前の気持ちを読んでこっちによんだんだよ」

「何だよ、神。ハゲたか？」

「ハゲねぇよ！ったく、せっかく読んでやったのにお礼のひとつも無しか」

「まぁ、今回のことは礼を言っとく」

「な、なんだよ、調子狂うな」

「今回は、やって欲しいことがある」

「まぁ、あらかた予想は付いてるさ」

「じゃ、話は早い。神、未だにG・W・社ってお前の物か？」

「当たり前だろ。あの世界に無理に作った会社だからな」

「問題はないか・・・・・・単刀直入に言う。デュノア社を買収してくれ」

「何でだ？」

「あんな腐った人間しかいない会社を独立させておくのはおかしい。だから、買収して欲しい」

「ま、それくらいなら問題はないな」

「あと、もう二つ程やってくれ」

「何だ？」

「一つはシャルル・デュノアをG・W・社の専属のテストパイロットにすること。二つ目はシャルルの親の医療費を出してくれ。頼む」

「何だ、そんなもんか。でも、何でそいつのためにやるんだ？」

「あいつは貧乏な暮らしでも母親とゆっくり暮らすのがいいんだってさ。それを邪魔させたくはない。それにあいつみたいな優しい奴には幸せになってもらいたいんだ」

「ふ～ん、気づいてないのか？」

「え？何に？」

「いや、何でもない。・・・・・・・・・・・・・・・ま、こいつのことだし時間が経てば気づくか」

「？何ブツブツ言ってんだ？」

「いや、なんでも。あと一つ教えておこう」

「何だよ」

「その、シャルルって娘の母親だが・・・・実は簡単に治る病気だ」

「は？何言って・・・・・・」

「重い病気ってのはあっちの嘘だってことだ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・つくづく腐ってやがるな」

「ま、それも買収しちまえば関係ないんだけどな」

「そうだな・・・・・・・じゃ、よろしく頼む」

「おう、任せとけ。なんたって俺は神なんだからな！」

初めてこいつがいい奴だと思った瞬間だった。が、

「・・・・・ん？」

「じゃ、お約束でお別れしましょう♪じゃあな～」

「このクソやろうがあああああぁぁぁぁぁぁぁぁ・・・・・・・・・・」

そして俺は落ちていった・・・・・・・・

何で世の中はこうも腐ってるんだ・・・・・・・（後書き）

なんか、姉の卒業論文を書くためにＰＣが手元にないときが増えてきました。

更新が空いたときはそういうふうに思ってください。

俺は弱いままだ・・・・・・・（前書き）

祝ＰＶ５万突破！！！

ありがとうございます

あとがきにてお知らせがあります

俺は弱いままだ・・・・・・・・

次の日の日曜日、朝のニュースはある出来事で独占されていた。『デュノア社がG．W．社に買収された』これは日本だけでなく、世界中のニュースを独占したのではないだろうか。IS世界シェア4位のデュノア社がIS世界シェア1位の会社に買収されたのだ。驚くなといったほうが無理があるだろう。それを、部屋でシャルルと見ていた。

「まさかとは思うけど・・・・・・これって慎二がやったんじゃないよね？」

「まぁ、俺が頼んだって方が正しいかな」

「あのG．W．社の社長に？」

「そんなとこだ」

「ほんと、慎二って何者なの？」

「う～ん、ただの一高校生だよ」

「・・・・そうだね」

「そ、気にしたらダメだぞ～」

すると、いきなりシャルルの携帯から音が聞こえた。音からして通話だろう。シャルルがそれに出る。

「はい、もしもし・・・・・・はい、そうです・・・・・・・・はい・・・・・・・・・・・・・・え？それってどういう・・・・・・あ」

「どうした？」

「あのね、電話でG・W・社の専属パイロットに任命されたって言えばいいのかな・・・・」

神、しっかり仕事はしてくれたか・・・・・・・続けて、またシャルルの携帯が鳴った。

「はい、もしもし・・・あ、お母さん！・・・・・うん・・・・・・・うん・・・・え、ほんと！？・・・・分かった！じゃ、またね」

「お母さんからの電話か？」

「うん！病気良くなるってお医者さんに言われたって！あと、一回日本に来るって！」

「そうか、良かったな」

「うん！」

よ～し、問題は万事解決。やっぱ、シャルルには笑ってもらわないと。これまで、頑張ったんだから。お母さんも日本に来るみたいだし、良かった・・・・・・

「ねぇ、慎二」

「ん？どうした？そんな顔して」

「お母さんの事も専属パイロットの事も、もしかして慎二が？」

「俺は何もしてないよ」

「嘘、こんな都合のいいことばかり起きるはずがない」

う～ん、これは誤魔化せそうもないな。・・・・・・仕方ない、正直に話すか。

「そ、今回の件は全部俺が頼んだ」

「でも、どうしてそこまで？」

「俺は、お前からの話を聞いて心から思った。お前には幸せに暮らして欲しいって。そのために、まずは腐った人間ばかりのデュノア社に消えてもらった。G．W．社の社長から教えてもらったんだが・・・・・・・お前のお母さんが重症だってことは嘘だ」

「え？」

「俺も驚いた。それを聞いて、なおさら必要ないって思った。お母さんの事は心配すんな。医療費も病院提供もG．W．社がしっかりとやってくれる。絶対に安全だ。それに、お母さんは直ぐに良くなるって」

「・・・・・・慎二、何で僕なんかの為にそこまで・・・」

「シャルル、僕なんかの為になんて言うな。お前はいい娘だ。だからこそ、シャルルには幸せになってもらいたい。お母さんとも仲良

くしてもらいたい。そう思ったから、俺は今回のことをしたんだ」

「・・・・・ありがとう、慎二」

「気にすんなって。あ、あと、専用機どうする？今までのが嫌ならG．W．社の方で新しいの準備するって言ってるけど」

「それはいいよ。このラファール・リヴァイブは一緒に頑張ってきた僕のパートナーだから」

「そっか。じゃ、いらないって言っとくな」

「ごめんね、せっかく用意してくれるのに」

「いいって。本人の意見を尊重しろって言われたから気にすんな」

「うん、分かった」

「じゃ、朝飯でも食いに行くか」

「そうだね！」

久しぶりにシャルルの元気な返事が聞けた日曜日だった・・・・

～・～・～・～・～

次の日の月曜日、学年別トーナメントまで2週間を切った今、放課後は練習をする生徒で溢れている。だが、まだ時間が早いせいで人影はない。そこに、ひとつの人影が出てきた。

「さてと、学年別トーナメントまで2週間をきったとこだし訓練しましょうかね。慎二と付き合うためにも」

人影の正体は鈴だった。鈴もあの噂を信じている一人だ。ただ、噂はただの噂であることには変わりない。そこに、もうひとつの人影が近寄る。

「あら、鈴さん。こんな時間にどうしましたの？」

「それ言ったら、セシリアもじゃない」

「わたくしは学年別トーナメントで優勝するための訓練に来たんですわ」

「あら、あたしと同じね。じゃあ、一回模擬戦でもする？確か、一回も戦ったことないし」

「それは名案ですね。どちらが上かこの際はっきりさせましょう」

そう言うと、二人はＩＳを展開した。武器をコールして、お互いに接近しようとしたところにひとつの砲撃が入る。

「ったく、いったい誰よ？いきなり攻撃してくるなんて非常識じゃない？」

「っふ、甲龍にブルーティアーズか・・・・・資料で見たほうがまだ強そうだったな」

そう、攻撃してきたのはラウラだ。

「何、喧嘩売ってんの？」

「あらあら、鈴さん。あちらの方は言語をお持ちでないようですわよ。いじめるのはかわいそうではなくて？」

こちらも、挑発されて苛立っていたのであろう。皮肉っぷりの言い草である。

「こんな量産機に負けるような奴を操縦者を代表候補生にするなど、数だけが取り柄の国と古さが取り柄の国はよほど人材不足と見える」

「・・・・・なんですって」

「人の事を侮辱するなんてマナーがなっていませんわね」

「セシリア、こいつ知らない国にきていきなりいじめられたいそうよ？」

「っは、所詮一足す一は二にしかならん。くだらん種馬の取り合いをしているメスは相手にすらならんな」

「・・・・・・よっぽど殺されたいらしいわね」

「・・・・・・ここはいっそ消し炭にしてあげましょうかね」

慎二を馬鹿にされて二人の怒りは頂点に達していた。もう一触即発の状態だ。

「さっさと来たらどうだ？こちらも暇ではないのでな」

「言われなくても・・・・・・殺ってやるわよ!!!」

鈴とセシリアは攻撃を始めた。・・・・・・鈴の言葉の字が違うような気がするが怒っていた、と言う理由にしておこう。

〜・〜・〜・〜・〜

こちらは慎二、一夏、シャルルの三人組である。放課後の方針を決めていた。

「ねぇ、慎二。今日は訓練どうする?」

「う〜ん、そうだな〜。学年別トーナメントまで二週間切ったし、訓練するか」

「え〜、ここのところ毎日じゃないか?」

「何だよ、一夏。不満だってのか?」

「そうじゃないけどよ〜、たまには休もうぜ〜」

「何言ってんだ、お前は。お前は弱いんだから人一倍訓練しないとみんなに置いて行かれるぞ。まぁ、それは俺もなんだが」

「まぁ、そうだな。よし!訓練して強くならないと!」

「そうそう。よし、じゃあ早速行くか」

方針が決まったところで少し教室がざわついていた。

「ん？どうしたんだ？」

「さぁ、僕にもさっぱり・・・」

すると、廊下の方から声が聞こえた。

「みんな、第三アリーナで模擬戦やってるってよ！」

ほぅ、模擬戦ね。でも、このざわつきようは何だ？

「ドイツの代表候補生と鈴とセシリアがやってるみたいだよ」

なる程、ラウラか。だったら、ざわついても仕方ないか。実力が分からないしみんな一目見たいのであろう。・・・・・・・・・・・・・・でも、何だ？この胸騒ぎは。酷く落ち着かない。

「・・・・・・・・ねぇ、慎二。ちょっと見にいかない？何だか悪い予感がして」

「シャルルもか・・・・じゃ、一回行ってみるか。一夏行くぞ」

「分かった」

俺たちは第三アリーナに向かった。

～・・～・・～・・～

第三アリーナは人で溢れかえっていた。それほどの人が来ている。席は座るところがない。仕方ないから入口近くの通路で見ることにした。すると、そこには箒がいた。

「箒、この模擬戦どうなっている？」

「ああ・・・・・それだが、見たほうが早い」

そう言う箒に従って、アリーナ内を見る。そこには情報通りにラウラたちがいた。

「やっぱりか」

「うん、でも何だか様子がおかしいよ」

言われてみればそうだ。鈴達が攻撃をためらっているように見えた。何故だ？そこで鈴が龍砲を放つ。

「このぉ！！！」

だが、ラウラが右手をかざすとそこに壁があるように消えてしまった。まさか・・・・・・・

「ＡＩＣだね。アクティブ・イナーシャル・キャンセラー」

「慣性停止能力とも言う。だが、あれは・・・・」

「そうだね、鈴達には相性最悪だね」

そう、シャルル達が言うように相性が悪い。最悪だと言っても過言ではない。ＡＩＣは意識を向けた対象の物の動きを止めるという厄介な能力だ。鈴、セシリアは遠距離をメインに戦う分、その飛び道具に意識を向けてしまえば攻撃は届かない。鈴は接近戦もメインに

できるが基本的に牽制は龍砲を使う。龍砲が効かないと分かれば迂闊には近づけない。もし、考えもなく近づいたらＡＩＣで動きを止められて肩のレーザーカノンでドカン、だ。これを使うには操縦者の技量も必要だが、難なく使っているように見えるから技量も確かなものだろう。これは強敵だな・・・・・

「っく、また攻撃が！！！」

「無駄だ！このシュヴァルツェア・レーゲンの停止結界の前ではな！」

そういって、またＡＩＣを発動させる。この調子じゃ攻撃を与えられていないだろう。その中でラウラはワイヤーブレードを出してそれでセシリアを捕まえる。

「っく！」

セシリアのうめき声が聞こえたが、そのままワイヤーで引っ張り鈴にぶつけた。二人は衝突の衝撃で少しの間動けない。そこに、ラウラが来る。

「っこのぉ！！！」

鈴は咄嗟に龍砲を放とうとするが、ラウラのレーザーカノンで撃ち落とされる。

「っきゃあ！」

鈴の悲鳴が聞こえたが、セシリアがバズーカのブルーティアーズでラウラに攻撃を仕掛ける。

「な！！！」

これにはさすがのラウラも驚いたらしい。爆発の煙でラウラの姿が見えなくなる。その隙にセシリア達は離脱した。

「ったく、いきなりバズーカなんて危ない真似するわね」

「鈴さんも、あんな狭い空間で空間圧縮兵器を使ったのですからおあいこですわ」

「ふふ、そうね」

「まぁ、これで少しはダメージが・・・・・」

いきなり煙からワイヤーブレードが出てきた。

「え！！！」

油断していたと言っては酷だろう。だが、気持ちが緩んでいたせいで判断が遅れて捕まってしまった。だが、今回ワイヤーブレードで縛ったところは首だ。

「う！苦しい・・・・」

ＩＳの絶対防御はあくまで武器の攻撃によるものを想定して作られている。だが、直接的に首を占め上げられたりするのは想定外だ。その状態のまま無理に立たされ、殴る、蹴るなどの攻撃を加えていく。所々ＩＳのアーマーが壊れて生身が見えている

「酷い！！あれじゃＩＳの生命維持装置がもたないよ！！！」

シャルルが言っているとうりだ。ＩＳの生命維持装置はある一定のダメージ量を超えると発動する。今は生命自装置が働いているがこのまま続けば命に関わる。

「ラウラ！やめろ！！！」

こういうことが嫌いな一夏がシールドを殴ってラウラを見ている。だが、ラウラから帰ってきた視線は冷酷なものだった。そこで俺の何かが弾けた。・・・・・この感覚は二回目だ。

「くっそ！どうすれば！！！」

一夏がまだ騒いでいる。そこに俺は歩き出す。

「慎二・・・・・・？」

シャルルが何かで怯えたような顔で見ている。箒もそうだ。・・・ああ、俺は今酷い顔をしているだろう。憎悪。いや、この一言で表すにはとても無理がある。とてつもなく黒い感情が出てくる。

「・・・・・・一夏、ちょっとどけ」

「慎二！何言ってんだよ！鈴達が危ないだろ！」

「いいからどけ」

有無を言わさない声で言うと一夏が俺がおかしいことに気づいたらしい。俺はそんなことを気にせずにシールドに近づいた。そして全

力で殴りつける。

ガッシャーン！！！！

殴ったところのシールド一面が粉々になった。

「慎二、血が・・・・・・・」

シャルルがそう言っているがそんなことはどうでもいい。俺はアリーナ内に降りて地面を全力で蹴った。すると、一瞬でラウラに近づく。

「なに！！！！」

いきなり現れた慎二に驚いたのであろう、瞬時に体勢を立て直そうとする。俺はそこに思い切り蹴り飛ばした。

「っがあ！！！！」

うめき声を上げラウラは１０メートル近く吹き飛んだ。

（な、何だこいつは！！！！生身の人間の蹴りでシールドエネルギーが１００も削られるだと！！！！）

俺は、悶えてるラウラに接近する。

（このままでは、こ、殺される！・・・・・殺らなければ殺られる！！！！）

そこでラウラは近接ブレードをコールし、慎二に切りかかる。が

ガギィン！！！

だがそれは、金属音で遮られた。

「まったく、これだからガキの相手は疲れる」

「きょ、教官！！！」

千冬さんは打鉄の近接ブレードでラウラの近接ブレードを受け止めていた。もちろん、生身でだ。

「お前は何をしている？生身の人間にＩＳの装備を使うなんてな」

「い、いや、これは・・・・・・」

「鷹野もいい加減落ち着・・・・・・・・け・・・・・・」

千冬は慎二を見て絶句していた。

「・・・・・千冬さん、どいてください。じゃないと、守れないじゃないですか」

（まさかこいつはあの時を・・・・・・・・・これでは、まずい）

千冬はとっさに今の慎二の状態があの時と同じと理解し判断した。

「鷹野！落ち着け！！！今回はあの時と違う！！！！！！」

（（（（（あの時？））））））

会場にいた全員が思ったであろう。あの時とは一体何だと。ラウラ、鈴、セシリアも例外ではない。立ち直ったラウラもしっかりと聞いていた。そして、千冬がドイツがいた時の事を思い出していた。確か、似たような事を言っていたはずだ。だが、詳細までは思い出せない。

「・・・・・あ・・・・・の・・・・・・・・と・・・・・・・き・・・・・・・？・・・・・」

（しまった！！）

千冬は心の中で悪態をついた。普段の慎二なら笑って流すところだが、今は違う。極度に心が不安定な状態になっているせいで普段よりも言葉に敏感になっていた。千冬も慎二の状態を見て早くどうにかしなければならない、と焦っていた。それが、仇となった。この状況を理解しているのは一夏、千冬、楯無くらいであろう。今、会場には楯無がいると信じたい。いなければどうしようもない。

「あ・・・うわあああああああああああああああああああああああああああ！！！！！！！！！！！！！！！」

「楯無！！！！！！楯無はいるか！！！！！！！！！！！」

すると、慎二が破ったシールドから楯無が出てきた。そして、慎二の元に駆け寄り抱きしめていた。会場中は何が起きたか把握しきれていないだろう。ただ、普通では無いと理解しているはずだ。が、そんなのに構っている暇は無い。

「違うんだ・・・・・・・瑠美香・・・・・・違うんだ・・・・・・・・

俺は・・・・・・・・・・・・・・・・・お前を・・・・・・・・・」

これは私の考えていたよりも深刻なトラウマね・・・・・・・っと、栖無は悪態をついた。

「慎二君、私よ。わかる？」

「た・・・て・・・・な・・・し・・・さ・・・・・ん・・・？」

「そうよ、栖無おねーさんよ。ほら、今は私の胸で落ち着きなさい」

「うう・・・・・・うあああああ・・・・・・」

栖無が千冬に目配せをした。それに千冬は頷き

「これから学年別トーナメントまで模擬戦の一切を禁止する！！！以上、今日は解散！！！！」

みんな渋々去っていったが何名か残っていたので

「いつまで残っているつもりだ！！！！解散と言ったはずだぞ！！！！！！！！さっさと戻れ！！！！戻らないと罰を与えるぞ！！！！！！！！！！」

千冬がそう言いみんな立ち去った。

「あの、織斑先生。鈴とセシリアを保健室に運んだほうがいいでしょうか？」

シャルルと箒、一夏が近づいてきて言った。

「・・・そうだな、そうしてやってくれ」

そんな中、一夏は千冬に目配せをしたが千冬は首を横に振った。それを見て、一夏は戻っていった。一夏達の姿ががアリーナから消えてから楯無が口を開いた。

「織斑先生、慎二君のトラウマはここまで・・・・・・」

「ああ、ひどい有様だ。もう、直しようがないくらいに、な・・・・・・」

「・・・・・・・そうですか」

そんな中、慎二はまだトラウマに犯されていた・・・・・・・・

〜・〜・〜・〜・〜・〜

場所は変わって保健室。鈴達の手当が終わりみんなが集まった。が、誰も口を開かない。そんななか、シャルルが口を開いた。

「・・・・ねぇ、慎二大丈夫かな?」

「「「「・・・・・・・・」」」」

その疑問には誰も答えられない。あの様子を見て慎二が何かとてつもない闇を抱えているのは確かだ。だが、それを調べる術は持っていない。だから、誰も何も言えない。だが、一夏だけは事情を知っている。が、口外にしないと言う約束があるので口を開かない。そ

の時、千冬さんが入ってきた。

「鳳、オルコットは大丈夫そうだな」

「お、織斑先生。慎二さんは？」

セシリアが聞いた。みんな返答を待っているようだった。千冬は口を開く。

「・・・・・・時間が経てば問題はない」

全員ほっとしたようだ。そんな中シャルルはさらなる疑問を口にする。

「織斑先生。慎二はどうしてああなったんですか？」

「あれはトラウマだ」

「一体何が・・・」

「それについては一切何も言えん」

「な、なんでですか？」

「お前らが知ったところでどうこう出来る問題じゃないからだ」

「そ、そんなことはやってみないと」

「お前らは医者ができなかったことが出来るのか？」

「「「・・・・・・・」」」

「お前たちは私が何もやっていないと思うか？」

「・・・・・・・いえ」

「結果は今の状態だ・・・・・・・・・早く寮に戻れよ」

そう言って千冬は部屋から出ていった。病室のなかには何とも言えない空気が流れる。

「一体慎二さんには何が・・・・・・・」

「私たちの知らない所で何かあったのか・・・・・・・？」

「でも、あれは本当に深い傷だよ・・・・・・」

「何よ、少しくらい相談してくれもいいじゃないのよ・・・・・・・・」

思い思いを口にし、みんなは部屋に戻っていった。

～・・～・・～・・～

ここは寮のある一室。そこに、慎二と楯無はいた。未だに慎二は楯無の胸の中でトラウマに犯されている。それを楯無は子供をあやすように優しく頭を撫でていた。楯無は事情を知っている分、慎二の事を分かっているつもりだった。だが、それは甘かった。トラウマは酷いとは思っていたがここまでは予想をしていなかった。

（慎二君は一体こんな心でどうやって生きてきたの？こんなになるような心の傷って一体・・・・・・・・瑠美香ちゃんは慎二君の心をどれだけ占めていたの・・・・？少し嫉妬しちゃうわね、ここまでだと）

また、慎二が呻き出す。それを楯無は優しく言葉をかけて頭を撫でる。

「大丈夫よ、私がそばにいるからゆっくりおやすみなさい」

すると、安定した寝息が聞こえてきた。

（慎二君を闇から救う、ね・・・・・・・・一体何を私は言っていたんだろう。闇の大きさを把握しきれず結局救えない。でも、必ず慎二君を救ってみせる）

新たに決心した楯無であった。

俺は、何をしているんだ・・・・・・・結局迷惑をかける・・・・・

・・・・・・・・あの時のことを振り切れない・・・・・・・・・・

・・・・瑠美香・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・俺は・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

俺は弱いままだ・・・・・・・（後書き）

ＰＶ５万を記念して何か話を作ろうと思うのですが

ネタがありません

なので、感想にてネタを募集したいと思います

みなさんの意見お待ちしています

うまくいかないもんだな、人生ってのは・・・・・・・・・（前書き）

更新空いてすいません。

話の繋げ方に手こずりました。

うまくいかないもんだな、人生ってのは・・・・・・・・

次の日、慎二は学校を休んだ。仕方ないと言えば仕方ないだろう。昨日のあれは普通ではない。それは会場にいた誰しもが思っていた。そんな中、千冬さんが教室に入ってきた。

「皆、揃っているな。ではＳＨＲを始める」

千冬さんも慎二については触れないらしい。そんな調子で、慎二のいない一日が始まった。

二時間目の休み時間、簪が１組の教室に入ってきた。教室の様子を見て、やっぱりかと言った感じの顔をした。それに、一夏が近寄る。簪も一夏の事を覚えている。

「どうした？簪」

「あ、一夏・・・・やっぱり、慎二は居ないんだね」

「・・・ああ、今日は休みだ」

「昨日、アリーナに居なかったから分からないけど・・・・・・何があったの？」

「・・・それは言えない」

「ど、どうして？」

「言わない約束なんだ」

「そう・・・・・お姉ちゃんもどこにいるかわからないし」

「ん？お姉ちゃんって言うと生徒会長の？」

「うん・・・私の自慢のお姉ちゃん。今日、学校休みみたいだけど連絡つかないの・・・」

「そっか・・・でも、俺も分からないや。ごめんな」

「ううん、いいの・・・・・自分で探してみる」

「ああ、こっちも見かけたら連絡する」

そう言い、簪は教室を出ていった。それを見送り、一夏は教室に戻る。が、いつもの様な賑やかさはない。みんな慎二の事を心配しているのだろう。気にしないように話している女子たちもどことなく元気がない。特に静かなのが箒、セシリア、シャルルだ。ラウラは何となくだけどイライラしているように見えた。シャルルの話を聞く限り、慎二は昨日部屋には戻っていないらしい。先生が付いているだろうから心配はないけど、やはり心配らしい。

「みなさ～ん、二時間目を始めますよ～」

元気に教室に入ってきた山田先生だが、反応がなく撃沈していた。彼女なりにクラスを元気づけようとしたのだろう。まぁ、失敗したわけだが。まさか、ここまで1組のみんなが慎二絡みで静かになるとは、と一夏は思っていた。まぁ、あれを見れば当たり前と言う気

もしなくはないが。事情を知っている一夏としては不安が沢山ある。
そんなこととは関係なしに時間は流れていく・・・・・・・・・・
～・～・～・～・～
次の日の朝、やはり慎二の姿はなかった。もうすぐ、ＳＨＲが始まろうとしたとき馴染みのある声が聞こえてきた。
「おはよ～、元気してたか～？」
「「「「し、慎二！？」」」」
「お、その調子なら問題なさそうだな」
「どこいってたのさ、慎二！一回は連絡頂戴よ。部屋にも戻ってこないで」
「はは、悪いなシャルル」
「もう・・・・大丈夫なのか？」
「ああ、問題ないぜ」
嘘だ。そこにいたみんながそう思っただろう。誰が見ても無理をしているようにしか見えない。だが、誰もそれ以上は追求はしない。それは千冬さんに止められているからだ。一夏が慎二が休んでいた間に学園から連絡された事を教えようと口を開いた。
「そういえば慎二、学年別トーナメントだが二人一組みに変更になったぞ」

「ん？ああ、なるほどな～」

「で、一夏。お前は誰と組むか決まってるのか？」

「いや、まだなんだよな～。簪にでも頼もうかな」

「あいつは強いからいいかもな。っと、俺はどうするか・・・シャルル、お前って決まってる？」

「え？僕はまだだけど」

「じゃ、俺と組もうぜ」

「うん、分かった」

「さて、ＳＨＲを始めるぞ。さっさと席に付け」

いつの間にか千冬さんが教室に入ってきていたらしい。そうして、一日が始まった。

～・～・～・～・～

放課後、訓練をしようとしたらみんなに止められたから仕方なくシャルルと一緒に自室に戻ってきていた。

「ったく、みんな心配しすぎなんだよ・・・」

「それだけみんなに思われてるって考えようよ」

「まぁ、それもそうだな」

そう言いながら俺はベットに横になった。ふ～、自分のベットが落ち着くなぁ。そこで俺は口を開いた。

「なぁ、シャルル」

「何、慎二？」

「その調子なら問題無さそうだけど、女ってバレてないよな？」

「そこは問題ないよ。学年別トーナメントのペアだって心配して組んでくれたんだよね？」

「まぁ、そうだが・・・・」

「ふふ、ありがとね慎二」

「・・・・どういたしまして」

何となく気恥ずかしかった。だが、別にシャルルが女だと隠す必要もない。今はデュノア社はG・W・社に買収されたし問題はない。しかし、安心もできない。デュノア社が反撃してくる可能性は十分にある。今はまだシャルルは表面上、デュノア社所属になっている。デュノア社が学年別トーナメントまではこうして欲しいと要望があった。まぁ、意味はないだろうがな。学年別トーナメントが終われば、シャルルは完全にG・W・社の一員になれる。最低限はそこまで女だと言うことは隠しておきたい。

「さ、一日空いたんだからその分のお話しよう？」

「なんでまた・・・」

「一日一人で寂しかったんだよ？」

「分かった。じゃ、話そうか」

その後、夕食までシャルルと話していた。

～・～・～・～・～

その同時刻、箒、セシリア、鈴、簪達は悩んでいた。原因としては慎二である。今朝の様子を見る限り明らかに無理をしていた。彼は他人に心配を掛けるのが嫌がる。特に女子に心配は掛けたくないらしい。理由は分からない。何せ会った時からそうなのだから。その優しさが結果的に甲斐性無しに繋がっているがその考えが変わった。今回の一件でだ。千冬さんが言った『あの時』と関係があるはずだ。簪に至ってはアリーナ内の出来事を見ていないので分からないが、慎二の話を聞いた時の一夏の様子を見てそう思っている。

箒ｓｉｄｅ

箒は自室で悩んでいた。やはり今回の件でだ。

（今朝の慎二の様子・・・・明らかに無理をしていた。確実に今回の件が関係しているはずだが・・・・・・・・千冬さんに話を聞くにしても中途半端な気持ちではいけない。人の大事な過去を聞くのだ。それもトラウマについての。・・・・・私は慎二を助けたい。だが、千冬さんにもできなったことが私に出来るのか？）

箒が悩んでいる事は同室の鷹月さんに少しばかり迷惑になっていた。自室で本を読んでいるのに険しい顔で悩んでいるのだ。気にするなと言っても無理だろう。その調子で箒はしばらくいた。

箒ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

セシリアｓｉｄｅ

セシリアはというと、高級ベットで部屋の大半を占めている部屋で箒と同じく悩んでいた。

（慎二さん、やはり今朝は無理をしていましたよね。何か手助けをしたいのですが・・・・・慎二さんの過去に一体何が・・・・・・・・・悩んでいても仕方ないのですが、どうしようもありませんわね。織斑先生に聞くしか手はないようですし。ですが、軽い気持ちで聞いてはいけませんわよね。大事なことですものね。・・・・・・・・・慎二さん、今度はわたくしが助ける番でしてよ）

セシリアはセシリアなりに答えを出していた。今まで慎二に助けられた分その恩返しをする為に頑張ろうと決心したにであった。

セシリアｓｉｄｅ　ｅｎｄ

鈴　ｓｉｄｅ

鈴は今は外に来ていた。５月の風が彼女を落ち着かせる。そして、思考を開始した。

（慎二、一体どうしたのかしら？この前の模擬戦のあれは普通の人が持っている闇ではありえないくらい大きかった。でも、結果的に

また私は守られてしまった・・・・・・何よ、人が恩を返す前にまた貸しを作って。・・・・・・やっぱり、千冬さんに聞くしかないよね。言わないと言ったけどここだけは妥協してもらわないと）

だが、苦手な千冬と話すと考えただけでため息が出た。そのため息は、５月の空に消えていった。

鈴　ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

簪　ｓｉｄｅ

簪は放課後整備室に来ていた。打鉄弐式の整備をしていた。だが、手が止まってしまい作業が全然進まない。

（慎二、結局今日来たみたいだけどなんだか元気が無かった・・・・・・お姉ちゃんも今日来たから慎二の事聞いたら教えてくれないし・・・・・・やっぱり昨日のあの話は何かあったんだ・・・・・・一夏の様子もどこかおかしかったし。それにみんなが言っている『あの時』って一体・・・・・・）

簪はアリーナ内にいなかった分、みんなから話を聞いて情報を集めていた。慎二の様子を語る話には違いはあったけど、全員の話に共通して出てくることがあった。『織斑先生があの時って言ったらおかしくなった』ここだけは本当にみんな同じことを言っていた。多分、お姉ちゃんは事情を知っているだろうけど、教えてくれないってことは簡単に他人には話していけないことだと直感した。

簪　ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

～・～・～・～・～

ここは慎二とシャルルの部屋。夕食も終わり部屋着に着替えようとしていた。シャルルが女なので俺は洗面所に行こうとしていた。

「ねぇ、慎二何で洗面所行くの？」

「何でって、一緒に着替えたら色々まずいだろ？」

「僕は気にしないよ？」

「いや、俺は気にするんだが・・・・」

「・・・・・・・・・・・・ダメ？」

「・・・・・はぁ、分かったよ」

結局、こういうのには弱いんだよな俺って。

「じゃ、仕切り使おうな。あと、仕切り越しに後ろむいて」

「うん」

俺は洗面所側のベットを使っている。洗面所のドアと向かい合いながら着替えた。部屋を布が擦れる音が支配する。

「・・・・・・」

「・・・・・・」

・・・・・やっぱ気まずいね。だから言ったんだよ。洗面所行くっ

て。すると、シャルルの方から倒れる音が聞こえる。

「きゃっ！」

こういう時は向いちゃダメだ。絶対に良くないことが起きるに決まっている！俺はドアを見ながら声をかけた。

「大丈夫か？シャルル」

「う、うん。なんとか・・・・」

何とか持ち直してくれたらしい。俺たちは着替えを終えた。だが、異様に疲れた・・・・そして、何故か眠い・・・・何でだ？今日は早くシャワー浴びて寝よう。眠いときは早く寝るに限る。明日からはいつもどうり訓練が始まるしな。

「なぁ、シャルル。今日は眠いから早くシャワー浴びて寝るから」

「あ、うん。分かった」

俺はその後、早めにシャワーを浴びて眠りについた。

～・～・～・～・～

シャルル　ｓｉｄｅ

慎二から寝息が聞こえてきてから、シャルルは慎二のベットに座った。

「もう寝ちゃうなんて、よっぽど疲れてたんだね」

慎二の頭を撫でながら、少し思考に浸る。

（今朝の様子はやっぱり無理をしていたんだね・・・・・一昨日のは一体何があったんだろう？織斑先生はトラウマだって言ってたけどあれは度が違いすぎる・・・・）

突然慎二が呻き出した。

「・・・・瑠美香・・・・違う・・・・・俺は・・・・俺は・・・・・！」

それを見てシャルルは頭を優しく撫でた。少しすると安定した寝息が聞こえてきた。

（瑠美香って娘と慎二には何があったの？・・・・・・全然分からない。慎二の様子を見る限り何か酷いことが起きたのは確実だけど・・・・・・はぁ、ここまで慎二が執着してるってことはその娘の事・・・・・・・・でも、僕も諦められない。本当に卑怯だよね、慎二は。あそこまでしてくれたらもう、どうすればいいのさ）

時間も時間なのでシャルルは眠りに就こうとしたが先にあることをした。そっと、慎二に顔を寄せて額にキスをした。

「・・・おやすみ、慎二」

シャルルはベットに横になった。・・・・・・自分がしたことに今更恥ずかしさを覚えしばらく寝ることができなかったのは余談である・・・・・・・そして、夜は更けていく。

シャルルside　end

～・～・～・～・～

今日は土曜日、しかも次の月曜日は学年別トーナメントが実施される、最後の週末である。午前の授業が終わり今は放課後となっている。が、今日はみんな都合が悪く訓練できないときた。さすがに、一人での訓練は意味があるようでないからなぁ、どうすっかな。そういえば、今日は鈴が暇だと言っていたような・・・・って、訓練するのに暇なのか？あいつ。まぁ、、いいか。俺は鈴に電話をかけた。何回かのコール音の後、鈴が電話に出た。

「どうしたの慎二？あんたから電話かけてくるなんて珍しいじゃない」

「それもそうなんだが、電話にでて第一声がそれかよ」

「仕方ないじゃない。本当に珍しかったんだから」

「まぁ、それもそうだな・・・・って、違った。鈴、今暇か？」

「昨日暇だって言ったじゃない」

「じゃあ、どこかに出かけないか？お前とゆっくり話したりしてなかったし」

「ほ、本当に！！！」

「ああ、二時くらいからどうだ？」

「分かった。集合は校門前でいいわよね？」

「それでいいよ」

「じゃ、また後でね」

「じゃあな」

俺は電話を切った。さて、準備もあるし部屋に戻るか。ちなみに今は、寮の部屋に戻ろうかと思って帰路を歩いていたところだ。そういえば、あいつは私服で来るのか？ま、どうでもいっか。

～・～・～・～・～

現時刻は１時５０分。１０分前行動は基本だからな。校門に行くともう鈴がいた。

「あれ、随分と早いな」

「あんたが遅いのよ。人には１５分前行動が普通とか言ってるのに遅れるってどういうことよ！」

「あれ、そんなこと言ったけ？」

「言ったわよ！まったく、何忘れてんのよ・・・・」

ああ、そういえば言ったな。こいつがあまりにも時間にルーズすぎるからそういったのだ。まぁ、１５分は早かったかもしれないな。まぁ、結果的に時間はきちんと守るようになったわけだが。

「ねぇ、慎二。私の格好に何かコメントないの？」

「ん？ああ、似合ってると思うぞ」

「何よ、そのとってつけたよなコメントは」

「そんなこと言われてもなぁ、思ったことを言っただけなんだが」

「う・・・・そう？そこまで言うなら許してあげる」

鈴の格好は、ジーパンのショートパンツに上は紺色のパーカーを着ていた。なんとも鈴らしい格好だ。似合ってる以外のコメントが正直思わなかった。っと、もう2時過ぎたな。早くしないと寮の門限に間に合わなくなるな。

「鈴、早くいこうぜ。時間なくなるし」

「ん、そうね。早くいきましょう」

俺たちは歩き始めた。

ＩＳ学園のある小島は埋め立てられている。街とは離れてるため、交通のアクセスはモノレールだけである。モノレールを使って駅に行けば、電車、バス、タクシー、地下鉄などの交通網が豊富になる。逆に言えば、駅まででないと何も無いと言うことだ。今は駅ビル『レゾナンス』に来ている。正直言って駅ビルってこんなに凄いもんなのかと最初は驚いたものだ。現代のイ〇ンモール並みのでかさで、中も服屋、食事場所（和、洋、中）食品類などイオ〇モール顔負けである。

「とりあえず、どうする？」

「そうねぇ、少し服みたいから付き合って」

「分かった」

俺たちは2階に来た。ここは服のフロアで婦人服、紳士服、メンズファッション、レディスファッションなど全部が揃っている。正直言って、この品揃えはは凄い。他の店が必要ないもの。流石にブランドとかは少ないけどな。

「で、何見るんだ？」

「夏服を見るの」

「ああ、なるほどなぁ」

鈴に付いていくと、いかにも夏服がある（ほとんどが夏服）店に来た。若者向けの服が多く、他の学校の生徒の姿も見える。

「ねぇ、慎二。これとこっちならどっちがいい？」

いつの間にか鈴は服を見てきたらしい。右手にはオレンジの半袖、鈴に良く似合いそうな服だ。左手には黒とピンクの半袖だった。こちらもこちらで鈴に良く似合いそうだ。

「そうだなぁ・・・・・・オレンジは良く見るし、黒の方かな」

「でも、女の子って感じしすぎじゃない？」

「何言ってんだよ。お前は女だろうが」

「・・・そうだよね！じゃ、買ってくる」

「行ってら〜」

・・・・・・・一言作者から言わせてもらいたい。リア中氏ね！！！！！！！！！！！！！

少しすると鈴が戻ってきた。心無しか嬉しそうだ。

「さて、鈴。少しお茶しないか？」

「そうね、買い物も終わったしそうしましょ」

俺たちは食事フロアの５階に向かった。

「で、何でここなんだ？」

一体ここはどこだというと『@クルーズ』と言う店だ。パフェの専門店で今も学生で賑わっている。が、問題なのはパフェの値段だ。一番安いので１５００円である。

「別にいいでしょ。自分の分は自分で払うから」

「いいよ、俺が奢るよ。好きなの食えよ」

「そう？じゃあ、お言葉に甘えましょうかね」

「その代わりちゃんと食べられる量にしろよ」
「分かってるわよ、そんなこと」
しばらく悩んでいたが鈴だが注文をした。
「チョコバナナパフェとジャンボパフェとイチゴパフェください」
「お飲み物は？」
「私はアイスティーで」
「俺は・・・」
「アイスコーヒーでしょ？」
「・・・ああ」
「かしこまりました」
そういってウェイトレスは戻っていった。
「なぁ、鈴。本当に食べられるんだろうな」
「当たり前でしょ」
「・・・・・・太るぞ」
「う、うるさいわねぇ。私は太りにくい体質なの！」

「代わりに一箇所、成長しないけどな」

「いいじゃない、そんなこと！！！」

余談だが鈴はきちんと頼んだパフェを食べきった。しかも、「なんだかもう一つくらなら食べられたかも」何ていいやがった。ある意味化け物なんじゃないのか、あいつは。ちなみに代金は５０００円だった。雪月花のテストパイロットの代金としてお金を貰っていなかったらどうなっていたことか。金額としてはサラリーマンの月給ぐらいだ。その代わり、何が起こるかわからないからＩＳは。ってか、この会計普通の高校生にはきついよな。

今は学園島に向かうモノレールの中だ。俺たちは隣同士で座ってる。

「鈴、今日はどうだった？」

「楽しかったわよ、久しぶりに遊べたし」

「そうか、なら良かった。何だか、こっちに来てから元気がなかったからな」

「・・・・・・やっぱり気づいてた？」

「そりゃあな」

「・・・・・」

「おじさんとおばさんのことだろ？」

「さすがね、あんたは」

「おじさん達の話をしたとたん表情が暗くなるんだ、分かって当然だろ」

「そんなに顔に出てた？」

「そりゃあ、もう。何があった？相談くらいならのるぞ」

「お父さんとお母さんね・・・・・・離婚したの」

「・・・・あんなに仲良かったのにか？」

「うん、そんな仲の良さなんて関係ないみたいね。簡単に崩れるんだもん」

「もしかして、中国に帰ったのって・・・」

「そう、もう離婚してたからよ。私はお母さんに引き取られたんだけど何か居心地が悪かった。そんな時、私ＩＳ適正が高いことが分かって頑張って訓練して代表候補性になったの。そしたら、あんたがＩＳ学園に入学するって言うからこっちに来たの」

「そんなことがあったのか・・・・」

「・・・やっぱり、昔みたいにお母さんとお父さんと暮らしたい。暮らしたいよ・・・・」

そう言い、鈴の目から涙が溢れた。俺はそっとそばに抱き寄せる。

「頑張ったな、鈴」

「うん、辛い訓練だって頑張った・・・・・・・もう、私はＩＳに逃げるしかなかった・・・・・・・・現実を認めたくなかった」

「うん、分かってるよ」

幸い、周りには人が居なかった。駅に着くまで鈴を抱き寄せていた。人間は難しいな。あんなに仲の良い夫婦だって離婚する。シャルルの時みたいな糞みたいな人間だっている。鈴やシャルル、箒、セシリア、簪、楯無さんの様にやさしい人たちだっている。人間ってのは一生分かり合えないのかな・・・・・・

寮までの帰り道、鈴は口を開いた。

「何だか・・・ごめんね」

「気にすんな、困ったときはお互い様だ」

「そうね・・・・・ありがとう」

「どういたしまして」

ふと、腕時計に目を落とすと５時５０分だった。門限は６時・・・・・・・

「・・・・・・・・鈴、急ぐぞ」

「・・・・・・・・そうね」

俺たちは走り出した。
結構（いや、かなりか？）ギリギリになってしまったが、寮の門限には間に合った。鈴とは同じ2階だが階段からが逆方向だ。
「じゃあな、鈴」
「慎二もね」
短い会話を交わし俺たちは部屋に戻った。部屋に戻るとシャルルが帰ってきていた。
「あ、慎二。おかえり」
「ただいま、シャルル。手続きは終わったか？」
「うん、あとは学年別トーナメントが終われば問題ないよ」
今日シャルルは、G・W・社に移るための書類の手続きの為G・W・社に行っていた。書類は多いらしいが今日だけで終わってよかった。面倒なことは続かない方がいいし。
「それよりも、慎二。今日はどこに行ってたの？」
「ん？鈴と買い物だが」
「へ～・・・・・そうなんだ～・・・・・」
あれ、何故か機嫌が・・・・・・・仕方ない、機嫌を直してもらおう。

「シャルル、飯食いにいこうぜ」

俺の経験上どうにかなるはず・・・・・・

「そうやって直ぐに話逸らす」

「うぐっ・・・・やっぱり怒ってる？」

「ふふ、からかっただけだよ。さ、早くご飯食べに行こう？」

「そうだな」

その後は、いつも通りシャルルと話して就寝した。

何だか、シャルルもフラグ立ったよな・・・・・・鈴も。はぁ、なんでまた俺なんだか。あの時の俺を見ても好意を寄せてくれているのか・・・・・・・・でも、思いには答えられない。いつか、ちゃんと言わないとな。それにしても眠い・・・・・・・・寝よう

うまくいかないもんだな、人生ってのは・・・・・・・・（後書き）

なかなか、話の時系列がおかしいですが気にしないでください。

そういえば、話のネタまだ募集してますからね。

無い場合は作者が自分で考えますができればみなさんの希望通りに話を作りたいので気軽にお願いします。

俺は最低な男だ・・・・・・・（前書き）

二十話到達！！！

いや～、順調の一言です

これもみなさまのおかげです

ありがとうございます

俺は最低な男だ・・・・・・・

今日は月曜日、学年別トーナメントが開催される日だ。トーナメントの組み合わせは当日発表される。今はシャルルと一夏とで更衣室で組み合わせの発表を待っているところだ。

「はぁ、長ぇ。いつになったら発表されんだ。流石に飽きてきたぞ」

「仕方ないよ。少し進行が遅れているみたいだし」

「まぁ、そうなんだが・・・・そういえば一夏、お前って誰と組んだんだ？」

「俺か？俺は簪と組んだぞ」

簪ね、あいつは強いから良いパートナーだろう。打鉄弐式はいろんな状況に対応できるようにできている。今の一夏のレベルなら心強いだろうな。

「あ、組み合わせが発表されたみたいだよ」

やっとか・・・・・長かった。なんたって３０分も待っていたんだからな。さてと、俺達は誰とかな・・・

「・・・・・・え？」

あれ？シャルルが驚いてる。ってことは、強い奴にでも当たったか？俺は更衣室にあるモニターを見た。

「・・・・・・最初から運がいい」

俺たちが当たったのはラウラ、箒ペアだ。最初からラウラが潰せるのか・・・・・・嬉しい限りだ。

「シャルル、手はず通りに頼むぞ」

「う、うん」

「慎二がんばれよ」

「言われなくても！」

とは言ったものの、俺達の出番はしばらく後だ。初戦がもう少しで始まるから、あと２０分位だろう。

「じゃ、慎二。行ってくる」

「ああ、勝てよ」

一夏が初戦で三組の人たちと対戦だ。負けることは無いだろうが、まぁ試合は見とくか。

結果は勝利。専用機と量産機とでは性能差があるから当たり前だろう。まぁ、操縦者の技量があれば話は別だ。だが、一年のこの時期ではそんなに技量に差が付く訳がない。よって結局機体の性能差なのだ。

「おつかれ、一夏」

「おう」

「だけど、もう少しエネルギー減らさないで勝てたんじゃないのか？」

「まぁ、そうだな。今回は無駄な動きが多かったからな～」

「ほぅ、自分で無駄な動きをしていたことに気づいたか。関心関心」

「流石に気づくよ。俺のＩＳ操縦技術は酷いからな」

「そこまで気づいてるなら言うことはないな」

「慎二、そろそろ準備したほうが良さそうだよ。試合が終わりそう」

「そうか、なら準備しとくか」

～・～・～・～・～

アリーナ内、もう両者揃っている。あとは試合のブザーが鳴れば試合開始だ。にしても、ラウラからの視線が鋭いな。まぁ、好意的じゃないのは試合をするにあたって本気を出せるから良いか。

「最初がお前で助かったぞ」

「ん？何がだ？」

「最初から本気でお前を潰せると言いたいんだ」

「それはこっちのセリフだよ」

カウントが始まった。3、2，1、

ビーーーーーーーーーーーー！！！！！！！！！

俺は瞬時に漆黒ノ太刀をコールしラウラに投げた。

「ふん、何をするかと思えば！」

ラウラは迷わずＡＩＣを発動させた。漆黒ノ太刀が空中で止まっている。

――――かかったな

漆黒ノ太刀はフェイクだ。俺は次にラウラに接近する。そして、コールしておいた菊一文字で切りかかる。

「な！」

これは予想外だったらしく難なくダメージを与えられた。そう、ＡＩＣの弱点は向けられるひとつの物に意識を向けると他が疎かになる。熟練者にでもなれば何個かの対象物に意識を向けられるかもしれないが、今のラウラの様子を見るとそうではないらしい。俺は落ちた漆黒ノ太刀を拾った。

「さて、ラウラさんよ。覚悟はいいか？」

「っく！」

俺は菊一文字をクローズ、そしてバズーカ（ネタ）をコール。

「シャルル！」

「分かった！」

シャルルが防御体勢をとる。ラウラと箒は意味が分からないさそうだが、こちらにとっては好都合だ。俺はバズーカを発射する、アリーナ中央に。誰もが失敗したと思ったみたいだがそれは違う。バズーカはある距離を行くと割れて突然中から何かが出てきた。その正体は・・・・・・・・・１００口径の銃弾だ。それがアリーナ全方位に発射される。それは俺にも飛んでくるのでそれを漆黒ノ太刀で切り捨てる。

「なに！！！」

「な！！！」

箒とラウラは驚いたらしい。箒は俺と同じように切り捨てていた。ラウラはＡＩＣを発動させた。こうもうまくいくと笑いが止まらない。

『疾風迅雷発動』

俺はここで勝負にでる。長引かせていいことは一つもない。疾風迅雷によって加速されたＩＳで漆黒ノ太刀を腰に構えラウラに切りかかる。

「鷹野流剣技、降りしきる千雨（ちさめ）」

俺はラウラとすれ違った。

「っふ、何の攻撃も無しか」

「そいつはどうかな」

「なにを言っている・・・・・何！？シールドエネルギーが！？」

降りしきる千雨は居合切りの要領で相手に接近する。そして、相手が近づいたらそこで瞬間加速を使いさらに加速する。そこで、ＩＳを装着していても必ずある、生身の所を狙う。絶対防御とまではいかないが、普通に攻撃するよりはダメージが大きい。今回は二の腕、太ももを計3回切った。多分、１８０位は削れたはずだ。そこでシャルルが現れる。

「こっちは終わったよ」

「さすが、早いな」

シャルルととっていた作戦は俺がラウラを相手し、シャルルが他の相手すると言う勝手な作戦だ。それでも、シャルルは文句の一つも言わなかった。

「じゃあ、僕は待機してるよ」

これも俺な勝手に言ったことだ。ラウラとは一対一で戦う。だが、危険な状態になったら助けてくれる。ほんと、最高のパートナーだよ、シャルルは。ラウラのシールドエネルギーは残り半分といったことだろう。さっさと勝負を決めてしまおう。

「さて、終わりにしようや。ラウラさん」

「なめるなぁ！！！」

そう言って、肩のレーザーカノンを発射する。成功してない方法で攻撃するなんて、大分動揺してるな。俺はレーザーカノンから発射された弾を一刀両断する。そして、菊一文字をコールし、切りかかる。

「鷹野流剣技、乱れ桜」

乱れ桜でさらにシールドエネルギーを削る。これで、残りは僅かだ。が、ラウラの様子がおかしい。

～・～・～・～・～

（私はこんなところで負けるのか・・・・？）

慎二の攻撃を受けラウラのシールドエネルギーは１００を切っていた。

（私は負けられない・・・・負けるわけにはいかない）

私は遺伝子組み換えによって鉄の子宮からから生まれた。私の存在意義は戦うこと。それ以外何もない。起きては訓練、起きては訓練。そんな日々を過ごしていた。そして、私はエリートになった。ＩＳはそんな私を崩した。一気に出来損ないになった。皆から蔑まれ侮蔑などの目で見られた。そんなある日私の前にあの人が現れた。織斑千冬だ。

「ここ最近調子が振るえないそうだな。なに、心配するな。私が教えれば一ヶ月で使い物になるようになる」

教官に教えてもらうようになってからはメキメキと上達した。今まで蔑んできた奴らも直ぐに抜かした。そして、私はまたトップになった。あいつらの驚いた顔が面白かった。教官が来て1年が経とうといていた。もうすぐ、教官は日本に帰る。

「教官、ずっとドイツにいてくれませんか？」

「それは出来ないな。日本には弟がいる。流石にこれ以上心配はかけられん。それに、あいつもいるしな」

「あいつとは？」

「ああ、弟の幼馴染でもう家族の一員みたいな奴だ。だが、去年にあいつは壊れた」

「一体何が？」

「それについては言えない。だが、これだけは言える。私は逃げてきたんだ」

「・・・・・」

「あいつを見ていられなくて、逃げてきたんだ」

「それは違うのでは」

「いいや、違わないさ。あいつの顔を見ていられなかった・・・」

私はそいつがどのようなやつか気になった。教官の力を持っても助けられなかった奴が。だが、反面苛立っていた。教官は強い。なのにこのような弱い顔をさせるやつが気に入らなかった。その、弟もだ。力が欲しい・・・・・・すべてを変えられるほどの・・・・・

『――――願うか・・・・？汝自らの変革を求めるか・・・・・？より強い力を欲するか・・・？』

力を・・・・全てを変革できる力を・・・・私によこせ！！！

Ｄａｍａｇｅ　Ｌｅｖｅｌ　・・・・・Ｄ．
Ｍｉｎｄ　Ｃｏｎｄｉｔｉｏｎ　・・・・・・Ｕｐｌｉｆｔ．
Ｃｅｒｔｉｆｉｃａｔｉｏｎ　・・・・・・Ｃｌｅａｒ．

《Ｖａｌｋｙｒｉｅ　Ｔｒａｃｅ　Ｓｙｓｔｅｍ》・・・・・・・・ｂｏｏｔ．

～・～・～・～・～

「あああああああああああ！！！！！！！！！！！」

突如、ラウラが悲鳴をあげた。そして、ラウラのＩＳの形状が変わっていく。

「なんだぁ？」

ＩＳは粘土のように動き、ラウラを包んでいく。そして、完全に形状が変わった・・・・・・あの、姿は・・・・・・・千冬さんか？

周りのシールドのシャッターが降りていく。教師陣が動いたのだろう。もうすぐ、教師がきてこの場を収めてくれる。だが、そんなことはどうでもいいのに、あいつを助けたい俺がいる。何が何だか自分でも分からない。俺はラウラに歩き出す。

「し、慎二！！！どこ行くの！？」

「どこって・・・・ラウラのところだよ」

「危ないよ！そんなことしなくても先生達が・・・・」

「そんなことは分かってるよ」

「じゃあ何で」

「俺にもよくわからない。でも、あいつは助けを求めてる。それだけは確かだ。それを助けるのに理由がいるか？」

「・・・もう、慎二は真っ直ぐだなぁ」

「真っ直ぐが一番だろ？」

「そうだね・・・・分かったよ、慎二。行ってらっしゃい」

「おう、行ってくる」

「でも、危なくなったら助けるからね？」

「分かった」

俺はラウラに歩き出す。そして、前に立ち話しかける。

「なぁ、ラウラ。そんなことをして千冬さんが喜ぶと思うか？」

「・・・・・・・」

「俺はな、千冬さんがそんなことに力を使うために教えたんじゃないと思うんだ」

「・・・・・・・」

「だからさ、そんなことやめて終わろうぜ？」

「・・・・・・・ケテ」

「ん？」

「・・・・・・タスケテ」

「・・・・・・」

「クルシイ・・・・・・タスケテ・・・・・」

「・・・・・分かったよ、今助ける」

俺は更にラウラに近づく。ラウラを包んでいる黒いゲルみたいなやつからラウラを切り離せばなんとかなるはず。だけどなぁ、厄介なのがこいつが千冬さんと同じ動きをすることなんだよな。まぁ、だったら癖とかも同じだからよけやすいか・・・

さらに歩を進めると、射程圏内に入ったのか、黒いＩＳは袈裟斬りをした。それも、千冬さんと同じ袈裟斬りを。速さ、鋭さ、太刀筋全てが千冬さんと同じ。だが、それだったら簡単によけられる。俺は右に体を捻り、最小限の動きで回避する。そして、菊一文字を下から振り上げる。切ったのは黒いＩＳの表面。ゲルのような物が割れて中からラウラが出てくる。酷く安堵したような顔は、ひ弱な子犬を連想させた。俺はＩＳを解除して、ラウラを受け止めた。酷く小さく、とても細かった。こんな体でよくも頑張ってこれたな。

～・～・～・～・～

『なぁ、ラウラ。俺はな、お前が強いと思う』

それはどういう意味だ？

『う～ん、うまく言葉にできないけどやっぱり、信念を持っていることかな』

信念・・・・・・

『俺は、結局のところ信念を持っている奴が一番強いと思う』

何故、そこまでお前は強い？

『俺は強くないよ。大切な人を守れなかった。弱い人間だよ』

大切な・・・・人・・・・・・・・

『そう、守れなくて一心不乱に修行して二度と同じことを起こさないようにした』

今は守れているのか・・・・・？

『ああ、今まで守れてきた。だけど、守れているうちにな、なんであの時は・・・・って思うんだよ』

お前は一体どれほど・・・・・・・

『っと、お前にこんなことを話しても意味ないか』

・・・・もうひとつ、聞いていいか？

『何だ？』

どうやって今まで生きてきた？辛いことがあって、心が壊れたのだろう？

『ああ、それも知ってるのか。そうだな・・・・・・やっぱりみんなの力が大きいかな』

みんな？

『ああ、一夏、鈴、千冬さん・・・・他にも色んな人たちのおかげでここまでこれた』

教官も？

『ああ、あの人には助けてもらってばっかりでな。最近もお世話になりっぱなしだ』

他人というのはそんなに大切か？

『大切だよ。人間は一人では生きていけない。そのためには他人の助けが必要なんだ。だから、ラウラ。お前も誰かを頼れ。いきなり出来るかは分からないけど、その時は俺を頼れ。そうすれば助けてやるよ』

ああ、そうか。これが鷹野慎二か。とても強いのに、酷く弱い。そんな彼を私は知りたい。そばにいて確かめたい・・・・

～・～・～・～・～

「・・・・・ここは？」

目が覚めると白い天井が見えた。

「ここは保健室だ」

「・・・教官」

「織斑先生だ。どうだ、体の調子は？」

ラウラは体を起こす。

「・・・・・少し重いです」

「まぁ、そうだろうな。この話は体の調子が戻ってからにしよう」

「・・・・教官、鷹野慎二という男は強いですね」

「ああ、あいつはとても強い。だが、反面とても弱い」

「・・・・・はい」

「それよりも、お前が他人に興味を持つなんてな・・・・・もしかして、惚れたか？」

「な・・・・・・そんなわけ・・・・・・・・」

「ははは、そうかそうか。お前も慎二に」

「お前もと言うことは・・・」

「ああ、私もだ」

「何故彼を？」

「・・・・そうだな、それは私も分からない。ただ、あいつに惹かれてた。それだけだ」

「そういうものでしょうか？」

「恋とはそんなものだ。お前だってそうだろ？」

「・・・・・・・はい」

「今日はゆっくり休めよ、ラウラ」

「分かりました」

そう言って、千冬さんは保健室を後にした。一人になり、ラウラは横になった。

「・・・・鷹野・・・・・・慎二・・・・」

名前を呼ぶだけでも体中が何かに満たされる。ああ、そうか・・・・・・これが恋か・・・・・・・・・・

～・・～・・～・・～

俺とシャルル、一夏は食堂に来ていた。学年別トーナメント騒動の事情聴取が終わり、夕飯を食べていた。俺は、仙台味噌ラーメン、シャルルは明太子の醤油ベースパスタ、一夏は焼き魚定食を食べていた。う～ん、仙台味噌はすこし辛めだが、またその辛さがいい味を出している。辛さがでないと味噌の良いところを引き出せないってのが面白いな。半分を食べ終えたところで休憩すると、周りから視線を感じる。三人組みの女子がいるな。どうしたんだ？

「優勝がなくなったってことは・・・」
「交際が・・・なくなった・・・・・・」
「せっかくのチャンスが・・・・・・」

「「「うわあああああああん！！！！」」」

そう言い、走り出した。ああ、そうか。学年別トーナメントで優勝すれば俺と付き合えるって噂が流れてたな、そういえば。確か、箒にも言われたな・・・・・・食堂に箒がいないかと探したら簡単に見つかった。何だか、戸惑いの目だな。まぁ、勇気出していったんだから、当たり前か・・・・・・・・でも、その思いには答えられないしな・・・・・・・はぁ、どうしたもんか。俺は箒に向かって歩

きだした。

「慎二・・・・・・」

「箒、あの話だが・・・・・」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・明日の放課後、返事をする」

「そ、そうか・・・・・・」

箒も俺の声のトーンから何かを感じ取ってくれたみたいだ。嬉しい顔をしていないことを見ると浮かれていないらしい。それでいい。結局、いい返事はできないのだから。

「で、ではな」

「ああ、おやすみ」

箒は部屋に戻っていった。すると、シャルルが近寄ってきた。

「ねぇ、何の話してたの？」

「いや、何でもないよ」

「でも、箒の様子じゃ・・・・」

「あ、やっと見つけました」

話の途中で割って入ってきたのは、山田先生だった。

「どうしたんですか？」

「朗報ですよ～。なんと！今日から男子の大浴場開放です！」

「お、本当ですか？」

「はい、今日の事件を頑張ってくれたのでゆっくり疲れをとってくださいね」

「ありがとうございます」

山田先生は食堂から出ていった。あ、そういえばまだご飯が途中だった。早く食べないと。そう思い、俺は席に戻り残りのご飯を食べた。

「なぁ、さっき山田先生なんて言ってたんだ？」

「そふぇわな、だいよくひょうがつはえるんでゃって」

「いや、何言ってるのか全くわからないんだが・・・・・」

「慎二の代わりに僕が説明するね。今日から男子の大浴場が開放されるんだって」

「お、ホントか！よし、今から行こう。慎二たちはどうする？」

ごっくん

「ふぅ、俺はお腹が落ち着いたら行くわ」
「僕も、もう少し休憩してからいくよ」
「そうか。じゃ、行ってくるな」
一夏は凄い勢いで食堂を出ていった。ふむ、難なく問題クリアか。楽勝だったな。
「シャルル、うまく隠せたな」
「え？何の事？」
「何のことって・・・・・お前、女だろ」
「あ！そうだったね、一夏と入れないか。ははは」
「お前忘れてたのかよ。忘れちゃダメだろ」
「慎二が忘れないから問題ないでしょ？」
「まぁ、そうなんだが・・・・・そいや、シャルルは風呂入るか？」
「そうだね、お風呂には興味あるしなぁ」
「だったら、しばらくしたら行けよ」
「慎二はどうするの？」
「俺はいいよ。シャルルがゆっくり入れ。外で待ってるから」

「そんな、悪いよ」

「気にすんなって。ほら、部屋戻ろうぜ」

「う、うん」

俺達は食器を片付けて部屋に戻った。

今は、大浴場のドアの前。一夏が風呂に行ってから、４０分が経った。あいつは長風呂だけど、４０分経てば上がる。まずは、俺が入って中の状況を確認する。よし、誰もいない。

「シャルル、入ってもいいぞ～」

「分かった」

シャルルが中に入ってきた。さてと・・・・・外に出ますか。

「慎二はやっぱり入らないの？」

「シャルルが入りたいなら俺はいいよ」

「でも、今日は慎二が頑張ったんだから慎二が入ってよ。僕はいいから」

「そうか？だったらお言葉に甘えようかな」

俺はさっさと服を脱いでタオルを持ち、大浴場に向かった。扉を開けると・・・・・・広い空間が。うん、ほんとにでかい。これ、俺一人が使っていいのか？ま、いいか。俺はお湯を体にかけて、湯船に浸かった。

「ふぅ～、気持ちいい～～～～～」

さすが、久しぶりの風呂は気持ちいい。だんだん、眠くなってきた。

「お、おじゃまし ま～す」

うん？何故かシャルルの声が聞こえた気が・・・・・・寝ぼけてるんだな、俺。

「慎二、湯加減はどう？」

「お～、ちょうどいいぜ～」

ん？会話が成り立ってないか。俺は振り返ると、シャルルの姿を見つけた。

「ちょ！シャルル、何やってんの！！！」

「だって、慎二が入りたいなら入れっていったでしょ？」

「それは意味が違う！！！」

俺はとっさに後ろを向き、真ん中の方に移動した。

「よいしょ、と」

シャルルが湯船に入る音が聞こえた。あいつ、本当に入ってきやがった・・・・・・でも、後ろ向かなければ問題ないか。うん、そうだな。

「ねぇ、慎二」

「ん？何だ？」

「ありがとね」

「いや、何に対してのお礼なんだかわからないんだが・・・・・・」

「今までやってくれたこと全部だよ」

「気にすんなって。どうせただのお節介だよ」

「それでもだよ。そのお節介のおかげで僕は救われたんだよ」

「そうか、だったら良かった」

しばらく沈黙が続く。だが、前みたいな気まずさはない。どちらかと言えば心地いいくらいだ。

「ねぇ、慎二」

「何だ、シャルル」

「僕のことシャルロットって呼んでくれる？」

「いいけど、その名前は？」
「僕の本当の名前。お母さんが付けてくれた本当の名前」
「分かったよ」
「・・・・・・ねぇ、今呼んでくれない？」
「どうした、シャルロット？」
「・・・・／／／／／・・ぼ、僕先に上がるね！」
そう言ってシャルロットは大浴場を出ていった。俺も、しばらくしたら出よう。流石にのぼせそうだ・・・・・・・・気のせいだと思いたかったけど、シャルロットも好意を寄せてくれているよな・・・・・・・・・・・はぁ、何でこうなるんだか・・・・・・
しばらくして俺は、大浴場を後にした。
～・～・～・～・～
次の日の朝、教室に衝撃が走った。またかと思うけど、衝撃が走ったんだから仕方ない。まぁ、結果を言ってしまうとシャルルが女の格好でＳＨＲで呼ばれたからだ。
「シャルロット・デュノアです。みなさん、よろしくお願いします」
「え？デュアノア君はデュノアさんだったってこと？」
「同室の鷹野君は知ってたの？」
「そういえば、昨日男子の大浴場開放日だよ」

「え？ってことは鷹野君は一緒に・・・・・」

「慎二――――――――――――――！！！！！！！」

そう言いながら、教室の壁を壊しながら入ってきたのは鈴だ。しかもＩＳ装着済み。わ～、すごいな～。ドアってあんな簡単に壊れるのか～。

「死ねーーーーーーーーーーーーーーーー！！！！！！」

鈴は龍砲を放ってきた。ん～、よけられないこともないけど、よけると教室壊れるしなぁ。そう思い、殴ろうかとでも思ったところに黒が割って入ってきた。ラウラだ。こっちもＩＳ装着済み。

「あれ、ラウラ。もう動いても問題ないのか」

「ああ、問題ない。それよりも鷹野慎二」

「いや、慎二でいいよ。俺もラウラって呼んでるし」

「そうか、では慎二」

そう言うと、ラウラは胸ぐらを掴んで顔を近づけてきた。そして、キスをした。え？何で？

「お、お前を嫁にする！これは決定事項だ！！！」

「・・・・・・は？」

状況が掴めない。というか、鈴が震えている。あれは怒ってるんだ

よな・・・・・・・・・

「あ、あああああ、あんたいきなり何してんのよ！！！！」

そう言って、俺に突っ込んできた。あれ？俺なの？俺って被害者じゃね？そんなことよりも、ここは逃げないと・・・・・・・俺は、教室の後ろのドアから逃げようと思ったらレーザーが前をかすった。

「し、ししししし、慎二さんどちらへ？お話があるんですけど」

ああ、笑顔が引きつっている。これはオワタ。しかも、箒も日本刀持ってるし・・・・・・って、教室に持って来てるの？あれ・・・・・・・シャルルの笑顔も怖いし・・・・・・・・・・さて、どうしましょうか・・・・・・・仕方ない、もうちょっとちゃんとした時に言いたかったけど今言わないと死にそうだし言っとくか。

「箒、セシリア、鈴、シャルル、ラウラ。放課後、話がある。俺の部屋に来てくれ」

俺の真剣な表情を感じ取ってくれたのだろう。みんな静まってくれた。・・・・・簪にも言わないとな・・・・・

「なぁ、鈴。放課後来るとき、４組の更識簪を連れてきてくれないか？」

「え？ええ、いいわよ」

これで、良いか・・・・・・・・・・はぁ、やっぱり言うのは心苦しい。でも、いつかは言わないといけないんだ。それが今だ。俺達は席に着き、一日が始まった。

～・～・～・～・～

今は放課後、箒たちを連れて俺の部屋に来た。ちなみに、昨日の夜シャルルは荷物をまとめていたから部屋を移った。部屋の前に来たから、ドアを開けて入った。

「とりあえず、適当なところに座ってくれ」

箒、シャルル、鈴、簪はベットに、セシリア、ラウラは椅子に座った。さて、落ち着いたことだし話を始めるか。

「最初に聞いておきたい。俺の勘違いならいいんだが・・・・・・・・・みんなは俺に好意を寄せてくれてるよな？」

みんなが息を飲んだのが分かった。勘違いじゃないか・・・・・・・・・勘違いであって欲しかった・・・・・・・でも、それじゃダメだ。

「好意を寄せてくれてるのは凄く嬉しい。みんな、優しいし良い娘ばっかりだ」

みんなの表情が和らぐ。それはそうだろう、好きな異性に嬉しいと言われたのだから。

「でも、俺はみんなの思いには答えられない」

「ど、どうして？」

シャルロットが不安な声で聞いてくる。

「それは・・・・・・・・・俺には人を愛する資格が無いからだ」

「それって、あの時と関係あるの？」

鈴も不安な声で聞いてきた。

「関係ある・・・・・・・あの時、俺は・・・・・・・生きている資格がなくなったんだ」

「・・・・・・・・・・」

「でも、みんなおかげで生きてこれた。だけど、人を愛する資格なんて俺にはない。だから、諦めてくれ」

俺は返事を待たず、部屋を飛び出した。途中、俺を呼ぶ声が聞こえたが気にしない。気にしたらいけない。俺は廊下に出て外に向かった。

外の風が気持ちいい。近くにあったベンチに座った。

「これで・・・・・・よかったんだ・・・・・・・・・・あんな良い娘達には俺なんかより相応しい男がいるはずだ。だから・・・・・・・これでよかったんだ」

でも、心に傷を負わせてしまったことには変わりない。でも、俺のことを忘れてもらうにはこうやって嫌われたほうが早い。・・・・・・・・・・・・・・・俺みたいな

犯罪者は嫌われて当然だ

俺は最低な男だ・・・・・・・（後書き）

今回のお話、いかがでしたか？

俺は酷いと思っています

なので苦情などありましたら感想にてお願いします

久しぶりの休日がこれか・・・・・・・・（前書き）

またもや、話を繋げるのに手こずりました。

こんなんでやってけるのかなぁ・・・・・

久しぶりの休日がこれか・・・・・・・・・

俺が彼女達に思いを伝えてから2週間が経った。その間、俺は彼女たちと話をしていない。時々話しかけようとしてくるが、俺が逃げている。同じクラスにいるから忘れることなんてできないだろうが、できる限り俺は彼女たちの心を支配しないようにしてきた。今は放課後、一人になった寮の自室で横になっていた。最近、訓練もしていない。彼女たちと会うからだ。

「そういえば来週、臨海学校か・・・・・・・と、言っても俺は海で泳がないか」

海でなんかで泳いだ日にはみんなと鉢合わせになってしまう。それだけは避けたい。今日は金曜日、明日と明後日は臨海学校前の最後の休日か・・・・・・・・みんな、水着買いに行くんだろうな・・・・・・・って、俺があいつらに心配してたら振った意味ないか・・・なんだかんだで俺は彼女達に惹かれているのかもしれない。あんな良い娘達に好かれればそうなるのも当然だと思う。

「はぁ・・・・・・・・・・寝るか」

俺はベットに横になり目を閉じた。しばらく寝付けないだろうが問題ないだろう。

～・・～・・～・・～

日曜日、俺は朝ごはんを適当に済まし部屋でゴロゴロしていた。

コンコン

「慎二くんいる？いるわよね、入るわよ」

「それってノックとか声かける意味あるんですか？楯無さん」

「最低限のマナーでしょ？やらないとダメよ」

「だからそれじゃ意味がないんですよ」

「そういえば慎二君、水着買ったの？」

「話いきなり変わりましたね・・・・・・買ってませんよ、どうせ泳ぎませんし」

「え～、何それつまんな～い」

「楯無さんには関係ないじゃないですか」

「え？私も行くわよ、臨海学校」

「臨海学校は一年の行事でしょう」

「生徒会長権限」

「・・・・・・いいんですか？そんなのに使って」

「いいのよ、どうせ使いどころ少ないし」

「・・・・そうですか」

何してんだよ、この人は。生徒会長でいいのか？って、そいやこの学校の生徒会長は『最強』だったら誰でもいいのか。

「さてと、買い物に行くわよ。慎二君」

「何でですか？」

「もちろん、私の水着買いに。ついでに慎二君のもね」

「俺はついでですか・・・・・・・・分かりましたよ、どうせ暇ですし」

「じゃ、行くわよ～」

俺は楯無さんに手を引かれながら部屋を後にした。

～・～・～・～・～

現在駅ビルのレゾナンスに来ている。まぁ、当たり前って言ったらそうなんだけどね。とりあえず、まずいことは、今日はＩＳ学園の生徒が多いことだ。これも当たり前なんだけどね。みんなと会わなければいいけど。

「・・・・・はぁ～」

「お姉さんと一緒にいるのにため息なんてどうゆうこと～？」

「それは、楯無さんが勝手に連れてきたんでしょうが」

「でも、最後は慎二君だって同意したでしょ？」

「・・・・・・そうですね」

この人と話すと調子が狂う。でも、何故かそれが悪い気がしないんだよなぁ。不思議だ。

「さ～てと、慎二君ちょっと付いてきて頂戴」

「はいはい」

ただいま、レゾナンス3階の季節物のフロアに来た。今の季節は水着がメインだな。でも、一つおかしい。8：2くらいで女子の方が多い。いくら女性優遇社会だからと言ってもこれはどうかと思う。

「ねぇ、慎二君。こっちとこれどっちがいいと思う？」

楯無さんが右手に持っているのが、青をメインとしたビキニタイプの水着だ。左手に持っているのが何故かスクール水着・・・・・・・・・しかも、楯無って名前まで書いてある・・・・・・・・

「楯無さん、左手に持っているのは・・・？」

「これは私の水着」

「何でそんなの持ってるんですか！」

「ただ持ってきたんだけど」

「持ってくる必要が無いでしょうが！ってか、一体今までどこに持ってたんですか！！そもそも、何故にスクール水着をチョイスした

！！！」

「慎二君が喜ぶと思って」

「いや、確かにスクール水着はいいけど・・・・・・って、違う！！！俺は変態ではないですからね！！！！」

「ふふ、慎二君はこうでなくちゃね」

「何がですか・・・・ってか、疲れた」

「だって、元気なかったじゃない？私が何言っても突っ込んでくれないし」

「楯無さん・・・・・・・って、俺の元気の判断ってツッコミですか！？」

「え？違うの？」

「そんなの理不尽だーーー！！！」

っは。周りの視線が！！！やばい、何俺は女性用水着売り場で叫んでんだ。こりゃ不審者として通報されてもおかしくないな。楯無さんは何故か微笑んでこっち見てるし・・・・・・はぁ、変な気使わせちゃったかな。確かにあれからはあんまり元気なかった。これじゃダメだって思っても気持ちは沈むし・・・・・・でも、もう心配はさせられないな。

「心配させてすいませんでした、楯無さん」

「何のこと言ってるのかな、慎二君？」

はぁ、全くこの人には頭が上がらない。心配かけてばっかりだ。これからは俺が頑張らないと。

「で、慎二君どっちの水着が良い？」

「せめてスクール水着は候補から外して！！！」

久しぶりに元気が出た日曜の昼だった。

～・～・～・～・～・～

「ふ～、いい買い物した～」

「そうですねー」

「なんでそんな返事なのかな～？」

「いや、だって・・・・・・」

あのあとだって、結局同じようなことを何回もやって、正直疲れた。結局、俺も水着も買ったんだけどな。って、もうお昼か。出てきた時間も微妙だったし仕方ないか。

「楯無さん、お昼どうします？俺が奢りますけど」

「あら、どうして？」

「こうやって、久しぶりに出かけられましたし。何より、元気が出

ました。なので、お礼もかねて奢らせてください」

「だったらお言葉に甘えちゃうわよ？」

「ええ、いいですよ」

「じゃ、行ってみたいところあったからそこに行きましょ」

「分かりました」

俺達は６階に向かった。

レゾナンスの５階は食事処になっているが、実は６階もそうなっている。まぁ、案内を見れば分かるんだけどな。で、６階は少しお値段高めのレストランとなっている。正直、学生のお財布にはやさしくない。鬼畜と言ってもいいんじゃないかな。なんたってここのフロアは、最低１８００円だからな。その分、味と質は上がる。上がらないと困るけどな。俺達はそこの『マルシェ』と言うイタリアンレストランに入った。雰囲気が落ち着いていて、客層も年配の方が多い。景色も良く、夜なんかにくれば絶景だろう。

「いいところですね」

「でしょう？私も来たかったんだけどねお金が無くて」

「いや、仮にもあなた国家代表じゃないですか」

「あら？ばれてた？」

「そりゃあ分かりますよ」
そこまで話していると、ウェイターの人が来た。
「ご注文はお決まりでしょうか？」
「ランチコースを２つください」
「お飲み物はいかがにしますか？」
「私はアイスティーを、彼にアイスコーヒーを」
「いつお持ちいたしましょうか？」
「食事と一緒で」
「かしこまりました」
ウェイターの人は去っていった。
「さっきの話の続きだけど・・・・ホントはね、初めて来るときは好きな人と来たかったの」
「それはロマンチックですね」
・・・・・・・・・・・・・ん？初めては好きな人とって、もしかして・・・・・
「楯無さん、ここに来るのは初めてですよね？」

「ええ、そうよ」

「まさかとは思いますけど、もしかして俺のこと・・・・・・・」

「ええ、大好きよ。前にも言ったと思うけど？」

「・・・・・そういえばそうですね。でも、その思いには・・・」

「分かってるわよ、そんなこと。最近元気がなかったのだって、あの子達にそう言ったからでしょう？」

「・・・・・・・・・全部お見通しですか」

「それは、好きな人だからじゃないの？」

楯無さんは頬を赤らめながら微笑んでそう言った。この人は本当に俺のことを・・・・

「私は慎二君の事情を知ってるし、何で思いに応えないのも分かってる」

「じゃあなんで・・・・」

「それは、そんなの関係無しに慎二君の事が好きなのよ。あなたが過去に何をしたって関係ない。今のあなたが好きなのよ」

「楯無さん・・・・・・・」

正直、ここまで思ってくれるなんて凄く嬉しい。俺の過去を知って

もなお、好きでいてくれることに。涙がこぼれそうだ。

「絶対に慎二君を振り向かせて見せるわよ」

「・・・・・・・」

本当に何でこんなにいい人が俺の事を好きになったんでろう。絶対にもっと相応しい人が居るはずなのに。もっと優しくて、かっこよくて、何でも出来る人が。

「楯無さん、俺は・・・・・・・・」

「お待たせいたしました。ランチコースのサラダとスープです」

・・・・・・・・・空気読めよウェイター。いや、ある意味空気読んだのか？・・・・・・・・もうどっちでもいいか。

「さて、食べましょう」

そう言って、楯無さんは幸せそうに食べる。こんな状況では言い出せないな。今は幸せな時間を満喫しよう。

～・～・～・～・～・～

「ふ～、今日は楽しかったわね～」

ただ今、学園島に行くモノレールの中だ。さすがにもう夕日が差し込んできている。お昼を食べてからもゲーセンとか色々行ったからなぁ。今日は疲れた。・・・・・でも、ある意味気分転換が出来たしなぁ。楯無さんには感謝しないと。

「楯無さん、今日はありがとうございました」

「いきなりどうしたの？」

「いえ、今日のおかげで吹っ切れました」

「そう、なら良かった」

「それで、お昼の時の返事は・・・・・・」

「言わなくていいわよ」

「・・・え？」

「だって、慎二君を振り向かせないと答えは変わらないんでしょ？」

「・・・・・はい」

「だったら、その時まで私は頑張るわ」

「・・・わかりました」

何となくだが、心の重荷が取れた気がする。やっぱり、楯無さんには敵わないな・・・・

～・～・～・～・～

「ふぅ～、今日は疲れたな・・・・・・」

部屋に戻ってきたが、今まで出かけると箒かシャルロットが出迎えてくれたから誰もいないと寂しいな・・・・・

「なんだかんだで、やっぱりみんなに頼ってたんだな・・・・・」

自分から拒絶しておいて、結局俺は頼ってるんだな・・・・・何してんだか。

「あ、そういえば水着買ったんだっけ」

楯無さんが付いてくるといったから無理に買わされたんだった。てか、水着って高くない？数回しか着ない割には二千～三千円するし。高いやつだったらもっとするし。何であんな高いんだろ。おかげで、財布の中が少し寂しくなってきたよ。お昼だって高かったし。あ、ちなみに、一万円したよ、あそこ。

思い返してみると、みんなと話していて俺は瑠美香に重ねていたのかもしれない。寂しい顔を見ると放っておけない、普段から悲しませないように優しくする。それのせいでみんなに好かれたのかもしれない。思いにも答えられないのに。本当に俺は最低だ。瑠美香とみんなは関係ないのに。未だに振り切れないせいでみんなを傷つけてしまった。

はぁ、ホント何やってんだろ・・・・・・・でも、明日からは頑張らないと。みんなに元気の無い姿見せて心配させたら意味がないし。とりあえず、夕飯まで時間あるし少し寝よう・・・・・・・・・少し疲れた・・・・・・

「ん・・・・・?今何時だ・・・・・・・・・・?」

時計に目をやると7時半になっていた。大体6時半に寝たから。1時間寝たのか。夕飯食べに行くか・・・・。体を起こそうとすると、体が重くて動かせない。そんなに疲れてたのか?俺。目を動かして状況を確認すると、髪の毛が見えた。少し青っぽい。・・・・・・まさかとは思うけど・・・・・・・楯無さん?

「ん・・・・・・んぅ・・・あれ?慎二君起きたの」

「何故、ここに」

「慎二君に会いに来たんだけど寝てたから一緒に寝てたの」

「いや、何でそうなるんですか。それと、どいてください。動けませんから」

「あ、それは遠まわしにお姉さんが重いって言いたいのね」

「別にそういう意味ではないんですけど・・・・・お腹減ったんで早くご飯食べたいんですよ」

「そういうことね、分かったわ」

そう言い、楯無さんはどいてくれた。やっと起きられる。そう思い、体を起こしベットから起きようとするが足にうまく力が入らずバランスを崩して壁に寄りかかってしまった。

「あれ？・・・・足がうまく動かない・・・・・・・というか、フラフラする」

「大丈夫！？慎二君！」

「ええ、まぁ、大丈夫ですよ」

「嘘言わないの。ほら、一回ベットに座って」

ベットに座らせられるが、頭がフラフラするせいで落ち着かない。ってか、こりゃ熱だな。楯無さんは額に手を置いた。

「う～ん、熱ね。多分、疲れが出たんじゃないの？」

「多分そうですね」

「ほら、寝なさい。お姉さんがご飯貰ってきてあげるから」

「すいません、迷惑かけて」

「いいのよ。じゃあ、しっかり寝てないさいよ」

楯無さんは部屋を出て行った。今回の熱は気疲れだな。精神的に疲れてたから、それが体に来たんだろう。昼間の買い物で楽にはなったけど、その分疲れが出てきたみたいだ。というか、熱が出るほど疲れたんだな、俺。気付かなかったなぁ。でも、疲れってそんなも

んか。う～ん、頭がうまく回らないから考えがうまくまとまらないや。って、また眠気が・・・・・・・・・楯無さんには悪いけど、少し眠ろう・・・・・・・・・

「・・・・う？」

起きると、周りは暗い照明が点いていた。薄暗く、少し心細い。額には濡れたタオルが置いていった。多分、楯無さんが置いてくれたのだろう。頭の脇のテーブルにはお粥が置いてあった。体を起こすと、机の方に楯無さんが座っていた。パソコンを開いているから仕事をしているんだろう。体はさっきと変わらないがお腹は空いている。お粥を食べよう。お粥に手を伸ばすがうまく取れない。少しお粥と格闘をしていると楯無さんがこっちに気づいた。

「あ、慎二君。起きたのね」

「ええ、まぁ」

あれ、喉も調子悪いな。声を出すのが辛い。

「お粥食べたいの？」

「食べ・・・たいで・・・・す」

「だったら食べさせてあげるわよ」

「いえ、大・・・・・丈夫です。自分で・・・食べ・・・・・られ・・・ます」

「そう言ってるけど、体辛いんでしょ？」

「大丈・・・・夫・・で・・・・・す」

「嘘おっしゃい。話すのだって辛そうじゃない」

あれ、バレてる。って、あんな喋り方だったら当たり前か。

「さっき熱を測ったら３８度８分だったのよ？安静にしないと」

そんな高かったのか。そんな熱高くなったの久しぶりだな。

「さっきから話さなくなったし、私が食べさせてあげるわよ」

そう言って楯無さんは、こっちに移動してきた。ベットの横のあった椅子に座りお粥を取った。お粥を冷ましてからこちらに差し出してきた。

「はい、あ～ん」

「あ～ん」

お粥は卵と塩だけというシンプルな味付けで体に染み渡った。あれ、前にもこんなのなかったっけ？でも、熱は出してないからなぁ。うまく思い出せないや。それよりもお粥優先だ。

「じゃ、次ね。あ～ん」

「あ～ん」

俺にお粥を上げる楯無さんはどことなく幸せそうだった。当たり前って言ったらそれまでだけどな。それにしてもこのお粥、おいしいな。俺の好みど真ん中だ。その調子でお粥を食べた。少ししたらお粥は無くなった。まだお腹は空いてるけど、体が受付ない。仕方ないか。

「じゃあ、風邪薬飲んで寝なさい。あと、水をたくさん飲んでね」

「はい・・・・分かり・・・・まし・・・た」

「そんなわざわざ話さなくてもいいわよ」

「すい・・・・ませ・・ん」

「ほら、さっさと風邪薬飲んでゆっくり休みさない」

言われたように風邪薬を飲んで横になった。お腹が満たされているから直ぐに眠気がやって来た。あ、そういえば前は箒に食べさせてもらったんだった。自室待機の時お粥を作って持ってきてくれたんだった。今日のお粥、あの時と同じ味がしたな・・・・・・・・・

「おやすみ、慎二君」

おやすみなさい・・・・・・・・・・・・・・・・・・

～・～・～・～・～・～

次の日、体の調子は大体戻っていた。ま、今日は学校には行けるな。そう思い、体を起こすと隣のベットに楯無さんの姿があった。あのあとも、看病してくれていたのだろう。

「・・・・・・・・んぅ？・・・・・・あら、慎二君。もう起きて平気なの？」

「はい、楯無さんの看病のおかげで大分楽になりました」

「そう。でも、本調子ではないんでしょ？大事をとって、今日は学校休んだら？」

「いいですよ。みんなには心配かけられませんから」

「そう・・・・でも、無理して風を拗らせないでよ？」

「そこは大丈夫ですよ。それよりも、お腹減ったのでご飯行きませんか？」

「そうね、そうしましょうか」

俺達は、食堂に向かった。今日は清々しい一日になりそうだ。

結局、あの後薬飲んで学校行ったんだけど、授業中に寝ちゃって千冬さんの出席簿アタック喰らったんだよな。で、意識が無くなって保健室に運ばれて休んだよなぁ。千冬さんが謝りに来たんだけど、またシュールだったよ。って、出席簿アタックで気絶って本当に本調子じゃないんだなぁ、あんま実感ないけど。ま、いいか。風は問題なさそうだけど、早めに寝とくか。おやすみ～

久しぶりの休日がこれか・・・・・・・・（後書き）

うん、前回の終わり方が問題だったね。

だって今回、箒たちの出番なしですよ。

かわりに楯無姉さんのターンって・・・・・

それよりも、次回からは臨海学校編です。

俺の過去なんてこんなもんさ・・・・・・・・・・・・・（前書き）

今回もｇｄｇｄです。

後半一応グロ注意です。

俺の過去なんてこんなもんさ・・・・・・・・・・・・・

今日は臨海学校、バスで移動していた。隣には、楯無さん。位置は俺が窓際、通路側が楯無さんだ。千冬さんが何も言わないところを見ると、本当に教師も許可しているらしい。いらん許可しやがって・・・・。しかも何で隣に座ってんだよ、この人。おかげで、４名の機嫌が異様に悪くなっている。まぁ、振られたのに他の女と仲良くしてたら怒るわな。逆にこのままいればみんなに嫌われるか・・・・・それはそれで良いのかな。あと、怒ってる原因は楯無さんの言動にも問題あると思うんだ。だって・・・・・・

「慎二君、あ～ん」

なんて言ってくる。

「いや、お菓子は要りませんから」

「そんなこと言わないで。はい、あ～ん」

「・・・・・・あ～ん」

なんて事をやってみろ。周りからも異様に冷たい視線が来る。いちゃいちゃすんなら他でやれっ、みたいなね。それには俺も同感なんだよ。でも、楯無さんがやってくるから仕方ないんだよ。拒否すればいいんだけど、断れないんだ。問題解決にはあれだな、俺が寝れば良いんだな。

「楯無さん。俺、寝るんで静かにしてください」

「え～、つまんな～い。おしゃべりしようよ～」

「昨日寝不足なんですよ。イヤホンで耳閉じるんで、用があれば肩を叩いてください」

「む～、分かったわよ～」

あれ、なんか可愛い・・・・・・うん、今のは忘れよう。悪い記憶だ。はぁ、それよりもこれでゆっくりできる。実際、昨日は本当に寝不足だしちょうどいいや。イヤホンを出し、音楽を流して目を閉じた。う～ん、やっぱ寝るときはロックが良いな。

ぽふっ

ん？何か肩に違和感が・・・・・・俺は目を開けて状況を確認すると、楯無さんが肩に寄りかかってきていた。俺はイヤホンを取った。

「・・・・・・楯無さん、一体何を」

「ん～？慎二君が寝るなら私も一緒に寝ようかな～って思ったの」

グシャッ！！！！

ん？何か良くない音が・・・・・・・・・・周りを見ると箒たちが何かを握り締めている。あれは・・・・・・・・・アルミ缶？・・・・・原型が分からないほど壊されている。怒り心頭のようです。うん、怖い。箒に至っては背後に般若が見える。あれか、箒はスタンド使いか。あ、ちなみに般若って女の人なんだぜ。みんな知ってると思うけど。

「寝るなら、なんで俺の肩に寄りかかるんですか」

「ん～、慎二君が好きだから？」

ピキピキピキ！！！！

・・・・・・・・・・・更に恐ろしい音が・・・・・・・・・・・・・・・・気にしたら負けだな、うん。というか一体何の音だよ・・・・・・・

「楯無さん、そういうことはこういうところでは言わないでくださ
い」

「じゃあ、別な場所なら言っていいの？」

「え？まぁ、はい」

やばい、墓穴掘った。

メキメキメキメキメキメキメキメキ・・・・

今度は一体何の音だ・・・・・・・・怖くて振り向けん。かろうじて確認できるのは一夏が犠牲になったことだ。さっきから悲鳴が聞こえる。悪い、一夏。お前の犠牲は無駄にはしない・・・・・・・・・

「とりあえず、楯無さん。静かにしていてください。本当に眠いので」

「分かってるわよ。あ・な・た」

「誰があなただ」

「慎二君以外いるわけないじゃない」

「は～、分かりましたから。俺は寝ます。おやすみなさい」

「ふふ、おやすみ」

耳にイヤホンを戻し再び目を閉じた。肩に違和感があるが気にしない。とにかく眠い。

～・～・～・～・～

「慎二君、起きて」

「んぅ・・・・・眠い・・・・・」

「寝言が眠いってどういうことよ・・・・それよりも起きてってば」

「うみゅう・・・・・・ん、たてなしさん？」

「やっと、起きた。着いたわよ」

「ん・・・・・着いたんですか・・・」

「ほら、早く起きなさい。みんなもう降りたわよ」

「は～い、わかりました～」

まだ寝ぼけていてうまく状況が掴めないがとりあえず降りよう・・・・・・

「遅いぞ、鷹野。いつまで寝ている」

「すいません～」

「まだ寝ぼけているのか。まったく寝起きは良くならないものか・・・・・・まぁ、いい。とりあえず早く並べ。挨拶をする」

俺はとりあえず列の最後列に並んだ。必然的に楯無さんも一緒だ。

「それでは、これから三日間お世話になる花月荘だ。全員、従業員に仕事を増やさせないよう注意しろ」

「「「よろしくおねがいしまーす」」」

「はい、こちらこそ。今年の一年生も元気があってよろしいですね」

女将さんが周りをぐるりと見渡し、一夏に目が止まった。

「あら、こちらが噂の・・・・・？」

「ええ、今年は2名ほど男子がいるせいで浴槽分けが難しくなってすいません。ほら、あいさつしろ。それと鷹野。お前も来い」

「は～い」

「あらあら、まだ寝ぼけているの？」

「すいません、こいつは人に起こされると寝起きが悪いもので」

「いえいえ、なんだか可愛いらしいじゃありませんか」

「そう言ってもらえると幸いです。ほら、挨拶しろ」

「織斑一夏です。よろしくお願いします」

「鷹野慎二です～。よろしくお願ねぎゃいします。・・・・舌噛んだ・・・」

「はい、こちらこそお願いしますね」

「鷹野はきちんと起きていればきちんと出来る奴なので迷惑はかけないと思います。弟は不出来ですが」

「あらあら、弟さんには厳しいのですね」

「事実ですから」

う～、眠い。一夏は地味にダメージを受けているみたいだね。眠いからどうでもいいけど。

「それじゃあみなさん、お部屋にどうぞ。海に行かれる方は別館で着替えができるようになっていますのでそちらをお使いください。場所が分からない場合は従業員に気軽に聞いてくださいまし」

みんなは返事をして旅館に向かった。一旦荷物を置いてから海に行くのだろう。俺も部屋に行ってもう一眠りしよう。眠くて泳ぐどころじゃない。てか、泳いだら絶対に溺れる。そういえば、俺の部屋

ってどこなんだろ？気にしてなかったけど。

「ねぇねぇ、一夏君と慎二君の部屋ってどこなの？しおりには書いてなかったけど」

クラスの相川さんが話しかけてきた。ってか、しおりに部屋割り書いてあったのか。

「う～ん、実は俺たちも知らされれないんだよな～。なぁ、慎二何か知ってるか？」

「う～？部屋割りは知ら～ん。ってか、早く寝たい～」

「慎二は未だに人に起こされると寝起き悪いな。一人で起きるときは普通なのに」

「織斑は私と同じ部屋だ。鷹野は楯無と同伴の部屋だ」

みんなで話していると千冬さんが報告するように言ってきた。今のセリフを聞いたみんなはこう思ったろう。『織斑先生と同伴って・・・・・さすがに鬼の巣に飛び込む勇気はないよ・・・・』と。多少は違うだろうが意味は同じだろう。俺の場合は『あのバカップルに参加はなぁ・・・・』だろう。別にカップルでもなんでもないのになぁ。部屋も分かったことだし早く部屋に行って寝よう。

「で、部屋ってどこですかぁ？」

「それは私が案内するわよ」

そう言って、楯無さんは俺の手を取って歩きだした。

旅館の端に近いところが俺たちの部屋らしい。部屋は純和風といった感じで畳の部屋になっている。そして、窓からは海が一望できる。窓は南側に設置されていて、日当たりがいい。でも、あれだな。台風なんて来たら大変だよなぁ、こういう所って。まぁ、いい。とりあえず寝よう。布団だすの面倒だしこのまま寝るか。腹に何か掛けて・・・・・・よし。

「じゃあ、楯無さ～ん。少し寝ます～」

「はいはい、おやすみ」

「おやすみなさ～い」

俺は目を閉じた。泳ぐのはお昼食べてからにしよう・・・・・・・・・

「ん・・・・・・・何か暑いな・・・・・・・・・・」

目を開けると窓からの日が直接俺に当たっている。こりゃあ、暑くて当たり前か。というか、楯無さんは・・・・・・・あ～、本読んでんのか。別に遊びに行けばいいのに。

「おそよ～ございます。楯無さん」

「あら、慎二君。起きたの？」

「ええ。って、起きないと話さないでしょう」

「それもそうね。ふふ」

「それよりも、楯無さん。何で泳ぎ行かなかったんですか？」

「だって、慎二君いないとつまらないじゃない？」

「さいですか・・・・・・じゃあ、お昼食べて泳ぎましょうか」

「そうね。そうしましょ」

俺達は食堂に向かった。眠くて気付かなかったが、廊下もいい雰囲気だな。まさに旅館！って感じがする。少し歩いて食堂に着いた。中も宴会ができるくらい広い。欧米の人のためにもテーブルまで用意されている。まぁ、ＩＳ学園はいろんな国の人が集まるからなぁ。さすが対応がいいな。ちなみに、座敷はみんな正座らしい。外国の人には合わないからな、正座。それもテーブルが用意されている理由のひとつかもしれない。あ、あと宗教もあったな。

俺達は適当なところに座敷に座った。時間が少し早いせいか人が少ないから好きなところに座れた。楯無さんはロシアの国家代表だが、日本でも暮らしていたから正座は大丈夫らしい。でも、俺があんまり正座って慣れないんだよなぁ。せいぜい２０分が限界だ。って、食事にそんな時間も取らないか。て、そういえば何で楯無さんはロシアの国家代表なんだろ？日本の国籍もあるのに。・・・分からんことを考えても仕方ないか。それよりも飯だ。

「さ～て、お昼は何が出てくるんですかね。海が近いからお刺身かな～」

「いいわね～、お刺身。だけど光物はダメなのよねぇ」

「ああ、それ何となくわかります」

そんな会話をしているうちに食事が運ばれてきた。内容は、マグロ、マダイ、スズキ、イカ、タコの刺身。味噌汁は白味噌の魚のあら汁。漬物が備えてある。あとは、ほうれん草のお浸しがあった。ご飯はツヤが出ていて食欲がそそられる。

「うへ～、昼からこんな豪華なのかぁ」

「そうねぇ、去年も同じ感じだったわよ」

「・・・ああ、そっか。楯無さんは去年も来ているのか。まぁ、いいや。さっさと食べよう」

まずはマグロの刺身からだな。少しだけ醤油につけて・・・・・・うん、うまい。赤身だけどほどよく脂がのっていて弾力もいい。新鮮な証拠だ。ご飯が進む進む。ひと切れで茶碗半分くらいのご飯がなくなった。次はあら汁。汁を啜るといろんな魚のだしが出ていてうまい。しかも白味噌だから、魚のだしと味噌の甘味がマッチしていてうまい。

「うん、昼からこんなうまいの食えるなら夜が楽しみだ」

「期待していいと思うわよ～。去年すごかったし」

「うわ～、今から楽しみだなぁ」

そんな調子で昼を食べた。周りにいた少数の生徒には『お前らは新

婚かっ』的な視線で見られた。うん、仕方ないよね。最近、楯無さんしか話してないから感覚がずれているけど、傍から見ればカップルに見えるんだろうな。なんだかんだで楯無さんに頼ってるし。事情を知ってるし優しいからなぁ、楯無さんは。しかも美人だし。ま、今は楯無さんには迷惑をかけないようにしよう。

～・～・～・～・～

今は食事が終わり、更衣室で水着で着替えたところだ。体には問題はないだろうけど、背中がなぁ。少し怪我が目立つんだよなぁ、仕方ないけど。そういえば、一夏は泳いでいるらしい。ここに制服を脱いだのが置いてある。そういえば、みんなも泳いでるんだろうなぁ。できれば会いたくないな。腹くくるか。会ったらその時は頑張ろう。いい加減、後ろ向きな考えは止めよう。って、結構時間経ったな。楯無さん待たせてるよな、これ。よし、行こう。俺はドアから海に向かった。

「ん～、眩しい～」

只今、正午を回った時間だ。太陽は頂点にあり、日差しが強い。その光が海で反射し、海も綺麗な青色を映し出していた。ここで豆知識、海の青って空の青色が反射して青なんだぜ？これも知ってると思うけど。砂浜を歩いていると楯無さんを見つけた。すると、楯無さんもこっちに気づいたみたいだ。

「あ、慎二君遅～い」

「すいません」

楯無さんは水色のビキニを着ていた。髪と同じ色なのでいい感じに

調和されていて似合ってた。しかも、この人はスタイルいいから何というか、色々と凄い。まぁ、あえて言わないでおこう。言わなくてもわかるだろうし。

「さ～て、夕方まで沢山遊ぶわよ～」

「集合時間までには帰りますからね」

「そんなの分かってるわよ。さ、行くわよ」

そういうと楯無さんは俺の手を取り海に向かって走り出した。そういえば、俺って楯無さんに手を引かれるの多いよなぁ。やっぱり、それだけリードされてるってことか。まぁ、今は遊ぼう。

「あ、しんくんだ～」

そう言って近寄ってきたのはのほほんさんだ。異様に遅い動きで俺のところに来た。

「お～、おりむ～よりもたくましい体だね～」

「まぁ、トレーニングはしてるからなぁ」

「あれれ、背中には傷があるね～。どうしたの～？」

「ああ、これ？子供の頃にやんちゃして怪我しちゃったんだよ」

「流石は男の子だね～。あ、後でビーチバレーしよ～」

「いいよ。じゃ、一回海に行ってくるね。ビーチバレーやるなら呼

んでね」

「わかったよ～」

俺はとりあえず海に入った。少し冷たいが、気持ちいいくらいだな。少し沖の方に泳いでぷかぷかと浮かんだ。ふ～、何だか落ち着くなぁ。海は広い。空は快晴。絶好の海水浴日和だな。空を見ていると夏らしい雲があった。季節によって雲の感じって違うよなぁ。それを見るのも落ち着く。何だか全てが許されるみたいな気がするんだよな。そんな訳はないのに。

「ふ～・・・・・・・・・ぶっ」

いきなり水をかけられた。いったい誰だ？人がリラックスタイムに入ってたのに。

「慎二、何してんだよ」

「って、一夏かよ。てめぇ、人がリラックスしてたのに水かけやがって」

「そんなに怒んなって。のほほんさんたちがバレーやるから呼んできてって頼まれたんだよ」

「ああ、なるほどな。じゃ、行くか」

砂浜に戻ると、ネットが貼られていた。なんだか人数が多いな。ギャラリーか？

「よ～し、慎二。勝負だ！」

「あれ、一夏。お前もやるの？」

「ああ、午前中で体をほぐしたからな。いつものように簡単にはやられないぞ」

「お～お～、そんなこと言っていいのか？ボロ負けするぞ？」

「やれるもんならやってみろ」

「っへ、一夏も言うようになったな。よし、始めるか」

メンバーは俺のところに鷹月さん、相川さん。一夏のところには楯無さん、のほほんさんが入っている。

「楯無さん、なんでいるんですか？」

「慎二君と戦いたくって。負けたら、ペナルティで今夜私にマッサージをしなさい」

「別にいいですよ。どうせ、負けませんから」

「言ったわね～。意地でも勝ってやるんだから」

そうして、ゲームは始まった。

～・～・～・～・～・～

今は夕食の時間。みんなが食堂に集まっている。そういえば、ここの夕食は浴衣着用らしい。浴衣は楽だから俺には丁度いいな。隣に

はいつも通り楯無さん。これは言わなくてもわかるよね、そろそろ。昼のゲームは・・・まぁ、負けたよ。あんだけ大口叩いたのにね。今夜は楯無さんにマッサージをしなくてはならない。まぁ、マッサージは得意なんだからいいけど、な～んか悪い予感しかしない。今から気にしても仕方ないんだけどね。

「慎二君、今夜はマッサージお願いね♪」

「分かりましたよ」

って言ってくる。このセリフにはいい予感がない。そんなことを思っていると食事が運ばれてきた。今回も刺身、鴨鍋、焼き魚、天ぷら、炊き込みご飯が今夜の食事だ。・・・・・・・・楯無さんに言われてある程度予想はしていたけど、ここまでか・・・・・・学生に出す料理ではないだろうに。

「本当に凄いですね」

「だから言ったじゃない。もしかしてお姉さんの言ってたこと信じてなかったの？」

「いや、そんなことはないですけど・・・・ここまでは予想してなかったです」

「まぁ、それもそうねぇ。こんな料理が学生に出されるとは思わないわよね～」

おっと、料理が冷めてしまう。早いとこ食わないと出来立てがもったいない。

「早く食べましょう。せっかくの料理が冷めますよ」

「そうね。いただきましょ」

料理に舌鼓を打つ俺であった。

～・～・～・～・～・～・～

「ふ～、風呂気持ちよかったな～。なぁ、一夏」

「そうだな。あんな風呂を二人だけで使えるんだもんな。びっくりしたぜ」

今は食事が終わり、露天風呂の男子利用時間が来たので一夏と一緒に入ってきたところだ。そういえば、このあと楯無さんにマッサージするんだっけ。待たせると悪いな。

「一夏。俺、先に戻ってるな」

「おお、分かった」

俺は部屋に戻った。部屋に戻ると楯無さんが布団に寝転んでいた。いつのまに布団出したんだか。

「あ、慎二君やっと来た～。早くマッサージして～」

「はいはい、分かりました」

俺は楯無さんの横に移動してマッサージを始めた。まずは足の裏から始めた。

「ん、そこくすぐったい」

「我慢してください」

「んぅ・・・んっ・・・・・・・・はぁあ・・・・・」

・・・・・・・何でまたこの人はこういう声出すんだか。

「はい、じゃあ次はふくらはぎ行きますよ」

声は気にしないでマッサージを続けた。

〜・〜・〜・〜・〜・〜

それと同時刻、一夏と千冬の部屋の前に人が集まっていた。箒、セシリア、鈴、シャルロット、ラウラである。今まで悩んでいたが聞こうと決心したことがある。慎二のことだ。最近はあちらが意図的に無視をしていた。嫌われるように。だが、何か理由があると思っていた。『あの時』と関係があるのではないかとも。だから、千冬に聞こうと決心したのである。

コンコン

「誰だ？」

「篠ノ之箒です」

「篠ノ之か、どうした？部屋に入れ」

そう言われて箒達は部屋に入っていった。

「何だ、お前たちもいたのか。どうした？大人数で押しかけてきて」

そう言う千冬も、５人がただ話を聞きに来たのではないと彼女たちの表情から読み取っていた。彼女たちがそんな顔で聞きに来ることと言ったらあれしかないだろう。

「鷹野の事を聞きたいのか？」

誰も何も答えないが否定しないところを見るとそうなのだろう。

「私は前に言ったな。お前たちには教えても意味がないと」

「それでも、私たちは教えて欲しいんです」

「・・・・・・・・本当にいいのか？後戻りはできないぞ」

「それでも構いません」

彼女たちの表情から中途半端な覚悟でここに来ていることは分かっていた。

「・・・・・・・・・・分かった。あいつの過去について話そう。その前にお前たち、適当なところに座れ」

そうして千冬は話し始めた。

「あれは６年前だな。ちょうど篠ノ之が引っ越したあとの春休みのことだ。あいつは澄野瑠美香と遊んでいた。丁度一夏もいたから私

の家で遊んでいた。それで、あいつと瑠美香はある約束をした。絶対に瑠美香を守ってやる、というな。あれはもうプロポーズに近かったのかもしれないな」

そこで、シャルロットが質問をした。

「じゃあ、慎二はその子のこと好きだったんですか？」

「ああ、そうだろうな。瑠美香もあいつも事を好いていた。そこである事件が起きたんだ。あいつらが外で遊んでいる時に瑠美香が拐われた」

「拐われたって、誰に？」

今度は箒が質問した。

「それはある組織だ。目的としては、私の弱みを作ろうとしたんだろう。第二回モンドグロッソに出場させないためにな。それを一夏が教えてくれて、私は直ぐに追いかけた。だが、慎二の方が先に動いていてもう姿が見えなかった。警察に協力を求めて探したが見つけたときにはもう遅かった」

「・・・・もしかして」

「瑠美香は無残な死体となって発見された。しかも、腹が裂かれていて内臓が無くなっていた。憶測だが、内蔵を売って金にでもしようとしたのだろう」

「・・・・・・・・」

「少し離れたところに慎二はいた。死体の中に立っていた。死体になっていた連中は首の骨を折られたり、腹が裂かれていたりしていた。そんな中にあいつは立っていた。あいつは犯人グループを皆殺しにしていたんだ」

「・・・・・・・」

「あいつがお前らの好意を受け取らないのはそこだろう。あいつのことだ、人殺しの俺なんかよりいい男を見つけろってことなんだろうな」

「そんなのって・・・・・・・」

「だが、それがあいつだ。話はこれで全部だ。あとは、お前たちで考えろ」

みんなは黙っていた。色々な気持ちが頭を駆け巡っているのだろう。皆、困惑している顔だった。軍人のラウラでさえどことなく悲しい顔をしていた。そんな中、箒が口を開いた。

「・・・・・・・・・織斑先生」

「何だ？」

「慎二は・・・・・・もしかして約束の事を引きずっているんでしょうか？」

「多分な。ガキが出来ることなんてたかが知れている。なのに、あいつは何でもできると思っていたんだろう。あいつの身体能力の高さは昔からだ。その時も、その身体能力で出来ると思ったんだろう」

次は鈴が口を開いた。

「もしかして、あいつの背中の傷も？」

「多分、犯人グループにやられたのだろう」

再びの沈黙。千冬はその様子を見て気持ちを整理しているんだろうと思った。そこで、千冬は質問を投げかける。

「なぁ、お前ら。この話を聞いても慎二の事は好きか？」

「「「「「・・・・・・・・・はい」」」」」

「そうか・・・・・・・」

千冬はどことなく満足したような顔をした。

「なら、明日の夜あいつに思いを伝えてこい」

「「「「「え？」」」」」

「8時にあいつを海岸に呼び出しておく。そこでお前たちの気持ちを伝えてこい。なに、夜の外出禁止は目をつぶってやる」

ぽかんとしていた彼女たちだが、意味を理解して頷いた。

「ああ、簪にも言っておけよ」

「え？でも、あの子って知らないんじゃ・・・」

「慎二の過去は知っているぞ、あいつは。楯無に教えてもらったらしい」

「・・・・・分かりました」

「では、部屋に戻れ。もう少しで消灯時間だ」

「では、失礼します」

その様子を千冬は見送った。

～・～・～・～・～・～

六年前の慎二視点

瑠美香が拐われて、車を追って捕まっているところを見つけた。俺は迷わず中に突入した。中には１０数人の男がいた。その中に瑠美香もいた。

「うーーーーー！！！！！」

口を布で覆われていて、声が出ていない。そして、酷く怯えている声だった。

「何だ、最初に来たのはガキかよ・・・・・・」

「これが織斑千冬だったら脅せたのによ・・・・・・」

「なんか、待つのめんどくないか？」

「そうだな、だったらこのガキ解体(バラ)すか？」

「そうだな、少しくらいは金になるだろ」

そう言い、男達はナイフを取り出した。そして、瑠美香に近づいた。おい、一体何をする？待てよ。俺は走り出した。だが、入口近くの男に掴まれて動けなくなった。

「くっそ、放せよ！！！」

「ガキは帰れよ、こっちは忙しいんだ」

次の瞬間、瑠美香に近づいていた男が瑠美香の腹を裂いた。

「うーーーーーーーーーーー！！！！！！！！！！！！！」

瑠美香は苦しみに呻いている。裂いた腹から内蔵を物色しカバンに入れていた。いつしか、瑠美香の悲鳴は聞こえなくなった。そして、自分の中が異様に冷えていった。そして何かが弾けた。

「・・・・・放せ」

「あ？何言ってんだ、ガキ」

俺は腕を掴んでいた男の腕を掴んだ。

「何してんだよお・・・・・」

そして思い切り蹴り上げた。

ボキッ

「ああああああああああああ！！！！！！！！！！！！！」

地面で転げている男の頭を足で踏み潰した。

グシャ

頭が潰れて脳みそが出てきた。そんなことはどうでもいい。今俺の中にある意志は『こいつらを殺す』それだけだった。

「おい、ガキ。何してんだよ」

騒ぎを聞きつけて何人か集まった。一人の男が手を伸ばしてくるがその腕をつかみ、後ろに回り込んだ。そのまま、腕を絞っていく。

「お、おい、ガキ。舐めたまねしてんじゃ・・・・・」

コキュ

肩が外れた音がした。

「おぐぁああああああああああ！！！！！！！！！！！！！！」

痛みで地面でうずくまっているが、俺は首を思い切り蹴ってやった。すると、首から骨が出てきた。まわりにいた男がまた近づいてくる。俺は懐に潜り込み、腹にパンチをかました。頭が下がってくるからその頭を抱え、思い切り膝で鼻を蹴った。グシャ、という鼻が潰れた音がしたが何回も蹴り続けた。途中からその男は動かなくなった。

「おい、やってくれたな。ガキ」

いつのまにか周りには8人の男がいた。俺は落ちていたナイフを取った。すると、何人かの男がバットなどで殴りかかってくる。それをかわし、その男の脇腹をナイフで切った。内臓やら血などが出てくるがもう一回、腹を切った。余っていた男が背中をナイフで切りつけた。だが、その男に近づき鳩尾あたりにナイフを刺し、そのまま下に下ろした。こちらも内臓やら血が出てくるが関係ない。残りは6人。

一人は思い切り頭を地面に叩きつけた。まだ動くから頭を潰した。もう一人は頭にナイフを刺し切り刻んだ。もう一人は何度も腹にナイフを刺してやった。もう一人は、首にナイフを刺してやった。もう一人は、目玉を潰して背骨を折ってやった。最後の一人は瑠美香と同じ殺し方をした。唯一違うのは、自分の腹にナイフが入ってくる感覚を味わわせてやったことだ。

ああ、瑠美香・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・何で、何で・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・お前が死んだんだ・・・・・・・・・・・・・・くそ、何で俺はこんなにも弱いん

だ・・・・・・・・ちくしょう・・・・・・・・・・・・・

これが６年前の事件の現場の様子である。言い表すなら地獄絵図。
そして、一人の少年が生きる意味をなくした日でもある。だが、少年は皆に助けられ今日まで生きてきた。生きる意味をくれた皆に恩返しをするため生きている。新たな理由が出来るのは後の話・・・・・・・・・・・・・

俺の過去なんてこんなもんさ・・・・・・・・・・・・（後書き）

正直言って、自分で何書いてんだか分からなくなりました。

いや～、眠くて何をしたいんだか分からんし・・・・・

瑠美香のくだりも意味わからんし

すいません、表現能力低くて

全く、俺は損な性格してるな・・・・・・（前書き）

今回は微妙です、はい

そして、サブタイ関係ないです

全く、俺は損な性格してるな・・・・・・

「・・・・・・・んぅ・・・・・・・夢、か」

ひどく懐かしい夢を見ていた気がする。それも、瑠美香が生きていた時の。

「・・・・・・・・・・・あれ？」

頬が濡れている。泣いていたみたいだ。夢の内容はいまいち覚えていないが、楽しい夢だった。なのに、何で泣いてるんだろ、俺。やっぱり、生きているのが嬉しくて泣いてたのかな。守れたって。

「すぅ・・・・・・・すぅ」

ん？何か寝息がすぐ近くで聞こえるんだが・・・・・・・俺は寝息が聞こえる方向に目を向けた。

「・・・・・いや、何で同じ布団に楯無さんがいるんだよ」

案の定、楯無さんがいたけど・・・・・布団ちゃんと2つあるやん。どうせ潜り込んできたんだろうけどさ。

「・・・・・・・・・・・・・眠気覚めたし少し歩いてくるかな」

俺は楯無さんにバレないように部屋を出た。

外は薄く陽の光が出ていた。もう日の出はしたみたいだ。風はどことなく涼しく、なんだか気持ちが落ち着いた。

「ふ～、昼間は暑いのに朝はやっぱり涼しいな・・・・・」

俺は陽の光を反射している海を見つめた。色はまだ青くなってはいない。空もまだ明るくはない。素直に綺麗だと思えた。

「・・・・・」

俺はしばらく海を見つめていた。そして、部屋に戻った。

～・～・～・～・～・～

朝食に向かうとき、渡り廊下を通っているとき外側の地面にウサミミが生えていた。しかも、ご丁寧に抜いてくださいと書いてある。こんなことするなんて、あの人以外はいないよなぁ・・・・・・・・・あ、あの後部屋に戻っても楯無さんは寝てたからなんの問題もなくここまで来てるよ。今はね。でもって問題に直面してるっていうね。

「楯無さん、これは抜くべきでしょうか？」

「う～ん、慎二君の好きにすればいいと思うけど」

「そうですよね・・・・・・・よし」

俺は下に降りてウサミミを抜こうと腰を屈めた。そして、思い切り引っこ抜く。が、抜けたのはウサミミだけだった。

「いってぇ・・・・・って、ウサミミしかないし」

キュイイイイイイイイイイン・・・・・・・・・・・・・・・

ん？なんの音だ？

ドカーーーーーーーーン！！！！！！

落下物は俺の５m先に落ちた。その落下物は・・・・・・・・『ニンジン』だった。わ～、空からニンジンが降ってくるなんて御伽の国に来たみたいだな～。・・・・・・・はぁ、何してんだかこの人。すると、ニンジンの一箇所が開き人が出てきた。

「あっはっは、引っかかったね。しー君」

出てきたのは『みんなのアイドル、篠ノ之束』である。このキャッチコピーは束さんが失踪する前に俺に教えてくれたんだ。別に教えてくれなくても良かったのに。

「久しぶりですね、束さん」

「うんうん、ほんとに久しいね。というか、束さん昨日から待ってたのに何で抜いてくれないのさ、しー君！」

「え？昨日からあったんですか？」

「まさかの気づかれてなかった！そのせいで何度偵察機に落とされそうになったことか・・・・」

「いや、普通に登場すればいいんじゃないんですか？」

「それじゃあ、つまらないじゃないか。それよりも箒ちゃん知らな

い？」

「いや、最近話してないし・・・・・でも、今の時間だったら食堂じゃないですか？」

「ふ～ん、何かあったね。しー君。でも今は、箒ちゃんに会ってくる～」

そう言って束さんは走り出した。食堂とは逆方向に。

「あれ、教えるべきでしょうか？」

「無理じゃない？もう見えないし」

マジか・・・・・あの人は変にハイスペックだな。まぁ、いいや。今は腹が減った。飯を食べよう。

「とりあえず食堂に行きましょう。お腹空きましたし」

「早くしないと時間なくなるしね」

俺達は食堂に向かった。

～・～・～・～・～・～

朝食後、俺達はＩＳ試験用ビーチに来ていた。この臨海学校の主な目的は『ＩＳの非限定空間による稼働実験』だ。決して海水浴が目的ではない。なので専用気持ちの代表候補生には新型の武器やパッケージなどが送られてくる。

「全員集まったな。では、これより各班に振り分けられた装備を試すように。専用機持ち専用パーツのテストだ。全員、迅速に行動するように」

はーい、という掛け声と共にみんなは班に分かれた。ちなみに、楯無さんは教師側にいた。楯無さんが来たのは教員が足りないって理由もあったかのかもしれないな。さて、俺の新作の武器ってあるのかなぁ。

「篠ノ之、お前は少しこっちに来い」

「はい」

「お前は今日から専用・・・・」

「ち～～～～～～～～～～～～～～～～ちゃ～～～～～～～～～～～～ん！！！！」

砂浜からすごい勢いで何かが近づいてきている。まぁ、束さんなんだろうけど・・・ここって関係者以外立入禁止だよな？って、あの人ほどＩＳに関わっている人もいないか。束さんは千冬さんに近づこうとしてアイアンクローを喰らった。

「痛い痛い痛い、ちーちゃんの愛が痛い！」

「なにが愛だ、バカ者」

そして、更に力を込める。

「ふふ、甘いね、ちーちゃん。それはもう見切ってるよ！」

そう言い、アイアンクローから抜け出した。一体どうやったんだ？
普通にするりと抜けた気がしたけど・・・・

「ひさしぶり、姉さん」

「ホント久しぶりだね、箒ちゃん。電話でも何回かは話してたけど、こうして会うのは何年ぶりだろうね～」

「何だかんだで４年は会ってないんじゃない？」

「そんなにか～。だったら、その胸の成長ぶりも納得でき・・・」

ドカン

「姉さん、そういうことはここでは言わないでね？」

箒が近くにあった岩を殴っていた。というか、ヒビ入ってる。箒も何だかんだですごいよなぁ。普通の人間なのに。

「分かったから怒らないで、箒ちゃん」

「それで、ちゃんと用意してくれたの？」

「もちのろんだよ！」

束さんが何かのボタンを押すと、上から何か音が聞こえてきた。

ドーーーーーン！

すごい勢いで何かが落ちてきた。今日はいろいろ空から降ってくるなぁ。空気が抜ける音が聞こえて、中が露になった。そこには『赤』がいた。

「これこそ束さんが用意した箒ちゃんの専用機『赤椿』だよ！現代ＩＳのスペックを大きく上回る高スペックの！」

そういえば、箒だけに専用機が渡されるのに誰も何も言わないな。何でだ？少しくらいはブーイング的なのがあってもいいと思うけど・・・・・・あれか、クラスになじめてるからこのこと言ってたのか？いや、でもそれはそれで不味いか・・・・・・う～ん、分からん。

「じゃあ、箒ちゃん。今からフォーマットとフィッティングを始めよう！束さんに任せれば５分で終わるよ！」

マジか・・・・俺なんて戦いながらだったから３０分も掛かったのに。流石は束さんだな。箒は赤椿に乗り込んだ。そして、束さんが赤椿にケーブルを繋ぎ空中ディスプレイを何かの楽器を弾くように打っている。

「ふふふ。箒ちゃん、胸だけじゃなくて体もきちんと鍛えてるんだね」

「それは、剣道やってるし・・・」

「いい感じの筋肉だよ。引き締まってて無駄な筋肉もない。最高の状態じゃないかな？」

「そうかな？」

そう言う箒はどこか恥ずかしそうに言っていた。

「は～い、フォーマットとフィッティング終わり～。さすが私」

え？５分もかかってないんだけど・・・てか、３分位しかたってないか？

「じゃ、少し待っててね。しーく～ん！！！！！！」

「はいはい、何ですか～」

「ちょっと、雪月花見せて欲しいんだけど」

「分かりました。ちょっと待ってください」

俺は雪月花を展開した。それと同時に箒の時のようにコードをぶっ挿した。

「ほ～ほ～、やっぱり少し普通のＩＳと違うね～。これ、しー君が設定したの？」

「いや、元からそうなってました。これでやりやすいからこのままでやってましたけど・・・何かおかしいですか？」

「いや～、別におかしいところはないよ～。ただ、ちょっと気になってね～」

話しながらもディスプレイを操作していた。ほんと規格外だな・・・・・この人・・・・

「よ～し、これで終わり～っと」

ものの2～3分で終わった。箒の時のフォーマットとフィッティングもそうだけど早すぎないか？これ・・・・・

「じゃあ箒ちゃん、ちょっと動かしてみようか」

「何すればいいの？」

「ちょっと上に行ってて」

箒は地上から30メートル辺りのところに到着していた。

「箒ちゃん聞こえる？今から武器の説明するね。右のが『雨月（あまづき）』左のが『空裂（からわれ）』ね。今からデータを贈るよ～」

ディスプレイを操作してデータを送った。

「じゃ、簡単に束さんが武器の説明するね～。まずは雨月は、対単一仕様の武装で打突に合わせてビームが出て相手を蜂の巣のするんだよ～。飛距離はまぁアサルトライフルくらいかな～」

箒は雲に向かって雨月を突き出した。すると、無数にレーザーが雲に穴を開けて文字通り蜂の巣にした。うへ～、あんなの喰らいたくね～。

「じゃ、次は空裂ね～。こっちは対多数用に武器で斬撃に合わせて帯状のエネルギーを展開するんだよ～。とりあえずこれを落としてみてね～。ほいっと」

すると、どこからともなく１６連ミサイルポッドが現れ一斉に放たれた。いや、初めて乗る機体でこれはないだろう、束さん・・・・・・そんな思いとは裏腹に、箒は空裂を振るいミサイルを全部破壊していた。

「やれる、この赤椿なら！」

その様子を満足そうに束さんは眺めていた。と言うか、他のみんなも唖然としていた。まぁ、当たり前だよなぁ。あんなの見ればなぁ・・・・・・対照的に千冬さんは険しい目で見ていた。まるで敵を見るかのように・・・・・・

「お、織村先生！た、大変です！」

山田先生が何か焦った様子で走ってきた。

「山田先生、生徒の前ですよ」

「す、すいません。それよりもこれを見ててください」

そう言って、山田先生は何かボードのようなものを千冬さんに見せていた。途端に千冬さんの顔が歪んだ。

「全員、注目！これより教員は特殊任務に移行する。なので、旅館の部屋で待機。専用機持ちはこっちに来い」

だが、みんなは何が起こったのか分からないのか、のろのろと片づけをしていた。

「さっさとしろ！部屋から出たものや、作業が遅いものは謹慎処分にするぞ！」

そう言うと、せっせと作業を始めた。

～・～・～・～・～・～

今は旅館の一室に教員全員、楯無さん、簪、鈴、セシリア、シャルロット、ラウラ、箒、一夏と俺が集められていた。

「先ほど、ハワイ沖で実験稼働していたアメリカの第三世代型ＩＳ『銀の福音（シルバリ・オ・スペル）』が何者かのハッキングを受け暴走した」

その言葉を聞くと、俺、一夏、箒以外の専用機持ちの表情が変わった。

「これより、専用機持ちによって制圧作業を行う。質問があるものは挙手をするように」

「はい」

セシリアが一番初めに手を挙げた。

「敵ＩＳの詳細情報を求めます」

「それはいいが、口外にはするなよ。した場合、国からの監査委員が２４時間付くだろう」

「わかりました」

すると、目の前にディスプレイが投影された。銀の福音（シルバリオ・スペル）の詳細情報が表示された。

「出力が高いですわね・・・」

「特殊武装ありってのが難点ね」

「流石にこれじゃ敵の戦闘力が未知数だね」

「一度くらい偵察はできないのですか？」

「それは出来ない。今、ＩＳは超音速状態で移動中だ。アタックできるのは一度と考えてくれ」

正直言って俺達は置いてけぼりだな・・・・・・ってか、みんなを見るのは久しぶりな気がするなぁ・・・・・・

「敵が未知数となると短時間勝負だな」

「そうだね。しかも、一撃で敵を沈められるような攻撃」

そう言うと、みんなは一夏を見た。まぁ、零落百夜が一番妥当だよな。

「お、俺！？」

みんなは静かに一夏を見つめている。

「織斑、無理ならやらなくてもいい。これは実戦だ。訓練とは違う。命がかかっている」

千冬さんが静かに聞いてきた。すると、一夏は段々と顔の表情が引き締まってきた。

「やります。俺がやってみせます！」

「よし。あとはどうやって織斑を運ぶかだな・・・・・高速稼働実験をしている奴はいるか？」

「それなら、わたくしならイギリスから強襲用高速パッケージ『ストライク・ガンナー』がきていますし、超高感度センサーも付いています」

「稼働時間は？」

「２０時間です」

セシリアって、最初に言ってたエリートって本当なのかもな。何でも出来るんだな・・・・・でも、これもオルコットの名前を守るために頑張ってきたんだろうな・・・・ホント俺の周りの女子って強いなぁ。

「ふむ、それなら適任・・・」

「ちょっと待つんだよ！ちーちゃん！！！」

「・・・・・山田先生、部外者を外に」

山田先生は束さんを捕まえようとするが、それをうまいこと束さんはよけていく。身軽やなぁ・・・・・・

「ちーちゃんちーちゃん、束さんの頭にいい作戦がナウプリーディング～」

「・・・・・・・・いいだろう、作戦の内容は聞いてやろう」

「こういう時こそ赤椿の出番なんだよ！」

「どういうことだ？」

「ここは第４世代ＩＳの出番の見せ所なんだよ！」

唖然・・・・・これが今の状況にふさわしい言葉だろう。５秒くらい経ったが未だにみんなはポカンした顔をしていた。そりゃそうだ。何で第４世代ＩＳが出てくるんだろう・・・・・・・

「・・・・・・・束、説明しろ」

千冬さんが頭を抱えながら言った。

「あれ？説明してなかったっけ？」

とぼけたように束さんは言った。いや、あれが素なんだろうな。あの人。一夏は何の事だって顔してるなぁ。実際分かってないんだろうけど。

「いっ君の為に説明するね～」

流石、束さんは見抜いてたか。ってか、みんなおんなじふうに思ってるよな。あいつ、顔に出るからな。

「まずは世代から説明しようかぁ。まず、第一世代型ＩＳのコンセプトは『ＩＳの完成』。第二世代型は『後付武装による多様化』。そして、第三世代型は『操縦者のイメージ・インターフェイスを利用した特殊武装の実装』。空間圧作用兵器、ＢＴ兵器とか、ＡＩＣとか色々だね。それで第四世代型は『パッケージ換装を必要としない万用機』。これば理論上の空論なんだけど束さんはこれを作っちゃたよ、ブイブイ」

またもや、唖然としていた。当たり前だ。今、世界中の各国は第三世代ＩＳの開発に取り組んでるのにそれを飛ばして第四世代なんて・・・・一体何考えてんだこの人は・・・・・・・・・

「ちなみに《雪片弐型》にも使われていま～す。私がぶっ込みました」

「「「「え？」」」」

「要は赤椿ってのは、全身が雪片弐片ってわけなんだよ～」

「え？ってことは・・・・・・」

「うん、強いね。というか、最強だね」

みんながし～んとしてしまった。というか、ほんと何してんだこの人・・・・・

「あれ？みんなどうしたの、御通夜みたいに。誰か死んだわけでもないのに。おかしいの」

いや、おかしいのはあんただ。

「言ったはずだぞ、束。やりすぎるなと」

「えへへ～、みんなに会えてちょっと張り切っちゃった。てへ☆」

「それで、束。赤椿の設定にはどのくらい掛かる？」

「お、織斑先生！」

驚いたような声を挙げたのはセシリアだった。それはそうだろう。あまり稼働していない箒が選ばれるとは思っていなかっただろう。現に、俺もそうだし。

「では、聞くが・・・・そのパッケージはもうインストールしているのか？」

「い、いえ。それはまだですが・・・・」

「私にかかれば調整は7分で終わるよ～」

パッケージのインストールには２０分は掛かるだろうから、これは決まったな。セシリアもそれを聞くと引き下がった。

「では、これより篠ノ之、織斑両名による任務を開始する。作戦開始は３０分後。他の物は機材の確認などをしておけ」

「じゃ、箒ちゃんこっち来てね～」

束さんはまた赤椿にコードをぶっ挿してまたディスプレイを操作し

た。あっちは問題なさそうだし、俺は機材でも運んでおこう。重いのは女子には辛いだろう。俺は廊下に出て、重そうな機材を部屋の中に入れた。途中、シャルロットが重そうな機材を運んでいた。声を掛けるか迷うが、重そうな機材を運ばせるわけにもいかないな。

「シャルロット、それ貸せよ。重いだろ？」

「し、慎二・・・・・・うん、じゃあお願い」

ぎこちないが仕方ないだろう。話したのも何だかんだで1ヶ月ぶり近いし。他に話すことも無いし、さっさと仕事を終わらせてしまおう。

～・～・～・～・～・～

30分後、もう少しで作戦が始まるところだ。俺達は砂浜に来ていた。とりあえずは一夏達を見送っておこうと思ったのだ。

「一夏、今回は命が掛かっている。だから、危ないと思ったら逃げろよ」

「ああ、分かってるさ。これは訓練とは違う。作戦なんだ」

よし、一夏はわかってるみたいだな。これなら作戦中も問題なさそうだ。箒は・・・・・・

「箒、大丈夫か？」

「大丈夫だ、問題ないぞ。私と一夏に任せておけ」

と言った感じに浮かれていた。まぁ、気持ちは分からなくはないが・・・・・・・これは浮かれすぎだろう。作戦に支障がでなければいいけど・・・・・

「一夏、箒は浮かれてるみたいだ。何か、危なくなったら助けてやれよ」

「ああ、分かった」

「では、今から作戦を開始する。両名、準備をしろ」

二人はＩＳを展開した。そして、一夏が箒の上に乗るといった感じで飛んでいった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・織斑先生、箒は大丈夫でしょうか？」

「さあな、あの調子じゃ無理だろうな」

「ですね・・・・・」

とりあえず、二人とも死ぬな。

～・～・～・～・～・～・～

一時間後、入ってきた報告は任務失敗とのことだった。しかも、一夏の意識が戻らず昏睡状態だという。箒は、一夏の怪我が自分のせいだと思っているらしくひどく落ち込んでいた。他のみんなも一夏を心配しているみたいだ。予測だが、一夏は箒を庇ったんだと俺は思う。それでケガをした、といった感じだろう。今の一夏はそう簡

単にケガをするようには思えない。・・・・・・・まぁ、どちらにせよ一夏が怪我を負ったんだ。それには変わりない。しっかりこの仕返しはさせてもらうぞ、銀の福音（シルバリ・オ・スペル）

時刻は夜の１２時。日をまたぐかまたがないか位の時間だ。俺は楯無さんと部屋にいた。

「・・・・・・楯無さん、あれは分かりましたか？」

「ええ、分かったわよ・・・・・・・・でも、私も行くわ」

「それはダメです。これは俺だけでいいんです。勝手な行動して罰を受けるのは俺だけで十分です」

「慎二君・・・・・・・・分かったわ」

「ありがとうございます」

俺は他のみんなにバレないよう、部屋を移動し砂浜に向かった。

「慎二君、死なないで・・・・・」

その声はか細く慎二には聞こえなかった。

～・～・～・～・～・～・～

作戦司令室内、銀の福音（シルバリオ・スペル）の監視をしていた山田先生から声が上がった。

「お、織斑先生。大変です！！！」

「一体どうしたんだ、山田君」

「これを見てください！」

空中に倒影された画面を見て千冬の顔が歪んだ。

「・・・・・・・・・・・・・・・あの馬鹿者めが・・・・・・・！」

～・～・～・～・～・～・～

俺は楯無さんの情報を元に太平洋を移動していた。数キロ先に明るい何かが見えた。・・・・・座標も聞いたとおりだし、あれだな・・・・・・・俺は、パイパーセンサーの出力を上げて姿をはっきりと確認した。あちらも、こっちに気づいたようで球状に出していたエネルギーを戻し、戦闘態勢に移行したように見えた。俺も普通のハイパーセンサーで確認できる距離まで移動し、空中に止まった。

「・・・・・・・・・・・さあ、落とし前はきっちり付けさせてもら

うぞ。銀の福音（シルバリオ・スペル）！！！！！！」

全く、俺は損な性格してるな・・・・・・（後書き）

微妙でしたよね～自分でも思います

次回は戦闘回です

やっと、色々と終わったよ・・・・・・・・（前書き）

今回で臨海学校編が終わりました

やっと、色々と終わったよ・・・・・・・・

「織斑先生！どうすればいいんですか！」

「いいから落ち着け、山田君」

と言うものの、千冬自体も正直焦っていた。一夏達との戦闘により銀の福音のシールドエネルギーは減っているとはいえ、訓練用ＩＳ一機で軍用ＩＳと戦うなど危険が多過ぎる。だからとは言え、他の専用機持ちに任せるのも気が引けていた。軍用ＩＳというのは、訓練用ＩＳとのシールドエネルギーの量が桁違いに多い。基本的には数倍と言われている。ましてや、軍が利用するとだけあって武装や特殊武装なども訓練用ＩＳとは桁違いに威力が上だ。

（全く、どうすればいいんだ・・・・・・！）

～・～・～・～・～・～

「・・・・くそ！」

銀の福音との戦闘が始まり３０分が経っていた。正直言うとジリ貧だ。シールドエネルギーは半分を切り、実体ダメージも中になっている。軍用ＩＳのシールドエネルギーがここまで多いとは・・・・・・・・見誤ったな。だが、嘆いているわけにはいかない。これは実戦だ。気を抜けば殺られる。

「っは！」

自然と笑みがこぼれる。自分の選択が命に関わる・・・・・・・・い

いじゃねぇか、ゾクゾクする。一夏と箒の敵討ちもあるが、純粋に戦闘が楽しい。俺ってそんな性格だっけか・・・・・・・・まぁ、いいや。そろそろ勝負を決めないとな・・・・・・

「さぁて、これから第二ラウンドだぜ。覚悟は良いか、銀の福音？」

「・・・・・Ｌａ♪」

機械音が聞こえたかと思うと、福音はくるりとその場で一回転した。すると、福音に付いていた翼から無数のエネルギー弾が放たれる。

「っく！数が多い」

とてもじゃないけどよけきれる量じゃない。とっさに、俺は菊一文字と漆黒ノ太刀を両手にコールした。自分に当たりそうな弾だけを切り落としていく。が、それだけでも手一杯だ。１０・・・２０・・・もう数がわからなくなった辺りでエネルギー弾の雨が止んだ。福音の位置を確認しようと、周りを見渡す。が、姿が確認できない。

「見失ったか・・・・・」

ＩＳのハイパーセンサーのもってしても、姿を確認できない。今は夜。月明かりはあるとはいえ、十分な光ではない。海の中に潜られたら確認しようがない。俺は目を閉じた。気配で敵を見つけようとする。

「・・・・・・・」

しばらく動きは無い。風の音が耳を掠める。

・・・・・・・・・・・・・・・・・ブゥン

「下か！」

声を上げたと同時に真下の海から福音が姿を表す。俺はそれを体を横に捻って躱した。

「おりゃああああ！」

遠心力に任せ刀を思い切りつける。そして、翼を破壊することに成功した。翼は爆発しながら海に落ちていく。だが、福音も寸前の所でヒットポイントをずらした。本当なら頭から落とすつもりだった。

「っち・・・・・・やっぱり簡単にはいかないか・・・・・・」

福音のシールドエネルギーを減らすことには成功したが微々たるものだ。もっと、大きな一撃を与えなければ勝負はつかない。方法はただ一つ。疾風迅雷しかない。だが、まだ使い時ではない。相手は軍用ＩＳ、こちらは訓練用ＩＳ。シールドエネルギーの量の違いはさっき思い知らされた。疾風迅雷はただでさえ燃費が悪いから、使うにはもう少し福音の機動力を落としておきたい。現在、福音のスラスターは３つ。元は４つで１個はさっき落としたから、もう一つくらい落しておきたい。スラスターがなくても機動力があるＩＳはあるが福音は違うらしい。今の動きはさっきよりも落ちている。半分になれば少しは違うだろう。

俺は気持ちを落ち着けた。ここでミスをすれば成功しない。俺はもう一度福音を見据えた。福音は先ほどと変わらない様子だった。この海の上じゃ隠すものもないから奇襲も出来ない。ゴリ押ししかないな・・・・・・こっちは二刀流だから手数は多いのが唯一の利点

か。

俺は福音に瞬間加速（イグニッション・ブースト）を使い福音に突進した。そのまま体当たりをして福音の体勢を崩した。そのまま菊一文字で切りつけようとしたが福音に刀を掴まれた。

「っく！」

俺は残りの漆黒ノ太刀で切りつけようとするが、福音が蹴りを繰り出してきた。蹴りは顎に入ろうとするが、体を反らしてなんとか躱す。だが、一緒に菊一文字も離れた。

（しまった！）

予想通り福音はこちらに接近していた。気づいたときにはもう遅く、攻撃を受けた。そのままラッシュを喰らい装甲がほとんど無くなってしまった。

（くっそ・・・・・・意識が・・・・・・・・・）

ＩＳが意識を無理に戻すが、その力も弱い。だが、ここで止まるわけにはいかない。俺は漆黒ノ太刀でスラスターを切りつけた。福音も攻撃の後で隙ができていた。そのまま攻撃が通りスラスターの破壊に成功した。

「はぁ・・・・・・はぁ・・・・・・・」

正直言ってシールドエネルギーがもうない。残り１００を切ってしまった。疾風迅雷は使えるが使ったあとがもう動かすだけエネルギーがない。・・・・・・・しかし、迷ってはいられない。ここで止

まれば誰も福音を止められなくなる。勝負を決めにかからないと本当に死ぬ。まぁ、どちらにせよ勝ったところで同じ結末か・・・・・・・・・ここは海。近くに島も何もない。ＩＳの補助機能が無くなって落ちたら命はない。だったら、危険が取り払われたほうが良いに決まっている。

『疾風迅雷発動』

俺は覚悟を決めワンオフ・アビリティーを発動させた。ここで・・・・・勝負を決める！俺は疾風迅雷で加速した雪月花で接近した。福音も驚いたらしく、回避にワンテンポ遅れた。その遅れが命取りだぜ・・・・・・

「おらぁあああああ！！！！！！！！」

二つの刀で交互に切りつける。その後に蹴り上げ、更に剣で切りつける。普通のＩＳならシールドエネルギーが切れているだろうが、福音は軍用ＩＳまだシールドエネルギーは残っている。俺は攻撃の手を緩めず、更に切りつける。そして、最後に距離を置いて、瞬間加速（イグニッション・ブースト）を使って接近する。

「鷹野流剣技、降りしきる千雨」

降りしきる千雨が完全に決まった。福音は所々煙を上げながら、海に落ちていった。

「やっと・・・・・・終わったか」

一息ついた瞬間、落ちていた福音に変化が起きた。突如、福音の周りにエネルギーが集まり出した。最初に見た時のエネルギーとは違

う。一体、何が・・・・・・

「まさか・・・・・・・第二移行(セカンドシフト)か！？」

集まっていたエネルギーが福音に収束した。中から出てきた福音はさっきとは姿が変わっていた。さっき壊したはずのスラスターは戻り、エネルギー刃のようなものが出ていた。そして、一番の違いはスラスターの大きさだ。さっきよりも大きくなっていて約1，5倍になっている。

「マジかよ・・・・こっちはもうシールドエネルギーが・・・・・・」

こちらのシールドエネルギーは最低限ＩＳを動かすくらいの分しか残っていない。ここで第二移行(セカンドシフト)なんてやられたら、まずい。少しの間思考に浸っていると、福音の第二移行(セカンドシフト)が完全に終わっていた。減らしたシールドエネルギーも回復したらしい。

「くそ、本格的にまず・・・・・」

次の瞬間には福音が目の前に移動していた。さっきと速さが比べ物にならない。

「はやっ・・・・・」

回避は間に合わず、俺はそのまま攻撃を受けた。さっきのお返しと言うくらい怒涛の攻撃だった。段々と意識が朦朧としていく。口に鉄の味が広がっていく。口の中を切ったらしい。薄れゆく意識の中で確認できたのは福音がエネルギーを溜めているところだった。

（ああ、くそ・・・・・・・・・こんなところで終わりか・・・・・・・・・・・・・・・最後までみんなに迷惑かけることになっちまったな・・・・・）

俺は体に衝撃を受け、海に落ちていった。

～・・～・・～・・～・・～・・～

「織斑先生！鷹野君のＩＳ反応、消滅しました！」

「なんだと！？もう一度確認しろ！」

「してます！だけど反応が・・・・・・・・！」

千冬は放心状態になった。あの慎二がやられた・・・・・・・・・・まさか、そんなことが・・・だが、反応が消えたのも事実。千冬の持っていたボードの形が変わって握りつぶされていた。そして、気持ちを切り替えた。今は任務中だ。

「・・・・・作戦終了後、鷹野の捜索をする」

「織斑先生！」

「山田先生、今は作戦中だ。集中しなさい」

「でも・・・・・・」

どこか煮え切らなような顔でディスプレイの方を向いた。その場で千冬は飛び出していきたい気持ちを抑えていた。

～・～・～・～・～・～

箒は太平洋を移動していた。途中で会った、セシリア、鈴、シャルロット、ラウラ、簪も一緒だ。

（一体何、この胸騒ぎ・・・・・・・慎二がやられる訳がないのに・・・一体）

それはここにいるみんなに共通して言えることだった。単に一夏がやられて敵討ちをすると言う気持ちもあるが大半は楯無と一緒だった。場所は楯無に聞いて向かっているところだ。本来なら止めるところなんだろうが、楯無自身も慎二を心配していた。楯無自身が出撃したいところだが、装備が点検中でまともな装備がなく出撃できないでいた。そして、箒達に場所を教えたのである。移動して１５分が経ち、座標ももう少しと言うところに来た。

「目標補足！これより迎撃に入る！」

ラウラが最初に福音も見つけた。そのままラウラはそこの停止し、肩の大型レーザーカノンで迎撃態勢に入った。弾が打ち出されるが福音には当たらない。

（４０００・・・・・２０００・・・・・くそ、予想よりも大分早い！）

福音の攻撃が入りそうになるがステルスモードに移行していたブルーティアーズの攻撃がそれを防ぐ。一瞬だが福音の動きが止まりそこに箒が攻撃を加える。赤椿のスペックをもってすれば簡単に攻撃が入った。が、そこで福音の形が違うことに気がついた。

「みんな！福音の形状が変わっている！」

「なに！まさか、第二移行（セカンドシフト）しているのか！」

すると、福音は一度距離を取った。誰もそこに飛び込もうとはしない。第二移行（セカンドシフト）したのだ、何か新しい能力が追加されたのかもしれない。そう思い、手を出せないでいた。

「ねぇ、みんな・・・・・気になっていたんだけど・・・・・・・・・・・・慎二はどこ？」

「「「「！」」」」

先程から慎二の姿が確認できないことを不審に思っていたシャルロットが口に出した。いや、皆気づいていたのかもしれない。あえて、気づかないふりをしていたという方が正しいのかもしれない。ただただ、それを認めたくない一心に。だが、シャルロットの一言で何かが切れてしまったのだろう。皆の目が怒りに染まっていた。最初に動き出したのは、ラウラだった。

「このぉおおおおおおお！！！！！！」

「ラウラ！待って！」

瞬間加速（イグニッション・ブースト）を使い接近するが、直線的すぎて簡単によけられた。そして、反撃をくらった。

「ぐぁあああああ！！！！！」

「よくもラウラを！！！」

今度はシャルロットが突進していた。両手に散弾銃(ショットガン)をコールし、それを打つ。が、機動力が上がった福音には当たらない。追撃と言わんばかりにセシリア、鈴も攻撃に参加するが結果は変わらない。意識がシャルロット達に向いている間、箒は福音の下に回り込み福音に切りかかる。攻撃は入り、初めてダメージを与えられた。

『ダメージレベル中、迎撃ＬＥＶＥＬ　ＭＡＸに移行』

その警戒音らしいのが聞こえた後、福音の動きが更に一段階早くなった。セシリアは瞬間的に接近された。

「なっ！インターセ・・・・・・」

インターセプターをコールしようとするが、福音の動きの方が早くエネルギー弾を喰らった。

「きゃあああああ！！！！！」

装甲が外れ所々が生身になっている。その隙に箒はマルチロックオンミサイルで迎撃した。が、福音の機動力の前では追尾機能も意味が無い。接近されそうになるが、荷電粒子砲で何とか持ちこたえていた。

カチッ

（しまった！・・・・補給を・・）

攻撃がなくなり簡単に接近された箒はなんとかシールドをコールし、攻撃を防いでいた。

（一撃が重い・・・・・このままじゃ・・・・！）

そこに一つの弾が通過する。その弾を感知し、福音は回避行動をとる。

「みんな、待たせたな」

「一夏！」

現れたのは一夏だった。前回、福音から受けた傷は完治していた。そして、一夏のＩＳの形状もまた変化していた。白式第二形態『雪羅』一夏も第二移行（セカンドシフト）していた。

「一夏！もう動いて大丈夫なのか？」

そう言いながら箒は一夏に近づいた。

「ああ、傷も完治してるし問題ないぜ」

「・・・・・・・すまなかった」

「？何のことだ」

「昼間のことだ。私は力があることが嬉しくて浮かれていた。そのせいでお前が・・・・」

「そんなことは気にすんなって。誰にでもそうなることはある。俺だってあったさ。だけど、そのあとで同じ間違いをしなければいいんだよ。人間は間違う生き物だ」

「一夏・・・・・・」

「それよりも箒、先に福音を倒しちまおうぜ」

「ああ、そうだな」

二人は福音を見据えた。今は鈴、セシリア、簪、シャルロット、ラウラによってなんとか持ちこたえている状態だった。そこで一夏があることに気づく。

「なぁ、箒。慎二はどこにいるんだ？」

「それは・・・・・・・・」

急に黙り込む箒。その様子を見て一夏は一つの可能性に辿り着く。

「まさか・・・・・・・・・・・・やられたのか・・・・・・・？」

箒は泣き出してしまった。その涙が肯定の意味なのだろう。一夏は自分の中の感情を抑えられないでいた。憤怒、それだけが心を支配していた。家族同然の慎二がやられて判断ができないでいた。だが、一つ。これだけは決定した。

「銀の福音（シルバリオ・ゴスペル）！お前を・・・・・破壊（こわ）してやる！」

一夏は福音に突進した。

～・～・～・～・～・～

（一体ここは・・・・・・・）

目の前が暗い・・・・しかもすごく寒い。そんな中、一つの光が慎二の前に現れた。

「これは・・・・・みんな・・・・・・・・・！」

光に映っていたのは今、福音と戦っているみんなだった。

「一夏もいる・・・あいつ大丈夫だったのか」

だが、戦況は良くないらしい。先程から押され始めている。このままじゃ、みんなが危ない。だけど、俺にはもう動く力がない。更に視界が暗くなり、体温も落ちていった。そんな時、頭に直接話しかけるように何かが話しかけてきた。

『汝、何を求める？』

「何をって・・・・・・・・」

俺は少しの間考えた。そして、もう一度問われた。

『もう一度問おう。汝、何を求める？』

「俺は・・・・・・俺は・・・・・・・・・・・・・・みんなを守る力が欲しい！」

『それは何故だ？』

「もう俺は、大切な人を失いたくない・・・・・・・・・そのために

みんなを守る力を俺にくれ！」

『・・・・・・よかろう。力を授けよう』

「これは・・・・！」

『それはＩＳの新たな力だ。使い方は分かるな？』

「ああ」

急に視界が明るくなり出した。そして、体の感覚が戻っていく。傷も治っているみたいだ。俺は、そこを飛び出した。

『・・・・し一君、頑張れ』

～・～・～・～・～・～・～

「おりゃあああああああああ！！！！！！！！」

一夏は零落百夜を使い福音に攻撃を仕掛けた。が、簡単によけられてしまう。

「くっそ・・・・はぁ・・・はぁ・・・はぁ・・・」

一夏が加わり戦闘は２０分が経っていた。福音の機動力をなんとか抑えようとするが上手くいかない。小さな隙を突いて攻撃するも当たらない。そのせいでみんなのシールドエネルギーは無くなりかけていた。装甲にもダメージがあり、本格的に危ない状況になってきていた。

（このままじゃ・・・・・・くっそぉ、何で俺はこんなにも無力なんだ。慎二なら・・・・・・慎二ならどうする？）

「一夏、危ない！」

思考に浸っていたせいでシャルロットの声に気付かなかった。

（しまった！）

回避行動が取れず、衝撃に身構えた瞬間

ザバーーーーーーン！！！！！！！！

突如、海に水柱が立っていた。福音の注意がそちらに向き、一夏は距離を取った。そのまま、みんなのところに行った。

「一体何が・・・・・・」

水しぶきが晴れていくにつれて、その中にいた人物の正体が露になった。

「よっ、みんな無事か？」

「「「「「「慎二・・・・？」」」」」」

「おいおい、俺以外に誰がいるんだよ？」

「そうだけど・・・・・」

鈴が口ごもりながら言った。みんなを見るとどこか安心しているよ

うな顔だった。

「だって・・・・・・死んじゃったかと・・・・・・・・思った・・・・・」

泣きそうな顔で簪はそう言ってきた。

「・・・・・・悪かったな、心配かけて。でも、話は後だな。まずはあれに消えてもらおう」

俺が福音を指さすとみんなが頷いた。そして。一夏が近寄ってきた。

「それよりも慎二、お前も第二移行(セカンドシフト)したのか？」

「ん？ああ、そうみたいだな」

「何か名前あるのか？」

「ちと待て・・・・雪月花第二形態『焔(ほむら)』らしい」

「焔(ほむら)？ああ、だから背中に赤いピットのようなのがあるのか」

「え、そんなのあんの？・・・・・・って、ホントだ。何だこれ？」

一夏に言われて見てみると、スラスターの辺に何か赤い棒みたいなのがある。

「何か新しい能力なんじゃないのか？俺だってあったし」

そう言って、一夏は左手を見せてくれた。なる程、前とは形状が違

うな。

「ま、そんなことよりもさっさと終わらして帰ろうぜ。もうちょっとで夜が明けそうだ」

「そうだな・・・・じゃ、行くぞ」

俺達は福音に接近した。

「・・・・・？」

俺はＩＳに少し違和感を覚えた。何だろう、この感じ・・・・今までよりもしっくりくる。これなら行ける！俺は瞬間加速（イグニッション・ブースト）を使い福音に急接近した。前の雪月花よりも早い。そして、漆黒ノ太刀で切りかかる。福音も腕で応戦し、力が拮抗する。が、今の俺は一人じゃない。後ろからラウラがレーザーカノンで福音を打ち抜く。俺はそのまま引き付け、寸前で回避行動を取った。そして、福音にダメージを与えられた。

（やっぱりか・・・・）

今の一連の動きで分かったことがある。背中にある赤いピットのようなものは、ＩＳの運動力を上げるものらしい。おかげで簡単に回避ができたし、瞬間加速（イグニッション・ブースト）も前よりも早くなった。そして、一番の違いは武器だ。一覧に新しい武器が追加されていた。その名も『煉獄（れんごく）ノ剣（つるぎ）』。これは赤いエネルギー刃らしく、今までの刀よりも出力が上だ。威力も上がっているだろう。

（しっかし、俺のＩＳの武器は接近メインか・・・・・でも、いくらなんでも刀三本は多くないか？）

そこで思考を止めた。こんな事を今考えたところで意味はない。俺は漆黒ノ太刀をクローズし煉獄ノ剣をコールした。日が完全に出てしまった。これ以上は時間をかけられない。俺はみんなにオープンチャンネルで話した。

「みんな、少しの間福音の動きを止めてくれ」

「「「「「了解！」」」」」

「一夏、勝負を決めるぞ。零落百夜を発動させろ」

「分かった」

俺も疾風迅雷を発動した。勝負は一瞬、それに全てを賭ける！まずはセシリアがピットで牽制、そちらに意識が向いたら、今度はラウラのレーザーカノン、簪のマルチロックオンミサイルが発射される。福音に何個かが当たり周りに煙が立ち込める。その中をシャルロットは散弾銃（ショットガン）で打ち抜いていく。福音はそれから逃げるようにして外に出た。そこには箒が待ち構えていて、スラスターを全て断ち切った。そして、俺は動きが鈍くなった福音に煉獄ノ剣で切りつけた。

「鷹野流剣技、乱れ桜」

福音は乱れ桜を喰らい完全に体勢を崩した。

「一夏！今だ！！！！」

一夏は福音から死角になる太陽の方向から福音に切りかかった。

「今度はにがさねぇえええええ！！！！！！！！！！！！！！」

一夏は切りつけたまま押し切っていた。福音が一夏の喉に手を動かすがその途中で動きが止まった。

「終わったか・・・・・・」

一夏がそう言うと、みんなが一息ついた。長かったな・・・・・・俺が大体一時くらいにここに来て今日の出だろ？え～と、単純計算5時間？・・・・・・うん、気にしちゃ駄目だ。

「さ、みんな戻ろうぜ」

「「「うん」」」

「「「ああ」」」

「ええ」

俺達は旅館へ帰った。

～・～・～・～・～・～・～

「任務完了・・・・と言いたいところだが、私は待機していろと言ったはずだが？」

旅館の入口に帰ってきた時、玄関先で待っていたのは千冬さんからの厳しいお言葉だった。

「特に鷹野。何をお前は一人で勝手な行動をしてる」

「え・・・・・・すいません」

「・・・・・・・・・・・・・・私がどれほど心配したと」

「「「「「え？」」」」」

「・・・・・・・・忘れろ。いいか、命令だぞ！」

「「「「「イ、イエッサー！」」」」」

有無を言わさない声でそう言われたら自然とその言葉が出てきた。
しかもみんな同じ言葉を同じタイミングって・・・・・・同じこ
とを思ったんだな。

「お、織斑先生。これくらいにして、みんな疲れているわけですし・
・・・」

「まぁ、そうだな・・・・・・・ああ、そのなんだ。よくやった」

そう言って、千冬さんは逃げるように中に入っていた。

「あれでも心配してたんですよ、織斑先生。特に鷹野君」

「え？俺ですか？」

「そうですよ、鷹野君のＩＳの反応が消えた時なんて泣きそうに・・
・・・」

「・・・・・山田先生、ちょっとこちらに来てもらえますか？」

いつまにか山田先生の後ろには千冬さんがいた。そして、襟を掴み部屋に中に引きずり込んでいった。

「ああ、みなさん。精密検査を受けてくださいね～」

山田先生は千冬さんに引きずられながらそう言って消えていった。

「・・・・・・とりあえず検査受けるか」

みんなは頷いた。

～・・～・・～・・～・・～

「ったく、検査終わったらいきなり外に出されるって、どういうことだよ・・・・・」

精密検査が終わる頃にはもう外は暗くなっていた。しかも精密検査中も楯無さんが来て大変だった。そして俺は食事後、ゆっくりしていたら千冬さんに砂浜に行けと言われ砂浜に来ていた。

「・・・・・・月が綺麗だな」

砂浜から見える月は綺麗な満月だった。俺は月明かりにきらめく海を見ていた。

「慎二」

誰かに名前を呼ばれた気がして振り向くとそこには箒、セシリア、鈴、シャルロット、ラウラ、簪がいた。

「みんな揃ってどうした？」

「私達の気持ちを伝えておこうと思ってな・・・・・」

気持ち・・・・・

「それなら受け入れられないって・・・・・」

「慎二さんの過去に何があったかは知っていますわ」

「！・・・・・誰から聞いた？」

「・・・・・千冬さんよ」

「私は・・・・・お姉ちゃん」

全く、あの二人は何やってんだよ・・・・・・・・人の過去、勝手に教えるなよ・・・・・

「じゃあ、尚更俺なんかに構うなよ」

「自分のことを俺なんかって言わないでよ、慎二。そう僕に言ってくれたのは慎二だったよね？」

「そうだ、私の嫁ならもっと堂々としていろ」

「なんでそこまで・・・・・・・」

「言っただろう、慎二。私はお前に助けられてばかりだ。その恩を

返したい。一生をかけても。それに私はお前が大好きだ。この気持ちは変えられない」

「わたくしも、助けられてばかりですわ。それにあなた様以外にわたくしの旦那様は考えられませんわ」

「そうよ、慎二。あんた勝手にそんなことするなんて非常識じゃない？私だってあんたの事大好きなのよ。少しくらいは恩返しさせなさい」

「慎二は僕をデュノア社から助けてくれた。それにお母さんだって・・・あんなことされたら慎二以外は見えないよ。僕も慎二のこと大好きなんだよ」

「私は、皆ほどお前を見てきたわけではない。だが、人の温もりというのを教えてくれた。あれだけで私はどれだけ救われたと思っている。もっと一緒にいて教えてくれ、家族と言うものを」

「私は・・・・昔から慎二のことが大好き。再開してからもその気持ちは・・・・変わらない。今でも私は慎二のことが・・・・大好き。これだけは譲れない」

みんな各々の気持ちを伝え俺に微笑みかけていた。みんな一途に俺の事を思ってくれている。・・・・・・そう思うと涙が零れそうになる。

「俺だって・・・・・・お前らに・・・・・救われて・・」

涙が出てきて、呂律が回らなくなった。すると、みんなは近くによってきて静かに抱きしめてくれた。

「慎二、お前はもう少し自分に自信を持て」

「そうですわ、慎二さん。あなたは最低な人ではありませんわよ」

「私たちを救ってくれたんだからさ」

「慎二が背負い込まなくてもいいんだよ？」

「だから、今度は私たちが救ってやる」

「慎二の心の闇から・・・ね」

「う・・・・うああああああああああああああああ！！！！！！！！！！！！！」

俺は泣いた。子供のように泣いた。惨めだが、今は彼女達に頼りたかった。全てを許してもらえるような気がしたから・・・・・・・・・

しばらく泣いていたが、気持ちも落ち着いてきた。

「みんなごめんな、惨めな姿見せて」

「慎二さん、あなたはわたくしに泣くことは惨めじゃないと言ったんではなくて？」

「はは、それもそうだな」

俺はもう一度みんなを見渡した。

「みんな、ありがとう。みんなのおかげで大分心の荷が降りたよ。これからは俺もみんなと向き合う。だから、これからもよろしくな」

「ああ」

「もちろんですわ」

「そんな水臭いことといってんじゃないわよ」

「こっちこそ、よろしくね」

「当たり前だ」

「うん・・・よろしくね」

どことなくだが、みんなの顔がとても眩しかった。俺は恥ずかしくなって、顔を反らした。

「あ、もしかして慎二、照れてるの～？」

「ち、違うよ。そんなわけないだろ」

みんなは笑い出した。俺は反論するがその様子も笑われてしまった。

暫くそんな調子でいたら、簪が何かを思い出したらしく俺に話しかけてきた。

「ねぇ慎二・・・・約束・・・・覚えてる？」

「約束？・・・・・ああ～、まぁ覚えてるよ」

「じゃあ、私と結婚してくれるの！」

ピキッ！

何かが固まる音が聞こえた。この場の空気だろう。俺は旅館に逃げよとするが肩を掴まれた。

「慎二、一体どこにいくんだ？」

「もう少しお話しませんこと？」

「さっきの、一体どういうこと？」

「詳しく教えて欲しいな～」

「おい、さっきのはどういうことだ。詳しく話せ」

みなさん目の光が消えてらっしゃる。異様に怖い・・・・弁解しないと。

「い、いや、みんな落ち着け。これはだな幼稚園での約束でな、本当の結婚とは違うんだ」

「え・・・・・じゃあ、結婚・・・・・してくれないの？」

「あ～、いやそういうわけじゃなくてだな・・・・・」

ピキピキピキ・・・

やべぇ、なんで俺火に油注ぐようなことしてるんだ。しかもみんなＩＳ展開してるし・・・

「いや、みんな落ち着け。誤解だ！いや、セシリア撃たないで！俺ＩＳないんだから！シャルロット！ラピッドスイッチの練習しないで！！！ラウラ！ちょっと待ってワイヤーブレードそんな風に使わないで！！！鈴、青龍刀って投げちゃダメ！！！！！箒、雨月の練習しないで！！！！！俺死ぬ！！！！絶対死ぬーーーーーーーーーー！！！！！！！！！！！！！」

～・～・～・～・～・～・～

現在帰りのバスの中、俺はぐったりしていた。昨日はあの後２時間追いかけられて死ぬ思いをした。その後、千冬さんに助けてもらったけど部屋に戻ったら戻ったで楯無さんに福音の時のことで説教されるし・・・・・というか今もなんだけど。

「あ～、体中痛い・・・・・・・てか、喉乾いた」

「モテる男は大変ね、慎二君」

「他人事みたいに・・・・」

「だって、他人事だもの」

っく、それを言われたらおしまいだ。もう少しでバスが出発するところに一人の女性が乗り込んできた。

「鷹野慎二君と、織斑一夏君っている？」

「俺ですけど」

「はい・・・・俺です」

「はじめまして、私は銀の福音の操縦者ナターシャ・ファイルスよ」

「「え？」」

困惑していると頬に唇が触れた。一夏も同じようにされていた。

「ちゅ・・・・・これはお礼よ。ありがとうね、白いナイトさん達」

「え？あ、う？」

「じゃあね、ばーい」

困惑していると、背後から何か不穏な空気が・・・・・・・

「慎二、頑張れ・・・・・・」

「ああ、できるだけ・・・・・・・」

戻ろうとすると、予想道り皆さんが立っていた。

「そういえば慎二、喉乾いてるんだっけ？」

「え、ああ・・・・うん」

「じゃあ」

みんな各々が持っていたジュースを取って

「「「「はい、どーぞ！」」」」

５００ｍｌ×４が投げられてきた・・・・・・・正直言おう、重い。

ああ、死ねる。２Ｌってあんなに重いんだな。疲れてるからだだと余計か・・・・・・はぁ、もうしんどい。何でこうなったんだろ・・・・でも、いくらか進展はあったか。みんなとも仲直りできたし。しかも、来週からは夏休み！！！！やっほう！！！今年は楽しい夏休みになりそうだ。

やっと、色々と終わったよ・・・・・・・（後書き）

ちょっとグダグダになりましたよね。

すいません、この話で終わらせようと思ったらこうなりました

終業式の日って結局午前中授業あるんだよね（前書き）

更新遅れてすいませんでした！！！！！

今週ちょっと体調を崩しまして執筆できなかったんです。

ほんとすいませんでした。

ではどうぞ

終業式の日って結局午前中授業あるんだよね

臨海学校の二日後の朝、今日学校に行けば夏休みになる。来たぜ！！！やっと、夏休みが！！！！！だけど、あんまり嬉しくない。だって、午前中が通常授業なんだもの。萎えるよ・・・・・・まぁ、今日頑張れば夏休みなんだけどな。今は、食堂に来ている。結構速い時間だけど、みんな結構来ている。部活とかの人なんだろうな。

「おばちゃ～ん、今日もよろしく～」

「はいよ」

食堂を見渡すと、箒がいた。剣道部に行ってたんだろうな。最近は行ってるみたいだし。

「おまたせ～」

「お、ありがと。今日のもうまそうだ」

「うまいんだって何回言えば分るんだい」

「はは、悪いね」

俺は食事を取って箒の所に行った。

「箒、ここ座っていいか？」

「慎二か。ああ、いいぞ」

今日のメニューは箒が和食定食、俺は中華丼だ。具が多くて、しかも大きい。新鮮な野菜を使っているから、素材の味が引き立つ。あんかけもいい感じにトロトロで味も濃くなく、薄くない。一言でいうと絶妙だ。ほんと、ここの食堂のメニューは全部うまいな。今まで食ったやつ全部うまい。さすが国立の学校の食堂なのかね。

「なぁ、箒。お前さ、夏休みって何か予定あるのか？」

「私か？私は一度実家に帰ろうかと思っている」

「実家ねぇ。じゃ、夏祭りの踊りやるのか？」

「ま、まぁ、一応はやる予定だ」

「そうか。じゃあ、見に行くよ」

「う、うむ」

とりあえず、臨海学校から帰ってからはみんなと話すようにはなった。いつも通り、いや前よりもよく話すかもしれない。みんな気持ちを伝えてから何故かアプローチが益々酷くなっている。まぁ、嬉しいような嬉しくないような微妙な所なんだけどな。今は気にしなくてもいいか。

「ねぇ、ここに座っていい？」

そういって話しかけてきたのはシャルロットだった。ちなみにメニューは洋食セットだ。

「ああ、いいよ」

そう言うと、箒は機嫌が悪くなった。というか睨むな。

「箒、そんな機嫌悪くすんなよ」

「そ、そんなことはない！」

いや、どう見たって機嫌悪いじゃん。まぁ、二人きりだったのにシャルロットが入って来たら嫌だよな。俺は箒に耳打ちした。

「そんな機嫌悪くすんなって。終業式終わったら一緒に出かけてやるから」

「そ、それはもしかしてデートか？」

「あぁ・・・・・まぁ、それでもいいか」

「そうかそうか、デートか。ふふ」

見るからに機嫌良くなったな。扱い易いな～。可愛いって思った事は秘密で。

「ねぇ、二人で何話してるの？」

「いや、特に何でもないよ」

「そ、そうだぞ。別に終業式の後二人で出かけるなんて・・・・・・あ」

あ～、何やってんだよ。全く、自滅してんなよ。せっかく人が気を

利かせて提案したのに。

「へぇ、出かけるんだ～。ねぇ、僕も一緒に行ってもいい？」

「・・・・ああ、いいよ」

「・・・・・・・・・ああ」

「じゃあ、集合は校門前に3時でいいか？」

「僕は問題ないよ」

「私もだ」

「じゃ、それでよろしくな」

ったく、そんな睨むなよ。元はといえばお前が自滅したんだろうが。そして対照的にシャルロットの機嫌が良くなる。あ～、なんて分かりやすいんだろ。

「なぁ、シャルロット。夏休みってなんか予定あるのか？」

「僕？とりあえずはG・W・社の新装備のテストかな～」

「フランスには帰らないのか？」

「そうだね、お母さんも日本にいるし。あ、慎二。お母さんが慎二に会いたいって言ってるんだけど、会ってくれる？」

「ああ、いいよ。いつくらいだ？」

「まだ決まってないから決まったら連絡するね」

「分かった」

「って、何だかんだで時間経ったな・・・・俺は先に戻るけどこの後どうする？１０分位したら教室行こうと思うんだけど」

「う～ん、じゃあ僕もそうしようかな」

「私もそうしよう」

「じゃ、１０分後に寮の玄関に集合な」

「分かった」

「ああ」

さて、一回部屋に戻って今日の準備しないとな。え？昨日のうちにやっとけって？そんなことは分かってんだよ。でも、やる前に寝ちゃうんだよ。まぁ、そのおかげでたまに忘れ物して千冬さんに出席簿アタックを喰らうんだけどな。

～・～・～・～・～・～・～

「おはよ～」

俺達は教室に来た。

「あら、慎二さん。おはようございます」

「慎二じゃない、おはよ」
「む、嫁か」
教室には鈴、セシリア、ラウラがいた。って、ここ一組なんだが。
「なぁ、鈴。毎度思うんだけど、何で一組にいるんだ？」
「そんなの私の勝手じゃない」
「そういうことじゃなくてだな、二組に馴染めてないんじゃないかって心配してんだよ」
「そこは心配しなくていいわよ。ちゃんとやってるわよ」
「ならいいんだが。そういえば二人とも夏休みって何か予定あるのか？」
「わたくしは一度イギリスに戻りますわ。家の事もありますし」
「大体いつくらいに帰ってくるんだ？」
「大体ですけど、８月半ばかと」
「ラウラは？」
「私も一度ドイツに戻る。戻ってくるのはセシリアと同じくらいだ」
「鈴は？」

「私は特に無いわよ。どうせ中国帰っても何もないし。それよりも慎二、何でそんなこと聞くの？」

「あ、それ僕も気になってたんだ」

「いや、みんなの予定が合えばもう一回海に行こうかなぁって思ったんだが。ほら、みんなと泳いでなかったからさ」

「いいね！僕は問題ないよ」

「わたくしもですわ」

「私もだ」

「わたしもよ」

「私も問題ないぞ」

「そっか。じゃ、８月の２０日位にしよう。詳細は後で決めるってことで。って、鈴そろそろ千冬さん来るぞ」

「それもそうね。じゃあ、慎二またね」

「またな」

鈴が後ろのドアから教室から出ると入れ替わりで千冬さんが入ってきた。

「席に着け。ＳＨＲを始める」

一学期の最後の日が始まった。

～・～・～・～・～・～

「ふぅ～、流石に暑いなぁ」

今は終業式が終わり夏休みってことになるのか？まぁ、放課後でいいか。校門に向かっている。一応終わって直ぐに来たけど、早すぎたかな。さぁてと、少し待ってるとするか。ちなみに今の格好は、GパンにTシャツというシンプルな格好だ。ファッションにはあまり興味がないから基本的にこんな服しか持ってない。

「てか、7月ってこんなに暑かったっけ？」

独りごとなのは置いといて、一応地球温暖化は止められているらしい。IS出来てるし、前いた世界よりも科学技術は発達しているからなんだろうけど。でも、地球温暖化を止められても逆は起きないんだよね。どんだけ強敵なんだよ、地球温暖化・・・・・そんなどうでもいい思考に浸っていると箒達が来た。

「すまない、待たせてしまったか？」

箒は青の短パンに白の半袖、その上に肩無しのピンクの上着を着ている。シャルロットは黒のスカートにハートの装飾がされている白の半袖だった。見惚れてしまったのは秘密だ。

「いや、大丈夫。暑いからさっさと行こう」

「そうだね」

俺達は駅に向かった。

～・～・～・～・～・～

「なぁ、誘っといてなんだけどさ。これからどうする？」

モノレールを乗り、今は駅前に来ている。どこの学校も今日が終業式らしく学生が多い。

「まさか何も考えてなかったの？」

「いや、今そういったよね」

「全く、お前は気が利くんだか利かないんだか」

「・・・・・返す言葉もありません」

「仕方ないなぁ。じゃあ、服欲しいから付いてきて。箒もそれでいいでしょ？」

「問題ないぞ」

「じゃ、行こ」

俺達はレゾナンスに向かった。てか思ったんだが、何故か注目の的になっている。・・・・・考えてみれば箒もシャルロットも可愛いから注目集めるよなぁ。しかも男一人を連れてる。まさに両手に花ってか。注目するなって方が無理か。考えながら歩いているとレゾナンスに着いた。まぁ、駅ビルだからそんな遠くもないか。

「じゃあ、まず2階に行こう」

「了解」

～・～・～・～・～・～

「・・・・・・・なぁ、まだか？」

現在レゾナンスに入って1時間が経った。というか、2階に1時間いる。女子の服選びって時間かかるとは聞いてたけどここまでとは・・・・・・

「もう少し待ってね」

さて、このセリフ何回聞いたんだろうか。俺の記憶が正しければ7回目だ。ってか、そこまで俺聞いてたんだな。

「うん、こんなものかなぁ」

はぁ、やっと終わっ・・・・・・・・・

「じゃ、次水着みよう？」

「・・・・・・・・・・マジ？」

「何その反応？せっかく慎二の為に新しいの買おうと思ったのに」

「そうだぞ、お前の為に二人で相談したんだ」

いや、そんな相談しなくていいんだけど・・・・・・

「分かった分かった」

「じゃ、慎二僕たちの水着見て選んでね」

「はいはい、何でもしますよ」

俺達は3階に向かった。

～・～・～・～・～・～

うん、いつ来ても女性用水着が多いな。

「じゃあ、慎二。一緒に付いてきてね」

「はいはい」

女性用水着の中に俺は入っていった。楯無さんと来た時以来だな。

そんな機会あっても困るけど。

「ねぇ、箒これなんてどう？」

「い、いや、私には着れない。この前のだって恥ずかしかったのに・・・・これは恥ずかしすぎる」

「え～、似合うと思うんだけどなぁ」

「じゃ、じゃあ、とりあえず着てみよう」

たまに思うんだけどシャルロットって人の扱い方上手いよな。今の箒然り、ラウラ然り。さすが優等生。いや、関係ないか？

「じゃ、来てくるから待っててね」

「おっけ～」

というか、試着室の前で待ってるのって何か変な感じするな。

「ちょっと、そこのあんたこれ片付けといて」

何かキチガイな声が聞こえる。ま、俺には関係ないだろ。

「そこのあなたよ！聞いてるの！！」

「あ？俺か？」

「そうよ、あんたよ！！！全くこれだから男は！！！」

・・・・・何か場違いな女だなこいつ。ブツブツ何か言ってるし。

「で、あんた。これ片付けといて」

「何でそんなことしなくちゃならないんですか？」

「そんなのあんたが男だからに決まってるじゃない。男は女に従えばいいのよ」

「・・・・・・・」

あれか、女性優遇社会の被害者か。つか、勝手に自分が偉いと思い込んでんだな。

「すいませんね、連れがいるんで」

「はぁ！？私の言うことが聞けないの！！！」

あぁ、あんま大きい声出すなよ。周りの注目集まるだろ。いや、最初から集めてるけどさ。

「たく、こんなのを連れてるなんて、連れてる女の気がしれないわ」

・・・・・・こいつ今、箒達の事バカにしたか？

「男をしつけられない女なんてたかがしれてるわ」

「・・・・・おい、ほざくのもいい加減にしろよ」

「何？私に反論するの？」

「ああ、するさ。あんたみたいな糞みたいな女にならいくらでも反論してやるよ」

「っ！・・・・警備員に通報するわよ」

「すればいいさ。どうなるかは結果はしれてるけどな」

「そうよね、私が勝つに決まってるもの」

「はぁ、馬鹿かあんたは？」

「な、何ですって！！！」

「あんたほんと馬鹿だな。俺はな・・・・・」

「慎二、それくらいにしておけ」

「箒・・・・・・・」

着替え終わったのだろう、更衣室から姿を見せていた。シャルロットもいた。正直言って見とれていた。箒は黒のビキニを着ていた。普段、箒が絶対に着ないだろうがとても似合っていた。シャルロットは白のビキニだった。シャルロットもとても似合っていた。というか、この二人に似合わない服なんてあるのか？と思ったくらいだ。

「そこのあなた、僕はフランスの代表候補生です。問題を起こせば・・・・分かりますよね？」

「う・・・・・これだから子供は・・・・」

そう言い、女は立ち去っていった。あいつ、追いかけて締めてやろうか・・・・

「慎二、追いかけなくていいよ」

「あれ、バレてた？」

「そりゃあ慎二の事だしね。分かるよ」

うん、見透かされてるみたいで恥ずかしいな。

「それよりも慎二、私達の姿を見て何か言うことはないのか？」
「ああ・・・・・うん、似合ってると思うよ」
「何だその取ってつけたようなセリフは」
「いや、思ったこと言っただけなんだが」
「だったら何でこっちをみない！」
「・・・・・恥ずかしいんだよ」
「・・・・・そ、そうか」
「「・・・・・・・・・・」」
気まずい、つか何でこうなったし。
「ちょっと～、二人だけの空間作らないでよ」
「そ、そんなことはないぞ。なぁ、慎二」
「あ、ああ、そうだな」
「ふ～ん、いいけど。で、慎二。僕のはどう？」
「シャルロットも似合ってるぞ」
「ふふ、ありがと。じゃあ、箒買いに行こう？」

「そうだな」

更衣室のカーテンが閉まった。あれだなぁ。俺って今、すごく幸せなんだろうな。何だかんだでトラウマも薄れてきた感じがするし。少し思考に浸っていると箒たちが出てきた。

「じゃあ、買ってくるから待っていろよ」

「分かってるよ」

そう言って箒たちはレジに向かった。さっきのシャルロットたちを見れなかった。うん、何で俺はあんな美少女に好かれたんだろう。でも、嬉しいんだけどな。それは秘密にしとかないとな、うん。

～・～・～・～・～・～

「あ～、疲れた～」

「慎二がプラン決めていてくれればこうならなかったと思うけど？」

「・・・・・反論できません」

買い物が終わってからあの後、ゲーセンとか色々行ったから何だかんだで7時近くになっていた。

「なぁ、もう遅いし今日は外でご飯食べないか？」

「そうだね、学園に帰ったら7時半くらいになっちゃうしそうしようか」

「箒も良いか？」

「ああ、問題ないぞ」

「じゃあ、今日は俺が奢るよ」

「いいの？」

「今日は誘っといて何もしてないからな。これくらいはいいさ」

「じゃあ、高いところ選ぼうっと」

「おいおい、流石に学生が払えるところにしてくれよ？」

「そんなこと言ったって慎二はお金もらってるんでしょ？」

「まぁ、そうなんだが。って、それ言ったらシャルロットも同じだろ」

「そうだけど自分のお金だし好きに使いたいんだよ」

「まぁ、いいか。箒、頼むぞ」

「シャルロット、ここらへんで一番高いレストランを選ぼう」

ああ、また俺の財布が寂しくなる・・・・・・・

～・～・～・～・～

「って、ここは・・・・・・・」

「いい雰囲気でしょ？ここ来たかったんだよねぇ」

「これは・・・・流石に私達には大人っぽくないか？なぁ、慎二」

「・・・・・・・」

「慎二？どうした？気分でも悪いのか？」

「・・・・ん？ああ、何でもないよ」

「そうか？ならいいんだが」

「とりあえず席に座ろうよ」

「そうだな」

とりあえず来て思ったこと。ここ楯無さんと来たところだぁあああああああああああああああああ！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！以上、心の声終了。うん、そうなんだよ。途中から予想ついてたけどまさかここことは・・・・・・・まぁ、ここらへんで良いところって此処なんだろうけどさ。気にしちゃ負けだな、うん。

「じゃあ、なに食べる？」

「無難にディナーコースでいいんじゃないか？」

「でも、流石に高いだろう」

値段を見ると八千円。まぁ、今の所持金は五万だから問題ないだろう。

「大丈夫だって。別な高いやつでもいいぞ」

「いや、そこまで高くなくていいよ。慎二に奢ってもらえるだけで十分だよ」

「じゃあ、ディナーセットで良いか？」

「うん」

「ああ」

おれは手を挙げた。するとウェイターが来た。・・・・・あれ？前来たときもこんな人じゃなかったっけ？

「お決まりでしょうか？」

「ディナーセットを三つで」

「かしこまりました」

立ち去ろうとしたウェイターだったが、戻ってきた。

「どうしたんですか？」

「今度は違う女性ですか？」

「は？」

「では、失礼します」

それを言うと戻っていった。うん？あの人は前と同じ人だったってことか？・・・・・・・・・何故か前の二人が殺気を放っているんだけど・・・・・・・・・・・・・・・

「ねぇ、慎二」

「な、なんだ？」

声のトーンが低い。というか、怖い。

「もしかしてここに来たことがあるのか？」

「ま、まぁ、来たけど？」

「誰と来たんだ？」

「え、あぁ、うん・・・・・・え～と」

「ねぇ、誰と？」

何か凄い危機的状況だよね・・・・・・・・・ダレカタスケテ

「お待たせいたしました。ディナーセットのオードブルでございます」

ナイスタイミング！！！！ウェイター！！！！！！！！と言うか、早すぎないか？

「ほ、ほら、料理も来たし食べようぜ」

「・・・・そうしようか」

「・・・・そうだな」

「うん、早く食べたほうがいいよな」

「でも、帰りに詳しく話を聞かせてね？」

「・・・・・・・はい」

これからが今日一番の危機かもしれない。そう思いご飯を食べ始めた。

～・～・～・～・～・～・～

「はぁ、疲れた」

このセリフは今日二回目だがそんなのはどうでもいい。あの後、結局楯無さんと来たことを話した。そのあと何だか不穏な空気が流れて俺の第六感が危ないと訴えかけてきて、駅に着いたから急いで逃げてきた。でも、やっと部屋の前だ。今日はこのまま寝よう。

ガチャ

「おかえりなさい。ご飯に・・・・・」

バタン！！！

何で楯無さんが・・・・・・・・

ガチャ

「ちょっと、いきなり閉めないでよ」

「何でいるんですか！！！！つか開けるな！！！！って、とりあえず入るか」

俺は楯無さんを押して無理に部屋に入った。

「あん、慎二君ったら強引」

「ちょっと黙ってなさい」

俺はとりあえずベットに座った。楯無さんは隣に座ってきた。何で隣くんだよ・・・・・

「で、何しにきたんですか？」

「慎二君に会いたくって☆」

「何だその星は」

「最近、私と話すとき敬語取れてきたよね。慎二君。さっきもそうだし」

「え？・・・・・確かにそうかも。すいません、直します」

「え〜、そのまま敬語取っちゃってよ」

「でも、年上ですし敬語は使わないと」

「敬語とってよ、じゃないと・・・・・・」

コチョコチョコチョコチョコチョコチョコチョコチョコチョ

「あはははは！！！！ちょ、やめて！！！！！！！！」

「敬語取るって約束しないと続けるわよ〜」

この人楽しんでやがる！！！！

「あははははは！！！！分かりました分かりましたから！！！！！やめてください！！！！！！！！」

「お願いも敬語とって☆」

「分かった！！！分かったから！！！！！！！！！！！！！止めて！！！！！！！！！！！！！！！！！」

「はい」

「はぁ・・・・・・はぁ・・・・・・・・はぁ・・・・・・・はぁ・・」

「観念した？」

「何に観念するんだ」

「そうそう。敬語は使わないでね」
「はぁ、分かったよ」
「ところで慎二君、私お腹すいたんだけど」
「俺は外で食べてきたからお腹すいてないよ」
「え～、せっかく待ってたのに」
「勝手に待ってるのが悪い」
「む～、慎二君冷たくない？」
「そんなことないよ。いつもこんな感じだろ？」
「う～～～～」
あれ、何か拗ねた？ってか、これはこれで可愛い・・・・・・・いやいやいやいや、今のは忘れよう。
「はぁ、分かったよ。ご飯一緒に行くからそんな顔しないで」
「じゃ、早速行くわよ～」
「あれ？もしかして演技だったの？」
「そうだけど？」

「クソ！！騙された！！！心配した俺が馬鹿だった！！！！！」

「あら、心配してくれたの？」

「・・・・・・・」

しまった、墓穴掘った！！！！余計なこと言わなきゃ良かった！！！！！！

「その沈黙は肯定の意味？」

「・・・・・そうだよ」

「ふふ、可愛い」

「言っとくがそんなこと言われても嬉しくないからな」

「そんなことは分かってるわよ」

「分かってるなら言わなくても・・・・・」

チュ

「・・・・・・・は？」

いつの間にか楯無さんの顔が近くにあって、頬に柔らかい感触がした。

「これはご褒美よ」

「一体何の・・・・・・・？」

「私を心配してくれた」

顔が少し赤くなってくた。恥ずかしいならやらなきゃいいのに・・・・・・って、俺も恥ずかしいんだけどね。

「・・・・・・・・・早くいかないと食堂締まるから早く行こう」

俺は足早に移動した。

「もしかして照れてるの？」

「そんなわけないだろ」

「ふふ、そういうことにしときましょうか」

見透かされてるみたいで落ち着かない。すると、楯無さんは俺の近くによってきて腕を取った。

「何してんの？」

「ん～？慎二君を独り占めしてるの」

「・・・・・はぁ、もう好きにして」

「じゃあ、今日は慎二君の部屋にお泊まりで」

「なんでそうなる！！！！！」

その後、食堂に行ったらまた一騒動あった。それはまた別の話・・・・・・・

結局、部屋に楯無さんは泊まるし、部屋に戻る途中に簪がいて俺たちを見て軽く泣きそうになるから宥めて色々あった。そのあと、楯無さんが泊まるっていったから簪も結局部屋に止まったし・・・・・・・ベット2つしかないのに泊まるから結局俺が床で寝ようとしたらベットに入れられてみんな一緒に寝るし・・・・・はぁ、楽しみだった夏休み・・・・・どうなることやら・・・・・

終業式の日って結局午前中授業あるんだよね（後書き）

そういえば慎二の容姿を説明してなかったんで説明します

鷹野慎二

身長１７２ｃｍ　体重５７ｋｇ　髪は少し長め

黒髪、黒目の生粋の日本人。髪は黒だが少し赤っぽさがある。基本的には黒に見えるが陽の光に当たると赤っぽく見えたりする。ルックスは１００人に聞いたら６割かっこいい、残り４割が普通と答えるくらいである。いわゆる少しかっこいい位だ。ちなみに一夏は９割がかっこいいと答える。友達や親のことを馬鹿にされると感情的になり周りが見えなくなる。

専用ＩＳ『雪月花』

基本的には白式と同じフォルム。色は白式よりも白く、白式の青いところや黄色い線が入っている部分も白く、肩のアーマーが少し刺々しくなっている。足のアーマーもがっしりとしている。白式との大きな違いはスラスターの大きさだ。スラスターが縦に大きく膝の後ろあたりまである。

第二形態『焔』

雪月花のスラスターの上に赤いピットのようなものが付いた。一つのスラスターに二つついている。これは『機体制御装置』で基本的にはＩＳの運動性能を上げるものだ。運動性能は現存するＩＳの中で赤椿に次いで第二位になっている。だが、ピーキーな代物なので

完全に扱うのは難しくなっている。

菊一文字

つばと柄の部分に菊の装飾がされている日本刀。刀身は2，5m。

漆黒ノ太刀

柄から刀身まで真っ黒な太刀。基本的に日本刀みたいなのを想像してもらえれば良い。刀身は3m。

バズーカ（ネタ）

バズーカの弾の中に100口径の銃弾が入っている。ある一定の距離を進むと弾けるようになっている。神が作った武器。

煉獄ノ剣

赤いエネルギー刃の武器。基本的にビームサーベルを想像してくれれば良い。エネルギー刃を細くできたり、太くできる。だが、菊一文字、漆黒ノ太刀よりも威力が高い。疾風迅雷と組み合わせることによって零落百夜と同等の威力を誇る。

ワンオフ・アビリティー『疾風迅雷』

シールドエネルギーを消費してISの運動能力を上げる。だが、全力で使うと骨や内蔵に影響がある。使い方によっては零落百夜より燃費が良くなるが基本的に零落百夜より燃費が悪い。

以上です。すいません、書くの遅くて。
しかも、わかりにくくてごめんなさい。

次話にご期待ください。

この調子だと夏休みが休みじゃなくなる・・・・・・・・（前書き）

先週、投稿できなかったので頑張って投稿しました。

朝チュンじゃなくて良かった・・・・・・・

と言っても今日は学校で夜更ししてるんだからあんま関係ないか。

では、本文どうぞ

この調子だと夏休みが休みじゃなくなる・・・・・・・・

「・・・・・・・ん・・・？」

朝日が刺してきて眩しくて俺は目を覚ました。

「・・・・・・・今、何時だ？」

頭が覚醒しない状態で充電してある携帯に手を伸ばす。

ふにゅ

「・・・・・・・ん？」

今テーブルのある方に手を伸ばしたら何か柔らかい物を掴んだような・・・・・・・

「・・・・・・・んぅ・・・・」

今、確実に俺じゃない奴の声が聞こえた。ビクビクしながらそちらを向くと

「・・・・・・・簪？」

そこには簪がいた。・・・・待てよ、そういえば昨日結局一緒に寝たんだ。やべぇ、寝起きで忘れてた。

ふにゅ

今度は背中に柔らかい物が・・・・・・・・・ってことは、楯無だよな。

「・・・・・・・・ん～、慎二く～ん」

「・・・・・・・・起きてるんよな？」

「あれ？バレてた？」

「当たり前だよ。行動がわざとらしいんだよ、楯無は」

「だって、慎二君が簪ちゃんを襲おうとしてるんだもん」

「違うわ！！！」

「え？じゃあ、私？」

「だから違う！！！襲うからとりあえず離れろ！！！」

「だって上半身裸なんだものしかたないでしょう」

「は？・・・・・・うおい！！！マジかよ！！！！！！」

「端から見れば襲ってるようにしか見えないわよ」

「確かに・・・・・って、何で上脱いでんの！！俺！！！」

「だって、私が脱がしたもの」

「おいこら、何してんだ」

「ところで今何時なの？」

「おい、スルーか・・・・・・・ちょっと待って」

簪の奥にあるテーブルに手を伸ばし携帯を取った。無理にベットをくっつけたから少し取るのに手間取った。

「え～と・・・・・・・８時？あれ、遅刻？」

「慎二君、今日から夏休みよ？」

「あれ、そうだっけ？」

「そうよ。ちょっと寝ぼけすぎじゃない？」

「そうだな、流石に寝ぼけてたな。って、流石に腹減ってきたな。食べに行くか？」

「そうね、そうしましょうか。じゃ、簪ちゃん起こしましょう。慎二君、よろしくね」

「何で俺なんだよ」

「好きな人にお越してもらったほうがいいでしょう？」

「そうか？」

「そうよ、だからよろしくね」

「はいはい、分かったよ」
俺は簪の近くに行って揺らした。
「お～い、簪、朝だぞ～」
「んぅ・・・・・・し・・・・・ん・・・・・じ・・・・・？」
あれ、超可愛いんだけど。何この小動物。
カバッ
「わ～い、しんじがいる～」
「ちょ、簪。何してんの！」
「簪ちゃん、寝起き悪いのよね～」
「お前、知ってたよな！！！絶対知ってたよな！！！！！って簪も何で薄着なんだよ！！！！！」
「それも私がやったの」
「おいこら！！！！妹に何やってんだ！！！！！つか、今更だがお前も薄着だな！！！！！」
コンコン
ん？今のってノックだよな・・・・・・？あれ、悪い予感しかしないんだが・・・・・・・・・

「慎二、いつまで寝ている。早く起きろ」

よりによって箒かよ！！！今の状況見られたら絶対に真剣出すよな、あいつ。ちなみに今の状況は、上半身裸の俺がYシャツとパンツだけの簪に抱きつかれていて、それを同じくYシャツとパンツの楯無が見ているという状況だ。一体どういう状況だ！ってツッコミは入れないでくれ。俺もそう思ってるから。

「慎二？いるんだろう。入るぞ」

あ～、これオワタ・・・・・・・

「全く、夏休みだからってだらけす・・・・・ぎ・・・・・・・・」

箒さんが固まりました、はい。状況が分かってないんだろうな。というか、脳内回路がショートしてんじゃないのか？

「・・・・・・・・・一体何をしている」

「え～と、朝の「慎二君に襲われてるの」・・・・ちょっと、何言ってんだ楯無！！！！！！」

「・・・・・・・・・・・・・」

ほら、箒が固まってんじゃないか。どうすんだよ、この状況。これじゃ、俺の執行猶予の時間じゃないか。というか、いい加減離れてくれよ、簪・・・・・・・・・

「・・・・・・・・・・・・・・・ぜろ」

「は？」

「私も混ぜろ！！！！」

「おま、何言ってんだ！！！！！」

ゆっくりと箒が近づいてくる。というか、あいつ壊れた！！！！！！！

「私だって、慎二に抱かれたい！！！！！」

「おい！！！！落ち着け、箒！！！！！！！」

「私は至って冷静だ！！！！」

「そういう奴に限って冷静じゃないんだよ！！！！！！！！！！！！！！」

ベットまでたどり着いた箒は俺に近づいてきた。

「待て！！！！！箒、そこで止まれ！！！！！！！！！！」

「あら、おもしろい」

「おい楯無！！！！！！何言ってやがる！！！！！！！！！というか、いい加減起きろ！！！！簪！！！！！！！！！！」

「慎二・・・・・」

そんなに距離がないからいつのまにか箒がそばにきていた。

「ちょ！！！待って！！！！！！おい、楯無！！！！！！！なんとかしろ！！！！元はといえばお前のせいだろ！！！！！！！！！！」

「え〜、こんな面白い状態なのになんで止めるの〜？」

「コノヤローーーーーーーー！！！！！・・・うお！！！！！」

箒に押し倒される状態になった。というか、これでも起きないのか、箒・・・・

「箒、ちょっと待とうな。落ち着くんだ」

「だから、私は落ち着いている。・・・・・・慎二、私じゃ嫌か？」

「いや、そうじゃないけど・・・・・って、待て！！！！顔近づけるな！！！！！！つか、服脱ごうとするな！！！！！！！！！！！！って、マジ待って！！！！！！！おい、楯無！！！！マジで助けて！！！！！！！！いやいやいやいやいやいや！！！！！！！！！！俺の貞操が！！！！！！！！！！！！！マジでやめてぇえええええええええええええええええええええ！！！！！！！！！！！！！！！！！！」

「・・・・・・・すまない、取り乱してしまった」

あれから20分の格闘の末、なんとか箏を落ち着けることに成功した。俺の貞操は守られた・・・・・

「あそこで箏ちゃんが襲ってくれれば私も参加したのに」

「お前はちょっと黙ってろ」

「え～」

何か言ってるが知らん。ちなみに簪はと言うと

「私、なんで薄着で慎二に抱きついてたんだろ・・・・・・・・・・もしかして・・・・いや、そんな記憶は・・・・・・・・」

といった感じになっている。箏との格闘中に起きて、そのまま訳が分からない状態で巻きこまれた。起きた時は俺の顔が近くにあって

驚いていた、という感じだった。まぁ、当り前っちゃ当り前か。というか、もう疲れた。そして腹も減った。いい加減ご飯食べよう、うん、そうしよう。

「とりあえずご飯食べに行こうぜ。さすがに腹減った」

「そうしましょうか。ほら、簪ちゃんも行くわよ」

「え？お姉ちゃん？・・・・う、うん」

おい、まさか楯無がいることも気が付かなかったのか？どんだけ寝起き弱いんだよ。

「箒はどうする？」

「私はもう食べた」

「そうか。だったらとりあえず付いてくるか？」

「・・・では、そうしよう」

気まずいのか少し歯切れの悪い言葉になっていた。まぁ、仕方ないか。俺も箒を直視できない。

「じゃ、行こうか」

俺たちは食堂に向かった。と言うか、こんなんで大丈夫か？俺の夏休み。つか、休みになるのかが心配だ・・・・・・・

～・～・～・～・～・～

現在は食堂内。時間が遅いだけあってか人は少ない。俺は食券を買って、いつも通りおばちゃんに渡した。

「おばちゃ～ん、よろしく～」

「はいよ。って、どうしたんだい」

「へ？何が？」

「顔だよ。すごく疲れてるみたいだけど」

主に後ろの人達のせいです。

「ははは、大丈夫だよ。心配しないで」

「そうかい？だったらいいんだけど」

はぁ、ほんとに疲れたな・・・・・・気にしちゃ負けだ、うん。

俺はいつも通り食事が来るのを待った。

「はいよ」

「ありがと」

人が少ないせいか、すぐに来た。今日は日替わり和食セットだ。本日のメニューはホッケの焼き魚、きゅうりと大根の漬物、しじみの味噌汁、ご飯だった。さっさと座ろう。といっても、席はガラガラなのですぐに座れた。

「はぁ、やっとご飯か・・・・・・・」

「どうしたの？そんなしみじみと」

「主にお前のせいだろ」

「なんのことかな～」

「はぁ・・・・もういい」

とりあえずさっさと食べよう。俺は最初にホッケに手をつけた。席に来る前に醤油を垂らしてきた。身をほぐして一口食べる。はぁ・・・・異様においしく感じる。すごくご飯が進む味だ。次にしじみの味噌汁に手をつけた。一口啜ると、しじみのダシと味噌の味がマッチしていてとてもおいしかった。しじみはあさりと違って食べるのがメインではなくダシを採るのがメインだからとてもいいダシが出ていた。

「はぁ、味噌汁ってこんなにおいしかったのか・・・・・」

「慎二、年寄り臭いぞ」

「うるせぇ、おいしいもんはおいしいんだよ」

そのまま食べ続けていると、携帯が鳴った。

「慎二、携帯が鳴っているぞ。出ないのか？」

「いいの。どうせメールだし。それと、俺は食事中は携帯使わないの」

「へぇ、そうなんだ～」

「そうなの」

俺はさっさとご飯を食べた。

「ふぅ～、お腹一杯だなぁ」

「慎二、お茶でも飲むか？」

「ああ、頼む」

箒がお茶を取りにいっている間に俺はメールを確認した。差出人はシャルロットだった。内容はこうだ。

『朝からメールしてごめんね。突然だけど明日の午後、お母さんと会ってくれないかな？無理ならいいんだ。突然だから無理なら別な日にするから』

といった感じだった。どうせ暇だし明日で問題無いな。俺は了承のメールを送った。すると、箒が戻ってきた。

「ほら、お茶だ」

「ありがと」

俺はお茶を一口啜った。

「はぁ～、やっぱ緑茶だな～」

「慎二君、おじいちゃん臭いわよ」

「うるせぇ」

一息つくと、箒が口を開いた。

「慎二、さっきのメール誰からだったんだ？」

「ん？ああ、シャルロットからだよ」

途端に箒の機嫌が悪くなった。

「箒、そんな怒った顔すんなって。別にデートとかじゃないから」

「だ、誰もそんなことは聞いていない！」

セリフとは裏腹に箒の顔に安堵の色が広がった。

「・・・・・ねぇ、慎二。今日は・・・・・何か予定ある？」

「ないよ、今日は一日中暇だ」

「なら・・・・・出かけない？」

「ああ、いいよ」

「じゃ、私も行く～」

「・・・・・・・・・どうする簪」

「お姉ちゃんなら・・・・・いいよ」

「箒はどうする？」

「今日は部活があるのでな。一緒には行けない」

「そうか。部活頑張れよ」

「ああ」

「じゃあ、１０時に校門集合でいいか？」

「うん」

「ええ」

「じゃ、俺は部屋に戻るから」

俺は部屋に戻った。

～・～・～・～・～・～

「・・・・・・・・はぁ～」

部屋に戻ってきた俺は一息ついた。そしてちらっと時計を確認した。９時２０分。待ち合わせまで４０分、いや１０分まえ行動するから３０分か・・・・・よかった、それまでゆっくりできる。俺は一度ベットに倒れこんだ。

「あ～、今日も疲れるんだろうなぁ・・・・・・・」

簪だけならよかったものの楯無まで付いてくるなんてなぁ・・・・・・何かしら一騒動ありそうだな。ま、気にしちゃだめだな。さてと、着替えてトイレ行ってから校門に行くか。

～・～・～・～・～・～

「・・・・・・ちくしょう、夏は嫌いだ」

俺は外に出て校門に向かっている。つーか、昨日も出かけたのに今日も出かけるのか、俺。俺ってこんなアウトドアだっけか？これも、みんなの影響なのかね。ま、インドアよりは健康的か。考えながら歩いていると校門に着いた。考え事しながら歩いてると早いな。

「あ、慎二君、おそ～い」

「あれ、もういたの？」

「そりゃあ楽しみだもの、早く来るわよ」

「それはすいません」

楯無さんの格好はフリルのついた白のスカートに赤いTシャツ、その上に青い上着を着ていた。なんつーか、似合うね、うん。軽く見惚れたもの。でも、これは秘密。これ言うと調子に乗るからね、楯無は。

「・・・・謝らなくていいよ。私達が・・・・早く来ただけだし」

そういう簪は、青いスカートに黄色いTシャツを着ていた。うん、簪も似合うな。

「簪、その服似合うな」

「／／／／・・・・ありがとう」

「ちょっと、慎二君！！！私は？」

「似合ってるんじゃないかなー」

「何で棒読みなのよ・・・・・どうぜ私なんて似合ってないんでしょうから・・・・・」

あれ、ふてくされちゃった・・・・てか、マジで落ち込んでるよな、これ・・・・・

「楯無、嘘だって！似合ってるよその服！！！」

「・・・・・ほんと？」

「ほんとだって！少し見惚れちゃったし！！！楯無は美人なんだから自信持てよ！！！」

カチッ

ん？何の音だ？

「今のはボイスレコーダーに録音させてもらいました☆」

「・・・・・・・・心配した俺がバカだった。つか、また騙された・・・・・」

「慎二君、落ち込まないでよ。慎二君の言葉、嬉しかったよ？」

「・・・・・・・・・・・・はぁ、もういいや。とりあえず早く行こう。さすがに暑い」

「そうしましょ」

俺たちは駅に向かった。

～・・～・・～・・～・・～

「あ、そういえば」

モノレールの中で俺はふと思い出した。

「8月20日くらいに海に行こうと思うんだけど、お前らどうする？」

「私は行くわよ～」

うん、こっちはある程度予想が付いていた。

「簪は？」

「私も・・・・・・大丈夫」

「そっか、なら詳しい予定決まったら連絡するな」

「うん」

「ところで慎二君、なんで海行くの？」

「いや、臨海学校の時みんなと泳いでなかったからさ。今度はみんなで泳ぎたいなって思ったんだよ」

「え～、私じゃ不満だったの？」

「そういうわけじゃないよ。ただ、みんなと思い出を作りたいんだよ」

「慎二って結構ロマンチスト・・・・・？」

「そこらへんてどうなんだろうな？ま、どうでもいいだろ」

～・～・～・～・～・～

「さ～てと、今日はどうすっかなぁ～。簪どうする？」

「私は・・・・・服見たい」

「じゃあ、お姉ちゃんが簪ちゃんに似合うの選んであげよう！水着もね！」

「程々にしとけよ」

「そうと決まればレッツゴー！！！」

「おい、楯無。一人で行くなよ！・・・・・・ったく、簪も行くぞ」
俺は簪の手を取った。
「あっ・・・・・」
「ん？どうした？」
って、俺が手を握ったからか。
「あ、悪い。手、離すな」
「離さないで・・・・・！」
「そうか？」
「ほ～ら、二人とも～早く行こ～」
少し進んだ所で楯無が呼んでいた。
「分かった！じゃ、行くぞ。簪」
「うん！」
～・～・～・～・～
結局あの後、服を買い、水着を買い、お昼を食べ、ゲーセン行ったりと色々して過ごした。そのおかげで7時近くになっていた。
「あ～、なんだかんだで遅くなったなぁ」

「そうね～、このまま外でご飯食べる？」

「そうするか。簪、何か食べたいのあるか？」

「特に・・・・・・・ない」

「楯無は？」

「私も特に無いわね」

「そうか。じゃあ、俺が食いたいのあるからそこでいいか？」

「ええ、いいわよ」

「うん」

俺たちは歩いてそこに向かった。

～・～・～・～・～・～・～

「五反田・・・・食堂・・・・・・・？」

「そ、ここ俺の友達の親がやってる店なんだよ。ここの業火野菜炒めが絶品でな、久しぶりに食べたくなったんだよ」

「へぇ、そんなにおいしんだ」

「ああ。とりあえず中入ろう」

ガラガラ

「いらっしゃ～い・・・・って、お前慎二か！？」

「おう、久しぶりだな、弾」

「ホント久しぶりだな！お前、連絡も寄こさねぇで何やってんだよ」

「まぁ、色々あんだよ」

「とりあえず座れよ・・・・・・って、一緒にいる美人誰だよ！！！！」

「あ？ああ、同じ学校の先輩と同級生。って、簪なんだけどな」

「簪？もしかして、保育園の？」

「ああ。簪、弾のこと覚えてるか？」

「うん・・・・・・・少しは」

「って、少しかよ！！！」

「いいから弾、さっさと案内しろよ」

「へいへい、分かったよ」

俺たちは弾に案内されて席に座った。

「じゃ、決まったら呼べよ」

「ああ」

弾は厨房に消えて行った。

「へぇ、色々あるのねぇ」

「ここのは基本なんでもおいしいよ。お勧めは業火野菜炒めだけど」

「じゃあ、私もそれにしようかな。簪ちゃんは？」

「フライ定食にしようかな・・・・・」

「おっけ。弾―！注文頼む！！！」

「ほいほい」

「業火野菜炒め二つとフライ定食一つでよろしく」

「おっけ～」

また弾は厨房に消えて行った。すると厨房から声が聞こえた。

「ん？今の声は慎二か？」

「あ、はい。ご無沙汰してます。厳さん」

出てきたのは弾の祖父、五反田厳だ。

「おう。ほんと久しぶりだな！何してたんだ！！！」

「まぁ、色々ありまして」

「そうかそうか！なんだか可愛い姉ちゃん連れてるしお前も隅に置けねえな！！！」

「ははは」

「ん、そうだな。蘭を呼ぶか。お前に会いたがってたしな。おーい！！！蘭！！！！！」

「なにー？」

「とりあえず降りてこい！！！」

少ししたら蘭が食堂の入口から出てきた。ここは家と店が完全に分かれているため、一度外に出ないと行き来が出来ないのである。弾曰く、「店と家が分かれてるおかげで店の事が家に干渉しないから楽だ」とのことだ。ま、分からなくもない。

「何？おじいちゃん、私宿題やってたんだけど・・・・って、慎二さん！？」

「久しぶり、蘭。夏休み始まったばっかりなのに宿題やってるなんて偉いな。兄とは大違いだな」

厨房のほうから「うるせぇ」と聞こえてきた。あれ、聞こえたんだ。

「あの慎二さん、一緒にいるかたは？」

「ああ、この二人はな・・・」

「慎二君の彼女で～す」

「ええ！？」

「おい、楯無。嘘言ってんじゃねぇ」

「ほ、嘘なんですね」

「あんなことやこんなこともしたのに・・・・・・」

「ええ！？」

「だから嘘言うな！！！誤解を受けるだろう！！！！！」

蘭が混乱した様子でこちらを見ていた。まずい、弁解しないと。

「蘭、こいつが言ってることは全部嘘だ。信じるなよ」

「ほ、本当に彼女さんではないんですね」

「ああ、信じてくれ」

「は、はい！」

ん？蘭の顔が赤い。熱中症か？夜とは言え油断はできないからな。

俺は席を立ち蘭に近づいた。

「蘭、顔赤いけど大丈夫か？」

「は、はひ、大丈夫です」

声が裏返ってるが、本人が大丈夫と言ってるんだ。大丈夫だろう。

「おーい、蘭！！！料理出来たから運べーーー！！！」

「分かったからおじいちゃん、そんな大声出さないで！！！」

蘭が厨房に言っている間、俺は席に戻った。

「慎二君、ここでもモテルのね」

「え？・・・・ああ、そういうことか」

「慎二君の事だから気づいてるだろうけどね」

「まぁ、そうだな」

「慎二さん、お待たせいたしました」

「ありがとう、蘭」

「い、いえ、これくらいは・・・・・・じゃ、私厨房に戻るので用があったら呼んでください」

そう言い残し、蘭は逃げるようにして厨房に帰って行った。

「さ、冷めないうちに食べるか」

俺は野菜炒めを食べた。うん、今日もいい味付けだ。

「へぇ、これおいしいわね」

「だろ？ここのはホントうまいんだよなぁ。簪のはどうだ？」

「おいしい・・・・学食のとはまた違ってこれはおいしい」

「へぇ、よかったな」

「食べたい・・・・？」

「ん？ああ、まぁな」

「じゃあ、食べさせてあげる・・・・・・」

「いや、恥ずかしいんだが・・・・・・・」

「嫌なの・・・・・・？」

「いや、違うけど・・・・・・ああ、分かった。じゃあ、食べさせてくれ」

「じゃ、じゃあ・・・・・・あ～ん」

「あ～ん」

サクサクの衣がこれはまたうまい。だが、それ以上に恥ずかしい・・・・・・

「う、うまいな、これ」

「そ、そう・・・・・・よかった」

「じゃあ、俺の食うか？」

「うん・・・・・」

「ほら、あ～ん」

「あ～ん・・・・・」

「どうだ？」

「うん、おいしいね・・・・・」

「だろ？」

「はい、慎二君。あ～ん」

「・・・・・・・何やってんの？」

「私の食べさせてあげるのよ」

「いや、メニュー同じじゃん」

「私の愛情が入ってるの」

いや、お前作ってないだろ・・・・・・ま、いいか。

「・・・・・・じゃあ、食わせてくれ」

「はい、あ～ん」

「あ～ん」

うん、味は変わらん。

「どう？」

期待した顔で聞いてくるなよ、ったく・・・・・

「うまいよ」

「よかった」

嬉しそうな顔で笑う楯無の顔が綺麗で見惚れてしまった。・・・・・くそ、今日はずいぶん可愛いな。俺はそう思ってるのを知られないようにご飯を食べた。特に何も言われなかったから問題ないだろ。その調子で食べているとすぐに食べ終えてしまった。

「ふぅ～、ごちそうさま」

「慎二君、早すぎない？」

「別にいいだろ。お前らは置いていかないから安心しな」

とは言ったものの、楯無たちもすぐに食べ終わった。

「おいしかった～。また来たいわね～」

「そうか、なら良かった。じゃ、帰るか」
俺たちは席を立ちレジに向かった。
「弾、会計頼む」
「おっけ～。え～と、２１００円な」
「ほい」
「毎度あり～」
「じゃ、またな」
「たまには連絡寄こせよ？それと今は夏休みなんだから遊ぼうぜ」
「ああ。厳さん、ごちそうさまでした」
「おう！また来いよ！」
「はい。じゃあ、さよなら」
蘭の姿が見えないが恥ずかしいのだろう。無理に会うのも可哀想だしこのまま帰るか。俺たちは帰路に着いた。
～・～・～・～・～・～
現在、寮に帰ってきた。そこで楯無が口を開く。

「あの、弾って子。結構かっこよかったわね」

「ああ、あいつ顔はいいのに性格が問題なんだよなぁ。それに女運も」

「へぇ、そうなんだ。今日、部屋に泊っていい？」

「いきなり話変わったな、おい」

「だって、あの調子でいえば了承してくれるかな～って思ったのよ」

「別にいいけど、俺の安眠は妨害しないでくれよ？」

「分かってるわよ。簪ちゃんも泊ろう」

「慎二・・・・・・・いいの？」

「昨日泊っといてそれ言うか？今更だろ？」

「じゃあ・・・・・・・泊る」

「はいよ」

俺は今日も面倒だなぁ、と直感していた。だけど、疲れたからさっさと寝よう。俺はさっさと寝ようと決意した。

結局、失敗に終わったよ、うん。途中に箒が来て部屋の状況を見て、私も泊るとか言うからまた一騒動あったんだよ。みんな、ベットで寝る羽目になるわで大変だよ。女子に囲まれて落ち着いて寝れるか、って思ったけど思いの他疲れてたらしくすぐに寝れたよ。ま、良かったか。明日はシャルロットのお母さんと会うのか。少し楽しみだ

な、どんな人か。

この調子だと夏休みが休みじゃなくなる・・・・・・・（後書き）

え～、内容に関しては何も言わないでください。

何だかごちゃごちゃなのは自覚してるので。

そして、忘れたけど１０万ＰＶを突破していたという。

早いね、５万ＰＶの記念話もつくらないうちに１０万突破しました。

これもみなさんのおかげです。ありがとうございます。

これこそ夏休み！！！・・・・・・なのか？（前書き）

すいません。更新開きました。

姉の卒業論文が本格的に始まったのでパソコンが使えない日が続いたんです。

しかも今週末テストなのでテスト明けまで更新はできません。終わってからも更新できないかもしれませんので、そのときはよろしくお願いします。

あと、久しぶりの更新なのに短いです。すいません。

これこそ夏休み！！！・・・・・・・なのか？

「あ～、午前中死ぬかと思った・・・・・・・」

俺は今、病院に来ている。朝は・・・・・まぁ・・・・一騒動あったけど無視の方向で。だって、今回は箒に殺されそうになるしね。あいつ、俺の部屋に勝手に来て泊まるとか言ってたのに起きたら俺を襲ってきやがった。あ、貞操が危ないほうじゃないよ？命の危険のほうね。どっちにしたって危ないけど。

「え～と、シャルロットからのメールだと確かここら辺のはず・・・・・・・お、あった」

メールにあった名前があった。　『ミーシャ・デュノア』個室だしここで間違いないだろう。

コンコン

「は～い」

「よ、シャルロット。元気だったか？」

「慎二！早かったね」

「そうか？」

「だって、慎二って時間にルーズでしょ？」

「そうだけど、大切な用事だったらちゃんと時間守るぞ？」

「そっか。あ、慎二。僕のお母さん紹介するね」
「はじめまして。シャルロットの母のミーシャです」
「こちらこそ初めまして。鷹野慎二です。って、若いですね。失礼ですがおいくつですか？」
「今年で３８歳です」
「マジか・・・・・」
明らかに俺前にいるのは２０代後半の綺麗な女性だった。なんだか、シャルロットが美人なのも頷けるな。
「とにかく座って」
「ああ」
俺はシャルロットが出してくれた椅子に座った。
「お体は大丈夫ですか？」
「ええ、お陰様で元気ですよ」
「もう、そんなこと言って。この前だって風邪ひいて退院遅くなったんでしょ？気を付けてよ」
「そうなんですか？」

「ええ。病気の方は問題ないんですが、元から体が弱くて」
「そうですか。でも、早いところ退院してくださいよ？シャルロットが泣いちゃいますよ？」
「し、慎二！誰も泣いてないでしょ！！！」
「あらあら、だったら早く退院しないとね」
「お母さんまで！！！」
シャルロットの様子を見て俺たちは笑った。シャルロットは弁解をしていたがその様子も微笑ましかった。
「シャルロット、少し飲み物買ってきてくれる？」
「わかった、慎二は何飲む？」
「ん～、じゃあ緑茶で」
「じゃ、行ってくるね～」
シャルロットが病室を出たことを確認してミーシャさんは口と開いた。
「慎二君、ありがとうね」
「病気のことですか？だったら、G．W．社の方に言ってくださいよ」

「シャルロットのことよ」

「シャルロットの？」

「ええ。あの子、イタリアで入院してた時とても無理してたのよ」

「・・・・・でしょうね、あいつの性格からして」

「だからこそ、私は辛かった。あの子が怪我をして帰ってくる、その姿がとても痛々しかったから」

もしかしてデュノア社の奴ら、暴力も振るってやがってたのか？とことん糞だったんだな。

「だけどそれも日本に来てから変わったのよ、あの子」

「変わった？」

「ええ、イタリアで一緒に暮らしてた時みたいにね。それも慎二君のお蔭なのよ？」

「俺ですか？俺はただ、G・W・社の社長に頼んだだけですよ？」

「それでもよ。あの子があなたにすべてを話した時、あなたは受け入れたのでしょう？あの子はそれに助けられたのよ」

「・・・・・あんま自覚ないです。ただ、俺は思ったことをシャルロットに伝えただけなので」

「だったらあなたはとてもいい人ね」

「・・・・恥ずかしいです、そんな面と向かって言われると」

「ふふふ、可愛いわね～」

「言われてもあんまり嬉しくないですからね」

「わかってるわよ、そんなこと。だけど、あなたみたいな子っていじめたくなっちゃうのよね～」

・・・・・あれ？この人軽く楯無に似てるな。けど、やっぱりシャルロットのお母さんなんだな。考え方とか、人の心を見透かしてるところとか、な。やっぱり、いいな家族って。

「お待たせ～」

「おかえり、シャルロット」

「はい、慎二。緑茶ね」

「ありがと」

「お母さんは紅茶だよね？」

「ええ、何も言わなくても分かってくれてるのね」

「それは、家族だからだよ」

「ですって。どうですか？ミーシャさんからして、嬉しいですか？」

「そりゃあ、愛娘からの言葉だもの。嬉しいに決まってるじゃない」
「二人とも仲良くなった？」
「まぁ、そうでしょうね。ね、ミーシャさん」
「そうね」
「・・・・・・・むぅ」
「大丈夫よ、シャルロット。あなたの愛しの慎二君は取らないから」
「ちょっと、お母さん！！！」
しばらく俺たちは楽しく過ごした。
～・～・～・～・～・～
「あれ？もうこんな時間か」
時計を見るともう5時を超えていた。楽しいと時間がすぎるのが早いな。
「さすがに俺は帰りますね。一応、遅いと寮長に怒られそうなので」
「あらあら、もうそんな時間？時間ってすぎるの早いわね～」
「シャルロットはどうする？」
「僕はもう少しここにいようかな」

「そんなこと言わないで一緒に帰ればいいのに」

「お母さん、せっかく残るって言ってるのに酷くない？」

「そんなことないわよ。慎二君と一緒に帰ればいいじゃない。そうすればアプローチ出来るんじゃないの？」

いや、ミーシャさんそれを言っている時点でアプローチは意味がないかと・・・・・・・

「アプローチ・・・・・」

おい！そこに反応するんかい！！！！

「うん！じゃあ、一緒に帰ろう！慎二！！！」

いや、満面の笑みで言われましてもね・・・・・・・・・」

「シャルロットをお願いね、慎二君」

ああ・・・・・・・もうどうでもいいか

「はい、分かりました。じゃ行くか、シャルロット」

「うん。またね、お母さん」

「頑張ってね、シャルロット」

俺達は病室を後にした。

～・～・～・～・～・～

今はモノレール内。病院からここまで来るのに1時間かかっている。ミーシャさんが入院している病院はＩＳ学園からは駅を2つ乗り継いで行かないと行けないから基本的に時間がかかる。
と言うか、1時間あるからなにかしらアプローチするかと思ったけど何もないな。病院出る前に言っていたから何かしらはやってくるかと思ったけど・・・・何も無かった。まぁ、そっちの方がいいんだけどな。だって心臓に悪いだろ？

「・・・・・・ねぇ、慎二」

今まで黙っていたシャルロット口を開いた。

「どうした？」

「・・・・・・・ありがとうね」

「？何に対してのお礼だ？」

「一番はお母さんの事かな。あとは色々かな」

「色々って・・・・・・さすがにアバウト過ぎないか？」

「でも、慎二には色々助けてもらってるから一言では言えないよ」

「そうか？そんなに助けてる自覚ないけどな」

「はは、慎二って鋭いんだか鈍いんだか分からないね」

「自分では鋭い方だと自覚はしてるぞ？」

「でも僕は鈍いと思うよ？」

「う～ん、どうなんだろうな、そこらへんは」

「僕もよく分からないや」

「・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・」

再び沈黙が支配する。

俺は別に、居心地が悪くはないがシャルロットは何か言葉を探そうとあたふたしている。何だか微笑ましいと言うか何というか・・・・・・・・

「シャルロット、無理に会話しなくてもいいだろ？」

「え！？」

突然話しかけられてびっくりしたみたいだ。

「だから、無理に会話繋げなくてもいいだろ？」

「でも、それだと慎二がつまらないでしょ？」

何でまたこいつは自分よりも他人を優先するのかね・・・・・・・・

「そんなことないって、俺は楽しいって」

「でも・・・・・」

「はぁ、この際だから言っとくけどなシャルロット。お前は性格を直したほうがいいと思うぞ」

「性格？」

「そ、他人を優先するんじゃなくてたまにはわがままとか言ってみたらどうだ？他人を心配するのは良いことだけど、それだと人生損するぞ。さらについでだが、俺はお前と一緒にいると楽しいからな」

「そ、それって僕だから楽しいの？」

って、何でそこに反応するんだか・・・・・・・はぁ

「まぁ、お前だから楽しいな」

「僕だからか～・・・・・えへへへ」

再び沈黙がこの場を支配するがシャルロットも先程と違って落ち着いている。どこかほっこりしているから放っておこう。

暫くそのままでいた。

～・～・～・～・～

「ふぅ～、やっと戻ってきたか～」

現在モノレールを降りた。あとは歩いていけばＩＳ学園に着く。何

だかんだで1時間半の道のりだった。
流石に少しは疲れるな。ずっと電車に揺られてたし。
「さすがにシャルロットもこれだと行くの大変だな」
「そうでもないよ？お母さんに会えるって考えるとね」
「そうか」
「でも、帰りは疲れるかなぁ」
「流石に仕方ないな、これだと」
それから暫く歩いた。するとシャルロットが口を開いた。
「ねぇ、慎二」
「どうした？」
「さっきわがまま言っていいって言ったよね」
「まぁ、言ったな」
「今、そのわがまま聞いてくれる？」
「内容にもよるな。とりあえず言ってみ」
「じゃあ、言うね・・・・・・・・・・・・・・キスして」
「・・・・・・・・・・・・・・は？」

「だから・・・・・・・キスしてって」

「・・・・・・・理由聞いてもいいか？」

「う～んとね、慎二のこと好きだからじゃだめ？」

いや、上目遣いで言われましても・・・・・・・まぁ、可愛いんだけどな

「はぁ、なんでまた最初のわがままがこんなハードル高いんだか・・・・・・・・・・・・・分かったよ」

「ほ、ほんと！？」

あれ？これ断れたんじゃね？でも、言っちゃたからな～。はぁ

「じゃあ・・・・・」

そう言ってシャルロットは目を閉じて唇を突き出してきた。

・・・・・こう見るとシャルロットって綺麗な肌してるよなぁ。

って、さっさとして終わろう。

俺はゆっくりシャルロットに顔を近づけていった。

チュ

俺はキスをした。頬に。

「え？何で頬っぺたなの！！！」

「誰も唇にしろとは言ってないだろ？」

「そうだけどさぁ・・・・・・・」

そう言って唇と尖らせながらシャルロットはふてくされた。俺はその様子が面白くて一つ悪戯をした。俺は少し強引にシャルロットの顎を取って唇を奪った。

「！？！？！？」

シャルロットはいきなりの事でびっくりしたみたいだ。

「じゃあな、シャルロット」

「え？慎二、今のって・・・・・・・」

俺は恥ずかしくてすぐにその場を離れた。
理由は恥ずかしいからだ。いや、恥ずかしいならするなって話だがあの顔見たら何となくしたくなったんだよな、何故か。ま、深くは追求しないでくれ。
暫く歩いて寮の前に来たら声を掛けられた。

「あれ？慎二じゃん。どこ行ってたんだ？」

一夏は第3アリーナの方から来たから練習でもしていたのだろう。

「なんだ一夏か。少しシャルロットのお母さんの所にな」

「シャルロットのお母さん？何でまた」

「呼ばれたんだよ。それよりも中に入って夕飯食べないか？」

「お、いいな。俺も腹減ってたんだ」

俺たちは食堂に向かった。

～・～・～・～・～

「ふぁ～、眠い・・・・・・・・」

今は夕飯を食べて自室に向かっている。今は夏休み中だから廊下を通る人も少ない。ＩＳ学園は半数近くが外国から来ていたり、九州、北海道からも来ているみたいだから帰省しているのだろう。俺は家に帰ってもやることないし帰らないけどな。部屋の前に来たからドアを開けた。

「あ、お帰り慎二君」

「何でお前は何くわぬ顔で俺の部屋に居るんだよ、ったく」

「え～、いいじゃない。どうせ二人部屋なんだし」

「そう言う問題じゃないだろうが」

「愛の力でそんなものは跳ね返せるものよ」

「はいはい、分かりました～」

「もう、最近反応が薄いんじゃない？」

「そうでもないって」

「それよりも今日はどこ行ってたの？」

「どこだっていいだろ」

「隠すってことは・・・・・・・浮気ね！！！」

「なんでそうなる！！！！つか、そもそも付き合ってすらないだろ！！！！！！」

「いいのよ、そんな細かいこと」

「いや、細かくないよねぇ！！！！！！！！！！！！」

何で楯無と話すとこんな疲れるんだろう・・・・・・・・・

「はぁ、疲れたから寝させてくれ」

「じゃあ、マッサージでもしましょうか？あなた」

「誰があなただ・・・・・でも頼もうかな」

「はいはい。じゃあ、ベットに横になって」

俺はベットに横になった。

何だかこのまま寝れそうな気がする。

「じゃあ、始めるわよ～」

まずは足から重点的に始めた。

「そういえば、楯無は実家に帰らないのか？」

「ん～、帰っても意味がないからね～。それよりも慎二君といたいし」

「そうか・・・・・・」

ああ、何だか眠くなってきた・・・・・寝る前にひとつ聞いとくか。

「なぁ、楯無」

「なに～？」

「クローン技術って完成してるのか？」

「どこの国も成功してないはずだけど？」

「そっか・・・・ありがとな」

「どうしてお礼言うの？」

「何となくお礼言いたくなったんだよ」

「じゃあ、そういうことにしときましょうか」

そのままマッサージ受けていたが直ぐに睡魔に負けて眠りについた。

ここは日本のある場所。そこはどこかの広めのラボな様な感じだった。機材が沢山床に落ちていて、ほとんど床が見えないくらいだ。唯一、一口近くが綺麗になっている。一角にはキッチンがありそこには誰かがいた。

「エイム～、ご飯まだ～？」

「もうちょっとだから待ってて～」

少女が声をかける。少女は中学生くらいだ。髪はマロンブラウンでロングヘアーだ。エイムと呼ばれたのは男性だ。こちらは２０代半ば位に見える。髪は緑でポニーテールになっていて、メガネを掛けている。

「よ～し、できたぞ～」

「今日はハンバーグだね。エイムのは美味しいからなぁ」

「ありがとう。じゃあ、食べようか」

「うん、そうだね」

「「いただきま～す」」

二人は食事を始めた。

同じ建物のある部屋に少女はいた。その部屋は女の子っぽい物が置いてあり、まさに女の子の部屋と言う感じだ。少女の髪は赤みが入った黒、長さは背中までである。見た目は高校生位だ。

「慎二・・・・」

少女は愛しそうにその名を口にした。

「あぁ、早く会いたいなぁ。私だって気づいてくれるかなぁ～」

その少女は微笑んでいた。楽しそうに微笑んでいた。

「ふふ、私だって綺麗になったのよ。あ、でもそれだと気づかないかもしれないかぁ。それなら仕方ないかなぁ」

だが、その笑みは不敵にも見える笑みだったとだけ言っておこう。

そして、時間だけは過ぎていく・・・・・・・・・・

これこそ夏休み！！！・・・・・・なのか？（後書き）

最後に少し何かが動き出しましたね、はい。

勘がいい人はわかるかもしれませんね、正体が。

はい、ではさよなら。

書く事少なくてすいません

ＰＶ５万、１０万企画！！！（前書き）

すいません、また遅れました。

やっと、テストも終わり姉も卒論が終わりそうなので更新できました。

久しぶりの更新なのにＰＶ企画をやっと書き終わったので更新します。

今回はメタルギアとのコラボです。慎二は出てきません。あと、少し勝手に設定を変えました。

あと、本編に関係あるようで関係ありません。

では、どうぞ

ＰＶ５万、１０万企画！！！

２０２７年１１月２３日

この日は、ある出来事が起きた。誰も知らないある出来事が・・・・・・・・・・・・・

アメリカ、アラスカ半島北部の海底８０ｍ地点。ここにある潜水艦が潜んでいた。

「目標ポイントまで残り３００ｍ」

その潜水艇にはある男が乗っている。男は潜水マスクを被っており、顔は見えない。身体にも断熱スーツを着ている。男の乗った潜水艦は進んでいく。

～・～・～・～・～・～

潜水艦はある島に到達する。そして、島の地下部の穴から内部に潜入する。何故、穴が開いているかは後々説明しようと思う。

ある程度進むと、潜水艦から男が出てきた。そのまま潜水艇を捨て、男だけが島に進んで行く。すると、岸らしきものが見えてくる。男は岸に上がり近くにあったコンテナの近くに身を隠した。そして、耳の後ろに指を当てた。

「こちらスネーク。島への侵入に成功した」

彼はスネーク。伝説の兵士『ビックボス』の細胞から生まれたクローンである。だが、スネークは劣化しており年を取るのが常人の数倍になっている。

「よし、スネーク。そのまま潜入を始めてくれ。くれぐれも見つかるなよ。テロリストから連絡が入り２時間が経過した。時間はかけ

られないぞ」
彼の名はロイ・キャンベル。階級は大佐。この作戦の指揮官をしている。
ここで本作戦について説明しておこう。本作戦はスネークが今いる『シャドーモセス島』にある兵器の破壊である。兵器と言うのは『メタルギアREX』。
ただの破壊任務なら大勢でやるものだが今回はできない。理由は、この作戦開始前まで時間が戻る。

～・～・～・～・～・～

今から6時間前、ホワイトハウスにある知らせが入った。『これから6時間後、シャドーモセス島のメタルギアでG・N・を破壊する』とのことだった。
これから、メタルギアの危険性とG・N・の説明をしようと思う。
まずメタルギアの危険性だが、危険性はメタルギア本体ではなく武装に問題があるのだ。その武装とは『ステルス核弾頭レールガン』。この武装の厄介な所は3つある。
まず一つは、これがレーダーに映らないことだ。普通は、このような兵器はレーダーに映るものだがこれは映らない。理由は、特殊粒子によるジャミング効果だ。これで、レーダーの機能を妨害する。
次に2つめは、この兵器はレールガンの速度で核兵器と同じ威力を持つことだ。レーダーに映らないことを考えると目視でないと確認できない。だが、レールガンの速度を持っているので確認は出来ないに等しい。
最後の3つ目は、射程距離だ。この兵器の射程距離は大気圏外まで到達する。

それほどの威力と射程距離を誇るのだから地盤がしっかりしてないと撃つことは出来ない。それが欠点だと言えるだろう。だが、それを補うためにメタルギアＲＥＸがある。メタルギアＲＥＸがあれば大抵の所で発射する事ができる。

次はＧ．Ｎ．について説明しよう。Ｇ．Ｎ．は地球全土に存在する『ナノマシンの制御装置』だ。これは衛星で現在も地球の周りを回っている。

今の世界ではどの国の兵士達にもナノマシンが埋め込まれている。ナノマシンの効果としては感情の制御、身体能力の上昇、ＧＰＳ機能、ナノマシン導入者同士の思考の共有などがある。なので、ナノマシンがなくなると兵士は何もできなくなるに等しい。

以上の事からＧ．Ｎ．が破壊されると多大な被害が出る。（紛争地域などに）それを防ぐためにこの作戦が開始された。

～・～・～・～・～・～

時は更に、２ヶ月前に遡る。

２ヶ月前、世界を震撼させるある事件が起きた。『白騎士事件』である。所属不明のＩＳ（正式名称インフィニット・ストラトス）が、日本に来る世界各国のミサイル『１１３２発』をたった一機で全て落としたのである。（この時、世界各国はハッキングをされてミサイルを発射した）この事件を聞くとナノマシンは必要ない、と思われがちだが実際は違う。現時点で存在しているＩＳは白騎士以外は無い。が、ＩＳのコアは４６７個ある。そのＩＳのコアは、各国に配られた。だが結局の所、ＩＳの研究を始めたのは２ヶ月間だからどこの国もＩＳの形にすらなっていないのだ。

なので、現時点では軍隊が必要になりＧ．Ｎ．が必要なのである。

～・～・～・～・～・～

時間は戻りシャドーモセス島。スネークは行動を始めた。

「これより潜入任務を始める」

スネークは物陰から顔を出し、周りの様子を確認した。が、全くといって良いほど人の気配がしない。

「大佐、このフロアには敵は居ないみたいだ」

「好都合だな、早く上のフロアに行くんだ。時間は四時間を切っている」

スネークはフロアの捜索を始めた。が、捜索するまでもなくエレベーターは簡単に見つかった。しかも、エレベーターは下に降りてきている。スネークはそのままエレベーターに乗った。

～・～・～・～・～・～

エレベーターの途中でスネークはマスクを取っていた。顔は二十代前半の顔立ちだ。額にはバンダナをしている。

エレベーターが最上階に到達すると、そこには白銀の世界が広がっていた。一面が白で埋め尽くされている。視界も吹雪のせいで悪い。だが、ここでもスネークは違和感を覚えた。

（ここにも兵士がいない？監視の必要がないと言うことか？一体どうなっている・・・）

ナノマシンには視力の上昇もあるので、吹雪でもある程度は視界が確保できる。スネークは違和感を覚えながらも建物の方角に進んで行った。周りの気配に気を付けて。
建物に到達しドアを見つけ近づいた。そして、ドアに手をかけると簡単にドアが開いた。

（鍵をかけていないだと？ここに居るのはテロ集団じゃないのか？ここまで警備が薄いというのもおかしい・・・）

スネークは警戒し、ドアを少し開け中の様子を確認する。が、中は今まで通り人の気配がしない。

「大佐、ここにも兵がいない」

「テロリストはいないと言うのか？」

「そうとしか思えない」

「一体どういうことだ？あの予告は嘘だと言うのか？くそ、何がどうなっている！」

キャンベルは状況の把握が出来なくて苛立ちを募らせた。同時にスネークには不安が広がっていた。今まで経験したことのない状況でわけが分からなくなっていた。

「・・・・・スネーク、とりあえずだがメタルギアの格納庫に向かえ。何事も無かったら破壊して戻ってこい」

「了解」

スネークはそのまま内部に潜入した。中を見渡すも人の気配はない。
「大佐、格納庫はどこにある？」
「近くに大きなシャッターのような物はないか？その先のフロアにある」
そう言われて、スネークは周りを見渡した。すると、簡単にシャッターが見つかったシャッターの近くに寄ると勝手に開いた。
「・・・大佐、これは罠だと思うか？」
「ああ。だが進むしかない」
「わかっている」
そのまま先に進もうとする。が
ザッ
後方から物音が聞こえた。スネークは即座に音がした方向に『Ｍｋ．２２』を向けた。
「誰だ！」
「あらら、見つかっちゃったか」
そう言いって、音がした物陰から両手を上げた男が出てきた。男は二十代くらいだろう。髪は茶髪で前髪が少し癖っ毛だ。
「お前は誰だ？何故ここにいる？お前テロリストか？」

「少し質問多くないか？」

「いいから答えろ。言わなければ撃つ」

「あ～、分かった分かった。ちゃんと話すからまず落ち着こうか。まず、その物騒なもん下ろして」

スネークは銃を下ろした。

「じゃあまず自己紹介からしようかね。俺は十六代目の更織楯無」

「更織？まさか、あの暗部のか？」

「そ。で、ここに来た理由は調査。まぁ、今ここに有るのなんてメタルギアＲＥＸしか無いけどな」

「お前、何故それを・・・国家機密レベルのものをどうやって」

「更織家を舐めて貰っちゃ困るよ。さて、今度はあんたの事教えてよ。伝説の英雄（スネーク）さん？」

「！？」

「何で知ってるって顔してるけど、あんた結構有名人だからな、暗部の世界だと」

「あまり嬉しくないな」

「そんな事言いなさんなって。単独潜入してグレイフォックスの壊

滅、そしてメタルギアの破壊。全く、文字通り伝説だな」
楯無はケラケラと笑いながら言う。
「どうせ今回だってメタルギアＲＥＸの破壊が目的なんだろ？」
「・・・・・」
「その無言は肯定と採ってかまわないか？」
現在の状態だと楯無が有利になっている。が、戦闘になればスネークが有利になる。それを知ってか、楯無はある一定の距離を取っていた。
「じゃ、こんな情報はどうだ？あんたも疑問に思っているだろうが、何故ここに兵士がいない理由を」
「・・・・・・」
「それにはちゃんと理由がある。兵士を置かなくともそれ以上の戦力になるものがあればいい」
「まさか・・・・・！」
「そのまさかだよ。ここにはＩＳが配備されている」
「だが、ＩＳはどこの国も完成していないはずじゃ・・・」
「開発に成功したのは国じゃないんだなぁ、これが」

「どういうことだ？」

「テロリストが開発したんだよ」

「テロリストにそんなことできるはずがないだろう」

「普通はね。だけどある人物の協力があれば可能じゃないかな？」

「ある人物？」

「エイム・シュナイダー」

「！！・・・・・なる程、そう言うことか」

エイム・シュナイダー
この名を知らない人は地球上にはいないのではないかと言うくらいの有名人だ。
十年前、自立型二足歩行ロボット『キュベイダー』を世界で初めて作った人物だ。二足歩行ロボットで日本には『アシモ』がある。が、結局コンピューターでプログラムした行動しかできない。それに対してキュベイダーは『自分で考え、自分で動く』事ができる。
このような開発ができた彼ならＩＳだって作れるはずだ。

「だが、奴はもう７０を越えてるはずだ。とてもじゃ無いが開発に参加出来るとは思えない」

「まぁ、普通はそうだけどそれすらも意味をなさないって言ったらどうする？」

「どうゆう意味だ？」

「それはあんたが一番分かるはずだよ。あんたと一緒なんだ、今の奴は」

「一緒・・・・・・？・・・・・・！まさか、クローンが！？」

「そう、今の奴はクローン。二十代くらいになっている」

「と言うことは、今の奴は全盛期って事か」

「まぁ、そうなるだろうな」

「話を聞かせて貰って悪いが時間が余りない。もうそろそろ失礼させてもらおう」

「だったら俺もご一緒しようかな」

「何故だ？」

「さっき言ったろ。俺だって調査はメタルギアなんだよ。一緒に行ったって問題ないだろ？」

「・・・・・・・・良いだろう」

彼らはメタルギア格納庫に向かった。

～・～・～

「ここまで楽に来れると言うのは、流石に不気味だな・・・・」

現在、メタルギア格納庫前。これまで、敵兵は勿論、無人偵察ロボット、監視カメラの部類が全く無かった。
あったとしても、老朽化が進みとても稼働をしているようには見えなかった。

「肝心のＩＳは一体どこなんだろうな」

「あれ～、確かな情報なんだけどなぁ・・・・・もう撤退したのか？」

『スネーク。話をするのは良いが、できるだけ早くしてくれ。２時間を切った』

「分かった。これより、メタルギアの破壊行動に移行する」

手には取りあえずオペレーターを持った。敵がいないと分かっていても癖と言うのは抜けないものだ。
スネークは内部に潜入した。とっさに右、左に銃を向け内部を確認した。内部は少し高くなっている所があった。

「・・・クリア」

「別に敵がいないんだからそんなことしなくても良いだろうに」

「これは癖だ。生き残る為に身に付けたな」

「そうかい」

「それよりもメタルギアはどこだ？見当たらないんだが・・・」

「確かあの高いところがエレベーターになってて、上にあるって話だ」

「なる程・・・」

スネークは上を見た。上は吹き抜けになっていて、上にもう一つフロアがあるのは確認できた。

「操作盤はここか・・・」

スネークはスイッチを押した。

ガコン

エレベーターは動き出した。

「この上にこの事件の主犯者がいるはず・・・」

「さぁ？それはどうかな」

「どういうことだ？」

「あえて誰も置かないでこの島をドカン、って可能性もあるだろ？」

「・・・・・・・確かにそれも有り得るが、だったらなんであんな犯行予告をしたんだ？」

「あんたの抹殺、ってのが一番有り得るんじゃないか？ま、あくまで全部俺の予想だけどな」

「・・・・・・・・用心するのにこしたことはないな」

「それもそうだ」

話しているうちにエレベーターが最上階近くに到達していた。

ガコン

最上階に辿り着くと、そこには静かにメタルギアが眠っていた。

「これがメタルギア・・・・・・・・！」

格納庫正面にはメタルギアＲＥＸが静かに眠っていた。（形は画像を検索して確かめてください）

「やぁ、待っていたよ」

いきなり上から声が降ってきた。声がした方向を見ると、男が何か機械の様なものを装着した姿で降りてきた。宙に浮きながら。

「お前は・・・・・エイム・シュナイダーか・・・・・・・！」

「よく分かったね。今の僕は若返っているはずなんだけどな」

「それはここにいる奴が教えてくれたんだ」

「？一体誰の事だい？」

周りを見渡すと、スネークとエイム以外は誰もいなかった。楯無は逃げたのだろう。

「・・・・・・まぁ、いいか。ところでお前が装着しているその機械はなんだ？ＩＳか？」

「よく分かったね。その通り、これは僕が作った『キャパシティ』だ」

「キャパシティ？それがそのＩＳの名前か？」

「ああ、僕はこれに乗って世界に復讐してやるんだ」

「・・・・・・・・」

「僕のキュベイダーを殺戮兵器にした世界への」

当初キュベイダーは介護用ロボットとして作られた。だが、軍の関係者がキュベイダーのプログラムを変更して『人を殺す機能』を作った。最初は、研究室の中でテストを繰り返し銃やミサイルを使えるようにした。そして改良を重ね、『Ｋｉｌｌモード』と言うのを作り上げた。その機能は熱反応や生体反応を感知するカメラがあって、それに反応した物を方法を選ばず殺す、と言う機能だ。それで自立型殺戮兵器の出来上がりである。

今までは、紛争地域などに無人飛行機を飛ばし、その飛行機をゲームの様なコントローラーで操作し画面に映った人を殺す物が実際に軍で使われていた。簡単に紛争介入が出来るといった利点の反面、現実と画面のギャップ（画面で人を殺しているのに、自分は温かい家庭を持って過ごすなど）で精神が不安定になったりした。

だが、キュベイダーにはそのような心配はない。そのせいもあって

か、最初にアメリカが実践してから次々と他の国も同じものを作り、使用していった。

「僕のキュベイダーは人を助けるために作った介護ロボットだ。なのに。軍は兵器に仕立て上げて・・・・・・・・そんな世界を僕が壊してやるんだ、争いのない平和な世界を」

「だが、人が存在する限り争いは消えない。人とはそう言う生き物だ」

「だからこそだよ」

エイムは口角を吊り上げながら言った。

「そんな世界には見せつけてやらなければならない、圧倒的な力を。そして、服従させるんだ。そうすればくだらない争いは消える」

「そんな事をして何の意味がある！統一された世界ではいつか人は飽き、同じことを繰り返す！」

「だったらその度にやり直せばいいんだ」

「どうやってやり直すんだ。お前はいつか死ぬ。そんなのは諦めろ」

「それだったら関係ない。死にそうになったらまた作ればいいんだ、僕のクローンを」

「ああ、それと忘れてた」

何かを思い出したようにエイムは言った。

「僕は君と同じクローンだけど根本的に違う。君は試験管ベイビーだけど、僕はオリジナルの細胞から直接生まれたんだ」

「何？そんなことができるのか？」

「ああ。だけどその分生きていられる時間が少ない。だけど、記憶はデータ化してあるから、それから改良を加えていけば関係ないんだけどね」

「・・・・・今のお前はどのくらい生きられる？」

「まぁ、大体１カ月前後かな」

この時スネークは思った。これまで執着してこいつは何をしたいんだと。作った世界に何があるのだとも思った。

「さぁ、そろそろ話を終わりにしようか」

そう言って、エイムはＩＳの武装を取り出した。

「君は生身の人間。ＩＳがあれば簡単に殺せるんだ」

「だったら、どうするんだ？」

「ここでＩＳの実験をしようかな、君を非検体にしてね」

エイムは、５０口径アサルトライフルの銃口をスネークに向けた。

（ＩＳは戦闘機すら簡単に破壊する兵器・・・・・このまま戦っ

ても勝機は無い。このまま逃げるか？いや、無理だな。あの機動力がある時点で無理だ）

思考を走らせるが案は出てこない。

「そろそろ、案が決まったかい？疲れたんだけど」

「ああ・・・・・・俺も寒くて嫌になっていたんだ」

「じゃあ、そろそろ・・・・・・・始めようか！！！」

そう言って、エイムは銃を発射した。

（っく！・・・・・早い）

ギリギリの所でスネークは横に転がりよけた。基本的に５０口径弾はライフルだ。狙撃用の銃を至近距離で撃たれたらよけるのが精一杯だ。いや、普通ならよけることすら出来ない。そこはナノマシンを埋め込んでいる為に上がる視力とスネークの身体能力にある。あとは、エイムがあまり銃に慣れていないことも要因だろう。

「へぇ、良くよけたね。さすが伝説の英雄だ。だけど、まだまだ終わらないよ！！！！」

次々と弾を撃ってくるエイム。その弾をギリギリでよけているスネーク。明らかに劣勢なのはスネークである。

（くそっ、このままじゃいつか当たってしまう。反撃をしなければ・・・・・・！）

反撃をしようとしたスネークが取り出したのは『ＲＰＧ－１』。ロケットランチャーである。エイムが弾薬のリロードをしている間にそれを撃った。

「なっ！！！」

反撃をしてくるとは思わなかったのだろう。初めてエイムが驚いた。

ドカーン！

爆発の煙でエイムが見えなくなった。

（少しくらいはダメージが通って欲しいもんだが、ＩＳにはシールドエネルギーがあると聞く。ダメージは通ってないと考えたほうがいいだろう）

煙が晴れてきて見えたのが、装甲が所々壊れているＩＳを装備しているエイムだった。

「っく、シールドが作動してないだと！？どういうことだ！！！」

（シールドが作動していないのを奴は驚いている？誤作動・・・・・・いや、正常に作動していないのか）

エイムのＩＳは８割方完成はしていた。そこに２割にシールドエネルギーが含まれていた。だが、エイムもそこの点は解決したつもりだった。が、エイム自身にも不安はあった。何せどこの国も完成していないのだ。当たり前といえば当たり前だろう。

（どちらにせよこちらにとっては好都合だ。今の状態なら銃も効くということだ）

ここで初めてスネークにも勝機が見えたわけだが、運動能力や武器の威力は結局の所エイムの方が上なのである。

「装甲が無くなったところで君は死ぬ運命にあるのさ！！！」

「そうはいかない。こちらにもやることがまだ残っているのでな！！！」

スネークはコンテナに隠れ、装備を確認した。

（今こちらにある武器は、リモコンミサイル、Ｍｋ．２２、ＡＫ４７、ＳＶＤ、グレネード、手榴弾、Ｃ４（プラスチック爆弾）があったはずだ。プラスチック爆弾はメタルギアの破壊をするためのもの。それよりもあと何分残ってるんだ？）

「大佐、あと何分残っている」

『あと、一時間だ。これは脱出を含めた時間だ。そこを間違えるなよ』

単純計算、エイムを３０分で倒し、残り３０分でメタルギアを破壊し脱出をしろというのだ。正直に言わなくても時間が足りない。

「作戦会議は終わったかい？そろそろ終わりにしようか」

そう言ってエイムはロケットランチャーをコールした。さっきスネークが撃ったＲＰＧ－１よりも大型の。それをエイムはコンテナに

撃った。

ドカーン

爆発と同時にコンテナが吹き飛ぶ。煙が立ち込め、状況は確認できない。

（ふむ、威力も申し分はないな。むしろありすぎるくらいだ。バズーカの実験は終わりだな。あとはサブマシンガンか・・・・。それよりも、スネークはどこから撃ってくるんだ？さっきのでやられるとは思えないしね）

煙が少しずつ晴れていくと、そこにはクレーターができていた。が、スネークの姿は確認できない。

（さてと、いったいどこから来るかな？）

エイムが空中で待ち構えていると、何かが投げられてきた。

（これは・・・・・グレネードか！！！）

とっさにエイムは後ろに回避をして。爆発には巻き込まれなかったが、爆発と同時に砕け散った破片と、グレネードの中に入っている銃弾には当たった。

「・・・・・ずいぶんと姑息（こそく）な手を使ってくるんだね、君は」

「そうでもしないと生き残ってこれなかったからな」

声がした方向を向くと、さっきエイムがロケットランチャーで爆破

したコンテナの上にスネークはいた。そこから、また何かを投げてくる。

「またグレネードか・・・・・・芸がないね、君も」

「そいつはどうかな？」

スネークは投げた何かを取り出したＭｋ．２２で打ち抜いた。すると中から炎が現れた。

「っな！？」

「これは、グレネードじゃなくて手榴弾だ」

炎に飲み込まれそうになるが寸前のところでエイムは離脱した。が、完全に回避できたわけではないので肌が少し火傷をしていた。

「くそ！！！こんなことで・・・・・・！」

攻撃に移ろうとしたエイムだったが、目の前に飛び込んできたのはミサイルだった。

「そんな簡単に終わらせるはずがないだろう？」

「くっそぉおおおおおおおお！！！！！！！！！！！！！！！！」

ドカーーーーーン！！！！！！

今までよりも爆発が大きい。理由は隠れていた時にミサイルの火薬

の量を少し（かなり）増やしていた。

（さすがにこれで終わるだろう・・・・・）

「・・・・・・・・・・・・・・・・よくもこんなことにしてくれたね」

「！？」

スネークは声がした方向に目を向ける。すると、そこにはエイムの姿があった。

（あれでもまだ終わらないのか・・・・・どこまで強いんだ、ＩＳ）

「さっきまでのお返しと行こうか」

エイムは両手にサブマシンガンをコール、そしてそのままスネークに向かって撃ち続けた。それをスネークは、近くにあったコンテナに隠れた。

（っく、まだこんな装備があったのか・・・・・反撃をしなくては・・・・・・・・！）

だが、銃弾の雨が鳴りやむことはない。マガジンが無くなったらすぐに別な武器をコールし、撃ち続けた。

（こんなことに時間を使っていられるわけでは・・・・・・・！）

「そういえば言い忘れてた。レールガンは時限式で撃たれるからね。早くしないとホワイトハウスを破壊してしまうよ」

「！！！」

時間は単純に考え、１０分は経過した。今、ここで倒せてもプラスチック爆弾をセットするのにも時間がかかる。

（このままじゃ、レールガンが発射されてしまう・・・・！どうにかしないと・・・・・・！）

ズドドドドドドドドドドドド！！！！！！！

「「！？」」

いきなりメタルギアの方から爆発が起きた。レールガン、脚部などの関節部分、操縦席が爆発して完全に破壊されていた。

「な、何が起きたんだ！？メタルギアがいきなり爆発して・・・・・・・」

「た～く、スネークさんも無理すんね～。ＩＳを生身で相手すんなんて」

「その声は・・・・・楯無か！！！」

「さっきぶり、ちょっとＣ４借りたよ」

「何だと？そんなはずは・・・・・・」

そこでスネークがバックパックを見るとプラスチック爆弾がなくなっていた。さっき、居なくなったときに取ったのだろう。

「楯無・・・・・・・・まさか、暗部の楯無か！！！」

「そういうことだ。スネークさんやい、もう逃げたほうがいいじゃないか？」

楯無がメタルギアを破壊した御陰で時間に余裕が出来たがぎりぎりなのは変わらない。

「そんなこと僕が許すとでも思ってるかな？」

「あんたにはさっさと退場してもらおうかな」

「何を言ってるんんだい？」

「さっき細工させてもらったんだよ」

「？・・・・・・・・・まさかシールドが展開してなかったのはお前の・・・・・・・！」

「そういうことだ。ま、正確に言うと俺の部下だけどな」

「貴様ぁあああああああああ！！！！！！！！」

「おいおい、もうひとり忘れてないか？」

「何？」

エイムが声がした方向を向くとスネークがＭｋ．２２を構えていた。

「これで終わりだ」

スネークはエイムの頭に銃弾を放った。

ドン！

ドサッ

銃弾はエイムの頭を撃ち抜き、エイムは絶命した。

「・・・・・さ、早く出ないと危ないんじゃないか？そろそろ、爆撃が始まるはずだ」

「何？一体どういうことだ？」

「証拠隠滅の為だな。軍がこんなのを残しとくはずがないだろう。しかも、ここは火薬庫って言われてるからな」

「そういうことか。ならば、さっさと脱出するか」
「そうしたほうが身のためだな」
スネークたちは脱出するために格納庫を後にした。
～・～・～・～・～・～
「楯無、お前はどうやって脱出するんだ？」
シャドーモセス島の港に出てきたスネーク達は迎えがくるのを待っていた。
「あぁ、それなら・・・・・」
バラバラバラバラバラバラ・・・・・・
上から何かの音が聞こえてきた。
「あれは・・・・・・・・・・・・・・ヘリか」
「そう、あれが楯無家のヘリなんだ」
「すごいな、ヘリまで所有しているのか」
すると、ヘリからロープが降りてきた。
「ここでお別れだな」

「ああ、今回は助かった。礼を言う」

「いいっていいって、こっちだって面白いのを見せてもらったからな」

そう言って、楯無は上に上がっていった。

「・・・・・・・・・・・・不思議な奴だったな」

次に現れたのは潜水艦だった。

「スネーク、大丈夫か？」

「ああ、問題ない」

「そういえば、楯無と言う男はどこだ？」

「ああ、それならさっき帰ったぞ」

「なんとも、雲みたいな男だな」

「俺もそう思う」

スネークたちは潜水艦に入り、海に潜っていった。

爆撃が始まる１０分前。コンピューター制御室であることが行われていた。画面を見ると勝手にディスプレイが動いている。言っておくが、ここには誰もいない。すると、画面に文字が打ち出された。

『このまま終わると思わないことだ』

その文字が打ち出され、コンピューターの電源は落ちた・・・・・・・・・・・・

ＰＶ５万、１０万企画！！！（後書き）

いかがでしたか？

設定の方は何も言わないでください。

あ、あとエイムはガンダムＯＯのビリー・カタギリ、楯無は初代ロックオンを想像してください。

感想をお待ちしています。

夏休みって色々あるよね（前書き）

今回は短めです

夏休みって色々あるよね

「ふぅ、今日はこんなもんか・・・・・・」

今日は８月１５日。海に行く日の５日前だ。何だかんだでみんな学園に戻り始めてきた。俺は日課のＩＳの訓練を終了して部屋に戻ろうとしている。

夏だから動いたときは流石に汗のせいでベタベタして気持ち悪い。昼はシャワー浴びてから食べよう。

「あぁ～、あち～。つか、髪が邪魔になってきた・・・・・・・」

（おいおい、俺が邪魔だと？誰のおかげで生きてられ・・・・・）

うるさい。お前じゃない髪だ。髪（神）ちがいだ、少し黙ってろ。・・・・・・・誰と話してんだ俺？いや、神なんだけどさ。

（そんなの俺に決まってるだろ？）

「うぉい！？何でいきなり話しかけてきてんだ！？」

（少しは落ち着けよ。周りに人がいなからいいけどよ）

端から見れば俺は変な人だろうな。いきなり大声出してるし・・・・・・・つくづく他に人がいなくてよかった・・・・・・

（で、何の用なんだ？）

（いや、ただの暇つぶし）

「そんなんでいちいち話しかけてくんな！！！」

（だから、そんなに騒ぐな。俺だって暇じゃないんだ）

「いや、暇つぶしっていったよな？言ったよな？」

（五月蝿いなぁ。細かいことは気にすんな）

「・・・・・・・・・・・・何かお前と話すの疲れる」

（よし！初めて自分のペースでこいつと話せた！！！）

「・・・・・・何言ってんの、お前？」

（いや、こっちの話だ。それよりも髪が邪魔なら切ってくればいいだろ？）

「そうなんだけどさ・・・・・・一応さ、俺有名人の仲間入りしたんだよ」

（あぁ、そういうことか。そういうのも面倒だな）

「そうなんだよ。それで髪切りに行くと更に面倒だろ？だから行きたくないんだよ」

ちなみに、俺の髪は前髪が目にかかる程度まで来ていて、後ろ髪が襟足に届くまでになっている。正直言って、この髪で汗をかくと邪魔で仕方ない。

（大変だな、有名人も）

「そうなんだよ、全くこんなんならＩＳ動かせなくても良かったかもな」

（でも、動かせなければ今の奴らと会えないんだぜ？それでもよかったのか？）

「いや、それは嫌だけどさ・・・・・・・・・うん、そうだな。ＩＳ動かせなければみんなに会えなかったんだよな。みんなに会えないのは嫌だから、ＩＳ動かせてよかったよ」

（それでよろしい！じゃ、俺仕事は行ったから帰るわ）

そう言うと、今まで話していた意識が消えたような気がした。

「・・・・・・・・・・・・ほんとに暇つぶしだったんだな。つか、帰るってこっちに来てたってことか・・・・・・・？」

考えても仕方がないと言うと結論に達し、俺は部屋に向かった。

～・～・～・～・～・～

昼食を採った後、俺は街に出ていた。足りなくなってきた日用品を買うためだ。今日はシャンプーとボディソープをまとめ買いしてきた。丁度いい感じに安売りをしていたためだ。

「ふ～、今日はこんなもんでいいか」

俺は寮に帰るために来た道を戻ろうとした。

「さぁてと、時間はまだあるから帰ったら寝るか」
今は3時。帰っても少しは昼寝ができる。そう思い歩き始めた時、ふと耳に何か音が聞こえた。
「ん？この音は祭りか・・・・・？少し行ってみるか」
道を変更して、俺は音がした方向に向かった。
～・～・～・～・～
「あぁ、そいや今日からだっけ。篠ノ之神社祭り」
音がした方向に来ると、案の定祭りをやっていた。というか、篠ノ之神社祭りだった。篠ノ之神社というのは、言わなくてもわかるだろうが箒の実家だ。ここは剣道場もあり、俺も昔はあそこで鍛錬をし全国優勝したのだ。
と言っても、小学校だったから簡単だった。俺、あの時は高校生位の精神年齢だったし。
「そいや、箒神楽舞するって言ってたな」
携帯の画面を見ると時刻は3時２０分を指していた。神楽舞は5時からだったはずだ。となると、だいぶ時間が余る。
さて、どうしようか・・・・・・・・・・・・・。箒に会ってくるか、久しぶりに。
ふと、歩を進めると懐かしい顔があった。
「お久しぶりです。雪子さん」

「あらあら、もしかして慎二くん？」

「はい」

「ずいぶん逞しくなったのねぇ。今日はどうしたの？」

「ちょっと箒の神楽舞を見ようと思いまして」

「そうなの？だったら期待していいわよ。さっき練習見たんだけど、箒ちゃんすっごく上手なんだから」

「それは楽しみです」

「まだ時間もあるし・・・・・箒ちゃんにでも会う？」

「え？ああ、まぁ・・・・・・」

「だったら来て」

そう言って、雪子さんは俺の手を取った。
何だか、叔母さんってすごいなぁって思った。だって、握った手が暖かいんだもんよ。懐かしいし。
そんなことを考えながら神社の奥に行った。

～・～・～・～・～・～

少し歩くと、本殿が見えてきた。近くには剣道場もあり懐かしさが漂う。
昔はここで箒と一夏とで剣道に打ち込んでいたなぁ。

「箒ちゃんはあそこでお守りとか売ってるから会ってきて頂戴」

「分かりました」

「ついでに連れ出しても良いわよ。さっきから働きっぱなしだから、あの子。あと、連れ出したら家の方に来てもらって」

「了解です」

「じゃ、私は家のほうに戻ってるから」

そう言って、雪子さんは家のほうに向かって行った。

さて、少し驚かしてやるか・・・・・

俺は、古札所(こさつじょ)の陰から窓口の近くに来た。

「全く、慎二は何をしてるのだ。来るのではなかったのか・・・・・・」

その人来てますよ〜、とは口に出さない。面白くなくなるからな。つか、タイミングが良いんだか悪いんだか・・・・・ま、気を取り直して。

「おいおい、酷いんじゃないか？俺忘れないできたのに」

忘れかけてたことは言わぬが花だ。

「ししし、慎二！？・・・・・・もしかして聞いていたのか？」

「ああ、バッチリ聞いたぜ☆」

慎二からのお願い。星に関してはノーコメントでお願いします。俺も気持ち悪いと思うので、はい。

「ああ、それはだな、ええと、お前に来て欲しくてだな・・・・・・」

などと永遠に話しそうなのでここらでいじめは終了しよう、うん。

「ああ、いいから箒。別に怒ってないから」

「ほんとか・・・・・・・？」

「ああ、ほんとほんと。ってなわけで、祭りの方行くぞ」

「え？でも、ここの仕事が・・・・・・」

「そこらへんは雪子さんに許可もらってるから。あと、一回実家の方に戻ってこいだってよ」

「雪子叔母さんが？」

「ああ、その雪子叔母さんが言ってたんだよ。ほれ、さっさと行って来い」

「う、うむ、分かった」

そう言って、箒は古札所（こさつじょ）を後にした。

「雪子さん、一体何するんだろうな・・・・・・・・・」

あの人のことだ、変に気を使って余計なことしてなければいいけど・・・・・・。ま、そこらへんは箒に頑張ってもらうか。

俺は箒が返ってくるのを本殿の近くで待っていた。

～・・～・・～・・～・・～

～２０分後～

箒はまだ来ない。

「あいつ、何やってんだ？いや、雪子さんに何かやられてるのか？」

～４０分後～

「・・・・・・・・・・・・どうする。流石に遅すぎるだろ。一回見てくるか？いや、帰るか？それだと、後々面倒だよな・・・・・・」

～一時間後～

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・帰るか。

この調子だと、あいつ出てくる気配無いし」

俺は途方に暮れてて、何か屋台で買って帰ろうかと思った時、声が聞こえた。

「慎二！」

ん？この声は箒か？ったく、やっと来た・・・・・・・か・・・・・・・・・？

俺は振り向いた後、思考が一瞬、いや数秒止まっていた。

いや、仕方ないだろ。いきなり箒が浴衣着て出てくるんだ。しかも、似合ってるときたもんだ。驚かない方が無理だろ。

「あの、待たせてしまったか？」

「・・・・・・・・・・・・・」

「慎二・・・・・・・？」

「ん？・・・・・あ、いや、大丈夫。あんま待ってない、よ」

「どうした？何か言動がおかしいが・・・・」

ずいっ、と箒は身を乗り出してくる。

「いや、大丈夫だ！問題ない！！！」

「そ、そうか？ならいいが・・・・・」

見惚れてたなんて恥ずかしくて言えねぇよ・・・・・・・・。

「じゃ、じゃあ、そろそろ屋台の方に行くか？」

「そうだな」

俺達は屋台の方向に歩きだした。

～・・～・・～・・～・・～

「ほ～、流石は篠ノ之神社。定番なのが揃ってんな～」

焼きそば、お好み焼き、たこ焼き、リンゴ飴、いちご飴ｅｔｃ・・・・・・といった感じに色々あった。ちなみに俺はいちご飴派だ。

「何か食べるか？箒」

「そうだな・・・・・・・・私はなんでもいいぞ」

「そうか～・・・・・だったら、俺と一緒でもいいよな？」

「う、うむ」

「じゃ、最初はお好み焼きでも食べるか」

「分かった」

お好み焼きを見ると1個２００円らしい。学生に優しい値段だな。

「おじちゃん、２個頂戴」

「おう、ちょっと待ってな」

そう言って、今焼いているお好み焼きをパックに入れた。

お、出来立てか。こりゃうまいな。

「ほいよ。一緒にいるのは彼女かい？」

「ははは、ノーコメントで」

「なんだ、甲斐性なしか、兄ちゃん」

「何か悪いみたいに言ってるけど、そういうわけじゃねえよ！？」

「さっさと答え出したほうがいいぜ、兄ちゃん。俺の経験からな」

「・・・・・・・・・・・・・・心に留めておきます」

お好み焼きを貰って屋台を後にした。

「な、なぁ、慎二」

「ん？どうした箒」

「あのだな、私たちはそのように見えるのだろうか？」

「そのようにって・・・・どんな風にだ？」

「だから、その・・・・・つつつ、付き合ってるように見えるのだろうか？」

「あ～、見えるだろうな」

だから、さっきから周りの目が変に痛いのか。つか、その視線のほとんどは箒に行ってるんだけどな。美人だからな、箒は。

「そ、そうか」

「・・・・」

「・・・・」

あれ、会話が止まった。何でだ？それよりも、お好み焼き食べるか。折角の出来立てなんだから、温かいうちに食べないと。

「箒、どこか座れるところいかないか？早く、食べないと神楽舞に間に合わなくなるし」

「そうだな、だったら本殿の階段のところにしないか？」

「おっけ～」

俺達は本殿に向かった。

～・～・～・～・～・～

「うん、なかなか上手いな、これ」

本殿に向かおうとしたが、結局近くにあったベンチに座って食べている。場所は屋台の裏側だ。御陰で少し静かでゆっくり食べられる。

「・・・・・・・・・・・・なぁ、慎二」

「ん？どうした？」

「最近、ＩＳの訓練のしすぎではないか？」

箒が言っているのは、昼に空いてるアリーナでやっているＩＳの特訓の事を言っているのだろう。

「そんなことないって」

「毎日、５時間もやっていてそれを言うのか？」

時間は午前８時から午後１時までやっている。

「そうでもないって」

「体を壊してからじゃ遅いんだぞ」

「大丈夫だって言ってるだろ。心配性だな、箒は」

「・・・・・・・・・・心配するだろうが、馬鹿者」

「・・・・・・・・・・」

「何か・・・・あったのか？」

「何にもないよ。心配だってしなくていい」

「だったら何で！！！」

「・・・・・・・・・怖いんだよ」

「・・・・・・・・・・え？」

「怖いんだ、俺に力がないばっかりにみんなを失うのが恐ろしく怖い。福音の時みたいなのがまた出てくるかもしれない。そうしたら、また守れる自信がないんだ。だから、後悔する前に強くなってみんなを守ってみせる。そうでもしないと、不安で心が押しつぶされそうになるんだ。怖くて怖くてどうしようもなくなるんだ」

「・・・・・・・・・・・・・・慎二」

沈黙の時間が流れる。聞こえるのは屋台から聞こえる声と蝉の声。

「・・・・・・・・・らいは・・・・・ってもくれても・・・・・・・・・だろう」

「え？」

「少しくらいは私たちを頼ってくれてもいいだろう！！！」

「ほ、箒？」

「お前はそうやって全部自分だけで背負い込もうとする！何でみんなに頼らない！何で私に頼らない！そんなに頼りないか！私は！！！」

「・・・・・・・・」

「私だって自分を守るために毎日鍛錬してるのだ！お前に心配されなくとも自分の身は自分でまもれる！他のみんなだって代表候補生だ！それなのに、何でお前は頼ろうとしてくれないのだ！！！」

「・・・・・・・・」

「何か言ったらどうだ！」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・お前なんて知るか」

箒は実家の方に戻っていった。

「・・・・・・・・・・・・はぁ、何やってんだろ、俺。全部、箒の言うとおりだ」

何がしたいんだろうな、俺は・・・・・・・・・・

～・・～・・～・・～・・～

あの後、神楽舞の時間になり見に行ったが正直あんまり覚えていない。覚えているのは、箏の舞いがすごく綺麗だったことくらいだ。結局、箏に言われたことが堪えていた。そして、今は寮に帰るために駅に向かっている。あのまま、箏を待っているのも気まずかったからな。

「はぁ〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜・・・・・・・・・・・・・」

さっきからため息しか出ない。どうやって箏に謝ろうなどといろいろ考えている。

「そもそも俺はみんなに頼らなかったんだろう・・・・」

迷惑を掛けたくないなど理由にならない。やはり、箏に言われたとおり頼りにならなかったからか・・・・でも、そんなことはない。みんなに救われて、みんなの大切さを理解した。

「・・・・・・あ、そうか。だからか」

大切だからこそ迷惑をかけたくない。俺の為に時間を割いて欲しくない。無意識のうちにそう思っていたのだろう。

「・・・・・・・・・箏に謝らないとな。あれ、あいつ今日って寮に帰ってくるのか？」

今は夏休み中。外出許可証なんてなくたって外泊はできる。わざわざ寮に戻る必要もない。

「・・・・だったら、戻ればいいだろ」

俺は来た道を戻った。

～・～・～・～・～・～

「ぜぇぜぇぜぇぜぇ・・・・・・・・」

早く謝りたくて走ってきたはいいが、だいぶ疲れた。

「箒は・・・・・？」

まだ時間的に屋台はやっていたから人はまだ多い。

「ああ、くそ！」

俺は人ごみの中に突っ込んだ。人ごみを突き抜けると、本殿に出た。

「箒！」

箒は本殿の階段のところに座っていた。

「慎二・・・・・」

「悪かった！」

俺は頭を下げた。

「・・・え？」

「確かに俺はお前に言われたとおりにみんなを頼らなかった。だけど、それはみんなに迷惑を掛けたくなくて頼らなかっただけなんだ」

「・・・・・・頭を上げてくれ」

「・・・・・・・」

俺はゆっくり頭を上げた。

「・・・・・・・・・・その、私も分かった。何というか、言いすぎた。すまない」

「いいんだよ、それくらいで。俺ってヘタレだからさ、きつい言葉位が丁度いいんだよ」

「そ、そうか」

はぁ、何とか仲直りできたな・・・・・・・・・・・・・・・疲れた。

「箒、今日は寮に戻らないんだろ？」

「ああ、実家に泊まっていく予定だ」

「そうか・・・・・」

ふむ、だったら早くしないと電車に間に合わないな。さすがに8時過ぎたし。

「じゃ、俺帰るわ」

「そんなこと言わないで泊まっていけばいいじゃない、慎二君」

「雪子さん」

実家の方から由紀子さんが歩いて来ていた。

「今の時間だと、走らないと電車間に合わないでしょ？だったら、泊まっていてよ。部屋なんて有り余ってるんだから」

「いや、それは・・・・・」

「箒ちゃんもいいわよね？」

「・・・はい」

おいおい、そこは反対してくれよ。

「・・・・・じゃあ、お言葉に甘えて泊まっていきます」

結局その日は箒の実家に泊まった。

まぁ、色々あった今日だけどみんなの大切さを再確認できたしいいか。あとあの後、雪子さんにからかわれて色々と大変だった。内容は聞かないでくれ。何せ、色々あって疲れたんだ。もう休ませてく

れ・・・・・・・おやすみ

夏休みって色々あるよね（後書き）

はい、結構普通のペースで更新できました。

中々、無理のある話だったと思います。

予定では、普通に箒と祭りを過ごして、普通に寮に帰る予定だったのにどうしてこうなったｏｒｚ

まぁ、気にしませんが

あと、箒の実家であったことは面倒なので書きませんでした。

皆さんからのリクエストがあれば番外編で書こうと思います。

リクエストがある方は感想にてお知らせください。

では

夏休みと言えば海だよな！！！（前書き）

今回は会話が多くて状況が分かりにくくなってしまったｏｒｚ

皆さんの想像力が豊かなことを願います。

では、どうぞ

夏休みと言えば海だよな！！！

「うは～、流石に人がいっぱいいるな～」

今日は８月２０日。みんなで海に来ている。朝８時に学校を出発し、神奈川県某海水浴場に来ている。現時刻は１０時になったところだ。

「さてと、着替えるか。じゃ、後で合流な」

そう言って俺達は男女に分かれて更衣室に行った。夏休み中だから人がいっぱいいて着替える場所を探すのも一苦労だ。

「慎二～、こっち空いてるぞ」

「お、流石一夏。たまには役に立つな」

「何だよ、たまにって」

「お前、決めるときは決めるくせに決めない時は酷いじゃねぇかよ」

「・・・・・・そんなことねぇよ」

「何だその間は。説得力ないぞ」

「そ、そんなことより、早く着替えようぜ」

「露骨に話逸らしたな。・・・・・ま、いっか」

俺達はさっさと着替えて外に出た。男の着替えなんてすぐに終わる。

「さっきも思ったが、人多いな」

「そうだなぁ。ま、夏休みなんだから仕方ないんじゃないか？慎二」

「ま、それもそうだな」

てか、こんなに人いるんだからガラ悪いの居るよなぁ。臨海学校の時はＩＳ学園の生徒しか入れなから問題はなかったが、今は完全にプライベートだ。あいつらの事だから問題はないと思うんだけど、何せ美人揃いだ。欲情する奴もいるかもしれない。ま、そんときは徹底的に潰してやるけどな。

「お待たせ～」

「お、来たか～」

振り向くと7人の美人とバスタオルオバケが一人、いや一体？いた。箒とシャルロットはこの前買った黒と白のビキニ、セシリアは青のパレオを腰に巻いたビキニタイプの水着、鈴はオレンジにタンキニタイプの水着、楯無は黄色のビキニ、簪は水色の水着、あと、全身にバスタオルを巻いてるのが一体？いた。

「なぁ、聞いていいか？」

「どうしたの？」

「・・・・・・・・・・・・そのバスタオルオバケって何だ？」

「俺も思ってたんだが・・・・・・・・・・本当に何だ？予想はつくけどさ」

「ほら～、二人とも不思議がってるよ～」

「そ、そんなことを言われても・・・・・・」

「「やっぱり、ラウラか・・・・・」」

シャルロットが言うも恥ずかしいものは恥ずかしいらしい。

「ほらほら～、バスタオルとらないと私達だけで遊んできちゃうわよ～？」

と、楯無。明らかにこいつはこの状況を楽しんでいる。いや、こいつの性格からすれば当たり前か。

「そ、それだけは！！！」

あれ、効果あった。

「じゃあ、バスタオル取ってよ～。可愛いんだから大丈夫よ」

今度は優しく話しかける楯無。こいつ、人を扱うのうまいなぁ・・・・・・

「うう・・・・・・・・だったら、取るぞ！！！」

バサッ！

バスタオルが宙に浮いた。そこには、普段のラウラからは想像できないほど大胆な水着を着たラウラがいた。黒の水着でレースをふんだんに使った水着だった。

「わ、笑いたければ笑えばいいさ」

「そんなことないよ～。ね、慎二、一夏？」

「ああ、可愛いと思うぞ」

「俺もビックリしたけど可愛いと思うぞ」

「か、可愛い！？私がか？」

「いや、今の状況で誰に言うんだよ」

「ほら～、言ったでしょ。似合ってるって」

「そ、そうだな。すまなかった、シャルロット」

「そんなの気にしないでよ。じゃあ、早く遊ぼう」

「そうだな」

俺達は海の方向に向かった。

～・～・～・～・～・～

「見てる時も思ったけどこんなに多いのか・・・・・・・・・」

砂浜に着くと上から見てた人混みに入った。何というか、酷い。周りに人しかいない。

「みんな、迷わないようにしろよ～」

と、後ろを見ると・・・・・・

「・・・・・・・・・・・・・・・あれ、見知らぬ人しか居ないぞ」

・・・・・・・・・・・・・・・あれ？

「・・・・・・・・・・・・・・・迷ったのか？俺」

～・・～・・～・・～・・～

「あれ～、慎二君は～？」

こちらは、先程のメンバーから慎二だけが抜けたメンバーである。

「もしかして、迷子なんて事はないわよね？」

「流石にそれはないだろう、慎二だし」

「さすがになぁ、それはないと思うけど」

「そうだ、私の嫁に限ってそんなことはない」

「いい加減その嫁ってのやめなさいよ」

「嫁に嫁と言っても問題ないだろう」

「いや、そういう問題じゃなくて」

ガミガミガミガミ――――――

「それよりも、どうします？先輩」

「慎二さんを探しますか？」

「ん～、慎二君だし問題ないんじゃない？」

「でも、お姉ちゃん・・・・・どうするの？」

「とりあえず、どこかに場所を取りましょう」

「分かりました」

こちらはこちらで話に一段落した。

「だから、そういう意味じゃ～～～」

・・・・・・・・・・・・・・・・片方だけ。

～・～・～・～・～・～

その時、慎二はと言うと・・・・・・・・・・

「はぁ、これ俺だけが迷子だよなぁ・・・・・・・」

人だらけの砂浜をひとり寂しく適当に歩いていた。正直言ってどう

しようもない。携帯は今に限って一夏に持たせていたバックに入っているし、人が多すぎてみんなを探す気にならない。到着して30分が経って、少しずつお昼の時間になっている。

「お昼くらいに海の家に行けば何とかなるか・・・・・・・・・・・・って、携帯無いから時間分からねぇな。どうすっか・・・・・・・・」

宛もない、金もない。正直言ってやることがない。

「・・・・・・・・・・駄目元で探すか」

慎二は歩きだした。

～・～・～・～・～・～・～

1時間後・・・・・・

「暑い・・・・・・・・・」

未だに慎二は一人だった。

「あ～、朝飯食ったの早かったから腹減った～。でも、金ないしなぁ」

財布も携帯と一緒に一夏の元にある。

つか、暑くて死にそうなんだけど・・・・・・日差し強いのに水着一枚で、少量だがもう日焼けをしている。ヒリヒリして落ち着かない。

「・・・・・・・・・海の家行くか」

～・・～・・～・・～・・～

「うわ～、想像してたけどここまで多いか・・・・・」

無事、海の家についたのはいいが人が多くて満席。どこに誰がいるのかもわからない。

「みんないるか？」

見渡すも分からん。俺の目で確認出来るところにはいない。

「はぁ、どうすっか」

ここだと食べ物の匂いがして空腹が増進される。ダメだ、ここにいたら飢えて死んでしまう。人間、2日、3日何も食わなくても生きていけるが気分の問題だ。

「はぁ、仕方ない。また地道に探すか・・・・・・・・」

「・・・・・・・てください」

ん？この声どっかで聞いた時あるぞ。

「やめて・・・・・・ください」

・・・・・・・・・簪だな。

「いいじゃんよ～、俺たちと遊ぼうぜ～」

「そうだよ～、こんなところで一人でいたってつまんないだろ？」
二人のチャライ男が簪に絡んでいた。
「人を・・・待たせてるので」
「その人たちと居る時よりも楽しいことやるからおいでよ～」
・・・・・・・気が弱い簪を心配してたが、ここまで予想的中とは・・・・・・・・・びっくりだな。つか、助けないと不味いな。
「あ、簪。ここにいたのか」
「あ・・・・・慎二！」
俺は簪と男の間に体を挟んだ。
「あ？お前誰だよ？」
「友達ですけど？」
「あ～、分かっちゃった。女友達にいい格好見せたいんだな」
「あ～、よくあるよな。そういうの」
男二人は二人だけで盛り上がっている。俺は、そそくさとその場を後にしようとした。
「あ？何逃げようとしてんだよ」
あ～、見つけて欲しくなかったな。面倒だから。

「女、置いてけよ」
「簪ちゃんだっけ？そんなのといるよりも俺たちといたほうが絶対楽しいって」
勝手に言ってるが、簪も少しずつ怒り出している。
「あ～、あんま言いたくなかったけど・・・・・・・・」
俺は簪の肩を掴んで
「俺の嫁なんだよ、簪は」
「・・・・・・・は？何言っちゃってんの、おまえ」
「頭イかれたか？」
「イかれたの何も、こいつは俺の嫁なんだよ。手出すな。次、手出したら潰すぞ」
「調子乗ってんじゃねぇぞ！ガキ！」
男の片方は右手で殴ってこようとするが遅すぎる。俺は右腕を軽く掴んで、勢いをそのまま受け流した。掴む力を強くし腕をしっかり握った。結果的に男の後ろを取る形になった。そのまま、腕を絞っていく。
「いでででででで！！！！！！！！」
周りの注目を集まってきた。だから、騒ぎおこしたくないんだよ・・・・・・・・・

「お、お前放せよ！」

もう一人の男が腰を引きつつ言っていた。

「あ～、見せしめに丁度いいかな～」

「な、何のだよ？」

「俺の女に手をだした時の見せしめ」

俺はニヤリと笑った。すると、腕を絞っていた男が騒ぎ出した。

「や、やめてくれ！金でもなんでも出すから！！！」

「何で、お前の言うこと聞かなくちゃならないんだよ」

俺は腕を更に絞る。

「あ、でも、金は置いてけよ。もちろん、全額」

俺は自慢できるほどの晴れやかな笑顔をしていただろう。

コキュ

「いでぇえええ！！！！！！！！！！！！！！」

男の叫び声が辺に広がった。

～・～・～・～・～

「これで全部か？」

「「はい」」

俺は脱臼させた肩をとりあえずなおしてやり、金を全額出させていた。金は１０万。しけた金だなぁ。

「あ、そういうえば、あんたらどこに住んでんの？」

「え～と、神奈川です」

敬語になっていうのは気にしない。

「こっから帰んのに何円かかる？」

「多分、二人合わせて１万あれば十分なくらいです」

「じゃ、ほい」

俺は一万を渡した。

「さすがに帰れないのは辛いだろうから金は渡してやる。でも、また手出すなら本当に全部取っからな？」

「「そんなことは絶対しません！」」

「じゃあ、行っていいぞ」

二人は走ってその場を後にした。

「ねぇ・・・・慎二」

「どうした？簪」

「さすがに・・・・・・やりすぎじゃない？」

「いいんだよ、少しくらい派手にやって丁度いいんだよ。また後で、お前に手出されても困るからな」

「それに・・・・・私のこと嫁って・・・・・・・・エへへ」

「簪ちゃん！」

そう言って近づいてきたのは楯無だった。

「簪ちゃん、怪我はない？」

「お前、さっき見てたよな？」

「あら？バレた？と言っても途中からだけどね」

「大体どこらへんだ？」

「腕絞ってるところあたりかな」

「ふむ・・・・・だったら問題ないか」

「その前に何かあったの？」

「いや、別に」

「それよりも慎二君」

「どうした、楯無」

「気のせいかもしれないけど」

「そうか、だたら気のせいじゃないのか？」

「簪ちゃんが凄く幸せそうな顔してるのは何で？」

「気のせいだろ」

「気のせいじゃないわ。ねぇ、どうして？」

「さぁ？俺にも分からん」

「エへへ・・・・・慎二のお嫁さん・・・・・・・・エへへ」

「・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・慎二君」

「俺は何も知らん」

「じゃあ、何で沈黙があったの？」

「特に言うことがなかったからだ」

「嘘おっしゃい。さっきからひどい汗よ」

「暑いんだよ」

「じゃあ、目が泳いでいるのなんで？」

「・・・・・・・・・・・」

「慎二君」

やばい、逃げ道がなくなった・・・・・・・・ならば・・・・・・・・・・・・・・・・・・・！

「・・・・・・・・・・・・とう！！！」

俺は走り出した。というか、これしか方法が無いだろう！

「あ、待ちなさい！！！」

楯無も追いかけてくる。走っている途中、シャルロットに会った。

「あ、慎二。探してたんだよ」

「悪い、今立て込んでるんだ」

俺はさっさと逃げた。

「え？・・・・どうしたんだろ慎二」

直ぐに、楯無が来た。

「あ、先輩どうしたんですか？」

「慎二君を追いかけるの」

「どうしてですか？」

「それはね、かくかくしかじか――――――」

「そういうことだったんだね、慎二・・・・うふ・・・・うふふふふふふ」

話を聞き終わると目の光が無くなったシャルロットそこにいた。

「先輩、お手伝いします」

「ありがとね。じゃ、行くわよ！」

「はい！」

その調子で、全員とすれ違ったんだが全員が楯無の味方になった。
まぁ、当然って言えば当然なんだが・・・・・正直言って、怖い。
後ろを見たくない。だけど、声は聞こえる。

「慎二、祭りに言ったことは嘘だったのか！！！！！！！」
「慎二さん！わたくしとＯ・ＨＡ・ＮＡ・ＳＨＩ☆しませんか！！！」
「よし、殺そう・・・・・・」
「慎二～？何で簪さんにそんなことしたのかな～？」
「私の嫁のくせに何をしている！！！」
「何で私じゃなくて簪ちゃんなのよ！！！」

などと、とてもじゃないが捕まったら何されるか分からない奴らに捕まるわけにはいかない。俺は必死に逃げた。

その時、簪は・・・・・・・・・

「慎二のお嫁さん・・・・・・・・・・エヘヘ」

まだ、余韻に浸っていた。

同じく一夏は言うと・・・・・・・

「みんな・・・・・・・・・・遅いな」

一人黄昏ていた。

～・～・～・～・～・～

「はぁ～、今日は疲れたな・・・・・・・・」

「あんたが逃げなければ疲れなかったと思うけど？」

「そんなこと言ってもなぁ・・・・・・・・いろんな意味で危険感じたしなぁ。つか、逃げなきゃ危なかったろ、あれ」

只今の時刻は６時を回り、辺も少しずつ薄暗くなってきている。あの後、追い掛け回され結論を言うと岩陰で捕まった。ちなみに、俺の貞操は無事だ。色々落着き俺達今日泊まる旅館に足を運んでいた。と言っても、海岸の近くにあるから時間は掛からない。

「何だかんだで、今日は一日中遊んだよね」

「そうだな、ここまで遊んだのは久しぶりかもしれないな」

「臨海学校の時は誰かさんがいなかったせいでつまらなかったしね？」

鈴は不敵に笑いながら言ってきた。

「悪かったな、いなくて」

「ラウラちゃん、みんなと遊んだのはどうだった？」

「何か温かいものを感じたな」

「そう、良かった」

「それよりも慎二さん、旅館はまだですの？さすがに、クタクタなのですが・・・・・」

「確かこの辺だったはずだけど・・・・・・お、あった」

前の方に看板が見えた。『花月荘』これが俺たちの泊まる旅館だ。この辺では少し有名な旅館で古さと新しさを兼ね備えたとても落ち

着ける旅館だと聞いている。高校生が泊まるにしたら少し大人すぎるが、問題無いだろう。

「へぇ、結構大きいんだな」

「そうだなぁ、ここまで大きいとは思わなかったな」

そこにはビルのような建物があり、１０階位まであった。

「・・・・・・これ、何かのホテルの間違いじゃない？」

鈴が言うのもわかる。明らかに荘って名前の付く建物じゃない。

「いや、看板にも花月荘って書いてあるだろ」

「「「「「「「・・・・・・・・」」」」」」」

「とりあえず入ってみましょう」

「そうだな・・・・・・・・」

俺達はその建物に入った。中は更に豪華でラウンジがあるんだが、上を見るとある程度吹き抜けになっていた。

「・・・・・とりあえず受付済ましてくる」

受付に付くもだれも居なかったから、呼び鈴を鳴らした。すると、直ぐに係りの人が来た。

「お待たせいたしました」

「9人で予約した鷹野なんですけど」

「鷹野様ですね、少々お待ちください」

近くにあったパソコンを操作して確認をしていた。

「お待たせいたしました。こちらがお部屋の鍵です。夕食は7時から2階の食堂に集まっていただくので遅れないようお気を付けください」

渡された鍵は2つ。『花の間』と『竹の間』だった。俺はみんなのところに戻った。

「わかりました。そういえば、ここの旅館見た感じが雑誌で見たのと違ってるんですが、何でですか？」

「それは、先週リニューアルオープンしたんですよ」

「ああ、なるほど」

「質問は以上ですか？」

「あ、はい。お手数お掛けしました」

「いえ。では、ごゆっくり」

「鍵もらってきたぞ～」

「やっぱりここなんだ・・・・・・それで何階なの？」

「え〜と、3階だな。ほれ、お前たちの鍵だ」

俺は花の間のカギを渡した。

「え？違う部屋なの？」

「当たり前だ」

「「「「「え〜〜〜〜？」」」」」

「そんな声出しても知らん」

「こういう時は一緒の部屋で裸のお付き合いするのが筋ってもんじゃないの？」

「なんでそうなんだよ！とにかく、部屋は別だ。あと、ご飯は7時に2階の食堂な。一夏行くぞ」

「おう」

「後で部屋行くからね」

「好きにしろ」

俺達はエレベーターに乗って3階に登った。

〜・〜・〜・〜・〜・〜

「え～と、竹の間はっと・・・・・」

三階に着くと奥まで通路が続いていた。通路の両脇に部屋があった。壁に名札が掛かっており、部屋の名前が分かるようになっている。まぁ、当たり前だが。壁はベージュ色のコンクリートで温かい感じがした。真ん中くらいまで歩くと、竹の間が見つかった。

「お、あった」

ふと、向かい側の名札を見ると・・・・

「花の間・・・・・・・・あいつら向かいの部屋かよ」

「まぁ、慎二。早く入ろうぜ」

「そうだな・・・・・・・」

俺たちは部屋の中に入った。

「・・・・・・・すごいな、これ」

「・・・・・・・そうだな」

中は臨海学校の時に負けず劣らず、というか勝ってる。二人部屋なのだが、畳が敷いてありその畳も高級感が溢れていた。襖にも綺麗な装飾が施してあり、見ているだけで落ち着いた。テレビは液晶テレビで、３２型くらいあった。だが、一番目を見張ったのが窓からの景色だ。こちらの窓は東向きなんだろうが、窓一面海が広がっていた。夕日が見えなくて残念だが、日の出が綺麗に見えるだろう。

「・・・・・・・・・こんなすごくて、一人７２００円かよ」
「え！？それホントか？」
「ああ。ちなみに、夕食と朝食付きな」
「・・・・・・・・・・・・・・・・マジか」
「ああ、大マジだ。素泊まりだと５０００円しないぞ」
「・・・・・・・・・何か、場違いじゃないか？俺たち」
「・・・・・俺もそんな気がしてきた」
「は～い、お二人さ～ん。お待たせ～」
「いや、別に待ってねぇよ」
入ってきたのは楯無だった。なんで、こいつはいつも突然やってくるのだろう。
「こっちの部屋もすごいわね～。こっちも部屋は大人数用みたいだけど、すっごく綺麗よ～。これ、とっても高いわよね～」
ちなみに、俺たちの部屋がある側が少人数用、反対側が大人数用の部屋になっている。
「いや、実はそんな高くないんだよ」
「何円くらいなの？」

「一人、７２００円」

「え！？それ、ほんと！」

「うん、ホント」

「すごいわね・・・・・」

「ほんとにな・・・・・・・・」

ふと、時計を見ると、６時５０分を過ぎていた。

「ちょっと早いけど、食堂行っとくか」

「そうね、私みんなを呼んでから行くから」

「じゃあ、俺達は先に行ってるな」

俺と一夏は先に2階に向かった。

～・～・～・～・～

「早く来たけどもう準備されてるのな」

「流石はこういう旅館って言うべきなのか？」

「まぁ、そこらへんはどうも言えないな」

「どちらにせよ、料理がすごいことには変わらないな」

「ああ、そうだな」

俺たちの前に置いてあるのが今日の夕食らしいが・・・・・・・・・やっぱりすごかった。まず、刺身。これは簡単に予想は出来た。何せ近いのだ。海鮮物が出ない方がおかしい。種類は、マグロ、帆立、赤貝、イカ、タコ、カワハギ、ホッキ貝だった。最近の刺身にはホッキ貝が少ないから俺にとっては嬉しい限りだ。あとは、一人用のすき焼き、鮭の塩焼き、漬物、きのこの混ぜ込みご飯。最後に・・・・・・

「・・・・これって、蟹だよな？」

「どう見たって蟹だな」

一人に1杯ずつ蟹が用意されていた。流石に、ここまで来ると呆れてくるな・・・・・・・

「あ、ここかな」

外の方から声が聞こえてきた。この声はシャルロットだろう。

「あ、慎二、一夏。ここでよかったんだね」

「違ってたらどうしたんだ？」

「ん～、謝って出てくる？」

「また、微妙な」

「いいでしょ、間違わなかったんだから」
「ま、それもそうだな。とりあえず、座れよ」
「そうだな」
シャルロットは俺の左側に座った。一夏は右に座っている。
「それよりも他のみんなは？」
「もう少し時間掛かるみたいだよ。それよりもすごいね、料理」
「そうだな、もうすごすぎてびっくりしてるよ」
「あはは、部屋もすごかったしね」
「そうだな、もう気にしない方がいいか」
「そうだよ、もう楽しんじゃお」
「は～い、お待たせ～」
「お、やっと来たか～。腹減って待ちくたびれたよ」
「先に食べてても良かったのに」
「やっぱりみんな一緒に食べたいだろ？」
「それもそうね。だったら早く食べましょう」

「それよりも、シャルロット」
後ろにいたラウラが突然声を出した。
「何故、私の嫁の隣に座っている！」
「早い者がちだよ」
「む・・・・・仕方ない」
渋々、了承したらしい。いまいち分からないが。
「みんあ、席に着いたな。じゃあ・・・」
「「「「「「「「「「「いただきま～す」」」」」」」」」」」
～・～・～・～・～・～
「ふぅ～、食った食った」
今は食事が終わり、部屋に戻ってきてゆっくりとくつろいでいる。
「一夏、もう少し落ち着いたら風呂行こうぜ。温泉みたいだからな」
「へぇ、温泉か～。ホントすごいな、ここ」
「ま、どっちにしても、まだ腹が苦しくて無理だ」
「そうだな」

それから２０分間、たわいのない話をしていた。

「よし、そろそろ行くか」

「分かった」

俺達は、風呂に向かった。

～・～・～・～・～・～

「・・・・・・・・・・ＩＳ学園に負けないくらい広いな」

「そうだな」

「しかも温泉だから、上だよな？」

「そうだな」

広さはＩＳ学園とほぼ同じ。でも、肝心のお湯が温泉だから結果的にこちらの方が上だ。

「あ、慎二。露天風呂あるらしいぞ」

「マジかいな！！！」

「ど、どうした、慎二」

「いや、もう色々おかしくなってきた」

「とりあえず、露天風呂いこうぜ」

「そうだな」

ドアを開けて外に出た。外に出ると、屋根がありその下に温泉があった。

「は～、すごいな」

「思ったんだが、ここにきてからすごいって何回言った？」

「もうわかんねぇな」

「ま、入ろうぜ」

お湯に入ると、適度の気持ちいい温度で今日の疲れが取れていくようだ。

「「はぁ～～～～～～」」

「気持ちいいな～」

「そうだな～」

しばらく、二人とも何も話さないでゆっくり過ごしていた。

ガラガラガラ――――――

少し遠いところでドアが空いたような音がした。まぁ、今はどうでもいい。

「わ～、外もすごいわね」

ん？とてつもなく聞いたことのある声が・・・・・・・・・・・・

「本当にすごいですね」

「箒ちゃんのおっぱいも負けないと思うわよ？」

「か、関係ないでしょう！」

・・・・・・・・・・・・・・・

「一夏」

「ああ」

「「出よう」」

俺達はそそくさと中に入った。何か聞こえたが関係ない。その後は中でゆっくり髪を洗い、体を洗い湯船にゆっくり浸かった。

～・～・～・～・～・～・～

「はぁ、気持ちよかったな～」

「何だかこのまま寝れそうな気がする」

「あ～、確かに」

部屋に戻るまでに温泉の事を話していた。部屋に着き、中を見ると布団が敷いてあった。

「このまま寝るか？」

「それもいいな」

二人して布団に寝転がり、寝ようとすると

「お前たち、何眠ろうとしているのだ」

箒が入ってきた。

「あ、ホントだ」

「これから夜本番でしょ」

「そうですよ、寝るなんて勿体ないでしてよ」

「これからもすることが沢山あるだろう」

「そうよ～、そのまま布団に潜り込むわよ？」

「やめろ」

俺は直ぐに起き上がった。

「あ・・・・・・入りたかったな」

何言ってんだ、簪・・・・・・

「で、これからトークタイムってとこか？」

「その通り！今夜は寝かさないよ」

「分かったよ」

面倒だが、楽しいそうだから俺は了承した。そのまま、トークタイムが始まった。

３０分後

「ふぁ～」

「おいおい、眠いなら部屋に戻れよ」

ほとんどがダウンしていた。唯一起きてるのはシャルロットだった。

「何だよ、ちゃんと部屋に戻れよ」

「・・・・・すぅ・・・・・・・すぅ・・・・・」

返事は寝息だった。

「はぁ～、仕方ねぇな。一夏手伝ってくれ」

「・・・・・・・・・」

「一夏？・・・・・・・・・・お前もか」

一夏も寝ていた。起きているのは俺だけ・・・・・・・

「・・・・・・・・・・全員運ぶか」

俺は近くにいた箒から運び始めた。だが、浴衣でさっきまで騒いでいたせいで少しはだけている。必然的に胸が見えるわけで・・・・・・・・

「・・・・・無抵抗でこれはマズイだろ、俺の理性が」

そう、無抵抗なのだ。しかも、今は寝ているからほとんど抵抗はない。触っても問題ないのだ。そう！触っても問題ないのだ！！！あの、服の上からでも大きさが分かる胸が！！！！！！！

「やばいやばい、理性のダムが崩落しそうになった・・・・・無

心だ無心」

それから２０分かけて、全員を運んだ。理性と戦いながら。みんなも基本的に浴衣がはだけてるから、辛いのなんのって。

「はぁ、運ぶだけなのに何でこんな疲れるんだよ・・・・・・・・・・」

チラッと一夏を見ると、タオルケットをかぶってなかった。

「はぁ・・・・仕方ねぇな」

俺は一夏の布団を直し、自分の布団に入った。

「今日じゃ疲れたな・・・・・・・・・・」

眠るのに時間は掛からなかった。直ぐに安らかな眠りについた。

「んぁ？」

夜中、突然目が覚めた。

「・・・・・・・寝るか」

――――――――――慎二

「？」

頭に直接的に響くような声が聞こえた。

――――――――外に来て。

普段の俺なら無視をしていただろう。だが、その時はその声に酷く懐かしさを覚え声に従った。

そして、外に出ると海が見えた。気分的に砂浜に向かった。月明かりが海に反射してとても綺麗だった。

「・・・・・・誰もいなよな」

夜が深いせいもあってか車の通りもない。

静寂

今の状況にはこの言葉が正しいだろう。しばらく、そのままぼうっとしていると

「・・・・・・・・・・じ」

どこからか声が聞こえた。周りを見渡すも誰もいない。というか、さっきまで出ていた月が隠れてしまった。

「・・・・・・・慎二」

さっきまで隠れていた月がまた出てきて、周りを照らし出した。先程まで誰もいなかったように見えた場所にマロンブラウンのセミロ

ングの髪の女性がいた。

「・・・・・・慎二、久しぶり」

「・・・・・・会ったときありましたっけ？」

「・・・・・・忘れちゃったの？」

「忘れたも何も会ったときないでしょう」

と言いつつも、俺は違和感を覚えていた。目の前にいる女性はあった時がない。なのに、酷く懐かしい感じがする。そんなことはありえないのに。そもそも、女性の声は先ほど頭に響いてきた声と酷く似ていた。

「・・・・・・折角、会いに来たのに・・・・・・酷いよ」

そう言って、その女性は泣き出してしまった。

「何かの勘違いじゃないですか？それよりも、こんな時間に何してるんですか？」

「・・・・・思い出してよぉ・・・・・・・慎二ぃ」

俺はこの人には泣いて欲しく無い衝動に駆られた。でも、理由が分からない。ふと、昔の事を思い出した。

「・・・・・・・・・何で昔のこと思い出してんだ、俺は・・・・・・そんな訳はないだろう」

でも、俺の記憶の中にいる女の子が成長するならこうなるはずだとも思っていた。

「あ・・・・・そうだ、これで思い出してくれる？」

そう言って、女性が取り出したのはおもちゃの指輪だった。

「！！！・・・・・・何でそれを」

「慎二に貰ったからだよ？」

「そんなはずはない！それは・・・・・それは、瑠美香に渡したものだ！！！」

「やっと・・・・・・やっと、名前を呼んでくれた」

「・・・・・・・・・・え？・・・・・・・・そ、そんなはずは・・・・・・・・・・」

女性を見ると、凄く嬉しそうにしていた。今から踊りだしてしまうそうなくらいに。だが、そんなことはありえない！！！瑠美香は・・・・・・・瑠美香は死んだ。でも、心のどこかで期待はしていた。生きているのではないか、と。俺は、その思いを口にしてしまった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・瑠美香・・・・・・・・・・なのか？」

女性は怪しく微笑んで――――――――――

夏休みと言えば海だよな！！！（後書き）

少しづつですが、クライマックスに近づいていきます。

あまりダラダラ続けてつまらなくなったりすると嫌なのでいいところで終わらせたいと思います。

短くなるか、長くなるかは分かりませんが応援よろしくお願いします。

あと、今回は大分詰まって昨日更新する予定が今日になってしまいました。かけない合間に書いた別な小説があるんですが、簡単に１話書き終わりましてｗｗｗｗこちらの小説が落ち着いたら更新しようと思いますので、楽しみにしておいてください。

では、さよなら

また、変な事に巻き込まれるのか・・・・・・？（前書き）

大分短いです。

更新空いた割に短くてすいません。

また、変な事に巻き込まれるのか・・・・・・・？

「そうよ、慎二・・・・」

女性――――――瑠美香から帰ってきた言葉は俺の望んでいた言葉だった。

「瑠美香なんだよな？本当に瑠美香なんだよな？」

「だからそう言ってるじゃない」

嘘じゃない。これは現実だ。あれほど望んでいた瑠美香が今ここにいる。そう思うだけで俺は、涙が抑えられなかった。

「もう、そんなに泣くなんて見苦しいわよ？」

「そんなこと言っても・・・・・・・・・・・・嬉しすぎて、無理だ」

「慎二・・・・・・・」

俺は瑠美香に近づき、抱きしめた。

「会いたかった。会いたかったよ、瑠美香」

「そんなの私もよ・・・・・・」

そう言って、瑠美香も俺の背中に手を回してきた。

あぁ、あれほど望んでいたものが今腕の中に、俺の中にいる。そう思うだけで、俺は幸せな気持ちになった。もう、これ以上の幸せな

んて無いんじゃないかと思うくらいだ。

「これから、俺と一緒に過ごそう。今まで過ごせなかった分を、一緒に」

「そうね、そうしましょう。だけど、その前にしたいことがあるの」

「何がしたいんだ？」

「あなたをね・・・・・・・・・・」

瑠美香は息を吸いこう言った。

「殺したいの」

ドスッ

「・・・・・・・・・・え？」

腹部に衝撃が走った。目を向けると、サバイバルナイフが腹部に刺さっていた。

「瑠、瑠美香・・・・・・何を・・・・・・・・・・・・・・・？」

「だって慎二、あなた約束守ってくれなかったじゃない？私がどれほど苦しんだか分かってる？分からないわよねぇ！ただ見てることしかできなかったあなたに！！！」

そう言って、瑠美香は俺の腹部に刺さっていたサバイバルナイフを抜いた。

「ぐぁ！」

抜け後から血が溢れ出す。血を抑えるために手で傷口を抑える。

「痛いわよねぇ？そりゃあ痛いわよねぇ。でもね、私が味わった痛みはこんなもんじゃないのよ！！！」

そう言って、瑠美香は何度も腹にナイフを刺してくる。

「まだまだねぇ！こんなモンじゃないのよ！！！こんなもんじゃ！！！！！」

俺は血が少なくなってきたのと、痛みで意識が薄くなってきていた。その中で思っていたことを口に出した。

「ご・・め・・・・・・ん」

「・・・・・・え？」

「あの時・・・・・・守れなくて・・・・・・・ごめん」

意識がなくなりそうになるのを堪え俺は言った。数年間溜め込んでいた気持ちを。

「約束・・・・守れなくて・・・・・・・ごめん」

だけど、そこまでだった。俺の意識は消えていった。そのとき、瑠美香を見ると何故か悲しい顔をしているように見えた

「っは！！！」

目が覚める。窓を見ると、少しずつ夜が明けていた。

「一体・・・・・・・何が・・・・・・・・・・・・」

今まで見ていたのは夢なのか？いや、あの温もりは痛みは本物だった。夢だったとは思えない。

「いや・・・・・・・・・瑠美香がいる時点で夢だな」

そう、瑠美香はもういない。いないんだ、絶対に。

ふと、左手を見ると薬指にあの玩具の指輪がはめられていた。

「・・・・・・・・・・・・・・」

～・～・～・～・～・～

夜が完全に明け、みんなと一緒に朝食を食べに食堂に来ていた。

「わぁ～、朝もすごいね～」

シャルロット嬉しそうに言っていた。他のみんなは何も言ってないが思っていることは同じだろう。

「さ、早く食べましょう」

楯無一言で朝食が始まった。俺も食べ始めたが何分味がわからない朝食だった。

～・～・～・～・～・～

朝食後チェックアウトを済ませ、俺達は花月荘を出ていた。

「今日もいい天気だな～」

一夏がそういうので俺も一緒に空を見た。憎らしいくらいの快晴だった。俺の気持ちとは正反対だな。

「そうね～、今日も暑くなりそうね」

「日焼け止めを塗ったほうが良かったのでしょうか？」

「そうね、今日は日差しが強いからそうしたほうがよかったのかも

ね」

「心頭滅却すれば火もまた涼し。日本にはこういうことわざがある」

「ほぅ、一体どんな意味なのだ？」

「心の持ちようによっては火も涼しく感じるという意味だ。夏の暑さも心の持ちようによって涼しく感じるのだ」

「なるほど、日本は面白い国だな」

「ちょっと、二人とも。そんなこと言ってると、倒れても放っておくからね」

「大丈夫だ。体調管理はしている」

「軍人たるもの体調管理ができなくてどうする」

「もう！ねぇ、慎二からも何か言ってよ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「慎二？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・え？ああ、何だ？」

「どうしたの？ご飯から元気ないけど・・・・・・」

「大丈夫だよ。昨日、暑くて寝れなくてな。少し寝不足なんだ」

「そう？だったら言いけど・・・・・」
そう言い、シャルロットは会話に戻っていった。
いかんいかん、もう少し態度に出さないようにしないとみんなに心配かけちゃうな。
「ねぇ、慎二君」
いつの間にか楯無がそばに来ていた。
「どうしたの？」
「どうもしてないって。心配すんな」
「嘘。慎二君、嘘ついてるとむきになるんだもん。分かりやすいわよ」
「え？俺ってそんな分かりやすい？」
「うん。とっても」
「だったら、今度はもう少しうまく隠さないとな」
「やっぱり、隠してたのね」
「・・・・・・あ」
楯無にうまく誘導されたらしい。
「それで、何があったの？」

「・・・・・・・・・・・・・・・」

これは話すべきか、話さないべきか・・・・・・・・・・・・・・・

「慎二君」

「・・・・・・・・分かったよ、話す」

俺は話すために息を吸った。気持ちを整理させるのも含めて。

「・・・・・・・・・・・夢を見たんだ」

「夢？一体どんな？」

「・・・・・・・・・・・・瑠美香に殺される」

「！」

楯無が息を飲むのが分かった。

「だけど、それが夢なのかわからないんだ」

「どういうこと？」

「夢の中に出てきた物が今ここにあるんだ」

俺はそう言って、玩具の指輪を見せた。

「これは？」

「子供のころ、瑠美香にあげたものだ」

「・・・・・・・・確かに、これはわからないわね。でも、夢じゃなかったら慎二君は死んでいるんでしょ？」

「ああ、あの血の量は死んでる」

「・・・・・・・・・・・・ちょっと、更識家に調査させてみるわね」

「・・・・・ありがとう」

「お礼なんて言わないで。慎二君の元気が無いとからかいがいが無いじゃない」

「・・・・・・って、そんな理由！？」

「当たり前でしょ？」

「・・・・・・・・・相談するんじゃなかった」

「うふふ」

笑いながら楯無はみんなの会話に混ざっていった。

「はぁ・・・・・・・・・全く、敵わないな」

～・・～・・～・・～

二学期の始業式。ＩＳ学園に全ての生徒が戻ってきていた。

「はぁ・・・・・・・・・今日まで情報無し、か」

そう、更識家が全力で探していると言っていいほど情報がない。これは、本格的に忘れたほうがいいのだろうか？あれは夢だ、と。

「とりあえず、教室いくか」

俺は教室に向かった。向かおうとしたとき

ピリリリリ――――――

「ん？」

ポケットの中で携帯が鳴った。ディスプレイを見ると楯無の名前だった。

「もしもし？・・・・・・・ああ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ホントか！？場所は！？・・・・・・・・ああ・・・・・・・・ああ・・・・・・・・・・・・・・・・・・ありがとう」

俺はそう言って、電話を切った。場所は分かった。あとは行動に移すのみ。

さぁ、これで真相が分かるかもしれない。俺は行動を開始した。

〜・〜・〜・〜・〜・〜

「失礼します」

俺は職員室に来ていた。

「織斑先生」

「何だ、鷹野か。どうした？」

「一週間、休みをくれませんか？いや、３日でいいです」

「始業式早々何を言ってるんだ、お前は」

「大事な用事が出来たんです」

俺は千冬さんを見つめた。すると、観念したように

「・・・・・・はぁ、分かった。了承してやる」

といった。

「ただし」

千冬さんは俺を見て

「絶対に一週間で帰ってこい、何があってもだ。分かったか？」

「はい。何かあったときは頼みます」

「他人の心配よりも自分の心配をしろ、馬鹿者」

「・・・・・すみません。じゃあ、行ってきます」

「ああ、行ってこい」
俺は職員室を後にした。

慎二が居なくなった職員室で千冬は
「ちゃんと何があったかを聞かせてもらうからな」
と言っていた。

「ここか・・・・・・・・・・・・・」

始業式を途中で抜け出してきた俺は、楯無の情報があった場所に来ていた。その場所とは

中国北部ゴビ砂漠。

「確かに、研究所とかを隠すのには丁度いいけどさ・・・・・・」

これは広すぎるだろう・・・・・・・

ＩＳを展開していても一面砂漠しか見えない。風のせいで砂嵐が吹き荒れ、視界が悪くなる。

「・・・・・・・・・・・・・・・ん？」

一瞬、何か建物の様な物が見えた。

「何だ？」

今度は一瞬ではなく、ちゃんと見えた。ということは・・・・・・・

「あれが目標物か・・・・・・・・じゃあ」

行くしかないよな！

俺はＩＳをその方向に飛ばした。すると、銀色の何かが飛んできていた。

「あれは・・・・・・・・ミサイルか！！！」

咄嗟に俺は回避行動をした。

「ったく！いきなり何だ！！！」

建物の方向を向くとまた何発もミサイルが飛んできていた。

「・・・・・・・・・・全く、最初から飛ばすな！！！」

俺は菊一文字と漆黒ノ太刀をコールして、ミサイルに向かっていった。

また、変な事に巻き込まれるのか・・・・・・？（後書き）

場所も何もかも変なところ選んですいません。

場所が思いつかなかったんです。

次も、頑張って更新します。

二学期が始まってるはずが・・・・・・・・（前書き）

今回も短いです

二学期が始まってるはずが・・・・・・・

「ったく、こりゃ何だ？」

ミサイルの雨をくぐり抜け、研究施設に潜入した俺は中の様子を見てそんな言葉を漏らした。中には人体模型、人が入りそうなフラスコのようなもの、遺伝子の研究の本などなど、俺にはとても理解できないような物が沢山あった。

「ここは、一体何を研究してたんだ？人体・・・・・いや、遺伝子の研究なのか？でも、遺伝子を調べて瑠美香と関係があるのか？だったら、人体の構造なのか？」

俺はＩＳを解除しながら考えた。が、何もいい案が出てこなかった。結果、行動あるのみとなった。

「ま、考えても無駄か。だったら、奥に行くしかないか」

俺は、奥にあった扉に向かった。が、何かおかしい。

「・・・・・・・・人の気配がしない？」

入ったときは中の様子に言葉を失ったが、今落ち着いて周りに気配を配るが人の気配と言うものが全く感じられない。

「これだけの研究施設なのに人がいないなんてことはあるはずがない。だったら、ここは用済み？調べる価値が無いか？」

周りに視線を配り、中の様子をまた確認する。すると、さっき気付

かなかったものが目に入ってきた。

「・・・・・・・・監視カメラか」

しかも、周りに同化する最新式の。

「用済みの施設にあんなのはいらないよな。ってことは、何かしらあるだろうな。だったら、行くしかないな」

俺は行動を起こした。監視カメラがあるということは、誰かがこれを見ている。先にするべきことは、監視カメラの破壊。俺の行動を見せる必要はない。俺は身近にあった本を監視カメラに向けて投げた。

「まず一個か。これは、まだあると考えたほうがいいな。用心して進むか。あと、ここには・・・・・・・無いか。よし」

俺は今度こそ、扉に向かった。人の気配を感じないと言っても、扉の向こう側の気配を探る。

「やっぱりいないか・・・・・・」

扉を開け、向こうの状況を確認する。

「さすがに何もないか」

俺は先に進んだ。

〜・〜・〜・〜・〜

同時刻、ＩＳ学園

「やっぱり、今日も慎二休みか・・・・」

一夏はそんな声を漏らしていた。慎二が休み三日が経った。

「千冬さんは一週間休みだと言っていただろう」

「そうは言ってもな、箒。さすがに気になるものは気になるんだよ。お前は心配じゃないのか？」

「それは、心配だ。しかも、急用だと言っていた。何かしら危ないことなんだろうが、私は慎二を信じる」

「・・・・・・・・そうだな。信じるか」

みんな、口には出さないが心配なのだ。だが、心の中では信じていた。

～・～・～・～・～・～

場所は戻り、ゴビ砂漠研究施設

「さすがに、こいつはないだろ・・・・・・・」

先程の通路を進み、少し経つと奥から何かが出てきた。俺の記憶が正しければ、数年前にエイム・シュナイダーが開発したキュベイダーと言うものだったはずだ。ついでに言うと、これは介護ロボットだったはずだ。

「・・・・・・・・・何で、アサルトライフル持ってんだよ、こいつら」

そう、完全に武装しているのだ。しかも、大量に出てきた全員が持っている。正直言って、恐ろしい。つか、量が多い！どんだけいんだよ！

「はぁ・・・・・・これが警備ロボットって事か？」

ガチャ

俺がこの状況に文句を言っていると、前のロボット共が戦闘態勢に入っていた。

「ちょっと血気盛ん過ぎないか？」

そんなのをお構いないしに前のロボット達は銃を撃ってきた。

「ったく、人の話聞けよ。いや、聞けないか？」

ぼやきながら俺はＩＳを展開した。キュベイダーが持っているのは軍で使われる『Ｍ４』。あくまで普通の人用。ＩＳを展開すれば攻撃は届かない。

「そんなに撃っても効かないぞ～」

俺は煉獄ノ太刀をコールし、キュベイダーに向かっていった。そして、斬りまくる。ほとんど抵抗が無いので、難なく十数体を破壊した。

「弱すぎないか？お前らだったら相手にすらならないな」
俺は更にキュベイダーを破壊していく。すると
ドン
どこか遠くから大型の銃が発射される音が聞こえた。
「ん？何だ？」
俺の疑問は簡単に解決された。更に奥から、五十口径弾が発射されていた。
「また、大型の撃ったな～」
俺は難なくそれを体を反らしよける。
「ん？」
よく見ると、シールドエネルギーが削られていた。
「何でだ？」
理由は簡単。『ＩＳの装備の銃で撃てばシールドエネルギーは削られる』要は、ＩＳ装備用の銃を使ったのだ。
「ったく、危ないこと・・・・・・・いや、危ないもクソもないか」
相手は、ロボット。人が打つと危ないＩＳ装備もロボットが使えば危険度なんて皆無だ。人と違ってロボットは替えがきく。

「胸くそ悪いことすんな・・・・・・・・」

だが、ぼやいてもいられない。ＩＳ装備を使うとなると、先ほどみたいな余裕は無くなってくる。

「進むのも一苦労だな・・・・・・・・やっぱ、何かあんだろうな、ここ」

これからは長期戦になりそうだな・・・・・・・・

～・～・～・～・～・～

二十分後

「はぁ～・・・・・・・・やっとここまで来たか」

先程の通路にいたキュベイダーを全滅させ、通路の奥まで来ていた。前にはとても大きな扉が待ち構えていた。

「ったく、一体何体壊したんだろうな」

破壊していたキュベイダーを百までは数えていたが、まだまだ奥にいるのを見て止めた。ちなみに、ＩＳ装備を持っていたキュベイダーは五十体いた。

「さ、行くか」

俺はＩＳを解除して扉の横にあったボタンを押した。

ウィイイイ・・・・・

機械音を上げ、大きな扉が開き出した。

「これは・・・・・・・・・！」

中に現れたのは、人の様な物が薬品付になっていた。人の様な物のというのは人の形になっているのかなっていないのか分からないのだ。まるでそこで人が作られている（・・・・・・・・）ように。

「何なんだ・・・・・・・・これは・・・・人なのか？」

俺が困惑してると、目の端にコンピューターの画面が入ってきた。

「ん？」

俺はコンピューター画面を見た。

「『人の細胞から人を作る』？プロジェクト名『ホムンクルス』？何だこれは・・・・・」

ほとんどが専門用語で文章が構成されているせいで内容は理解できなかった。だが、分かったのが

「・・・・・・・今、いる『これ』は人なんだな」

ということだった。よく見ると周りにもよく似た物が沢山あった。

「それだけ、人が作られているのか・・・・・・・・」

もう一度、コンピューターに目を戻す。

「何が書いてあるかは分からないけど、コピーして楯無に見せたほうが良いか」

俺は懐に持っていたＵＳＢメモリーをコンピューターに刺し、中のデータをコピーした。

「流石に量が多いな」

全部コピーするには二十分かかるみたいだ。仕方ない、ここにある本でも読んでるか。

二十分間俺は本を読んでいた。もう一度コンピューターの画面を見ると、コピーが終わっていた。

「やっと終わったか・・・・・・ここには他に情報は無さそうだな。帰るか」

俺は研究所から出た。

それを見ている機械が一機あった。

～・～・～・～・～・～・～

「くそ暑いな・・・・・・ちくしょう」

忘れていた、外は砂漠だったことに。仕方ない、ＩＳを展開して帰るか。

「帰りは飛行機使うか・・・・・・・・・」

とりあえず、近くの街まではＩＳで飛んでいこう。

～・～・～・～・～・～・～

「はぁ、疲れた・・・・・・・・・・・・・」

二日後、俺はＩＳ学園に戻ってきていた。予定よりも早いが問題ないだろう。というか、飛行機疲れる。こんなんなら行く時と同じようにＩＳで行けばよかった。

「千冬さんの所行くか。予定よりも早くなったしな」

俺は職員室に向かった。そういえば学園の生徒が見えないな。何でだ？

～・～・～・～・～・～・～

職員室に着いた俺は千冬さんのところに向かった。

「織斑先生、予定よりも早く帰ってきたので報告に来ました」
「鷹野か、分かった。何があったかは後で聞くからな」
「はい。それよりも、織斑先生。楯無はどこにいますか？」
「楯無か？今の時間だったら生徒会室にいるだろう」
「分かりました。では、失礼します」
俺は職員室を後にして、生徒会室に向かった。
～・～・～・～・～・～
生徒会室についた俺はいつも通り生徒会室のドアを開けた。
「お～い、帰ったぞ～」
中に本音と虚がいたが、別段気にした様子はなかった。
「あら、慎二君。おかえりなさい。何か情報はあった？」
「俺には理解出来ない物ばっかりだったよ。だからコピーしてきた」
俺はＵＳＢメモリーを渡した。
「あら、そんなことまでしてたの？」
「まぁな。今回はきっちりと理解したいことだからな」

「そう。じゃあ、私たちも全力で解析するわ」
「頼むわ。俺は疲れたから部屋に戻って寝る。じゃまはしないでくれよ？」
「大丈夫よ。今はこっちを最重要にするから」
「何日くらい掛かる？」
「明後日位には報告できると思うわ」
「よろしく頼む」
「はい、分かりました」
そう言い、楯無は笑顔で俺を見た。何となく気恥ずかしかったが俺は睡魔の方が強敵だ。
「じゃ、部屋に戻る」
「ゆっくり休んでね」
俺は生徒会室を後にした。
「さ～て、早く仕事を終わらせないとね」
慎二が去った生徒会室は慌ただしかった。

慎二が帰ってきた日の深夜、生徒会室に楯無はいた。生徒会室のコンピューターで慎二がコピーしてきたデータを見ていた。

「・・・・・・人の細胞から人を作る。プロジェクト、ホムンクルス」

それを怪訝そうな顔で楯無は見ていた。その中に、一つ目を見張るものがあった。

「細胞の活性による治癒能力の向上？」

それを読んで楯無の顔は何か納得したような顔になっていた。

「なるほど、これなら・・・・・・・」

そして、データの他の所に別なデータを見つけた。

「被験者名簿、ね・・・・・・」

楯無はその名簿を見ていった。そして、見続けていきある名前を見つけた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・これは！」

しばらく楯無は何かを考えていた。今まで集めたピースを組み立てるように。

「・・・・・なるほどね、そういうことだったの。これで、全て納得できるわね」

そして、このことを慎二に教えるかを考えた。

「・・・・・・・・・・・・まだ彼には教えなくても・・・・これを受け止めきれないわ、今の彼には。そして、このプロジェクト発案者は・・・・・彼ね」

コンピューターの画面を見ると、ある女性のプロフィールと顔写真が載っていた。その顔写真は楯無も調べた人物だった。その女性とは――――――

二学期が始まってるはずが・・・・・・・（後書き）

これから短い内容になるかもしれません。

中々、話をうまく切ると糞長くなるか、短くなるかの二択なんです。

更新を早めたいので、短くしています。

できる限り濃い内容にするよう努力するので温かい目で見てください。

学園祭、それは・・・・・・・・・・（前書き）

年明け前に投稿しようと思ったんですが間に合わなかったです。すいません。

しかも今までずっと執筆してました。で、この時間です。

長くなりましたが話自体はあんまり進んでいません。

では、どうぞ

学園祭、それは・・・・・・・・・・・・

次の日、慎二はいつも通り登校した。そして、学校中が変に浮き足立っていることを感じ取る。

「何だ？みんなに何か良いことあったのか？」

不審に思いながらも教室に着く。そして、慎二が入ってきた途端に

「慎二！帰ってきたか！」

と一夏が言ってくる。まぁ、いつも通りの風景と行ってしまえばそうなのだが。

「一夏、何でみんな浮き足立ってるんだ？」

「ああ、それはな」

と言い、一夏は行事の知らせが書いてある掲示板を指さす。そこには

『文化祭まで残り一週間！』

と、でかでかと書かれていた。そこで慎二も合点がいった。

「あ～、なるほどな。文化祭か。そりゃあ、浮かれるか」

そこで、一つ気になったことがあった。

「なぁ、一夏。一組って何やるんだ？」

「ん？ああ、それは・・・」

「メイド喫茶だ」

いきなり、慎二の後ろにラウラが現れた。
つか、それよりも・・・・

「メイド喫茶？」

「ああ」

「・・・・・・ちなみに、誰発案だ？」

「私だ」

「・・・・・・・」

一瞬、言葉を失う。しかも、何でラウラ？という疑問の浮かんできた。が、気にしないことにした。

「で、俺は何やるんだ？」

「厨房と執事だってさ」

「・・・・・・・・・さいですか」

俺のいない間に大分話が進んでいたらしい。というか、文化祭の事を完全に忘れていた。夏休み開けにやるから、夏休みから準備する奴らもいるから覚えてたけど、今回はまぁ、あんな事があったしな

ぁ・・・・・・・・放課後、楯無のところでも行くか。

「そういえば、慎二。休んでいる間、どこ行ってたんだ？」

「ん？ああ、中国行ってた」

「何でまた」

「用事があったんだよ、大事な用事がな」

「へぇ」

一夏から聞いてきたくせにもう興味がないらしい。
何だ、こいつ。最初から聞くなよ、ったく。こいつはこういう奴だけどさ。
慎二がそんなことを想っていると、教室のドアが開かれた。

「ＳＨＲを始める。さっさと席に着け」

と千冬さんの登場だった。何というか、いつも通りなんだが、何か凄いよなぁ。一言でみんな黙らせるんだから。

「では、出欠をとる――――――――――」

～・～・～・～・～・～

時は飛び、現在放課後。休み時間や昼休みは、箒達からの質問攻め、特に鈴は「何で中国行ったのよ！」などと理不尽な事を言われまくった。
ま、今はそれを振り切って逃げてるんだけどな。

振り切った理由は生徒会室に行くからだ。楯無には二日掛かると言われたが、やはり気になる。と、気づくと生徒会室に着いていた。逃げている間に近くまで来ていたらしい。慎二はそのまま生徒会室に入る。

「楯無、いるか？」

「あら、慎二君。どうしたの？」

いつも通り、生徒会長の椅子に座っていた。

「昨日渡したデータ、何か分かったか？」

「ん～、少し微妙ね」

と、楯無は少し言葉を濁す。楯無にしては珍しい、と慎二は思った。

「分かったことでいいから教えてくれないか？」

「いいけど・・・・そんなに情報ないわよ？」

「それでもいい」

すると、楯無は話し始めた。

「とりあえず言えることは、あの実験の立案者はエイム・シュナイダーよ」

これはやはりというか、予想はついていた。研究所には彼の開発したキュベイダーがあったのだ。予想はいくらでもつく。

「でも、エイム・シュナイダーは年寄りだろ？そんなことできるのか？」

「そこは・・・・・・・・わからないわ」

一瞬何かを考えるような顔をした楯無だったが、直ぐに言葉を発した。

「あと、あの研究に行って思ったんだが、キュベイダーが何で武装してたんだ？あれは介護ロボットの筈だろ？」

「それはそうだけど、慎二君知らないの？」

「何をだ？」

「その様子だと本当に知らないのね。だったら教えてあげる」

一度息を吸い、楯無はあの事を話し始めた。ある、軍関係者がキュベイダーのプログラムを書き換え、軍事利用をしたことを。それを聞いた慎二は

「・・・・胸くそ悪い話だな」

と、無意識の内に言葉を濁した。

「そうね・・・・・私もそう思うわ。エイム・シュナイダーもそう思ったでしょうね」

「それはそうだろ。エイム・シュナイダーもそんなことに使われて

るために開発したんじゃない」

「でも、それは全部に言えることよ」

物は使いよう、という言葉があるが全くそのとおりだと思う。例を上げれば車だ。車だって普通に使えば便利な乗り物だ。だが、操作を誤ると人を殺してしまう道具になる。ダイナマイトだってそうだ。今は兵器で使われることが主流になっているが、元は炭鉱の人たちの為に開発されたものだ。

「・・・・・人を助けるために作ったものが人を殺す・・・・・・・・・エイムはどんな思いでそれを聞いたんだろうな」

「それは私たちには分からないわ。でも、彼の悩んだみたいよ」

「そうか・・・・・・・」

少しの間、沈黙が流れる。

「他に、何か分かったことがあるか？」

「・・・・・・無いわ」

「そうか・・・・・・ありがとな」

「好きな人の為に尽くすのは当たり前じゃない？」

「言ってろ」

楯無は笑っていたが、慎二は気にすることなく生徒会室を後にした。

そして、残された楯無は

「・・・・・彼が全部を知ったら、どうなるでしょうね」

と、悲しく呟いていた。

～・～・～・～・～・～・～

一週間というのは早く過ぎる。今日は文化祭。特に問題なくここまで来た。問題になっていた服は、ラウラが調達してきた。何故、そんな宛があるのかと疑問に思ったが気にしなかった。
準備は万端。そして、生徒のテンションは最高潮になっていた。あとは、楯無が掛け声をかければ始まる。

「みんな、今日は楽しむわよ！！」

「「「「「「おおおおおおおおおおお！」」」」」」

と雄叫びが上がった。ある意味、男よりも凄い。

そして、学園祭は幕を開けた。ＩＳ学園の学園祭は一日目は生徒だけ、二日目は一般公開、という形になっている。ゴタゴタの変な事が起きるのは基本的に二日目だ。が、ＩＳ学園の警備はかなり完璧で殆ど問題は起きない。たまに、馬鹿が問題を起こし警備員に連れられていく、というシュールな映像が流れたりする。

「ま、二日目に気を配ればいいか」

慎二は楽しむというよりは、警備をしようと考えていた。それは、最近楯無から聞いたサイレント・ゼロフィスが来るかもしれないか

らだ。といっても、確率は低い。情報すら信用性は少ない。

「慎二、早く準備して」

来たのはシャルロット。開会式が終わり、慎二は直ぐに教室には行かず、屋上に来ていた。何となく、風に当たりたくなったのだ。こういう時に慎二はいつも、やっぱり面倒見が良いというか、周りに気を配れるというか、と思っている。

「いつも悪いなシャルロット。こういう時、呼びに来てもらって」

「だったら、呼びに来る労力を使わせないでもらいたいな」

「ははは」

「笑ってごまかさないでよ～」

慎二はひとつ気になることを聞いた。

「もしかして、それがラウラが借りてきた服か？」

「うん。えへへ、可愛いよね、これ」

確かに、服は可愛い。が、この魅力を出しているのはシャルロットの美貌もあると慎二は思う。

「服もだけど、シャルロットも可愛いから似合うと思うけどな」

「か！・・・・・・・・慎二ってそういうの不意打ちだよね」

「そうは言ってもなぁ。思ったこと言ってるだけだし、シャンルロットが可愛いのも事実だし」

「・・・・・・本当に可愛い？」

「ああ、保証する」

「えへへ」

シャルロットは少し余韻に浸っているみたいだ。少し、この余韻に浸らせてあげよう、と慎二は思った。
でも、俺も執事服着るんだよな・・・・・・何か、嫌だな。
そこで、シャルロットが現実世界に戻ってきた。

「あ、慎二。そろそろ行かないと」

「そうだな、みんな待たせちゃ悪いか」

「じゃ、行こう」

慎二とシャルロットは歩きだした。

～・～・～・～・～・～

「「遅い！」」

教室に着き、待っていたのはメイド姿のラウラと箒のお叱りだった。
ラウラも箒も似合っている。

「全く、シャルロット行ったのに何故遅いのだ！」

「慎二も慎二で一体どこに行っていた！」
「悪かったって。そろそろ準備しないと時間ないだろ？」
「準備といっても、あとは慎二が着替えれば始められるぞ」
「え？一夏も終わってるのか？」
「おう、今終わったぜ」
教室の仕切りの向こうから出てきたのは執事服を着こなした一夏だった。
「お～、中々様になってんな」
「でも、結構キツイぞ、これ」
「マジ？」
「ほら、早く慎二も着てこい」
「はいはい、分かりましたよ～っと」
みんなに叱咤されて慎二は仕切りの向こう側に行った。そして、箱に入ってのは一夏と同じ執事服。
「これか・・・・・確かにキツそうだ、色んな意味で」
ぴっちりとしているし、これを長時間着るのは辛そうだ。あと、視

線に耐えるのも。

「慎二～、着替え終わった～？」

「もう少し待ってくれ！」

慎二は直ぐに着替え、みんなのところに戻った。

「「「「「お～」」」」」

戻ったら、みんながそんな声を上げた。

「そんな声上げる程のもんか？」

「似合ってるよね、みんな？」

シャルロットそう言うとみんなが頷いた。

「どうでもいいけどさ、始めようか」

「慎二がそれを言うか？」

「うっせ」

そして、慎二達の学園祭は始まった。

～・～・～・～・～・～・～

店を初めて一時間もすると、一年一組の前には長蛇の列ができていた。

「こっちに、執事セットよろしく」

「こっちにも」

「はいはい」

中の喫茶店もとても慌ただしくなっていた。

「少し・・・・・・休ませて」

慎二は休まず働いていて、汗だくになっていた。ちなみに、現在一夏は休みが入っている。

「もう少し頑張って、まだお客さん引かないから」

「いや、これだったら暫く無理じゃね？」

少し、教室の外を見ると最後尾が見えない列があった。とてもじゃないが休みなんてなさそうだ。

「仕方ねぇか」

「何とか休み作ってもらうから頑張って」

「ありがとうな、シャルロット」

「それは休み作れてからにして。この調子じゃ作れるかも分からないから」

「良いんだよ。その心遣いが嬉しいんだよ」
「そう言って貰えると嬉しいかな」
「さて、もうひと頑張りするか」
「うん！」
「慎二君～、あっちの席行って」
「分かった～」
そう言われて、行ってみると
「慎二、私の言うこと聞きなさいよ」
「・・・・鈴かよ」
チャイナ服を着た鈴がいた。さすが中国人あってか、とても似合っている。頭にはボンボンの様なものが付いてきて、いつもとは少し印象が違う。
「何よ！最初の間は！」
「いやな、結構疲れてるんだよ」
「それで、メニューとかはないの？」
「人の話聞かないのな。ま、それがお前か・・・・・・ほら、メニューだ」

「ちょっと雑じゃない？」
「お嬢様、こちらがメニューになります。こっちの方が良いか？」
「それならいつも通りの方が良いわ」
「だろ？とりあえず、何か決めてくれ。他の席もあるから」
「ん～、じゃあ、この執事ご奉仕セット頼もうかしら」
「・・・・・・コーラおすすめだぞ」
「何かあるわね」
「俺も嫌だから露骨に話変えたんだけど」
「尚更、頼みたいわね。じゃあ、執事ご奉仕セット一つ」
「後悔すんなよ」
慎二は厨房からセットに使う物をとってきた。
「はい、ご注文の品です」
慎二はそう言い、鈴の向かいの席に座る。
「何であんた座ってんのよ」
「黙ってろ」

慎二はセットの内容のポッキーを一つ取った。そして

「あ～ん」

とポッキーを鈴の口に差し出した。

「な、あんた何やってんのよ！」

「これがセットの内容。食べさせてもらう内容なんだよ、このセットは」

それを言うと鈴は顔が赤くなった。当然と言えば当然の反応である。

「でも、これ普通に食べるのもできるぞ」

「い、いや、やってもらおうかしら、もったいないし」

「そうかよ。ほら、あ～ん」

「あ、あ～ん」

小っ恥ずかしい光景が今まで何回流れたことか。最初は恥ずかしかったがやっていくうちに慣れた慎二であった。

楽しい時間というのは早く過ぎる。直ぐにポッキーは無くなった。

「はい、終了」

「結構早いわね・・・・・・・何か勿体ない」

「はいはい、早いとこ帰ってくれないか」

「流石に雑すぎるでしょう、もうちょっといたって良いじゃない」

「まぁ、良いけどよ・・・・・・後ろ詰まってるから早くしろよ」

慎二は入口を指さす。鈴も状況が分かったらしく席を立った。

「仕方ないか・・・・・・・それじゃ、戻るわ。後で二組来なさいよ」

「もう少し落ち着いたらな。いつになるか分からないけど」

「まぁ、頑張りなさい。待ってるから」

そう言い残し、鈴は教室を出ていった。そして、次の生徒が入ってくる。

「はぁ・・・・・・・・・しばらくは休みもないし、鈴の所行けないな」

もう一頑張り・・・・・・いや、もう三頑張り必要かな。

～・～・～・～・～・～

「あああああああああああああああああああああああああ、疲れたあああああああああああ」

そう言って慎二は、教室の控え室の椅子に座った。

結局、慎二が仕事から開放されたのは鈴は来てから４時間後だった。

でも、学園祭初日は終わってない。が、慎二の出番は終わった。

「お疲れ様」

そう言い、シャルロットはお茶を慎二に渡した。

「ありがとう」

慎二はお茶を貰って、一気に半分近く飲んだ。

「ぷはぁあああああああああああ・・・・・・・・・生き返る」

「あはは、最初から休み無しだったからね。そりゃあ、疲れたよね」

「そういえば、初めて水分取った気がする。つか、飯食ってねぇよ、俺」

現在の時刻は三時。お昼じゃなくて、もうおやつの時間だ。と言っても、何も食べるものを持っていない。

「はいこれ。冷めちゃったけど食べて。休憩中に買ってきたんだ」

そう言い、シャルロット渡してきたのはお好み焼きと焼きそばだった。

「・・・・・・・・・・・・・・・本当、気が利くな。ありがとう」

「今まで頑張ってたんだから、これからは休んでいいよ」

「そうさせてもらうよ」
慎二はそう言い、焼きそばを食べた。
「うん、うまい」
「良かった」
それから、直ぐに慎二は二つとも平らげた。
「ふぅ、ごちそうさま」
「あとは少し他の所見てきたら？」
「いや、疲れたからいいや。少し、ここで寝る」
慎二はベンチに横になった。
「何か掛ける？」
「あったらよろしく」
「無かったらそんなこと言わないよ」
「じゃあ頼む」
シャルロットは毛布を慎二に掛けた。
「ありがと。じゃあ、寝るよ」

「うん、おやすみ」
「おやすみ」
慎二が眠りに就くのに時間はかからなかった。
～・～・～・～・～・～
「慎二はいるか？」
そう言いながら控え室に入ってきたのは箒だった。
「寝ちゃったよ」
シャルロットはベンチを指さした。
「では、いいか。少し休ませてやろう」
「しばらく起きないだろうしね、最初から今までフルで動いてたもんね」
「今日は人が多かったな」
「ほとんどが慎二と一夏目当てだったけどね」
「もう人も少なくなってきたから問題はないな」
「明日は休憩作ってあげたいね」

「そうだな」
「じゃあ、最後の一仕事行こうか」
「そうだな」
箒達はホールに出た。
～・～・～・～・～・～・～
「んぁ？」
慎二が目を覚ますと、みんなが後片付けと明日の準備をしていた。
「あ、起きたか、慎二」
最初に気づいていたのは箒だった。
「何も起こしてくれれば良かったのに」
「疲れているのに起こすのは悪いだろう」
「それよりも、俺何分くらい寝てた？」
時計を見ると、五時を回っていた。
「俺、二時間も寝てたのか。尚更、悪い気がするな」
「気にするな、お前は今日頑張っていたのだから休んでいいんだ」

「これからは手伝うよ」
「別に休んでいてもいいぞ」
「手伝ったほうが早く終わるだろ？」
「そうだが・・・・・・」
「よし、早く終わらせよう」
慎二は無理に手伝いをした。時間は掛からず片付けは終わった。
「よし、明日も頑張るか」
「慎二、明日は一時間だが休憩が取れたから、明日は学園祭を見てくるといい」
「別に休み作らなくてもいいのに」
「今日のご褒美だと考えればいいだろ？」
「ま、休みもらえるならそれに越したことはないか」
「そういうことだ」
「じゃ、寮に戻るか」
「そうだな」
慎二と箒は寮に戻った。

～・～・～・～・～・～

「ふはぁあああああああああああああああああああああ、疲れたぁあああああああああああああああああああああああああああ」

部屋に戻った慎二はベットに横になりながらそんな言葉を漏らした。ベンチでも寝たが、やはりベンチは硬いので疲れは取れない。

「この調子で明日もかぁ。ま、何とかなるか」

結局、直ぐに慎二は眠りに就いた。

～・～・～・～・～・～

次の日、一般客も交えた学園祭二日目が始まった。学園の生徒ひとりひとりに招待券を配れる。ちなみに、慎二はその招待状を弾に渡した。弾はなんどもＩＳ学園に来たいと言っていたからである。一夏は蘭にあげると言っていた。

慎二は、昨日とは違い早めに教室に行った。が、結局最後だった。

「嫁、早く来たのはいいが結局最後だな」

「それを言うな、ラウラ・・・・・・つか、俺は嫁じゃない。ま、さっさと着替えるか」

慎二は更衣室に行き、昨日と同じ執事服を着た。

「何か、昨日あれだけ働いたから少し愛着があるな」

何故か、愛着が湧いていた慎二だった。

「さ、今日も頑張るか」

そして、学園祭二日目が始まった。

～・～・～・～・～・～

昨日のうちに大分、生徒の方は捌いたから仕事は昨日よりは大分楽になっていた。一般公開では、普通にいろんなところに行って、うまく人が別れていた。

「今日はだいぶ楽だなぁ」

「昨日があれだけすごかったからね～」

「ま、楽に越したことはないな」

「これだったら、普通に休憩入れそうだね」

「そしたら、少し探索してくるか。そういえば、シャルロット達は昨日見てきたのか？」

「まぁ、半分は見れたかな」

「そうか～」

「お昼くらいに見てくれれば？昨日と違って量も多いはずだよ」

「だったら、お昼に休憩させてもらうよ」
「じゃあ、今頑張ろうか」
「おし、もうひと頑張り行きますか」
～・～・～・～・～・～・～
「じゃ、一時間くらい休憩させてもらうよ」
お昼、少し混んできたが昨日ほどじゃない。みんな昨日あれほどの客を捌いたせいか今日はだいぶ落ち着いている。
「うん、楽しんできてね」
「おう」
と言っても、少し探るくらいだけどな。
慎二はまず生徒会室に向かった。
人混みのせいでいつもより時間が経ったが、生徒会室に着いた。
「楯無～、何か問題起きた・・・・・・か・・・・・・・・・？」
生徒会室を開けた慎二だったが、中の様子に言葉を失った。何故なら・・・・・・
「・・・・・・・・・何で着替えてんだよ」
楯無がメイド服に着替えており、下着姿だったのだ。しかもかなり

際どい。

「慎二君、早く閉めてくれない？流石に恥ずかしいんだけど」

「あ、ああ、悪い」

慎二は中に入りながら、ドアを閉めた。中に入りながら。

「って、何で中に入ってんだ！俺！」

「あら、そんなに見たかったの？慎二君ならいつでも見せてあげるのに」

と言いながら、近づいてくる。もちろん、下着姿で。

「ちょっと待って！近づいてこないで！！！俺はまだ貞操を失いたくない！！！！！」

「そんなこと言わずに、いいことしましょ？」

その後、生徒会室には・・・・・・・・

～・～・～・～・～・～

三十分後、生徒会室からは少しやつれた慎二が出てきた。

「あぁ～、何でこんなことになったんだ・・・・・・・」

中で何があったかは、皆さんのご想像にお任せする。ちなみに、その後の楯無はテカテカしていたとだけ言っておこう。

「さてと、校門でも行くか」

人がたくさん来る校門に慎二は向かった。

校門に着いた慎二だったが、人の多さにうんざりしていた。

「ここまで多いとは思わなかったなぁ・・・・・・・・はぁ」

少し、ため息をついていると声を掛けられた。

「ちょっといいかな？」

そちらの方向を見ると、緑髪のポニーテールの様に髪を結んでいる男がいた。

「君が鷹野慎二君かな？」

「はい、そうですけど」

「ちょっと話があるんだけど、いいかな？」

「すいません、忙しいんで」

「そうか・・・・だったら、これだけでももらってくれないかな？」

そう言って、男が渡してきたのは何かの箱だった。

「これは？」

「僕からのちょっとしたプレゼントだよ」

「そうですか」

慎二は、この時後でこれを捨てようかと思っていた。

「じゃあ、僕はこれで失礼するよ」

そう言い、その男は去っていった。

「何なんだ？今のは・・・・・・というか、何渡したんだ？」

中身を確認すると、何かのメモリーが入っていた。

「ん？何だこれは・・・・何のデータが入ってるんだ？」

今は確認できないが、後で確認でもしてみるか。

と、そこで

『一年一組の鷹野慎二君、第三アリーナに来てください』

と、放送が入った。

「は？そんなのあったけ」

『模擬戦を行いますので、至急来てください』

「あ～、そんなのあったな」

一般客が来るということで、ＩＳ学園ならではのＩＳの模擬戦をする、と言う話になった。それで、慎二が選ばれたわけだ。

「仕方ねぇ、行くか」

慎二は第三アリーナに向かった。

～・～・～・～・～・～・～

「ふ～」

第三アリーナでの模擬戦を終え、アリーナのピットに慎二は戻っていた。

「何だかんだで、盛り上がったなぁ」

まぁ、ＩＳなんて普通の生活ではお目にかかれない。それを生で見られるのだ。興奮するなと言う方が無理だろう。

「慎二、お疲れさま」

ピットのどこからか声が聞こえた。多分、箒たちの誰かであろう。放送で呼び出したのだ。来ていてもおかしくない。

「これ、よかったら飲んで」

近くで声が聞こえ、そちらを振り向こうとした。

「おお、ありが・・・・・・・・・・・・」

が、途中から声が出なかった。その理由は

「海振りね、慎二」

「瑠・・・・・・・・美・・・・・・・・・・・・・・・・・香・・・・・・・・・・・・・？」

そう、声の主は瑠美香だったのだ。

「ええ、また会いに来ちゃった」

「お前・・・・！誰なんだ！！！！！！」

「誰って・・・・・さっき瑠美香って呼んでくれたじゃない」

「そんなわけある訳がない！！！！瑠美香は、死んだんだ！！！！！！！！！！！俺の目の前で！！！！！！！！！！！！」

そのセリフを言うと、瑠美香の表情が先ほどと別物になった。

「そうね、確かにあなたの目の前で私は死んだわ。あなたに殺されたわね、私は」

ズキッ

その言葉は、慎二の心にとても響いた。

「だから、私はあんたなんて大嫌いよ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・やっぱり、そうか」
「え？もしかして、今でも好きでいてくれてるなんて思ってたわけじゃないわよね？」
慎二はそれに応えない。心のどこかでそう思っていたのだ。
「はっ！おめでたいわねぇ、あんた」
「・・・・・・・・・・・・・・・」
と、そこで慎二はある疑問が浮かんだ。この女はさっき「海振り」と言った。ということは、あの時起こったことは全部真実と言うことになる。あれが、全部起きたこととということは
「俺は死んだ・・・・・・・・・・・・・？」
「正確には、私が殺しそこねたのよ。・・・・・・・・・・・・・ったく、あそこで邪魔が入らなければ」
「殺しそこねた・・・・・・・・・・・・・・・？」
更に疑問が広がる。
真実ということは、海岸で俺は刺された、ということになる。となると、あの血の量が出たことになる。なのに、何で俺は死んでいない？
疑問が広がるだけで、その疑問は解消されなかった。
「ああ、もう時間切れか・・・・・・・・・・」

「？」

女が言葉を発すると、近くで爆発が起きた。

「！？」

「ったく、また殺しそこねた。タイミング悪いわね、私」

「お前は何を言って・・・・・・」

「ここでお別れね。今度は絶対殺してあげる」

そう言い、女は逃げていった。

「待て！！！」

慎二は、それを追いかけた。

～・～・～・～・～・～・～

外は爆発が起き、パニック状態になっていた。爆発は教員が処理し、問題は解決されつつあった。が、そんなことは問題では無い。

「あの女は・・・・・・・」

慎二は、あの女を捕まえ情報を聞き出そうとしていた。が、姿は見つからない。

「くっそ！」

悪態をついていると、近くの森で何かが上に上がっていった。よく見ると、それはＩＳだった。

「あの野郎逃げようってか！逃がさねえぞ！！！」

慎二もＩＳを展開し、それを追いかけた。が、直ぐにそれは中断される。十数メートル上がったところで、ビームが飛んできたのだ。

「狙撃か！」

周りを見渡すが、そんな姿は見つからない。が、攻撃は続く。その間に、ＩＳは逃げていく。

「くっそ！何なんだ、一体どこから！」

慎二は攻撃が来ている方向を見て、さらにハイパーセンサーの出力を極限まで上げ、やっとその姿を確認できた。が、それでも完璧に確認は出来ない。ハイパーセンサーは出力は抑えられているとはいえ、数キロ先の物まで確認できる。それが、その姿を完璧に確認できないとなると

「超遠距離狙撃か」

しかも、かなり高度になる。狙撃はただでさえ命中率が低い。それを推定で数十キロの位置から、慎二に当てようとしてる。現に、よけないと当たりそうだ。そういうことは、狙撃手はかなり・・・・いや、超一流以上の実力を持っているだろう。
しかも、数十キロの距離を飛ぶビーム兵器が開発されているのだ。
それだけでも驚きだ。
そんな考えていると、先程のＩＳは確認できないほどまで逃げてい

た。あれは、高速移動ができるらしい。

「・・・・・・・何も出来ない！何でだよ！！！ちくしょう！！！」

慎二は、そのまま下に降りた。

規定区域外でのＩＳの展開で慎二は事情聴取を受けていたが、それを終え生徒会室に向かっていた。そして、ドアを開く。中には楯無がいた。

「楯無、あの組織の事を調べてくれ」

「昼間の事件の？」

「ああ、あれはおかしい」

「確かにおかしいわね。あれほどの技術と兵器どこで手に入れたのかしら・・・」

「そっちじゃない」

「？」

「やっぱり瑠美香は生きていた。そして、この前の海で起きたことは全部事実だ」

「・・・・・・・やっぱりね」

「は？」

今、楯無はやっぱりと言った。ということは

「お前、最初から知ってたな」

「最初からでは無いわ。慎二君が研究所から持ち帰ったデータに全部書いてあったの」

「なら、何でお前は教えなかった」

「あなたに教えるのは、、少し戸惑ったのよ」

「どういうことだ？」

「あの内容をあなたが受け止められるかが私には分からなかった」

「だから、どういう・・・・」

「瑠美香ちゃんが生きているという事実。そして――――――

―」

楯無は息を吸い、こう言った。

「あなたを恨んでいる」

学園祭、それは・・・・・・・・・・（後書き）

新年一発目が何も変哲もない、話でした。

特別話を投稿したかったんですが、ネタがありませんでした。

あと、クリスマス何も投稿できなくてすませんでした。

投稿スピードもあんまり変わらなくてすいません。

新年、謝ってばっかりですが

今年も、この駄作品をよろしくお願いします。

俺は一体何を・・・・・・・・・・（前書き）

今回も短めです。

すいません。

俺は一体何を・・・・・・・・・・・・

学園祭が終わり一週間が過ぎた。みんなも落ち着きを取り戻している。
そんな中、慎二は楯無に言われたことをずっと考えていた。

「瑠美香に恨まれている、か・・・」

そんなものは予想は付く。あんなことがあったんだ。当たり前なんだ。でも、楯無の言っていることは別なことのような気がする。あれだけ神妙な顔で言っていたんだ。何かあるはずなんだ。あるはずなんだけど、見つからない。

「もう、何なんだよ・・・・・・・瑠美香に恨まれてるなんて分かりきってるんだよ・・・・・・・・！」

実際、この前あった瑠美香らしき人物は俺の事を恨んでいた。いや、あれは瑠美香だった。瑠美香じゃないけど瑠美香だった。もう訳が分からない。だれか、俺に答えをくれ・・・・・・・！
思い悩んでいた慎二だったが、今日は平日。学校に行かなくてはならない。

「時間ねぇな・・・・・・・仕方ねぇ、行くか」

慎二は学校に向かった。

～・～・～・～・～・～

教室に着いた慎二だったが、席に座り完璧に上の空だった。それを

一週間続けている。流石に心配になる、箒達。

「慎二は一体どうしたんだろうか・・・」

「分かりません。でも、何かに悩んでいますよね」

「そうねぇ。でも、何で私たちに相談しないのかしら？」

「僕たちに心配かけたくないんだよ」

「そんなことを言っても、水臭いぞ」

「「「「「う～ん」」」」」

答えは出ない。結局、その日は慎二に任せようと言う結論になった。

「おい小娘共、席に付け。ＳＨＲを始める」

～・～・～・～・～・～・～

「瑠美香・・・・・・一緒に過ごさないか？」

慎二は、ずっと思っていたことを瑠美香に伝えた。瑠美香の答えは・・・・・・

「は？何言ってんのあんた？一緒に過ごそう？あは・・・あはははは！」

瑠美香は笑う。狂ったように笑う。慎二の知っている瑠美香とは別人みたいに。

「ふざけんじゃないわよ！何で大嫌いなあんたと過ごさないといけないのよ！！！」

大嫌い。その言葉は慎二の心に深く突き刺さった。だが、それは瑠美香の本心だと確信はあった。

「だからね、私はあんたを殺したいの。ねぇ、死んでくれる？」

普通なら、それを断っていただろう。だが、慎二自身も負い目を感じていた。そして

「・・・・・・・・・・ああ、殺してくれ」

そう言ってしまった。すると、瑠美香はとても嬉しそうな顔で

「あは！やっぱり慎二大好き！」

何て言う。だが、それだけで慎二は・・・・・・・・・・・

そして、瑠美香はどこからかナイフを取り出した。

「慎二、ありがとね」

笑いながらそう言い、瑠美香はナイフを慎二の腹に刺した。慎二の腹部に激痛が走る。だが、それでもいい、と慎二は思ってしまった。

「瑠美香」

「どうしたの慎二？」

「・・・・・・・・・・・大好きだ」

それを、聞いて瑠美香は

「・・・・・・・・・・・・・・・私もよ」

と言った。それを聞いた慎二の意識は遠のいていく・・・・・・・

〜・〜・〜・〜・〜・〜・〜

「・・・・・の！」

何だ？何かが聞こえる・・・・・・一体何だ？

「起きろ！鷹野！」

この声は千冬さん？何で千冬さんが・・・・・・・？

「ほう、これで起きないとは。余程死にたいと見える」

「い、いや、織斑先生。流石にそれを使ったら鷹野君の命が・・・
」

「そんなことは知らん！」

ブォン！！！

身の危険を感じた慎二は、咄嗟に頭を横に動かした。次の瞬間

ボコン！！！！！！

そんな音が聞こえた。
いや、何振り下ろしたんだよ、千冬さん。
今まで目を開けていなかった慎二だが、目を開けた。そこは

「教室・・・・・・・・・・・・？」

「何だ、まだ寝ぼけているのか。よし、目を覚ましてやろう」

「い、いや！大丈夫です！！！」

「何だ、遠慮するな。ほら、こっちに来い」

グイ！っと身を引っ張られた慎二。これは終わりだなぁ、と思ったが突然千冬の動きが止まった。

「おまえ・・・・・・・・泣いているのか？」

「へ？」

そう言われ、頬を触った慎二だったが、触ると確かに濡れていた。

「ホントだ・・・・・・・何でだ？」

さっきまで見ていたのは・・・・・・・・・・・・・夢だったのか？
じゃあ、何で俺は泣いてた？あの内容だったら、俺は満足していたはずだ。ってことは、何か心のどこかで不満があったってことか。

「そんなに夢が泣くような夢だったのか・・・」

千冬の元気が無くなっていた。それをみた慎二はびっくりして咄嗟にこういってしまった。

「い、いや、大丈夫ですって。何でもないですよ！」

「そうか・・・・・・・・・」

そう言った、千冬だったが一瞬、腕が消えたように見えた。次の瞬間

バコン！！！！！

「うごぁ・・・・・・・・・・・」

「私の授業で寝るな。次はもっと強くするからな」

「は・・・・・・・・・・・・・はい」

やべぇ、めっさ痛い。つか、一体何で殴ったんだ？

そう思い、慎二は千冬が手に持っているものを見た。そこには

「・・・・・・・・・・・鉄板？」

何か、金属光沢を出しているものがそこにはあった。厚さは四センチ。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・何で、俺死んでないんだ？

～・～・～・～・～・～

放課後、慎二はアリーナには行かず自室に戻っていた。

「今日は、色々ダメだったなぁ・・・」

あの後、千冬さんに叩かれること十回。良く俺死ななかったなぁ。
あの夢を見てから、調子が狂ってばかりだ。どういうことなんだよ、本当に。

「・・・・・・寝るか」

一週間、夜中も考え事をしていたため寝不足になっていた。慎二はそのまま仮眠を取った。

～・・～・・～・・～・・～・・～

同じく放課後。生徒会室に千冬は来ていた。

「楯無、いるか？」

「はい、何ですか？織斑先生」

「鷹野に・・・・・・慎二に一体何があった？」

それを聞いた楯無は一瞬何かを考えたが直ぐに口を開いた。

「彼は・・・・・・瑠美香ちゃんに会いました」

「瑠美香にか？それはありえんだろう。瑠美香は死ん・・・・」

「確かに死にましたけど、これを見てください」

そう言い、楯無が見せたのは前に慎二が研究所から取ってきたデータだった。

「何だこれは？」

「これは、クローン技術の論文です」

「クローン技術？何で今になってそんなものが。その研究は打ち切られたはずだろう」

「いえ、それとはまた別な方法でクローンを作るんです」

「どうやってだ？」

「人間の細胞の情報から作るんです」

「細胞の情報だと？」

「はい。例えば、髪の毛、人の皮などから情報を取得して、それからクローンを作るんです」

「そんなことが・・・・・・・・・・・・」

「ありえるんです。この理論通りなら。そして、多分この技術で瑠美香ちゃんは・・・」

「そう、か・・・・・・・・そんなことが分かったなら奴は・・・・・」

「多分、慎二君を殺しに来るでしょう」

「やはり・・・・・・・・そうか」

「あとは、これですね」

「これは・・・・・・細胞活性だと？」

「はい。こんなものが世間に出たら大変です」

「なるほど・・・・・そういうことか。ある程度は分かったぞ。だが、こんな研究をするとなるとかなり大きな組織だろう。これはファントム・タスクか？」

「いえ、別な組織です」

「そんな組織があるのか？」

「まだ情報は掴んでませんが、今、楯無家に捜索させています」

「では、打つ手無しか」

「そうなります」

「なら、防御を固めるしかないのか・・・」

「織斑先生、万が一の時のため準備をしておいてください」

「ならば、急ぐしかないか・・・」

「できるだけそうしてください」

「分かった。では、情報が入り次第提供を頼む」

「分かりました」

「では、私は失礼する」

そう言い、千冬は生徒会室を出ていった。

「急ぐしかないのか・・・・・・・・仕方ないか」

～・～・～・～・～・～・～

「慎二・・・・・・」

この声は瑠美香・・・・・・？

「死んで」

ドスッ

「っは！」

周りを見ると、自分の部屋。

「また・・・・・・夢か」

今日の居眠りから、俺はおかしい。瑠美香の夢ばかり見る。どうい

うことなんだよ・・・・・・・・くそ
時計を見ると、七時。
「飯・・・・・は良いか」
慎二はご飯を食べる気分では無かった。そうなれば、寝るしかない。
「また、同じ夢見るのかな・・・・・・・・」
まぁ、それはいいかな。瑠美香に会えるし・・・・・・・・・・・・・
慎二の意識は直ぐに沈んでいった。

俺は一体何を・・・・・・・・・・（後書き）

色々と、進んできました。

分からない人は感想に書いてくれればある程度の事は教えます。

まぁ、伏線とか作るの苦手なのでわかるとは思いますが。

では、また今度。

結局、意味がなかったのか・・・・・（前書き）

すいません、更新開きました。

では、本編どうぞ

結局、意味がなかったのか・・・・・・

「・・・・・・慎二」

この声は・・・・・・・・・・・・瑠美香？これで何度目だろう・・・・・・？

「瑠美香・・・・・・・・・一緒に暮らさないか？」

慎二はいつも通りそう言う。何度も同じことを聞く。もしかしたら、別な答えが帰ってくるんではないかと。もしかしたら、一緒に暮らそう、って言ってくれるかもしれないと。だが、その願いはいつも砕かれる。いつも、最後には殺されて終わる。それが、毎回そうなっている。

「慎二・・・・・・・お願いがあるの」

ああ、またいつも通りになるのか・・・・・・殺されて終わり、か

「もう、私の事なんて忘れて」

「・・・・・・・・・・・・・・・え？」

・・・・・・・・・・・・・・・・・今、何て言ったんだ？忘れて？

何で、忘れてなんて・・・・・・

「私のことなんて忘れて、もっと素敵な人と出会って」

「瑠、瑠美香・・・・何で・・・・・・・・？」

「それじゃあ、私戻るね。私のことは忘れてね」
瑠美香は身を翻し、歩いていく。
「ま、待ってくれ！瑠美香！！！」
慎二は瑠美香を追いかけようとするが、光に包まれていく。
「瑠美香！瑠美香ぁあああああああああ！！！！！！！！」
～・～・～・～・～・～・～
「・・・・・っは！」
当たりを見渡すと見慣れた自室。先程が夢だと言うことは分かっている。が、完全にいつもと違った結末だった。
「私を忘れて、か。・・・・・・・・・・・一体どういうことなんだ？」
考えても慎二は分からなかった。
「今日は・・・・・・どうするかな」
今日は休日。本来なら、ＩＳの実習に励まなければならない。だけど、今日は全然気分が乗らない。そんな理由でサボるのもおかしいが街に出てサボれば問題ないか。
「丁度良い、か。日用品でも買ってきたほうがカモフラージュにな

るか・・・・・・」

慎二は、街に出ていった。

～・～・～・～・～・～・～

「というか、俺何やってんだろうな・・・・・・」

街に出てきたのは良いが、何もすることがなくただブラブラしている慎二。街に出てきても気分が晴れない。むしろ、気分が悪くなっているかもしれない。

「最近おかしいな、俺。本当に、俺は何をしてるんだろう・・・・・・・・・」

訳の分からない事ばかりで、自虐的になっていた。

「・・・・・・・・早いけど帰るか」

結局、街に出てきて一時間で帰ることになった。

～・～・～・～・～・～・～

部屋に戻ってきた慎二。そして、ベットに寝転がる。

「はぁ・・・・・・・・・・・・・・」

何をするにも気分が乗らない。眠気もない。そのまま、壁を見ていたら制服のポケットに何かが入っていた。

「ん？何だあれ」

慎二は、ベットから起き上がりポケットの中身を確認した。

「これは・・・・・・ＵＳＢメモリーか？」

ああ、思い出した。これ、学園祭で男に渡されたやつだ。渡されたての完全に忘れてた。

「・・・・・・・・・暇だし、確認するか」

慎二は部屋に備え付けられているＰＣを起動し、ＵＳＢメモリーを刺した。

「・・・・・何のデータだ？」

データは何かの設計図の様なものでぱっと見は何か分からなかった。が、よく見ていると分かってきた。

「これって・・・・・・・・・ＩＳの設計図だよな」

そう、よく見るとこれはＩＳの設計図。しかも、この設計図良く見たことがあるような気がする。

「これって・・・・・・・雪月花と似てる気がする」

慎二自身、開発には関わってないから分からないがフォルムや設定で何となく分かった。

「何で、あいつがこんなものを？いや、ＩＳの開発者ならありえな

くもない、か。でも、雪月花に似てるんだ？」

そもそも、何で俺にこんなもの渡してきたんだ？

「・・・・・・・・・・・良く分からん」

結局見ていても分からない。そもそも、開発者でもない慎二が見たところで分かるはずもないのだが。何となく、設計図を見ていると上の方に何か書いてあった。

「・・・・・・・・・水蓮花？」

よく見ると、そんな言葉が書いてあった。多分だが、これがこのＩＳの名前なんだろう。更によく見ると、小さい字でまだ何か書いてあった。

「・・・・・・・Ｇ．Ｗ．ＴＲＺ．０００２？」

これって、Ｇ．Ｗ．社のＩＳの製品番号だよな？何でだ？

そして、もう一つ項目が書いてあった。

「テストパイロット・・・・・澄野瑠美香・・・・・・？って、何でだ！！！」

何で、Ｇ．Ｗ．社のテストパイロットに瑠美香の名前があるんだ。瑠美香はもうとっくの昔に死んでいる。それなのに、何で瑠美香の名前が・・・・・・？くっそ！全然分かんねぇ！！！何なんだよ！ちくしょう！！！

「手っ取り早く、あいつに話聞いたほうが早いか・・・・・・でも、

こっちから干渉できるか？」

直ぐに、慎二は何とか干渉しようと眠った。

～・～・～・～・～・～

次に目を覚ますと、白い空間。どうやら、成功したらしい。だったら、やることは決まっている。

「おい神、いるんだろ。さっさと出てこいよ」

慎二が声を出すと、何も無い空間から神が出てきた。

「っよ！久しぶりだな」

「・・・・・・・・」

「どうした？そんな暗い顔して」

「・・・・・・・瑠美香がG．W．社のテストパイロットって一体どういうことだ」

慎二がそれを言うと神は一瞬驚いたような顔になったが、それは直ぐに笑顔に変わった。

「お～、ついにそれが分かったか～。いや～、長かったようで短かったなぁ」

「これについてしっかり説明してもらうぞ」

「まぁ、良いけど。最初は何から話そうかね～」
「じゃあ、俺から質問したことに答えろ。それだったら簡単だろ？」
「まあ、確かにそうだな。よし、それで行こう」
「まず、何で瑠美香を選んだ？」
「それは、お前が好きな人だからだよ」
「それだけか？」
「そう」
「じゃあ、次の質問だ。瑠美香は生きてるのか？」
「それは、微妙なところかな。死んでるっていったら死んでるし、生きてるっていったら生きてるし」
「どういうことだ？」
「そのまんまの意味だよ。オリジナルは死んでるけど、他は生きてるって話だ」
「オリジナル・・・・・・？」
「そ、オリジナル」
「・・・・・・・・まぁ、いい。次だ。G．W．社を作ったのは何でだ？」

「それは、お前のＩＳを・・・・・」

「嘘はいい。真実を話せ」

「別に嘘じゃないのに・・・・・・ま、いっか。本音を話せばいいんだな？」

「ああ」

「ぶっちゃけると、暇潰しだ。これは分かるだろうけどな」

「・・・・・・・」

「で、あとはこれは計画の一部だったんだよ」

「計画？」

「そう、お前がその世界に転生した時からのな。それで、お前を瑠美香を選んだのは偶然じゃなくて必然だ。このあとお前には試練がある。それを乗り越えられるかはわからんが、俺を楽しませてくれよ？・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・つか、ここまで来るのに時間かかったなぁ。今回は出来がいいと思ったんだがそうでもなかったか。また、出来がよさそうなの探さないとな」

「お前、何を言っている？出来がいい？悪い？なんの話だ」

「あら、聞こえてた？聞こえない声で言ったはずなんだけどな」

「いいから答えろ」

「・・・・・はいはい、分かりましたよ～。さっき言ったけど、これは計画の一部だって言ったろ？」

「ああ」

「それは、最初から仕組まれてたってことだ」

「最初から・・・？」

「そう、お前が転生したときからって意味でな」

「・・・・・・・・・ちょっと待て」

今、こいつが言ったことは今まで起こったことが全部仕組まれていたってことだ。ということは、瑠美香が死んだのも・・・・・・・

「ああ、それも最初から仕組まれてた。いや～、もっと早く気付くかと思ったんだけどな。お前ほど用心深い人間だったら嘘見抜けるかと思ったんだけど、俺の思い違いだったし」

「嘘、だと・・・・？」

「ＩＳ学園入ってから、お前死にかけたよな？」

「ああ、そうだな」

「その時俺が言ったこと覚えてるか？」

「たしか、瑠美香の名前出して・・・・・人が死ぬ悲しみをお前

は知っているよな、って言ってきたな」

「よく覚えてたな。で、それ全部嘘」

「・・・・・・・は？」

「だから全部嘘だって。結構分かりやすい様に言ったつもりだったんだが、気付かなかったなお前」

「・・・・・・・・・・・・何でだ」

「さっきも言ったろ？暇潰しだって。あ、ついでに言っとくと、瑠美香を殺した犯罪グループって俺が作ったから。まぁ、お前に潰されたから意味なかったけどな」

「お前・・・・さっきから何言って・・・・」

「あ～、理解能力ねぇな。これだから人間は」

神は一度ため息を付いてから言った。

「俺が瑠美香を殺したんだよ」

「・・・・・・・・・・・・・お前が、瑠美香を」

「敵撃ち、しないのか？」

「・・・・・・・・・・・・・くそがぁあああああああああああああああ！！！！！！！！！！」

慎二は、神に向かって殴りかかろうとした。が、

「時間切れだ。さよなら～」

突然下に穴が空いて、そのまま落ちていった。

「何でだよ、ちくしょう・・・・・・・」

そう呟きながら、慎二は落ちていった。慎二がいなくなった神域で神は

「あ～、これから楽しめそうだ。あいつらの・・・・が楽しみだ」

そう楽しそうに呟いていた。

～・～・～・～・～・～・～

目が覚めると、自室。

「・・・・・・・・・・んだよ、ちくしょう。最初から踊らされてたのかよ」

そう、この世界の支配者は神。分かっていた。分かっていたはずなんだが・・・

「納得いかねぇな」

結局、慎二はそのまま眠った。悩みが増えた状態で・・・・・・

結局、意味がなかったのか・・・・・（後書き）

色々と意味が分からなくなってきました。（自分でも）

最初は神をこんなキャラにする予定なかったんですがこうしたほうが面白いかな～と言うことでこうしました。

関係なんですが、書き方変えたんですがどうでしょう？

変だったら戻すので、感想にてお願いします。

では、次の更新までさよなら。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1763x/

IS　～インフィニット・ストラトス～　・・・・・・こんなんで大丈夫か？

2012年1月9日01時50分発行